芥沢遺跡Ⅱ

――「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書――

２００７年3月

茅野市教育委員会

芥沢遺跡Ⅱ

――「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書――

２００７年３月

茅野市教育委員会

序　文

八ヶ岳の西南麓に広がる茅野市は、棚畑遺跡出土の国宝土偶『縄文のビーナス』、中ッ原遺跡出土の重要文化財土偶『仮面の女神』をはじめとして、国特別史跡尖石・与助尾根遺跡、国史跡上ノ段遺跡、国史跡駒形遺跡などの縄文時代の遺跡が多数あることから、縄文文化の宝庫『縄文王国』と称されています。

ここに報告する芥沢遺跡は平成15・16年度に県営中山間総合整備事業御柱の里地区の施工に伴い、遺跡の保護措置として記録保存を前提に茅野市教育委員会が発掘調査を実施したものであります。

本遺跡は、今まで小規模な発掘調査が行われたことはありましたが、県営中山間総合整備事業に伴い、平成14年度に事業予定地で試掘調査を行い、併せて周辺で踏査による遺物表面採集を実施した結果、遺跡範囲は35,000㎡の広がりをもっていることが判明し、今回の発掘調査は遺跡北西側、約1/3の範囲が対象になりました。

発掘調査の結果、縄文時代早期末から前期前半の竪穴住居址が38軒、平安時代の竪穴住居址3軒、落し穴11基を含む数多くの土坑が確認され、遺跡の全体像が垣間見えてきました。

本遺跡が立地する宮川水系の流域には国史跡の阿久遺跡を代表として、縄文時代早期末から前期の集落が数多く点在しています。芥沢遺跡はこのような遺跡の中で、広い面積を持つが短期間の断続で形成された集落であったことが判明しました。

発掘調査では、居住域と生産域が同じ調査区内で見つかっていますが、周辺遺跡の調査成果を含めた情報を基に八ヶ岳西南麓における縄文時代早期末から前期のより具体的な生活の様子が今後解明されると思われます。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会、地権者、基盤整備実行委員会、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課の皆様の深いご理解とご協力に感謝すると共に、調査ならびに作業にあたられた皆様のご苦労により、無事終了できましたことを心からお礼申し上げます。

平成19年3月

茅野市教育委員会

教育長　牛山　英彦

例　言

1．本書は、長野県諏訪地方事務所長と茅野市長との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成15・16年度県営中山間総合整備事業（広域連携型）御柱の里地区に伴う、長野県茅野市芥沢遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．試掘調査・発掘調査・遺物整理・報告書刊行は、長野県諏訪地方事務所土地改良課からの委託金と、文化財国庫補助平成14・15・16・17・18年度国宝重要文化財等保存整備費補助金市内遺跡発掘調査並びに県費補助金平成14・15・16・17・18年度文化財保護事業補助金市内遺跡発掘調査、市費を得て、茅野市教育委員会が実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第２節2.調査の体制として記載してある。

3．試掘調査は平成14年12月11日から平成14年12月20日、発掘調査は平成15年度調査を平成15年６月18日から平成15年12月15日、平成16年度調査を平成16年８月２日から平成16年11月25日まで行い、出土品の整理は発掘調査終了後、平成15・16・17年度に実施し、報告書の刊行は平成18年度に茅野市教育委員会文化財課が行った。

4．発掘調査から本書作成までの作業分担、執筆分担等は第１章第２節に記してある。

5．本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵保管している。

凡　例

1．調査区の基準点は国家座標基準点による。なお平成15年４月から測量原点は世界測地系座標を使用することとされているが平成14年度以前に実施している芥沢遺跡及び周辺の遺跡で実施した過去の発掘調査時設定軸と合わせるため日本測地系座標を用いて軸設定をした。遺構全体図の数値は同平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。

2．本報告書に掲載の住居址・土坑の遺構実測図は1/60、土器拓本1/3、土器実測図は、1/4の縮尺を基本とした。石器については３㎝の基準尺を個々に記載してある。

3．土層の色調については『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。

4．挿図中における遺構部分のスクリーントーンは焼土を示す。

目　次

序　文　　茅野市教育委員会教育長　牛山英彦

例　言・凡　例

第Ⅰ章　経過……1
　第１節　発掘調査に至る経過……1
　　１．調査に至るまでの協議……1
　　２．本調査に至るまでの協議経過と諸事務……1
　第２節　発掘調査作業の経過……7
　　１．発掘調査の方法とその経過……7
　　２．調査の体制……7
　　３．調査日誌（抄）……8
　第３節　発掘調査に伴う諸事業の記録……12
　　１．成果の公表……12
　　２．平成16年度発掘予定区の保存……15
　第４節　整理作業と報告書刊行……16
　　１．遺物整理と報告書作成作業……16

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……17
　第１節　地理的環境……17
　　１．遺跡の位置と地理的環境……17
　　２．遺跡の立地……17
　第２節　遺跡の歴史的環境……18
　　１．調査の歴史と周辺遺跡の地理的位置……18
　　２．土器の研究史……22

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要……25
　第１節　調査区の基本層序……25
　　１．土層の基本的な堆積状況……25
　　２．土層の成因と性格について……25
　第２節　発掘した遺構・遺物の概要……26
　　１．遺構の概要……26
　　２．遺物の概要……26

第Ⅳ章　遺構と遺物……27
第１節　竪穴式住居址……27
１．第１号住居址……27
２．第２号住居址……27
３．第３号住居址……27
４．第４号住居址……32
５．第５号住居址……32
６．第６号住居址……32
７．第７号住居址……40
８．第８号住居址……40
９．第９号住居址……40
10．第10号住居址……40
11．第11号住居址……45
12．第12号住居址……45
13．第13号住居址……45
14．第14号住居址……45
15．第15号住居址……51
16．第16号住居址……51
17．第17号住居址……51
18．第18号住居址……51
19．第19・21号住居址……51
20．第20号住居址……58
21．第22・23・32号住居址……58
22．第24号住居址……58
23．第25号住居址……61
24．第26・33号住居址……61
25．第27・28号住居址……61
26．第29号住居址……66
27．第30号住居址……66
28．第31・34号住居址……66
29．第35号住居址……73
30．第36号住居址……73
31．第38号住居址……73
32．第37号住居址……73
33．第39号住居址……75
34．第40号住居址……75
35．第41号住居址……75

第２節　焼土址……75
１．第３号焼土址……75
２．第１・２・４号焼土址……75
３．第５号焼土址……75
４．第６・７・８号焼土址……78
第３節　集石……78
１．第１号集石炉……78
２．第２号集石炉……78
３．第１号石囲炉……78
第４節　土坑……80
１．落し穴……80
２．第９号土坑……80
３．第54号土坑……81
４．第189・190号土坑……81
第５節　溝址
１．第１号溝址……81
２．第２号溝址……81
第６節　断層……93
第７節　その他……93

まとめ ……101

引用参考文献 ……104

付　表 ……106

図　版
抄　録

第Ⅰ章　経　　過

第１節　発掘調査に至る経過

１．調査に至るまでの協議

芥沢遺跡が事業地内に含まれている県営中山間地域総合整備事業（大沢地区）地区内埋蔵文化財発掘調査について、平成12年５月１日、茅野市土地改良課から照会があった。茅野市教育委員会文化財課では芥沢遺跡が規模、範囲について不明確であったため、協議に先立ち、当該事業地区内及び周辺で表面採集を行った。芥沢遺跡は昭和26年の小規模発掘調査以来、縄文時代早期から前期を中心とする集落遺跡であることが判明していたが、表面採集の結果、遺跡範囲はおよそ35,000㎡の広範囲に及ぶ台地全域に広がっており、該当する保護対象部分は遺跡北側の約20,000㎡であることを確認した。表面採集は周辺地域も含めて実施したため芥沢遺跡から南に300m 離れた地点で柏木遺跡が見つかっている。同年６月23日には県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財保護協議を長野県教育委員会文化財・生涯学習課から原明芳指導主事の派遣を頂き、長野県諏訪地方事務所土地改良課、茅野市土地改良課を交えて実施した。保護協議では諏訪地方事務所から事業内容と具体的な工程が示され、保護対象区域の台地は全域を削平し、その発生土で谷を埋める計画が明らかになった。協議の結果、削平が計画されているため埋蔵文化財のやむを得ない保護措置として記録保存を前提とした発掘調査を実施することが決定した。事前の表面採集の結果から遺物の散布状況は希薄であることが確認されたため、平成13年度、作物の収穫後に試掘調査を実施し、遺構の分布範囲と密度の絞り込みをすることになった。

２．本調査に至るまでの協議経過と諸事務

調査に至るまでの協議経過

平成13年度は市教委文化財課が職員配置換えによる実質的な調査員減と他地区の農業基盤整備事業に伴う発掘調査と試掘調査が優先されることになったため、御柱の里地区に伴う調査は一時停止の状況となった。

平成13年10月18日に県営中山間総合整備事業御柱の里地区大沢・青柳換地区地権者総会が開かれ、市文化財課からは保存対象となる埋蔵文化財について該当する芥沢遺跡と柏木遺跡の概要説明を行った。

同年11月19日に行った平成14年度以降実施の農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財保護協議で諏訪地方事務所土地改良課から御柱の里地区大沢工区の事業と埋蔵文化財保護に対する取り組みの説明があり、柏木遺跡、芥沢遺跡が該当するため、既に地権者と埋文保護について話し合いを持ち始めているとの報告があった。工事は平成15年から３年かけての予定で、平成14年度は青柳が工区となり、富士見側から着手。大沢工区は３年間の工事期間で、面積は均等割とする計画が示された。県教育委員会・市文化財課から柏木遺跡は平成14年度に発掘調査し、遺構がなければ減額する。芥沢遺跡は14年の収穫後に試掘調査を行い、内容を明らかにして協議を再び行うこととし、本工事着手に先立ち20,000㎡以上の発掘調査を実施し、発掘調査は茅野市教育委員会に委託する。発掘調査に係る経費は、事業主体者が負担する。ただし、経費のうち農家負担分（9.5%）については文化財保護側が負担することを確認した。

平成14年10月17日に平成15年度以降実施のほ場整備事業に伴う埋蔵文化財保護協議を行い、諏訪地方事務

所土地改良課から本工事は現在青柳地区を施工中である。２遺跡がある大沢地区の施工面積は約16haであり、３工区を３年計画（平成15～17年度）で施工する。地元には２年休耕（１年発掘、１年工事）で話を進めており「芥沢遺跡を南北に横断する舗装道路は現状のままとする。道路は既に設計済みであり、調査範囲はどう確定するか」と説明及び質疑があり、市教委文化財課は「11月中頃から試掘を予定したい。舗装道路の東側は遺構の検出は間違いないだろうが、西側にどれだけ遺跡が延びるか推測し難い。試掘は遺跡西側の広がりをおさえ、遺構の密度も把握したい。遺跡の北側である中野沢川側は低いので、この部分だけでも盛土で設計してもらえれば調査面積が減となる」と回答。県教育委員会から試掘後、１月か２月に保護協議を行い、結果をみて設計を詰める―と示された。

調査範囲確定の試掘調査は平成14年12月11日～12月20日に承諾書の提出されている19筆に54本、1,752㎡のトレンチで調査を実施、発掘が必要となる面積は20,000㎡以上に及ぶことが判明する。この調査の際、周辺の踏査も行っているが予定区東端に隣接している名取家の墓地で中世の五輪塔が祀られているのを確認した。

名取家は大沢集落の最上部に屋敷を構えていたが直系の子孫は大沢を離れてしまっていることから詳細は不明である。墓地内に『租先追孝碑』が建てられており碑文には

祭　近世以來累代之靈

我祖源往元居近江永祿二年祿來神宮寺為郷士經數代而移天狗山藩主

賜姓及地乃建社焉後移大澤之地至今衰昭和十年建追孝碑記以為念云

との由来を記してある。

五輪塔は墓地区画内南側、碑の斜め前に据えられており、安山岩系の石材を用いて一辺が21cmで方形の地輪、球形で径21cmの水輪、四角錐状で最大片26.5cmの火輪、半球形で径15cmの風輪、宝珠形で径15cmの空輪から成り、総高は71cmを測る。刻まれている梵字は風雨にさらされてはいるが現在でも判読は可能である。

第１図　芥沢遺跡の五輪塔

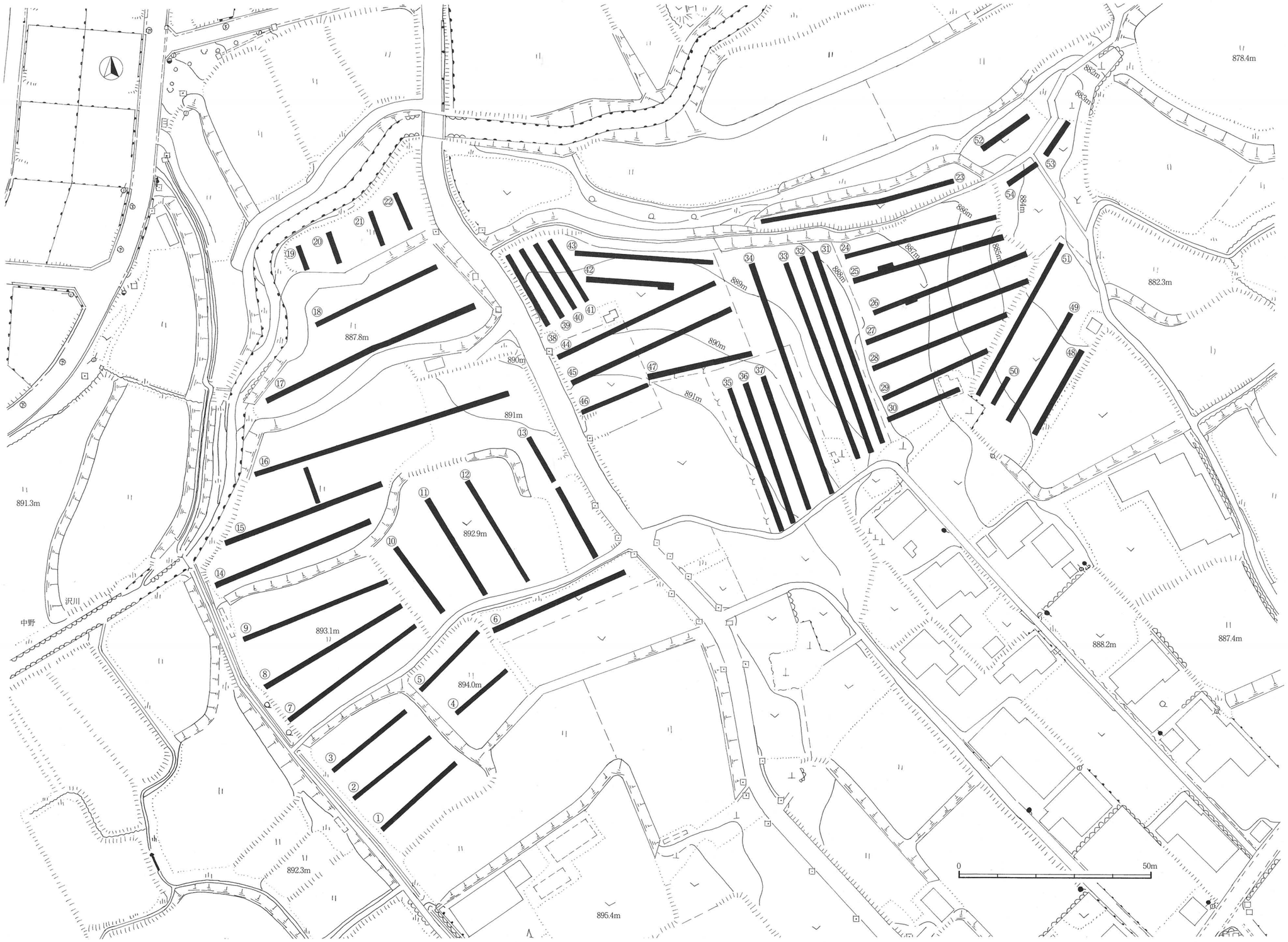
この五輪塔も金沢の中世を解明するための貴重な資料である。

事業費

平成14年度は試掘調査を実施することとして当初1,200,000円（文化財保護側負担1,200,000円）で事業を計画したが、地権者の作付けの都合により調査ができない予定区が生じたため、調査費1,000,000円（文化財保護側負担1,000,000円）に変更を行った。

平成15年度発掘調査費は当初40,000,000円（農政側負担36,200,000円、文化財保護側負担3,800,000円）で事業を計画したが、表土剥ぎの結果、開田された際に行われた削平により実質的な調査面積が減少したため、調査費24,00,000円（農政側負担21,720,000円、文化財保護側負担2,280,000円）に変更を行った。

平成16年度調査費は当初36,000,000円（農政側負担32,580,000円、文化財保護側負担3,420,000円）で事業を計画したが、新年度になってから諏訪地方事務所土地改良課は予算見直しで盛土による保護措置を執るため調査区を削平部と道路敷きの分として、調査面積を減らし、減額したい旨の申し入れがあり、８月になってから調査費10,000,000円（農政側負担9,050,000円、文化財保護側負担950,000円）で契約にこぎつけた。調査区内に遺構密度が薄い部分と耕作による攪乱部分があったため、最終的に調査費は9,500,000円（農政側負担8,597,000円、文化財保護側負担903,000円）に変更を行った。



第２図　芥沢遺跡平成14年度試掘　トレンチの位置図 1/1000

平成17年度は6,000,000円（農政側負担5,430,000円、文化財保護側負担570,000円）で契約し、整理作業を行った。

平成18年度は報告書作成作業を行い2,000,000円（農政負担1,810,000円、文化財保護側負担190,000円）で事業を計画した。

なお、文化財補助金申請等事務・発掘諸法令事務を下記の通り行った。

発掘調査に至る文化財補助金申請等事務経過

平成14年度

平成14年４月８日　14教文第１－27号　平成14年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成14年４月９日　14教文第２－27号　平成14年度文化財保護事業の内示について（通知）
平成14年４月15日　14教文第４－１号　平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成14年５月30日　14教文第１－27号　平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定（通知）
平成14年６月３日　14教文第４－２号　平成14年度文化財保護事業補助金申請書提出
平成15年１月14日　14教文第91－１号　平成14年度国宝重要文化財等保存整備費補助金計画変更承認申請書提出
平成15年２月26日　14教文第91－２号　平成14年度文化財保護事業計画変更承認申請書提出
平成15年３月20日　14教文第103－７号　平成14年度国宝重要文化財保存整備費補助金実績報告書提出

平成15年度

平成15年４月７日　15教文第１－25号　平成15年度文化財関係国庫事業について（通知）
平成15年４月７日　15教文第２－25号　平成15年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）
平成15年４月16日　15教文第３－２号　平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成15年４月16日　15教文第３－３号　平成15年度文化財保護事業補助金交付申請書提出
平成15年５月30日　15教文第１号　平成15年度文化財関係国庫補助事業補助金交付決定（通知）
平成15年６月２日　15教文第２号　平成15年度文化財保護事業補助金交付決定
平成16年１月19日　15教文第131－３・４号　平成15年度市内遺跡発掘調査等補助金計画変更承認申請書提出
平成16年３月５日　15教文第２－25号　平成15年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）
平成16年３月19日　15教文第157－６・７号　平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成16年度

平成16年４月21日　16教文第６－１号　平成16年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
平成16年４月21日　16教文第６－２号　平成16年度文化財保護事業補助金交付申請書提出
平成16年６月16日　16教文第１号の35　平成16年度文化財関係国庫補助事業補助金交付決定（通知）
平成17年１月18日　16教文第111－１・２号　平成16年度市内遺跡発掘調査等補助金計画変更承認申請書提出
平成17年２月14日　16教文第２－35号　平成16年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）
平成17年３月25日　16教文第133－６・７号　平成15年度国宝重要文化財等保存整備費補助金、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成17年度

平成17年４月11日　17教文第１号　平成17年度文化財関係国庫事業について（通知）

平成17年６月２日　17教文第２－35号　平成17年度文化財保護事業補助金の内示について（通知）

平成17年４月15日　17教文第４－２号　平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成17年６月13日　17教文第４－３号　平成17年度文化財保護事業補助金交付申請書提出

平成17年６月15日　17教文第２－35号　平成17年度文化財保護事業補助金交付決定（通知）

平成18年１月18日　17教文第110－２号　平成17年度『市内遺跡発掘調査等事業』補助金計画変更承認申請書提出

平成18年２月28日　17教文第１－35号　平成17年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）

平成18年３月30日　17教文第133－２・３号　平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金『市内遺跡発掘調査等事業』、文化財保護事業補助金実績報告書提出

平成18年度

平成18年４月３日　18教文第１－３号　平成18年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（市内遺跡発掘調査等）申請書提出

平成17年６月１日　18教文第１－19号　平成18年度文化財保護事業補助金の交付決定（通知）

平成17年４月15日　17教文第４－２号　平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出

平成17年６月13日　17教文第４－３号　平成17年度文化財保護事業補助金交付申請書提出

平成17年６月15日　17教文第２－35号　平成17年度文化財保護事業補助金交付決定（通知）

平成18年１月18日　17教文第110－２号　平成17年度『市内遺跡発掘調査等事業』補助金計画変更承認申請書提出

平成18年２月28日　17教文第１－35号　平成17年度文化財保護事業補助金計画変更決定（通知）

平成18年３月30日　17教文第133－２・３号　平成17年度国宝重要文化財等保存整備費補助金『市内遺跡発掘調査等事業』、文化財保護事業補助金実績報告書提出

発掘諸法令事務の経過

平成14年４月11日　14教文第３－３号　芥沢遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の提出

平成15年１月７日　14教文第89－２号　芥沢遺跡発掘終了報告の提出

平成15年12月15日　15教文第123－１号　芥沢遺跡発掘終了報告の提出

平成15年12月15日　15教文第123－２号　芥沢遺跡埋蔵物発見届けと保管証の提出

平成15年12月25日　15教文第10－103号　芥沢遺跡埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

平成16年５月18日　16教文第19－２号　芥沢遺跡埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の提出［計画変更］

平成16年11月26日　16教文第97－２号　芥沢遺跡発掘終了報告の提出

平成16年11月26日　16教文第97－１号　芥沢遺跡埋蔵物発見届けと保管証の提出

平成16年12月24日　16教文第６－97号　芥沢遺跡埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

第２節　発掘調査作業の経過

１．発掘調査の方法とその経過

調査区の設定と発掘調査の方法

表面採集と試掘調査により遺跡は、台地全体の広範囲に広がっていることが把握された。この結果をもとに調査範囲を決定したが、盛り土による保護措置をとれる区画が生じたため発掘範囲は減少することになり、最終調査面積は12,615㎡となった。調査区のグリッド設定は、日本座標X＝－6700.000、Y＝－27650.000、標高890.165mを基準とし、遺構密度が薄いためグリッドは10mピッチで設定した。

遺構測量

地形と土坑の測量は写真測量を実施しこの図を基本としたが、住居址、落とし穴及び遺物の平面分布、遺物の出土状態や土坑内の礫等については、遣り方測量や平板測量の成果を写真測量図に反映させ修正を加えている。基本土層の観察は、水田、畑地内は耕作等の関係より安定した土層堆積を示している地点はほとんど無いため、調査区西側G－15グリッドで土層の遺存状態が良好な地点の東西方向で行っている。なお、発掘現場における諸記録は百瀬一郎、遠藤佳子、篠原リカ子、宮坂ひとみ、森浩子が携わった。

２．調査の体制

調査主体者　両角 源美　（茅野市教育委員会教育長平成16年９月30日まで）
　　牛山 英彦　（茅野市教育委員会教育長平成16年10月１日より）
事　務　局　伊藤 修平　（茅野市教育委員会教育部長平成15年３月31日より）
　　宮坂 耕一　（茅野市教育委員会教育部長平成15年４月１日より平成18年３月31日まで）
　　金子 強　（茅野市教育委員会教育次長平成18年３月31日より）
　　小平 廣泰　（文化財課長）
　　守矢 昌文　（文化財課文化財係長）
　　小池 岳史　百瀬 一郎（現場担当）　小林 健治（平成15年９月30日まで）　柳川 英司
調査補助員　太田 友子　小松 とよみ　武居 八千代　原 敏江　矢崎 つな子
発掘調査・整理作業協力者
　青木 政喜　稲垣 幸子　鵜飼 澄雄　牛山 晴雄　遠藤 佳子　金井 まさみ　北原 常彦　酒井 みさを
　篠原 リカ子　立岩 貴江子　田中 洋二郎　中川 聡史　名取 國雄　名取 末彦　野澤 明美　野澤 みさ子
　原 徳治　藤原 一登　藤原 きよ江　北條 嘉久男　増木 三訓　宮坂 功　宮坂 ひとみ　森 浩子
　柳沢 省一　柳沢 宏　山田 千広　山田 博司　渡辺 郁夫
発掘調査参加者
　小池 喜良（岡谷南高校）　稲垣 幸子（立正大学博物館実習）　竹内 若菜（信州大学博物館実習）　土橋 恵里（国士舘大学博物館実習）　豊平小学校６年１部（北澤 淳担任　38人　博物館活用指定学級）　木川 雅人、宮坂 孝史（茅野北部中学校職場体験学習）　笹川 智香、松崎 杏里（岡谷北部中学校職場体験学習）

発掘調査・遺物整理期間中、長野県諏訪地方事務所土地改良課・茅野市土地改良課並びに、中山間総合整備事業御柱の里地区青柳・大沢換地区実行委員会を始め地権者の方々にご助力頂き、調査を円滑に進めるこ

とができた。謹んで謝意を表したい。また下記の方々より特に有益なご指導・ご助言・資料の提供を頂いた。ここに記して感謝を申し上げる。

藤森 みち子　戸沢 充則　長崎 元廣　高見 俊樹　五味 裕史　田中 総　小林 公明　樋口 誠司
小松 隆史　小林 俊治　名取 洋之　小林 文人　名取 甚市　山田 富美恵

業務委託

事業を迅速に進めるに当たり、測量、実測については下記の業者に委託し事業を進めた。

基準杭測量：株式会社嶺水茅野支店　支店長　花井 陽二（茅野市本町西５番34号）

航空測量：新日本航業株式会社　代表取締役　工藤 八一（小諸市甲1176－４）

石器実測：国際航業株式会社長野営業所　所長　古磯 直樹（長野市鶴賀緑町1393－３番地 富士火災長野ビル２F）

土器実測：株式会社東京航業研究所　代表取締役　中本 直士（埼玉県川越市伊佐沼28－１）

３．調査日誌（抄）

平成14年度調査（試掘調査）

12月11日　道路西側の台地南側より重機を用いてトレンチの表土剥ぎを開始し、土坑群を確認する。西側では礫層を検出する。

12月12日　開田による削平部を確認する。

12月13日　調査予定区は全体的にローム層までの層序が薄く、遺構密度もムラがあることが判明。計測作業を始める。

12月16日　東側の調査区に重機を移動。遺構の密度は濃くないが全域に散在している。

12月17日　前夜の雨で雪融けが進んだため重機を使って全景写真の撮影をする。トレンチの表土剥ぎを進める。

12月18日　遺跡を縦断している道路近くまで移動、遺構の密度が濃くなる。焼土と落とし穴と思われる土坑を確認する。

12月19～20日　埋め戻し作業を行う。

平成15年度調査（発掘調査）

６月18日　重機により西側調査区の南東側から表土剥ぎを開始する。表土は薄く、焼土址を３個所検出する。

６月19日　表土剥ぎに合わせ廃土集積を開始、発生土は耕土と基盤土に分けて集積する。谷部の掘り下げ、西側は礫多く、南側からの遺物出土量が減る。

６月23日　発掘作業員加わり、遺構検出作業を始める。縄文時代前期初頭の住居址３軒検出。以後同期の住居址を次々に検出する。

７月１日　金沢地区の発掘作業員加わる。

７月15日　平安時代の住居址検出。

７月17日　西側の水路が詰まり、調査区内まで水が流れ込む事態が発生、草刈りを行う。

７月24日　再度、水路溢水、復旧作業を行う。

７月25日　金沢歴史同好会宮坂武夫会長、金沢小学校の先生を案内し来跡、作業を見学する。

７月29日　表土剥ぎ終了。

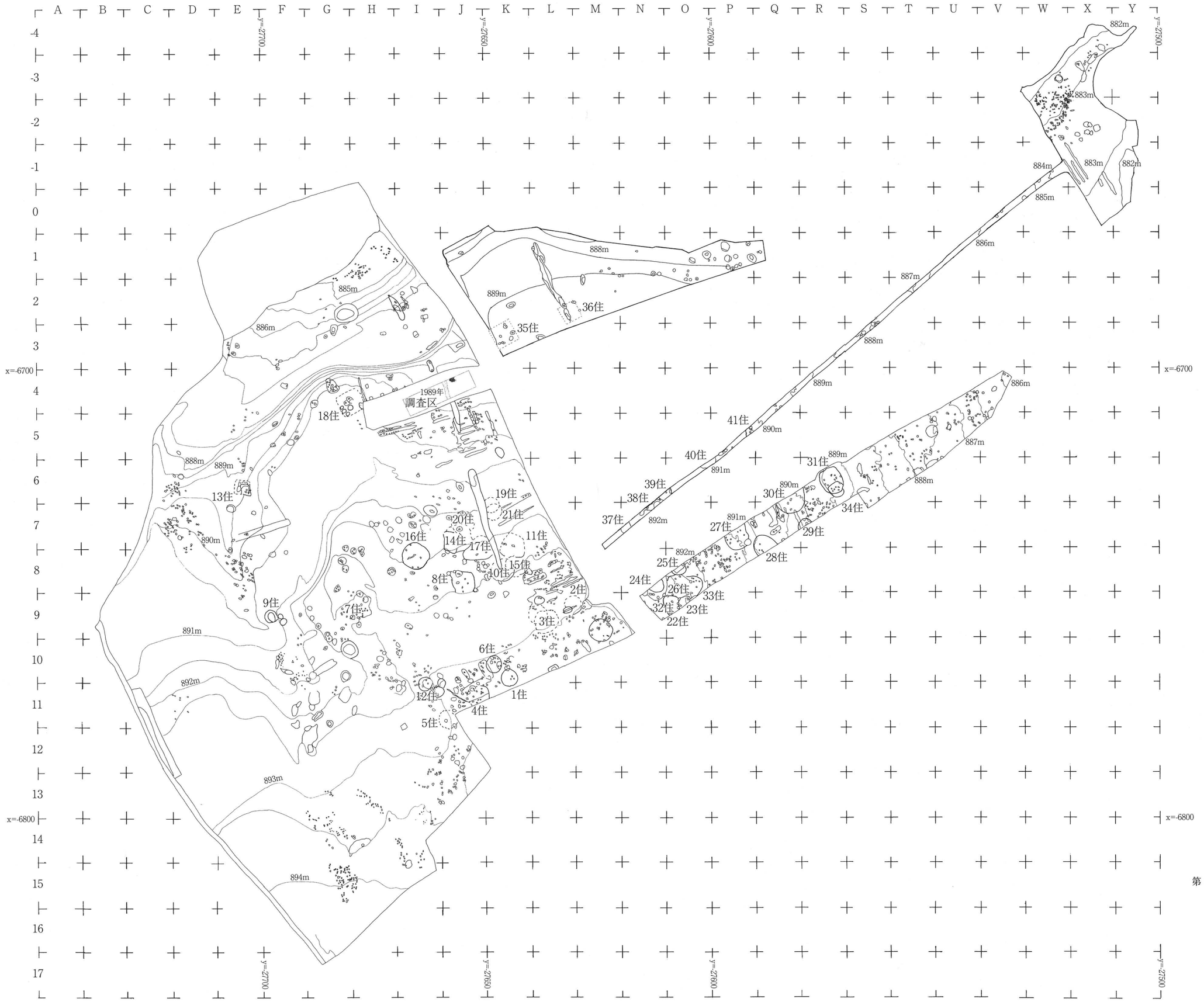
８月１日　調査区が広いため遺構検出と破砕帯部検出の２班に作業員を分けて進める。

８月６日　基準杭測量開始。１号住居址設定する。八ヶ岳総合博物館の実務実習生受け入れで発掘調査の実習を行う。

８月11日　２回目の八ヶ岳総合博物館の実務実習生を受け入れ発掘調査の実習を行う。

８月12日　耕作による攪乱が調査区東側の道路沿いに帯状になっていることが判明する。

８月18日　集積してあった発生土の一部が崩落を起こしたため作業中止する。



第３図　芥沢遺跡遺構分布と
グリッド設置図 1/800

8月25日　遺構検出作業ほぼ終了する。

8月26日　住居址の分布図作成を始める。

9月1日　遺構の掘り下げ開始する。

9月2日　本年度本工事業者と今後の発掘調査と本工事の工程等を打ち合わせる。

9月3日　本工事業者技術部と発掘で発生した廃土の本工事使用などについて現地打ち合わせをする。

9月4日　遺構外から内耳土器の破片が出土する。

9月5日　金沢歴史同好会の見学について宮坂武夫会長打合せに来跡。

9月8日　航空測量準備の散水作業を行うが乾燥が著しく散水した端から乾いてしまう。

9月9日　地形測量を中心とする1回目の航空測量を実施、補備測量を開始する。

9月12日　金沢歴史同好会が見学に来跡。

9月19日　基本層序の図化と観察をする。

9月26日　小平文化財課長の案内で伊藤勝助役来跡。

10月3日　博物館指定学級で豊平小学校6年1部（北澤淳担任38名）を受け入れる。長野日報で取材に来跡。

10月6日　八ヶ岳初冠雪。朝冷え込む。

10月8日　小林俊治委員長来跡。

10月9日　名取洋之換地担当来跡。

10月28日　茅野北部中学校の職場体験で2名を受け入れる。

10月29日　本工事業者から調査区内に工事用の仮設道路を造りたいとの要請があり切り渡しについて協議を行う。

10月30日　名取洋之換地担当切り渡しについて来跡。

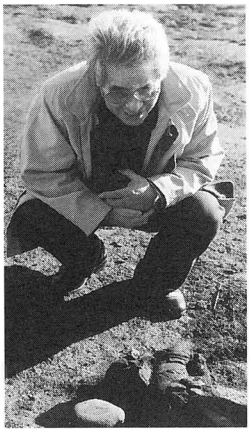
11月13日　長野日報で取材に来跡。

11月20日　雨天のため2回目の航空測量は延期にするが補備測量は開始する。

11月21日　航空測量実施。終了後、見学会の準備をする。

11月22日　芥沢遺跡現地説明会を実施する。内外から70人が集まり、遺構、遺物の見学を行う。

11月26日　戸沢充則尖石縄文考古館名誉館長が守矢文化財係長の案内で来跡し、昭和26年に実施した第1回の芥沢遺跡発掘調査状況と土器について説明を受ける。



第4図　戸沢氏の説明

12月1日　記録用のカメラが故障していたため、急遽遺構写真の撮り直しをする。

12月2日　前日夜、調査済みの落し穴に鹿が落ち、逃げ出すために多数の足跡が穴周辺と底に残されていた。

12月4日　断層部分の深掘りを試みる。

12月8日　旧石器が出土した周辺の深掘りをする。遺物を収蔵庫に運搬開始する。

12月10日　現地で航空測量の図面校正を行う。

12月15日　掘り上げの写真撮影、長野県諏訪地方事務所土地改良課に引き渡しの連絡をする。

12月15日～平成16年3月19日　遺物洗浄と注記作業を行う。

平成16年度調査（発掘調査）

平成16年度は前述の理由から契約が遅れたため、5月10日～5月31日にかけて発掘道具の点検、整備を行い、6月14日～7月21日まで前年度の遺物の注記作業を行った。

8月2日　北西部から表土剥ぎ開始。

8月4日　北西部の表土剥ぎ終了。

8月5日　重機東側に移動、表土剥ぎ。遺構検出作業開始。

8月6日　重機南側に移動、表土剥ぎ。

8月12日　長野県教育委員会より指示のあった頂部に重機で通しのトレンチを入れる。

8月24日　東側での遺構検出を開始する。

8月31日　前日、台風で機材をおいてあったテント1棟が風圧で潰される。

9月3日　長野県教育委員会から綿田弘実文化財生涯学習課指導主事の派遣を受けて現地保護協議を行い、原則として残る用地内の遺跡については保護層を設けて盛り土保存をすることが決定する。午後、小林委員長、名取換地担当保護方法の確認に来跡する。

9月8日　調査区内の墓地と事業用の杭について小林委員長立合の下で撤去を実施する。長野県諏訪地方事務所土地改良課沓掛係長遺跡の保護方法について確認のため来跡する。

9月10日　写真撮影のために清掃作業を開始する。

9月13日　基準杭打ち作業を開始する。

9月21日　保存地区に植えられている桑の根がローム層まで達していることが判明、重機による抜根では遺構を破壊してしまう可能性が生じたため手作業によりローム層上で根切りをすることになる。

10月13日　土坑を掘り始める。

10月14日　岡谷北部中学校体験学習発掘で2年4部の2名が発掘体験する。

10月15日　八ヶ岳初冠雪、冷え込む。

10月19～21日　台風23号で発掘作業中止、図面整理をする。

10月25日　東調査区で地割れ痕を検出する。

10月29日　航空測量準備と補備測量を行う。

10月30日　休日であるが天候の関係で航空測量を実施する。

11月1日　長野日報、読売新聞で取材に来跡。

11月3日　芥沢遺跡現地説明会を実施する。内外から50人が集まり、遺構、遺物の見学を行う。

11月4日　遺構の掘り抜き開始。

11月9日　掘り抜きと撤収作業を行う。

11月25日　航空測量図面の現地校正を行う。

11月15～30日　航空測量図面の校正を行う。

12月1日～平成17年1月5日　遺物洗浄、注記を行う。

1月6日～2月25日　遺物洗浄、注記、復元を行う。

2月28日　遺物洗浄、注記、復元。写真、図面整理を行う。

3月1～25日　土器復元。写真、図面整理を行う。

第3節　発掘調査に伴う諸事業の記録

1．成果の公表

遺跡見学会・速報による公表

調査状況を公表するために、遺跡現地見学会を平成15・16年度とも航空測量後に行った。併せて新聞各紙を通じて報道発表された。また地元の金沢小学校の先生や金沢歴史同好会の見学も随時受け入れた。

遺跡の速報についても、迅速に発掘成果を広く公表することを目的に平成15・16年度の発掘調査に関わる調査速報を下記のとおり実施し、広く一般に公開・普及に努めている。

各年度の調査速報は、平成16・17年2月11日に諏訪考古学研究会主催の第16・17回諏訪地区遺跡調査研究発表会において成果発表を行った。また直接市民に調査内容を知ってもらう一環として年度末に市内全戸配布する「茅野市の博物館・文化財課だより八ヶ岳通信」22・23号で年度毎の調査概要報告を行った。

平成17年12月1日株式会社ジャパン通信情報センター発行の『文化財発掘出土情報』通巻289号の「各地の動向」に記事が掲載されている。

公開と企画展

できるだけ早く成果を公開するため、土器復元作業終了後の平成17年12月3日から平成18年3月21日まで茅野市尖石縄文考古館が開催した平成17年度企画展「速報縄文の里茅野を掘る Vol. 2 '01～'05」に展示を

第５図　芥沢遺跡と天狗山遺跡の遺構分布図（天狗山遺跡周辺は造成前の地形）1/1600

行い、期間中の平成18年１月15日には遺跡調査スライド報告会を実施している。

２．平成16年度発掘予定区の保存

当初10,000㎡の発掘調査を予定していた平成16年度調査予定区が、平成16年６月２日の協議で県土地改良課から、本年度予算を見直す中で事業変更概要が示され、これから設計変更を行い、耕地は盛り土として保存するため全面発掘から部分発掘に変えたい―という方針が示された。市教委文化財課では日程的な問題もあり今までの協議経過で全面が切り土になることと遺構の密度は南側が濃く、残りの分についても密度は薄いがほぼ全体に遺構は散在していることが判明しており、さらに国庫補助の内示を受けていたため全面発掘調査を予定して準備作業をしていた。埋蔵文化財保護措置で最善の方法である保存となるならば遺跡の記録保存の必要性も無くなり、本来歓迎するところであるが、試掘調査の結果から、工事に際しては現況の耕土が薄い上、浅いところでは表土から12cmで遺構確認面に達してしまうため耕土の鋤取りは不可能であることを示した。県教委文化財生涯学習課の上田典男指導主事からは調査面積が大幅に変更となるので、埋蔵文化財発掘通知（57条３第１項）の再提出の必要性が示され、表土剥ぎに際しては台地頂部に通しのトレンチを入れ耕土の厚さ確認して本工事の盛り土の参考にしておくようにとの指示を受けた。８月から発掘調査に着手したが、頂部の耕土厚が判明した９月３日現地を確認しながら保護協議を行い、現状では耕土の鍬取りで遺跡が破壊されてしまい、保護層を盛ってから耕土を乗せるようになるが土の確保ができるか不透明で、耕土を剥ぐと遺物の包含層を破壊してしまうため現況に手を付けられない状況にある。本工事に当たってはブルドーザーの使用は絶対に不可であることを市教委から示した。県土地改良課からはブルドーザーは用いずバックホーで行う予定と工法が示され、耕土は全く削れないか問い合わせがあったが、県教委文化財生涯学習課の綿田弘実指導主事は遺跡の保護方法として通常保護する場合はローム層から10～20cm厚の保護層を設けて上の耕土を剥ぐが、現状では無理である―との説明があり、保護方法については地元と再協議をして方針を決めることになった。

地元の了解も得られた平成17年７月19日に盛り土の工事が開始された。保護層の問題については事前に、厚く盛る所の確保は可能であるが、薄い所は確保ができないため県教委文化財生涯学習課の指示を受け、現況に35cm以上の耕土を盛って対応することにした。施工当日現地確認の結果、南側の計画高が現況より低く設定されていることが判明し、県土地改良課に連絡、勾配変更ができないため計画高を上げて対応することで了解を得た。また耕土が不足していることから発掘調査の済んでいる道路敷きから礫を含まないロームを切り出し耕土に使うこととなり、ロームが礫層に達する直前の深さ2.5mまで掘り下げた。盛り土が終了した部分から地均しの転圧のためにブルドーザーを使用したいとの申し入れがあり、県教委との協議の結果、バックホーの自重よりも軽い６tの押しブルドーザーを使い工事を進めることになった。７月25日まで盛り土は行われたが東端の発掘調査終了部分については耕土不足となるためロームを切って基盤土を入れロームを乗せる予定とし、この部分については後日、本工事の際に立ち会うことにした。８月30日東端部分の立合をするがこの１ヶ月の間に状況が大きく変化し、総体的な土量は確保できているが本工事で使う基盤土が不足し確保できる見込みが立たないという事態が発生していた。そのため東端部分の工法については現況に耕土だけを盛る方法に変更したいとの申し入れがあり、耕土を盛る確認をしてから施工業者に引き渡しをした。

芥沢遺跡北東側の遺構密度が濃い部分は以上のような経緯で盛り土による保護措置がとられ、整備事業が執り行われた。茅野市で実施してきた農業基盤整備事業に伴う発掘調査で調査範囲を年度内に県土地改良課

の事業計画変更により埋蔵文化財の保護措置を保存という方法に変更し、調査面積を縮小したのは初めてのことであった。

第4節　整理作業と報告書刊行

1．遺物整理と報告書作成作業

遺物の整理と土器の復元

遺物整理は、各年度の調査終了後から開始した。遺構・遺物の内、縄文時代早期末から前期初頭の資料に重点を置き整理を実施した。住居址覆土内からの遺物については、その出土位置や出土層位、また、覆土内に含有されている礫との供伴関係等に注意しその出土位置を記録に留めた。表土から遺構確認面まで極めて浅い状況ながら重機を用いて土砂を除去したため、時期別の遺物包含層の状況については観察することができず、重複については、遺構検出時に判明した重複関係をもとに遺構との供伴関係を判断しているため曖昧な遺物も生じているが、基本的には遺構覆土内のものは一括りで取り扱っている。

発掘調査が平成15・16年度の2年間に亘り行われたことと、遺物の総量は整理用コンテナに28箱と面積に比べて少量だったが、特に縄文時代早期末前期初頭の土器には脆い破片が多く、洗浄中に崩壊してしまう土器片もあったため遺物洗浄は予定外に手間取った。遺物の注記略号は遺跡番号189、遺構名、地点・層位の順としたが、遺構外からの遺物についてはグリッド番号を付し、発生土内からの遺物については表面採集の表を用いて行っている。

土器は器形が判明するものについて復元作業を行った。復元には石膏を用い器形復元に重点を置いたが、時期決定資料については、図上復元も行っている。土器復元は田中洋二郎が担当した。

遺構平面図等・写真の整理

遺構平面図は、航空写真測量により得られた1/20の原図を、現場に於いて遺構と対照し校正を行い、また、住居址、集石、土坑、一括土器出土状態等については、平板測量等により平面図を作成し、航空写真測量図と合成した。住居址は床面しか確認できないものもあり、遺構検出時にプランを把握して平面図を作成して調査を開始している。土層断面図は遺構の重複関係、遺構の埋没状況の把握を目的に行ったが、前述のように遺構相互の重複関係が判明しにくい住居も多かった。航空写真測量を導入し省力化を図ったが、補備測量、図化表現には課題が残るものもある。

調査における記録は、測量図、写真記録を採用している。写真記録はカラーリバーサル・モノクロネガ・カラーネガの3種類のフィルムで撮影し、ネガはモノクロを現像後ベタ焼きし、カラーネガはラッシュプリントしてファイル保存としている。なお、原稿執筆用・報告書図版用にはキャビネ版以上のプリントを利用した。

遺物実測と報告書作成

遺構・遺物については、資料化に努めたが全てを図化するには至ってはいない。また、報告書においては、頁数の関係からこれらの全てを図示することはできなかった。

現場に於いて作成した図については、報告書中にできる限り図示するように配慮した。なお、報告書中において本来調査された遺構・遺物全体を掲載し論考すべきであるが、時間的・予算的制約があり、すべてを記載することはできなかった。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

１．遺跡の位置と地理的環境

芥沢遺跡は、青柳駅から西に500m の茅野市金沢大沢に位置にする。金沢地区は諏訪湖に注ぐ宮川とその支流の河川によって形成された谷合いに主な集落があり、北西方向に緩やかに傾斜している。芥沢遺跡は大沢集落の北側、標高は884m～894m の台地上にあり、遺跡範囲は約35,000㎡の広がりを確認している。

金沢地区には交通の要衝として栄えてきた歴史があり、現在でも信州と首都圏を結んでいる中央自動車道、国道20号線、JR 中央東線等の幹線が通過し、江戸時代には甲州街道の宿駅が置かれ、特に大沢から金沢峠（松倉峠）を越え伊那方面に向かう高遠街道と八ヶ岳西南麓の山浦方面への分岐点でもあった関係で商業の要所としても栄え、参勤交代の際には甲州街道を上がってくる高島藩の他に、高遠藩、飯田藩が高遠街道を利用した記録がある。更に古い道筋としては鎌倉街道という地名が大沢から天狗山の東、金沢近隣公園の西などに残っている。

主要道とは異なるが諏訪神社（現諏訪大社）上社御射山祭のため御射山社（原山様）に向かう参道を御射山道と呼んでいる。金沢の宿中から宮川を渡り、穂屋之木明神を経て、祢宜坂を登り、御射山社の社域に至るがこれも古くからの道であろう。

２．遺跡の立地

金沢は糸魚川～静岡構造線上にある。西には赤石山脈北端の入笠山系の急斜面が迫り、東は八ヶ岳の山裾が広がっている。芥沢遺跡は、入笠山系の大沢山（1,312.6m）山麓で、宮川支流の大沢川と中野沢川の侵食により形成された北東側に傾斜する台地上にある。地質は苦鉄質岩類・緑色岩類・粘板岩類など火成岩や堆積岩の円礫上にローム層が堆積し、この上を有機物が分解してできた腐葉土が覆っている。平成15年度調査区の西側からは糸魚川・静岡構造線の大規模な活断層による南北方向の破砕帯が見つかっている。同年、発掘後の本工事で耕土の鋤取りに立ち合った際、調査区西側で検出された破砕帯は西側の入笠山系の山裾まで続いており幅は50m 以上に達していることを確認した。平成16年に本工事に伴い、西側山裾の立ち合いを行ったが斜面際には厚さ１m 以上の粘土層が広範囲に存在していた。

大沢から芝平峠（標高1,450m）に登る途中に武田信玄が吊るし掘り（露天掘り）で金を採掘した跡と伝えられている擂り鉢状の窪みが200ヶ所以上残っている金鶏金山がある。金山内には千軒平湿原（標高1,431.6m）があり、千軒堤と呼ばれている築堤址を見ることができる。湿原の北側には天保十己亥年の年号が刻まれた墓石がある。湿原は中野沢川の北を流れている金川の水源となっている。湿原から北ノ沢下った左側に明治時代に金鉱採掘特許を記念して建てられた不動明王座像が祀られ

第六図　天保の墓石と明治の不動明王像

ている。

金川からはかつて鉱石粉砕用の石臼が見つかっており、金沢小学校にはこの石臼の他に碗かけ法による砂金採取に用いられたという伝世品の揺すり鉢も展示されている。

第７図　整備事業前の下田圃湧水噴出口周辺

地下水位が高いこともあって涌水は遺跡近くの下田圃の大清水のように音を立てて噴出しているものを始めとして各所にあり、天狗山遺跡のあった鉄塔付近と農道に隣接する水田内の南側にも少ない水量ではあるが湧き出していた。総じて一帯の水量が豊富で、雨後には調査区内でイモリを多数見かける機会があった。しかし、農業基盤整備後、大清水の湧水量は激減してしまっている。

内陸的気候の茅野市の中でも金沢は西側に聳え立つ入笠山系を背にし、諏訪湖のある北西側に傾斜している影響から、夏は暑く、冬は寒い。また昼夜の寒暖の差も大きく、市内の集落としては最も降水率が高い。

第２節　遺跡の歴史的環境

１．調査の歴史と周辺遺跡の地理的関係

金沢地区には諏訪における考古学研究の契機となった発掘がいくつかあるので、主なものを列記しておく。

最初の学術的な考古学調査が行われたのは1920（大正９）年に信濃教育会諏訪部会の依嘱を受けて郡史編纂資料収集のため諏訪を訪れた鳥井龍藏によるもので、木舟芝平の俗称ケツヨリで発掘調査を行い住居址と推測される竪穴を掘っている。記録によれば糸切り底の須恵器や弥生土器らしきものもあり、出土した土器片の中には縄文時代早期の楕円押型文土器が含まれていた。ケツヨリ遺跡の発掘調査報告1922（大正11）年に八幡一郎が『東京人類學雑誌』で行い、八幡は押型文土器研究の先駆者となっていく。この発掘時の遺物は現在も金沢小学校に保管されているが、昭和50年代中頃に行われた校舎改築時に他の遺跡の出土遺物と混じってしまったため、分別ができなくなっている。調査された住居址一帯も後にゴミ捨て場となってしまい、現在は林の中に埋もれて平らになっている。

1924（大正13）年に『諏訪史』第一巻が発行され、ケツヨリ遺跡は「金沢村木船竪穴跡」として訂正を加えて報告されている。また、諏訪郡先史時代遺物発見地名表で金澤村にはハゴヤ、芥澤、西畠、狐塚、原山、栃木澤、久保畑、茂左衛門窪、古屋敷、竹原上（ケツヨリ）、芝平、金澤峠、金澤山が、原始時代遺物発見地名表に矢ノ口、諏訪郡古墳調査表には稚子塚が記載されている。昭和20年代には清陵高校の生徒らが芥沢遺跡の発掘を幾回も行っているが、記録として残っているのは1951（昭和26）年の小発掘で諏訪考古学研究

所を主宰していた藤森榮一と清陵生であった戸澤充則、松澤亜生らにより、道路沿いの極狭い範囲が調査され、縄文時代早期末前期初頭の住居址の一部を発見している。この発掘調査については『諏訪考古学第8号』に次のような記載があるので転記しておく。

小報　―最近のニュースから―

⑤縄文式前期初頭の新遺跡調査

研究所では26年度文部省人文科学研究費による調査の一部として、11月11、12日の両日、金沢村大沢にある古式遺跡を試掘調査した。この遺跡は同人松沢亜生君の発見になるもので、静岡縣の木島式類似の土器を主体とし、若干の黒浜式を混える單純遺跡で、諏訪地方としては最初の発見である。尚今回の調査には清陵高校長千野光茂博士も参加された。本誌第九号に結果が報告される予定である。［但し9号は未刊筆者註］

第8図　芥沢遺跡第1次調査にて　左から戸澤・藤森・松沢

戸沢によるとこの発掘は少人数で行い、他には土器は拓本を取り、謄写版刷りの『大沢遺跡』としてまとめたとのことなので再三探していただいたが行方不明とのことである。

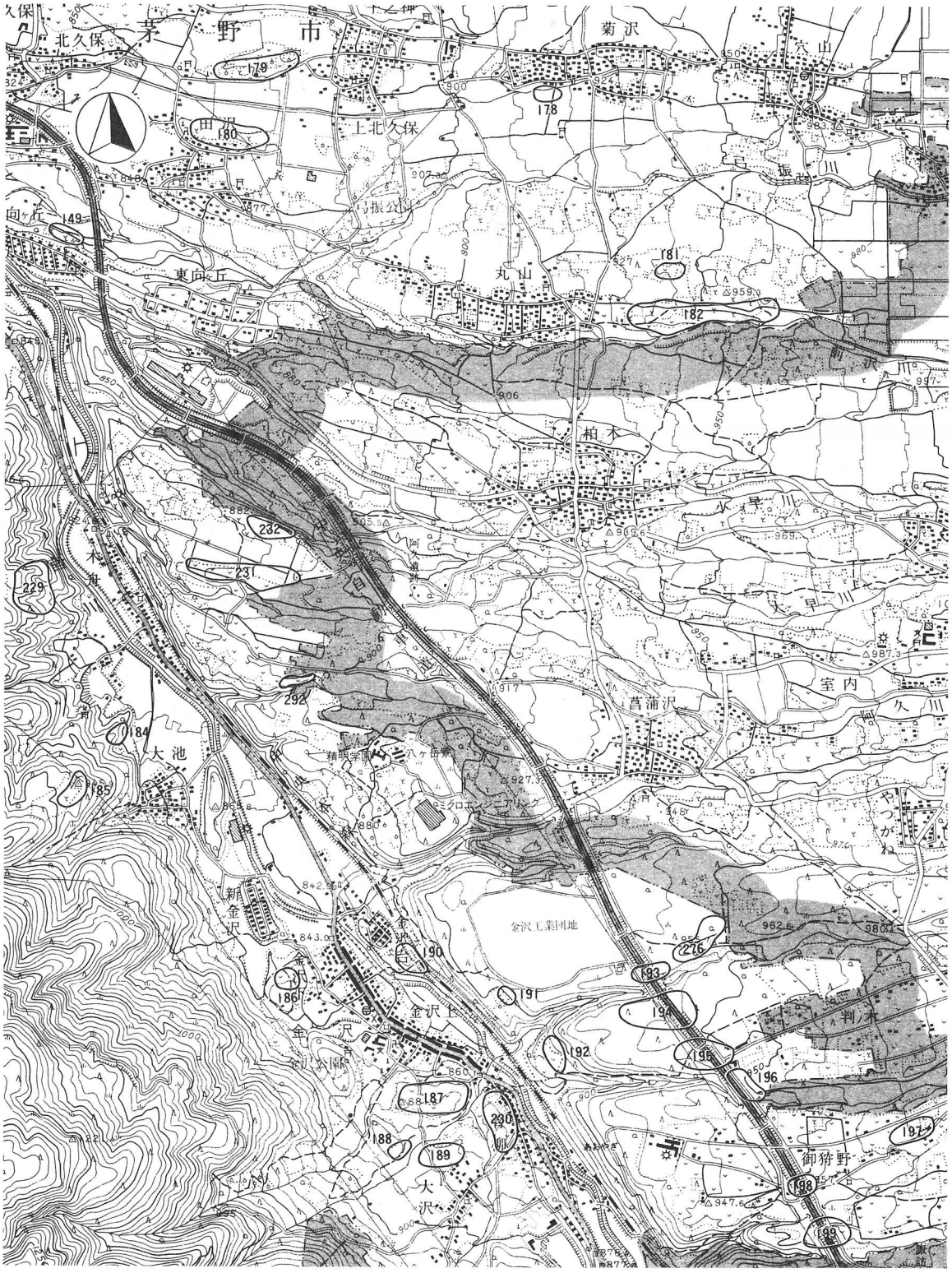
この時出土している遺物については、1983年長崎元廣らにより再確認がなされ、隆帯系と沈線系の両者が存在していることが明確にされている。

1956（昭和31）年にまとめられた『信濃史料第1巻上』考古資料編の遺跡地名表では大沢と芥沢が別遺跡として並記されているが備考の文献から判断すると芥沢遺跡を混同しているようである。

1975～1978（昭和50～53）年には中央自動車道建設に伴う発掘調査が金沢でも行われた。中でも注目される遺物に判ノ木山西遺跡で出土した縄文時代早期の条痕文系土器群がある。判ノ木山西タイプと呼ばれている早期後葉の土器で、この発見により八ヶ岳西南麓に位置する遺跡で空白となっていた同期の性格解明が進んだ。

1986年（平成61年）に『茅野市史上巻原始古代』が発行され、芥沢遺跡の今までの調査と研究成果について端的にまとめられている。

1989年（平成元年）には諏訪南インター林間工業団地地下水道施設用地に係り芥沢遺跡の小規模な発掘調査を実施し、諏訪考古学研究所の発掘で見つかったのと同時期の土器が出土している。狭い範囲の調査であったがこの調査により芥沢遺跡における同期土器群の編年的な位置や系統関係の内容充実が図られてい



⑭長峰遺跡　⑰屋敷添遺跡　⑰古御堂遺跡　⑱神垣外遺跡　⑱大悦遺跡　⑱大悦南遺跡　⑱ケツヨリ遺跡　⑱芝平遺跡　⑱御湯の山遺跡
⑱向坂遺跡　⑱天狗山遺跡　⑱芥沢遺跡　⑲金沢台遺跡　⑲裏の山遺跡　⑲中平遺跡　⑲上の平遺跡　⑲判の木山西遺跡
⑲判の木山東遺跡　⑲金山沢北遺跡　⑲頭殿沢上遺跡　⑲御狩野遺跡　⑲頭殿沢遺跡　㉒シラザレ城跡遺跡　㉓はごや遺跡　㉑阿久尻遺跡
㉜下原山・茂佐久保遺跡　㉖下原山遺跡　㉒久保畑遺跡

第９図　芥沢遺跡位置と周辺の遺跡

る。この時には、中世以降の遺物も出土している。

1990～1991年（平成２～３年）金沢工業団地造成に伴い阿久尻遺跡の発掘調査が実施された。方形柱穴列が19基検出され、隣接する国史跡で縄文時代観の転換と言われた阿久遺跡とともに縄文時代前期前葉の集落論に多くの問題点を投げかけている遺跡である。

1992年（平成４年）金沢住宅団地（現在の旭ヶ丘）宅地造成に伴い芥沢遺跡と中野沢川を挟んで相対する天狗山遺跡の発掘調査を実施、断続的ではあるが縄文時代早期から平安時代末期までの生活址を確認している。縄文時代早期の押型文土器を伴う住居址、焼石炉など居住の痕跡と早期末～前期前半のムラが形成されていた時期の住居から出土している遺物の中には数形式にわたる東海系の土器が認められる。金沢で初めて見つかった弥生時代後期の住居址からは、箱清水式、座光寺原式・中島式の土器が出土していることから両文化圏の接点であったことが伺える。平安時代の住居址は芥沢遺跡と対向するように展開しており、複数の竈や柱穴の位置から建替えが数回に及んで認められた例もある。集落に位置する住居址の軸方向と構成から判断すると規則性を持ち集落形成がなされた可能性も考えられる。また時代の特定はできなかったが生産域の遺構である落し穴も複列で検出しているので、時期により居住域、あるいは生産域として利用された遺跡である。

2002年（平成14年）中山間総合整備事業御柱の里地区に伴い発掘調査を実施した柏木遺跡は、芥沢遺跡から南西に400m離れた大沢山の山裾に位置しており、事業計画が示されてから新たに見つかった遺跡であるが、検出した同類の遺構（落し穴）から芥沢遺跡、天狗山遺跡と極めて深い関係を持つ生産域の遺跡として捉えることができた。遺物には中世の内耳土器の破片もあり、遺跡の立地が金鶏金山の登り口にあることから、今後、中世の金沢を考察する上でも興味深い遺跡である。

上記以外の周辺遺跡としては、天狗山遺跡の北東に芥沢遺跡とは中野沢川を挟んで対する北側に縄文時代前期から中期の土器片や石器類が採集された記録のある向坂遺跡が位置しているが天狗山遺跡の調査、芥沢遺跡の発掘時にも表面採集を試みたが遺物は全く採集できなかったため、遺構密度が薄い遺跡と思われる。

芥沢遺跡と大沢側を挟んだ東側のはごや遺跡からは明治時代中頃にほぼ完形の土器が出土し、大正11年には『諏訪史』第一巻の編纂に伴って地元の金沢小学校、信濃教育会諏訪部会等の関係者により掘られた記録がある。出土品は縄文時代中期の遺物が多く、厚手土器、薄手土器、石鏃、石棒、凹石、磨石斧なども出土していることから、規模の大きな集落遺跡の可能性がある。

芥沢遺跡を含む遺跡名については金沢村史刊行会が1992年（平成４年）発行している『信州金沢の歴史』において―遺跡名をつける場合地籍名と同じ名称にしてほしいものである。地元としては従来からの地籍名と同じ名称のほうが親しみもあり混乱もしない。―との記載があり、同書においては遺跡名に芥沢（五味沢）を用い、字名から古新井遺跡と同一遺跡について３つの遺跡名を使用してある。しかし、遺跡登録以前の同一遺跡でも複数の遺跡名を使用してある場合、その後の研究等に混乱を生ずることが多々生じている。また、小字名を新たに遺跡名とする場合は芥沢遺跡の対岸にある天狗山遺跡（小字は馬飼場、笹の山、山の神）のように小字名とは異なる遺跡は従来の遺跡名が使用できなくなってしまい、芥沢遺跡の場合も遺跡範囲が小字名の古新井、屋敷添に跨っているためどちらを用いればよいかという問題も生じる。茅野市教育委員会では周知の遺跡以外を新遺跡として登録する際には、原則として発見した地点の小字名を用いているが、芥沢遺跡は前述の『諏訪史』第一巻には記載があり、学史的にも著名な遺跡である。

なお周知の遺跡について長野県教育委員会がまとめた1980年（昭和55年）発行の『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書　昭和54年度』から遺跡名と共に現在の遺跡番号－189を使用している。

芥沢遺跡と同じ糸魚川―静岡構造線上の富士見町上蔦木に位置する釜無川左岸の坂平遺跡は、土地改良整備事業に伴い1996年から発掘調査され、2004年『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』として富士見町教育委員会から報告書が刊行された。芥沢遺跡と坂平遺跡は約11km離れているが前期初頭の遺構・遺物の出土状況が芥沢遺跡と似通っていることから、小林公明は糸静線上に主要な交通路があったことを同書で想定している。

2．土器の研究史

芥沢遺跡の発掘調査でまず注目されたのは土器についてである。1953年発行の『川岸村史』で戸沢充則が1951年の発掘で出土した土器について、同書第２編先史時代第１章川岸村周辺における先史時代土器の研究―諏訪郡地方の編年学的調査の概要―第１項縄文式土器1,早期縄文式土器で次のように型式設定している。

早期から前期に移る間を埋める一形式として、関東地方では花積下層式という土器があるが、これは底が若干の尖底を除くほか、多くは平底になる。土器の姿の上に現れた大きな変化であろう。この形式にあたるものは諏訪地方では最近、金沢村大沢から単純に近い形で検出されたので、大沢式という名を付けた。これは無文粗製の土器とセンベイ土器が主体をなすもので、静岡県の木島式と同じ。後略

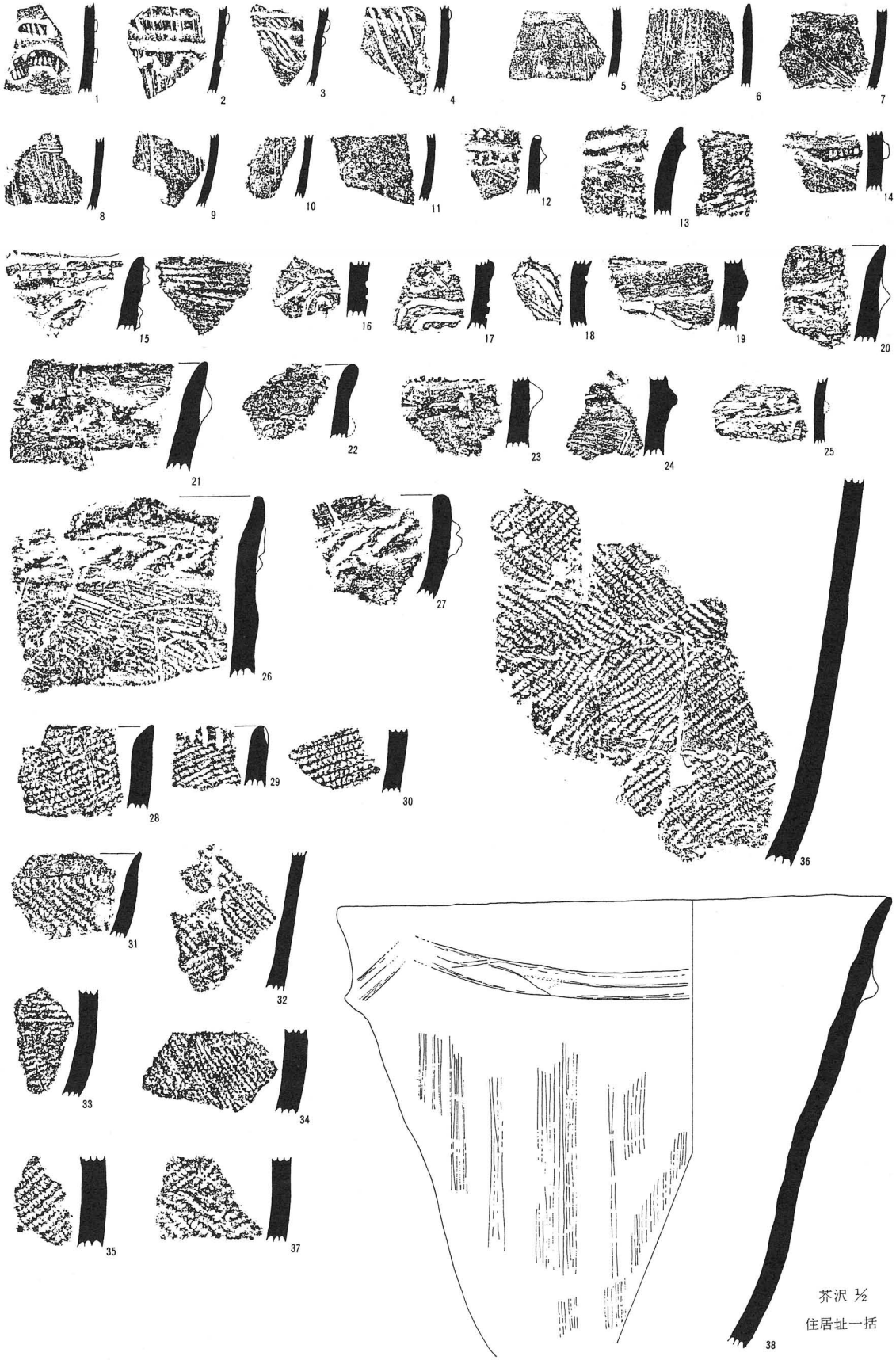
戸沢によると当時見つかった土器を一括して大沢式と命名したため現在の分類からするとかなり大まかな型式設定で内容も具体的ではなかったと話している。

1956年（昭和31年）の『信濃史料第１巻上』考古資料篇の編年表で東海の木島（石塚下層）、関東の花積下層に平行する前期最初頭土器として、大澤は現在の佐久穂町の中松井と中部山地に並記されており、『同下』同第２要説Ｂ縄文式文化⑵前期縄文式土器には

> 前期初頭にあっては、いまだ早期末葉同様に、東西兩日本各地方に分布の中心をおく花積下層式・木島式が各別箇の分布軒圏を示すこと、換言すれば、いまだ信濃獨特の土器の存在が明瞭でないことが、まず注意される。この點、南佐久郡畑八村中松井・諏訪郡茅野町金澤地區大澤兩遺跡の發掘結果によって、その大要を知ることができる。前者は、繊維を多量に含み羽狀縄文を主とする中厚手の粗雑な土器に、多少貝殻条痕文のある一群の土器を出土し、後者では木島式が主體となって、僅かに數片の花積下層式的な土器が伴出したといふ。この事實は、兩遺跡の地理的状況に起因するものであり、中松井遺跡のある千曲川上流地域には、少なくとも北關東方面からの影響であらう。花積下層式土器が點々と出土してをり、逆に天龍川、木曾川流域の東海或いは關西地方に繋がる地域からは花積下層式に編年的位置を同じくする木島式土器の存在が認められてゐる。　後略　との記載がある。

1975年、地元大沢をフィールドとする茅野高社会科クラブ考古班員の小林一史は「大沢遺跡紹介」として芥沢遺跡について同班の研究紀要『かやの』創刊号に報文と共に遺跡略図を掲載している。中でも遺物について①表面採集の結果、繊維土器片（縄文前期）、中期土器片などが見つかっており、多量の石鏃の他には拇指状掻器・石錐を採集していること、②近隣の狭い範囲から岩石片が10数片、粗雑な石鏃３点、繊維土器７点、柱状石核１点が見つかっており、特に注目すべきだとしてそれまでの研究の中心であった土器だけでなく、石器についても関心を寄せている。

1983年、前述のように長崎元廣は1951年の発掘で出土した土器について図化をして『神奈川考古第17号』の［長野県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集］で資料報告をする（第９図）。同年12月３・４に開催された神奈川考古同人会縄文研究グループによる「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」で長崎は資料について２時期（２型式）の混在か過渡的な土器としながら幅広で斜めに切られた隆帯が



第10図　「長野県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集」に掲載された１次発掘出土土器　1/3

付き、下に簡単な条痕が付いた土器については、今後注目すべき資料で、花積下層の最古段階に伴うとの考えを示し、また無文隆帯文土器については渋谷昌彦から今後の課題として残して置いた方がよいとの指摘を受けている。1988年に宮下健司は『長野県史考古資料編遺構・遺物』でこの集成図集をもとに芥沢遺跡では隆帯文系土器群に塩屋式土器が共伴していることに注目をしている。

諏訪南インター林間工業団地地下水道施設用地に係り芥沢遺跡の小規模な発掘調査を実施した守矢昌文は1990年発行の『芥沢遺跡』で出土した縄文時代早期末から前期初頭の土器群について分類、分析し、特に様相をまとめ、段階的な位置づけを行っている。この土器の一部については1994年『塚田遺跡』で下平博行が「塚田式」の設定をする際に他遺跡における様相と他形式との共伴関係資料として取り上げている。

2004年刊行された『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』で縄文時代の土器を担当した小松隆史は坂平遺跡が前期初頭の下吉井段階で箍状に粘土紐を貼り付けて繊維を混入する在地系の土器が主体を占め木島式と花積下層式が伴出していることを指摘している。この前期初頭の土器群については澁谷昌彦によって細分化され「坂平式土器」として2006年に型式設定された。以上が20世紀中頃から注目されていた芥沢遺跡と近隣遺跡出土の土器を中心とした縄文時代早期末・前期初頭の在地系土器研究略史であるが細分化に対する時間幅の設定などに未だ多くの問題を抱えている。

第Ⅲ章　遺跡の層序と調査区の概要

第１節　調査区の基本的層序

１．土層の基本的な堆積状況

基本層序の概要

本遺跡の立地している尾根状台地は、八ヶ岳起源の火山堆積物である泥・砂・礫、火砕流を基盤として、この上にロームが堆積する。台地西側から西山の山裾にかけてはロームの堆積は認められず糸魚川・静岡構造線破砕帯の砕けた礫層が続いており、両層の上部を有機物腐食物の堆積物である黒色土が覆う形で台地全体を形成している。

調査区全体は畑地造成により、地形が改変されており、特に台地南側斜面部は近代の水田開削時に削り取られて、台地頂部から台地斜面部にかけて土層の堆積状況を調べられる箇所は少ない。土層観察は調査区内で最も土層堆積状態の良好な西側で、緩やかな台地斜面の土層状態を観察している。発掘調査で少量の遺物が検出されているが、生活面の分層には至ってはいない。

Ⅰ層　耕作土　色調は黒褐色（10YR1.7/1）を呈する。粒子が細かく、粘性が強い、締まりのある土質で、内部に少量のロームと炭化物粒子を含有する。現在耕作されている畑の耕土で地表に畝痕が観察される。

Ⅱ層　黒色土　調査区の頂部には薄く、斜面に至るにつれ厚く堆積している土層で、Ⅰ層に近似する性質を持つが５㎜以下の礫を少量含む。色調は黒色（10YR1.7/1）を呈する。

Ⅲ層　黒色土　Ⅰ層に近似する性質を持ち２㎜以下のローム粒子を少量含む。色調は黒色（10YR1.7/1）を呈する。

Ⅳ層　暗褐色土　調査区全体に割合安定して堆積している土層で、色調は暗褐色（10YR2/2）を呈し、粒子は細かく締まりが有り、２㎜以下のロームを多量に含む。本層中で遺構の検出が可能となる。

２．土層の成因と性格について

土層の状態

土層はⅠ層からⅣ層の４群に分類した。Ⅰ層は現在の畑地耕作に関わる土層群である。Ⅱ層内は農耕機械等による攪乱を受けている状況が観察される。Ⅲ層は安定した土層で、調査区の各地で認められた。Ⅳ層が遺物の包含層にあたり、遺物が混在する形で認められた。覆土とは色調に差があるために、掘り込みの判断が可能になる。本来はⅣ層上が生活面となりこの層より遺構の掘り込みがなされたと考えられる。遺構内の覆土は基本的にはⅣ層に類似する土層である。なお、ナイフ形石器が出土したことから周囲のローム層を部分的に掘り下げたが、他に旧石器時代の遺物の包含は確認されなかった。

第2節　発掘した遺構・遺物の概要

1．遺構の概要

検出された遺構の概要

本遺跡から検出された時期決定が可能な遺構は、縄文時代早期末、前期初頭、平安時代に帰属するもので、縄文時代早期末・前期初頭の遺構が主体を占める。集落の変遷を考える上で重要な資料が得られている。

検出された遺構　検出された竪穴住居址の番号は、調査が2年度にわたっているため調査着手順に通し番号を付し、土坑番号も同様の順番付けをしている。

住居址は第1号から第41号まで付しており、縄文時代の住居址は第13・18・35・36号を除く37軒でこの番号に沿って、第Ⅳ章は記されている。縄文時代早期末・前期初頭の住居址は37軒を確認しているが平面プランを確実に把握できているのは4軒だけである。なお、住居址としたものの中には、地床炉の焼土を伴う例が多く、掘り方はロームにまで達するが凹凸が激しく、地床炉の焼土はほとんどが掘り方より上層面で検出され、ロームまで達していないものもある。前述のように遺構の残存状況が良好でなく壁体・炉・床の確認はできないが河床礫を用いた固定石皿を据え、凹石と少量の土器片が組み合わされて見つかる等の遺物出土状況や柱穴の検出状況から住居址として取り扱っているものもある。

土坑については、一応番号を付したものは、平成15年度174基、平成16年度65基の合計239基を設定したが、整理作業時に攪乱及び近代以降の穴と判明したものは除外したため229基を登録している。土坑の中で特筆すべき土坑は、上面が楕円形を呈し列をなす落し穴の存在で、周辺や本遺跡における配置等に注目される。

集石遺構は調査区北西側台地肩から2基の集石炉が見つかっている。

2．遺物の概要

旧石器時代の遺物

旧石器時代に確実に帰属すると思われる遺物は1点得られており、平成15年度調査区の台地頂部J－11グリッドから黒曜石のナイフ形石器が出土している。

縄文時代の遺物

遺物の主体を占めるものは縄文時代早期末前期初頭の遺物である。少量ではあるが中期中葉の土器片と表裏縄文土器と後期前半の浅鉢の破片が各1点見つかっている。

復元された土器は全て底部が欠損しており、ほぼ完形のもの6点、口縁部あるいは胴部で器形復元ができた土器が6点ある。

石器は全てを資料化することはできず、また、図示したものも限定されている。注目される石器としては、礫塊の一部を剥離し粗雑な刃部を形成した石器や量的に多く出土している緑色岩の剥片などがある。

黒耀石は製品・素材・原石を含めて3,501点に及び総重量は14,870.3gを量る。黒曜石の原産地を背景とした霧ヶ峰南麓に位置する遺跡を除けば、その重量は割合多いと言えよう。チャートは13点、113.4gと少ない。他に水晶が4点、4.1gある。

平安時代・中世の遺物

平安時代の遺物は住居址の残りが少ないため、芥沢遺跡対岸の天狗山遺跡の同期の住居に比べ量が少ない。中世に帰属する遺物では内耳土器の破片が出土している。

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１．第１号住居址（第11図、図版11）

本址は調査区のＫ－10・11グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居の中央部で長径3.00m×短径2.63mの円形を呈していた。長軸方向はＮ－85°－Ｗを示す。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。床面まで耕作による削平を受けているが、東側から焼土を検出しており、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。ここが地床炉であると思われるが、削平等の影響で検出された平面形は不整形である。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む胴下部破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土しており、図上器形復元以外の総重量は1,910gが出土している。石器は緑色岩系の周囲に調整痕を持つ礫が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

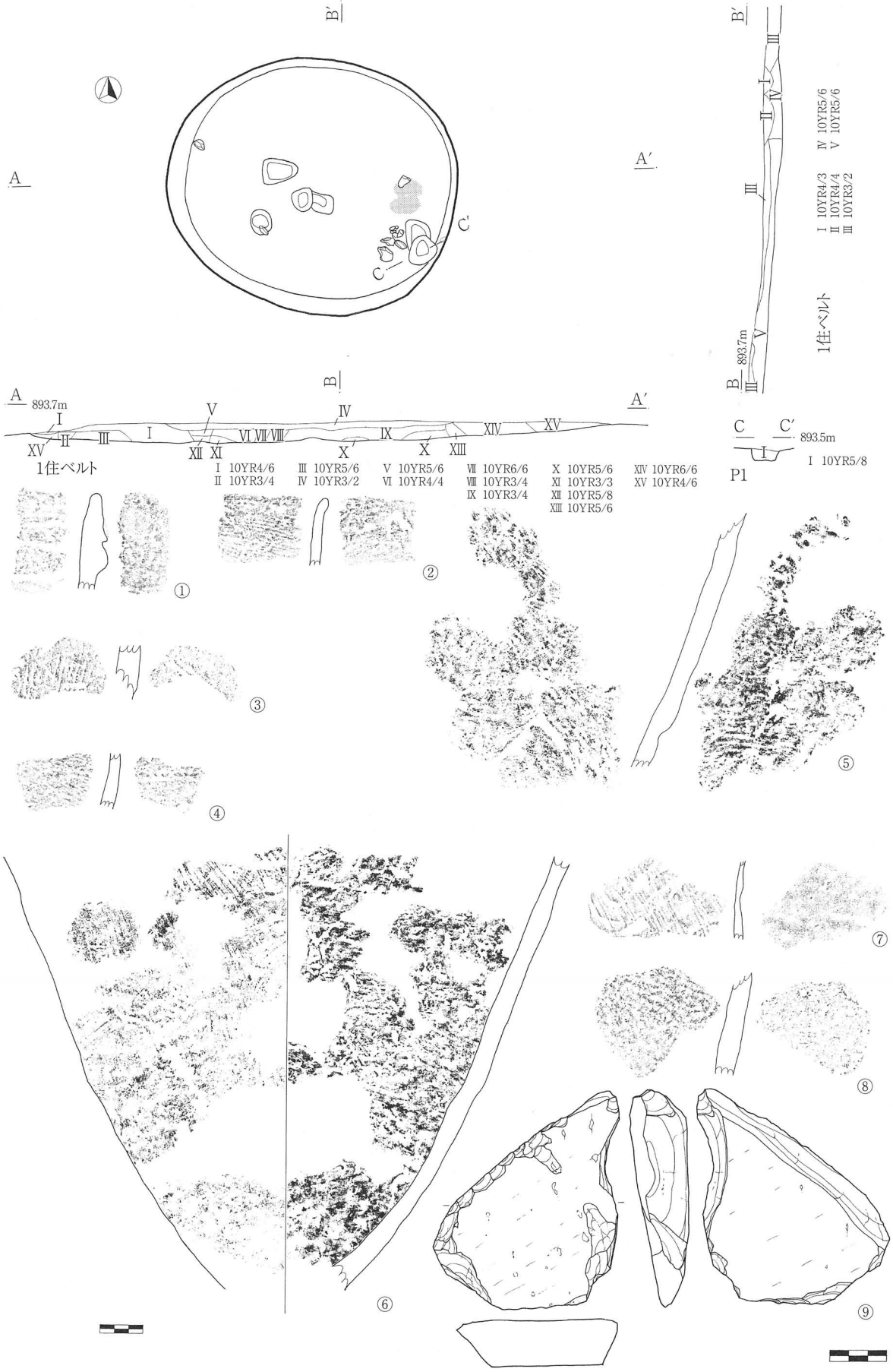
２．第２号住居址（第12図、図版12）

本址は調査区のＬＭ－９グリッドで確認されたものである。住居址は１号住居址の北東台地の平坦面に位置する。旧作業道内に一部が掛かり残りも耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。南西側を落し穴の第62号土坑によって切られているが切り合っている所から南東側では弧状に立ち上がり伺わせる落ち込みを検出しており径は4.5m以上になる。内部構造は住居址の北西側が削平と耕作による攪乱が著しく壁や周溝だけでなく残存する床の境も不明瞭である。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。床面まで耕作による削平を受けているが、ローム面まで焼土が達している地床炉を中央付近で検出している。焼土は南北方向に長く検出し加熱を受け硬化したブロックが認められ、ローム面まで達している。ここが地床炉であると思われるが、削平等の影響で検出された平面形は不整形である。

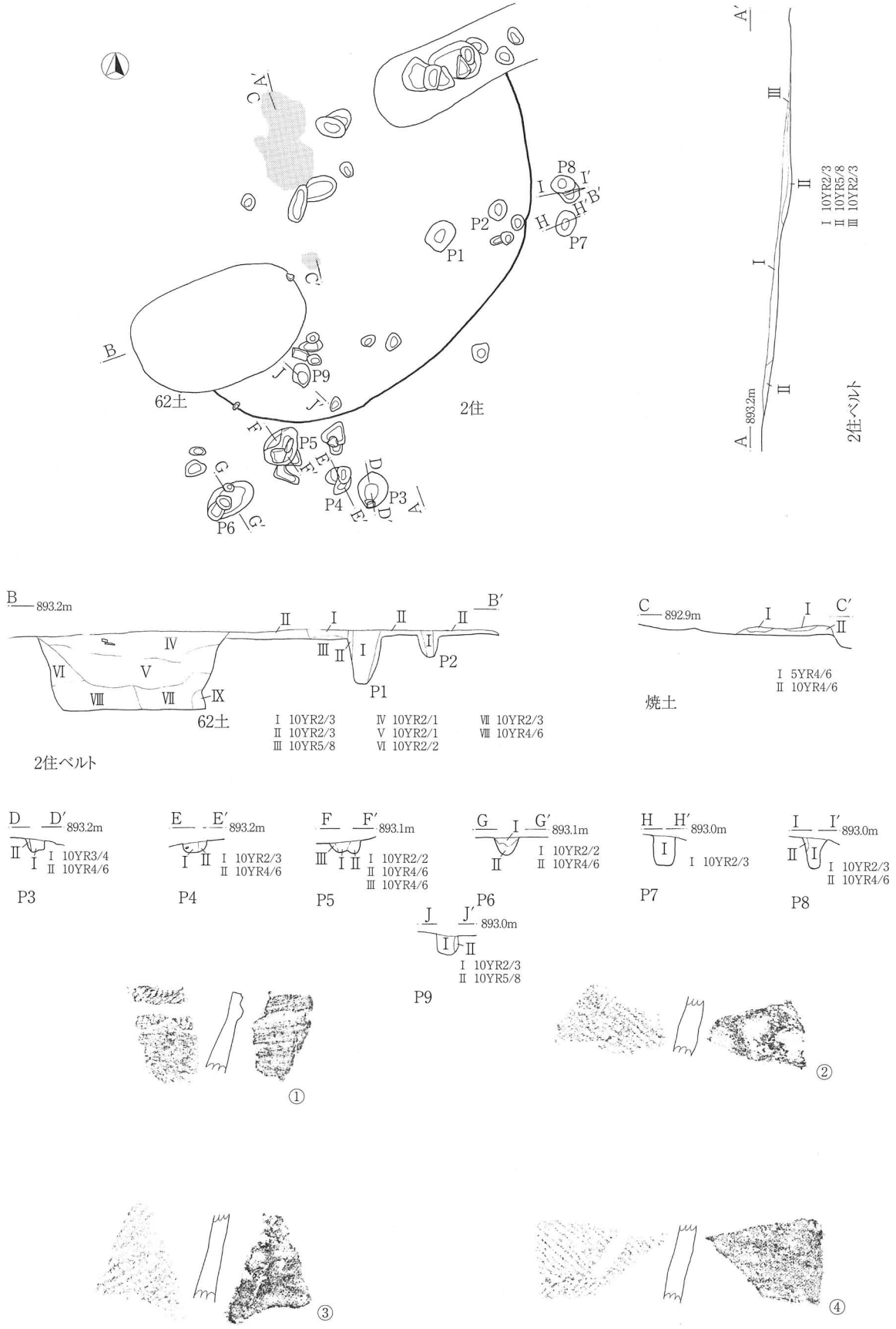
遺物は少量の土器片が出土している。いずれも繊維を含み神ノ木台式併行の口縁部の破片と羽状の細かな縄文を施文した土器があり、総重量は400gが出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。なお戸沢充則によるとこの住居址付近が1951年の発掘調査地点の可能性があるとのことである。

３．第３号住居址（第13・14図、図版13）

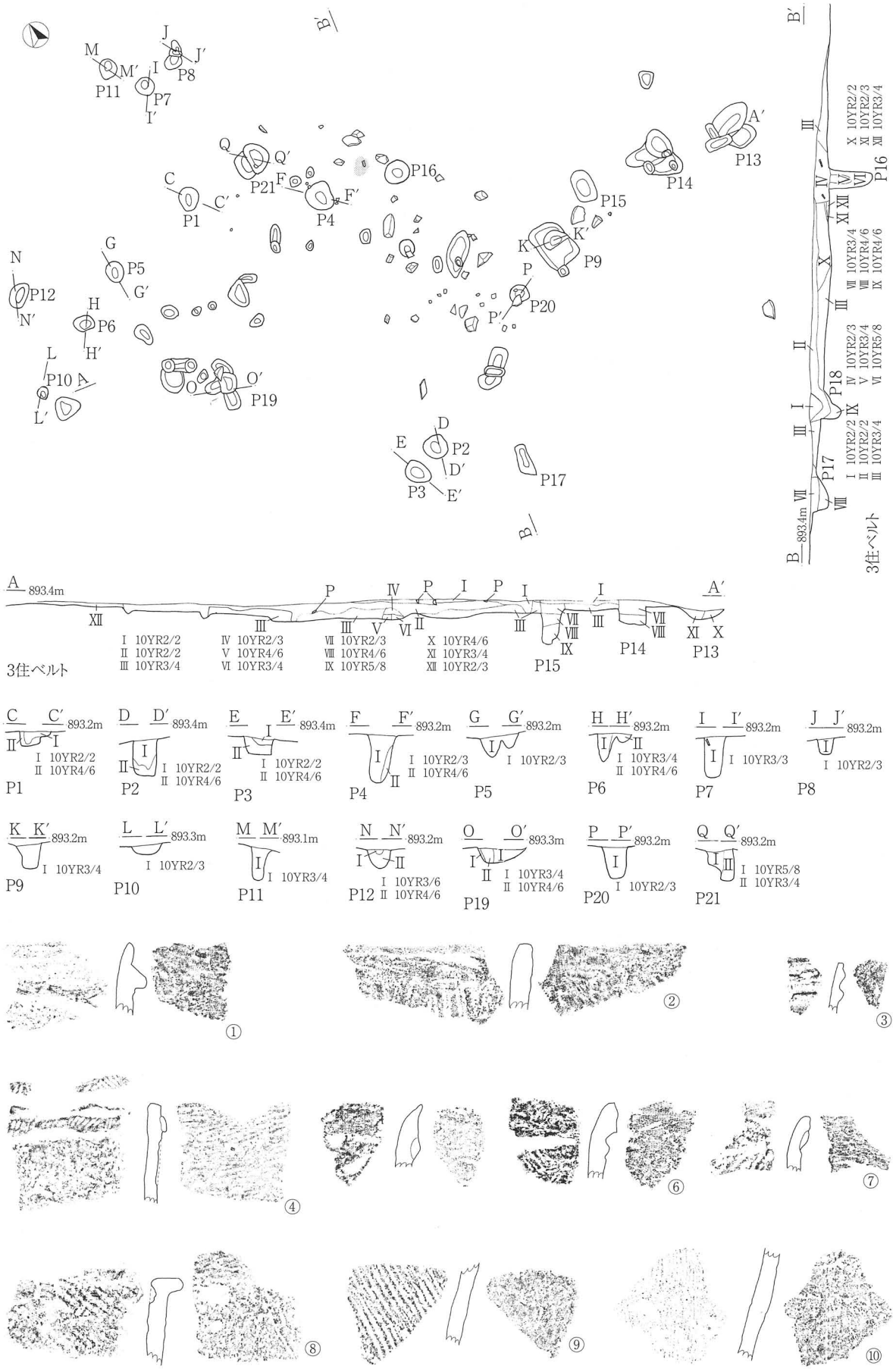
本址は調査区のＫＬ－９グリッドで確認されたものである。２号住居址南西側に隣接する台地の平坦面に位置する。長径約6.5m×短径約５ｍのぼんやりした落ち込みと遺物出土の確認ができたため住居址として調査を進めた。平面プランの把握には至らなかったが、中央やや北寄りで焼土を検出している。掘り方を確認するため掘り下げて行くと落ち込みの境界が検出面とほぼ同化してしまった。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、境界から皿状に窪む中央付近までの比高差は16cmを測る。検出状況は軟弱である。床面は遺構検出面とほぼ同面になると思われ壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思



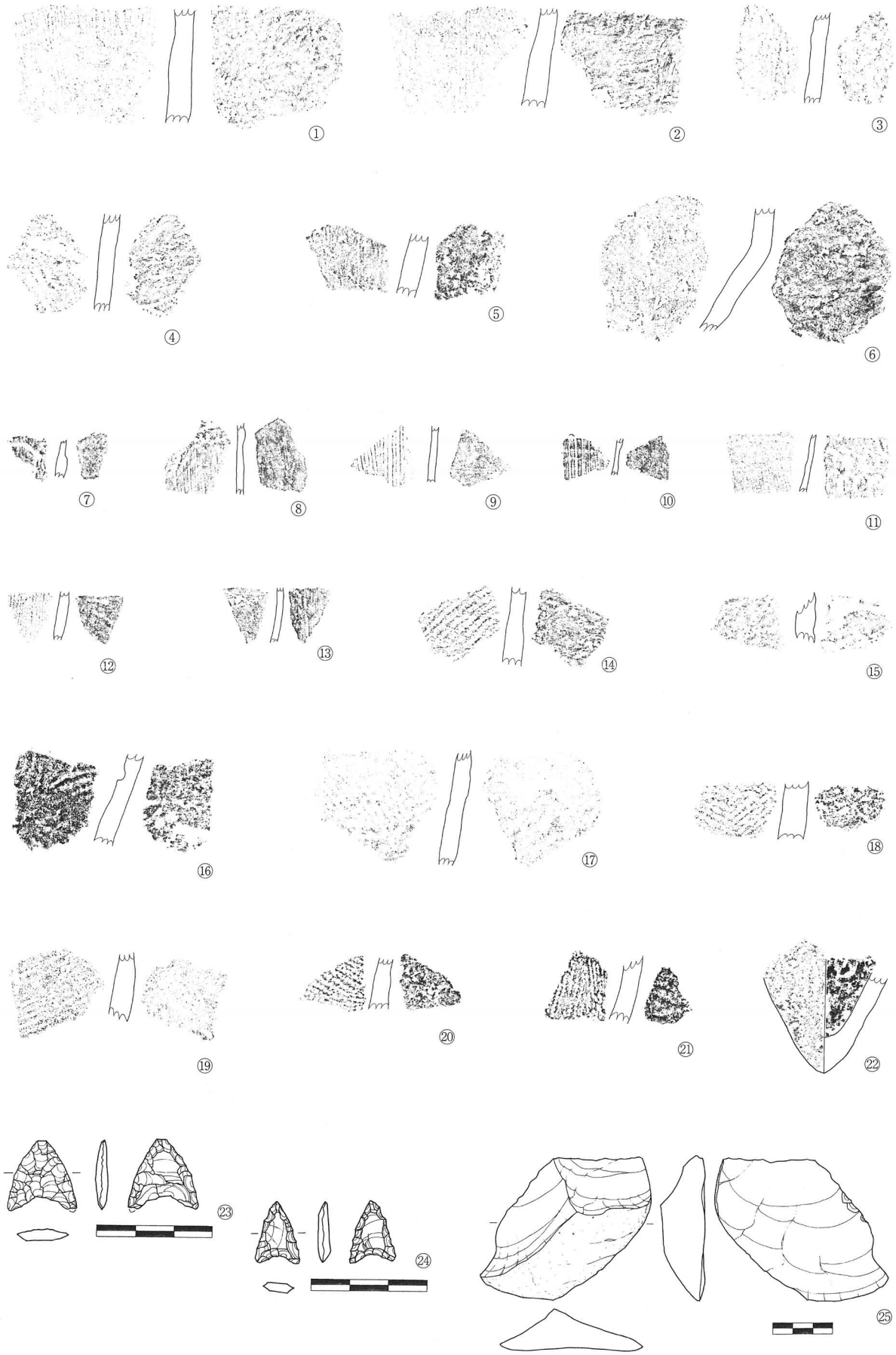
第11図　第１号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、⑥(1/4)



第12図　第２号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第13図　第３号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第14図　第３号住居址遺物(1/3)、㉓㉔(2/3)、㉕(1/3)

われるピットは検出されていない。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められるが、ローム面までは達していない。

遺物は在地系下吉井式土器と神ノ木台式併行の口縁部の破片と東海系の土器と羽状縄文、擦痕のある繊維土器があり、総重量は2,150gが出土している。石器は黒曜石の石鏃と緑色岩の調整痕のある剥片が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

4．第4号住居址（第15・16上図、図版14）

第1号住居址の南西側JK－11グリッドで確認されたものである。台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、東側では壁の明瞭な立ち上がりを確認している。検出した長径は6.10mで短径側は調査区外に続いているため短径は3.40m以上になる。長軸方向はN－60°－Eを示す。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。床面は軟弱で、中央やや東側からローム面まで達する焼土を検出しており、検出状況から地床炉である。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。床面同様、検出状況は軟弱である。

遺物は在地系下吉井式土器と神ノ木台式併行の口縁部の破片と東海系の土器や羽状縄文を施文、擦痕のある土器などがあり、総重量は2,120gが出土している。石器は黒曜石の石鏃と緑色岩の調整痕のある剥片が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む底部と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土している。石器は一部に欠損はあるが黒曜石の石鏃7点が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

5．第5号住居址（第16下・17・18図、図版15）

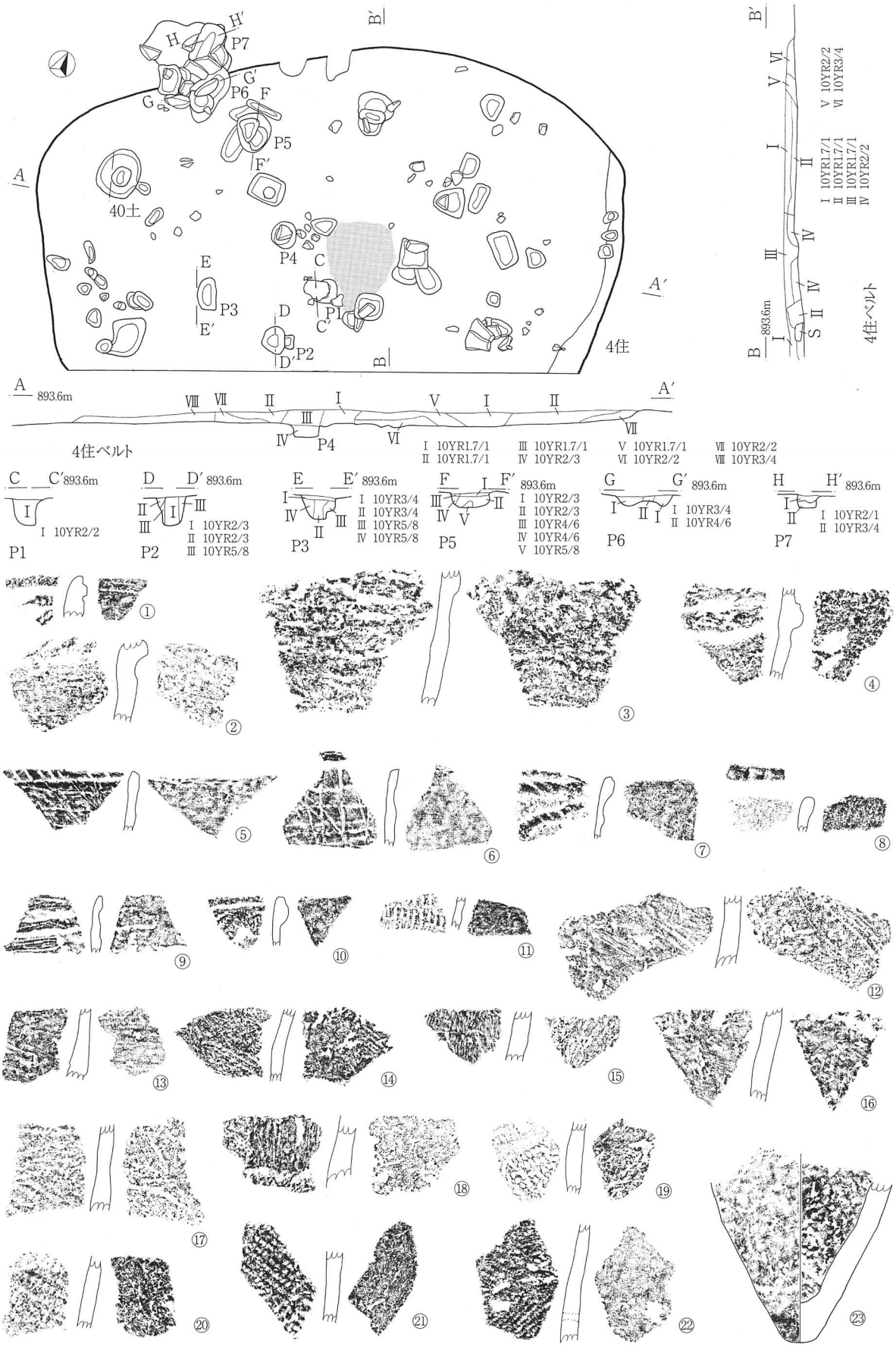
4号住居址の南西IJ－11グリッドで試掘のトレンチで確認されたものである。住居址は台地の平坦面が西側に緩やかに傾斜し始める位置にある。暗褐色土層の中に遺構があるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、径約6mになると思われ中央東寄りに地床炉があり、西寄りには台石がある。

遺物は前期初頭の土器片の他に中期中葉の土器が南側より出土しており、総重量は7,150gである。石器は本遺跡でよく見ることができる緑色岩系の石材を用いた刃部調整痕を持つ礫器、打製石斧、欠損部のある凹石、台石は2点、黒曜石の石錐が1点出土している。焼土を中心とする本址は前期初頭に帰属しよう。

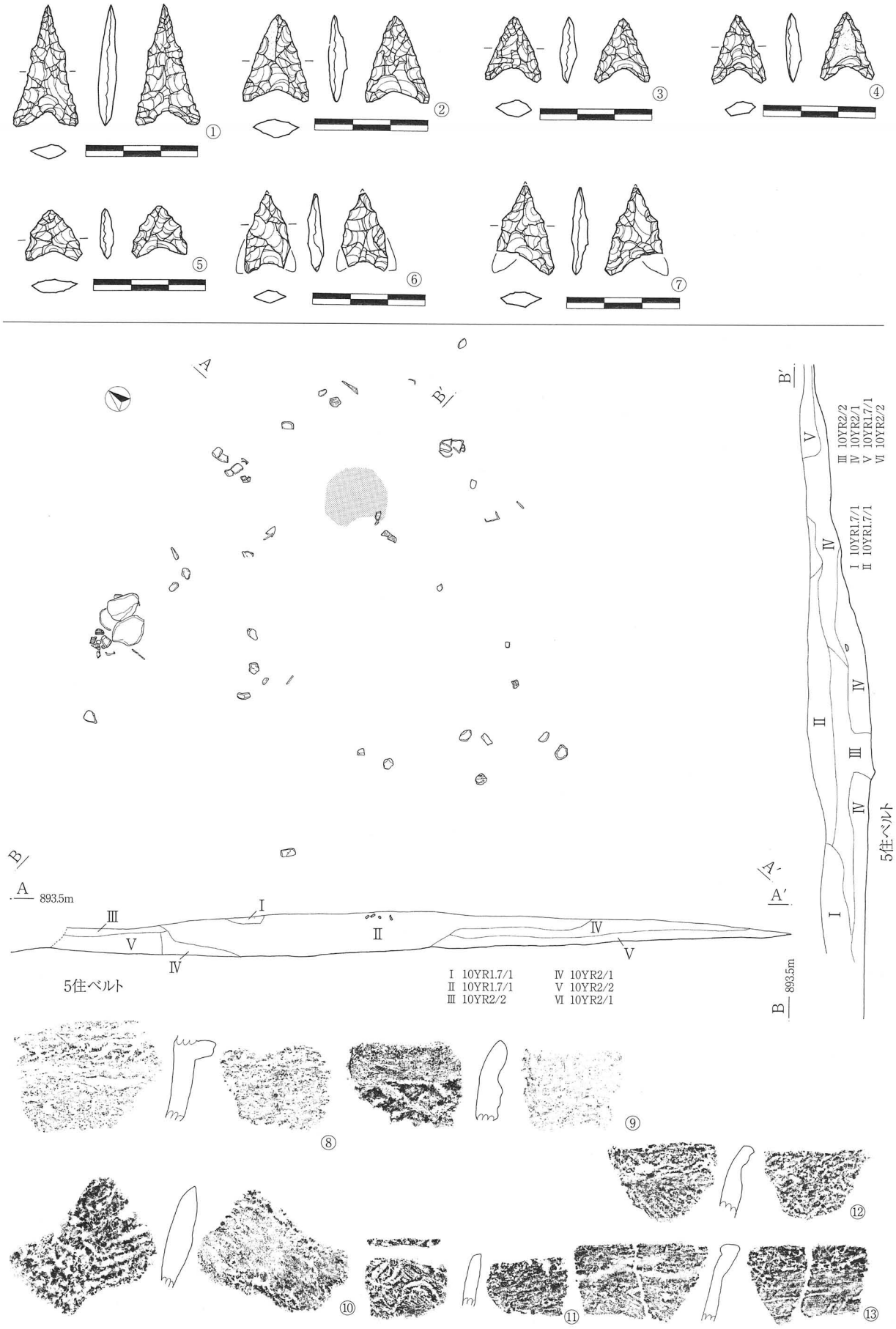
6．第6号住居址（第19・20図、図版16）

1号住居址北西のK－10グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により攪乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。西側で僅かな壁の立ち上がりが確認されているが、本址に伴う確実な遺構は他に中央部付近に3個所の焼土がある。5m×3mの範囲から遺物が出土しているが、内部構造は不明で、明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方も軟弱である。焼土の一部はローム面まで達しているところもあり、平面形は不整形であるが地床炉である。

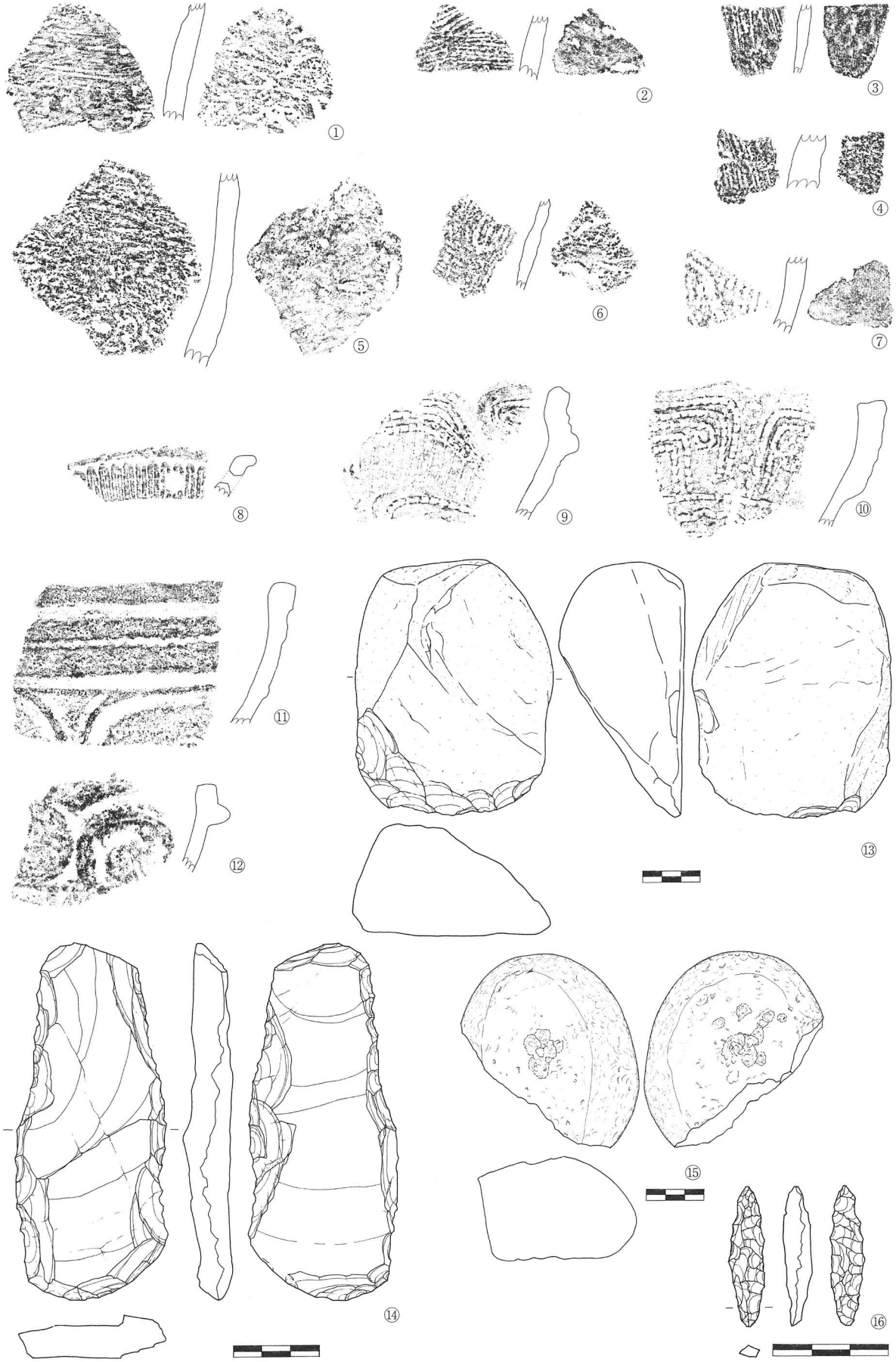
遺物は器形を図上復元できた土器に内外を指頭圧痕で調整し器厚を薄くして、口縁は口唇が波状で1.5cm～2cmの折り返しをしてやや厚く仕上げその下に2条の粘土紐が廻り、左上から右下に細線文を施してある土器がある。出土している厚手で繊維を多量に含む土器片の中には箍隆帯状に廻っている隆帯の高さが2cmに及んでいるものがある。他に東海系の土器片もあり、図上器形復元以外の総重量は1,900gが出土している。石器は黒曜石の石鏃が3点、同ブランク1点、拇指状掻器1点、砂岩の刃部調整痕を持つ礫、凹石が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。



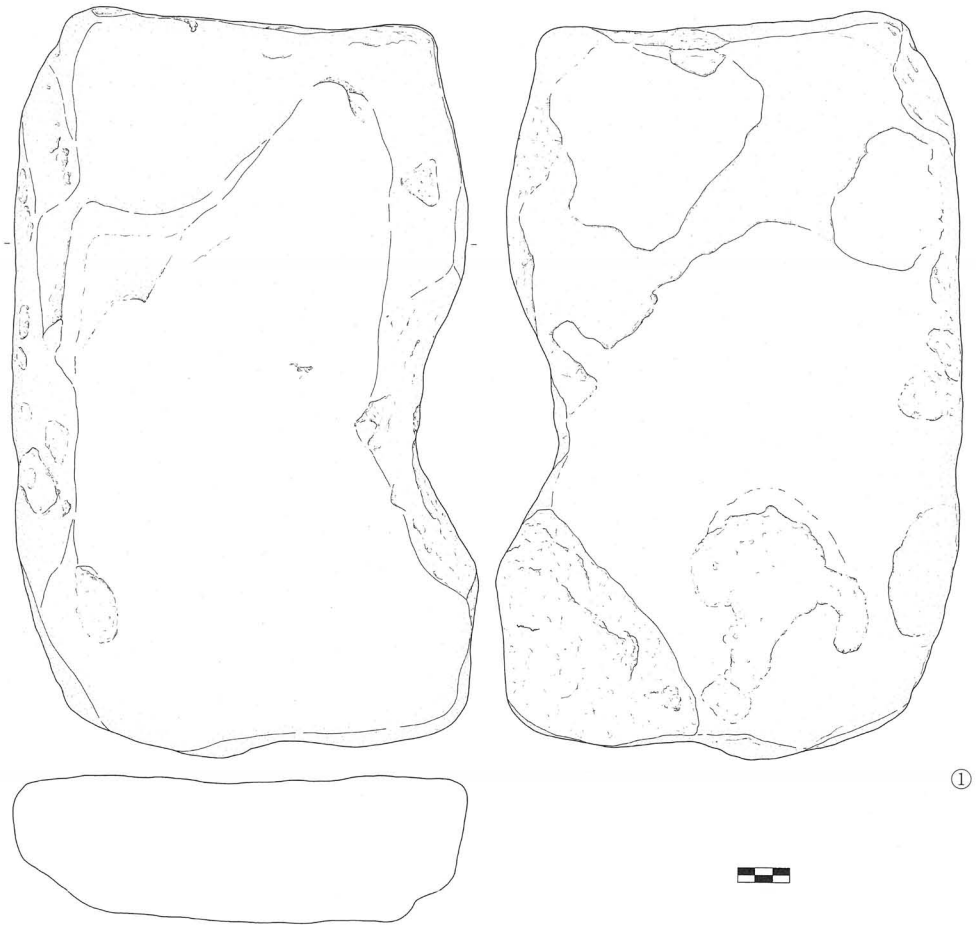
第15図　第４号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

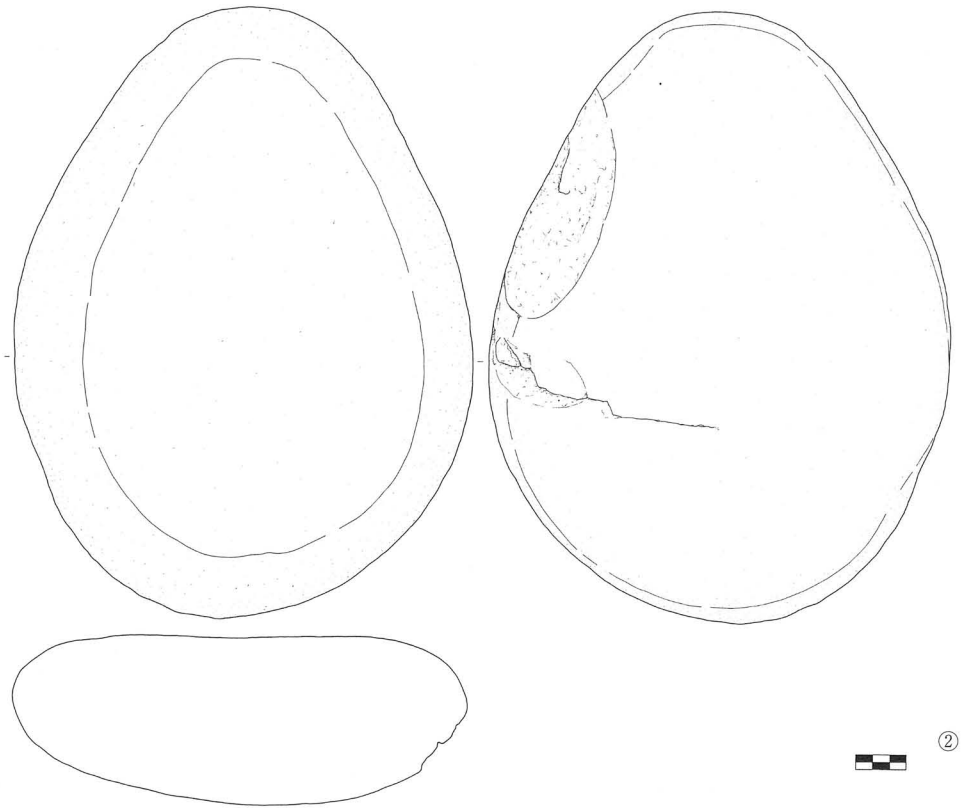


第16図　第４号住居址遺物(1/3)、第５号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

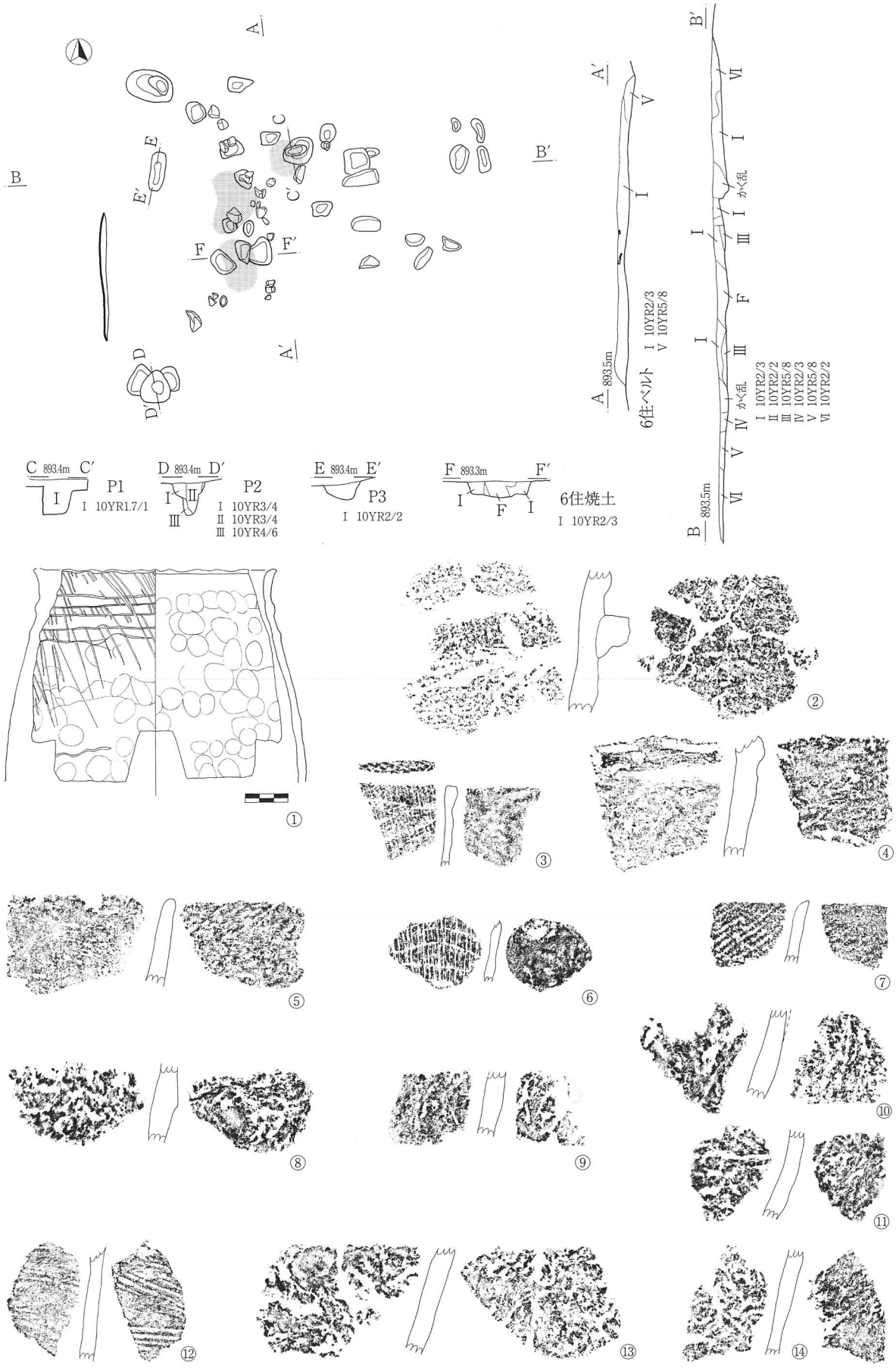


第17図　第５号住居址遺物(1/3)、⑭(1/2)、⑮(2/3)

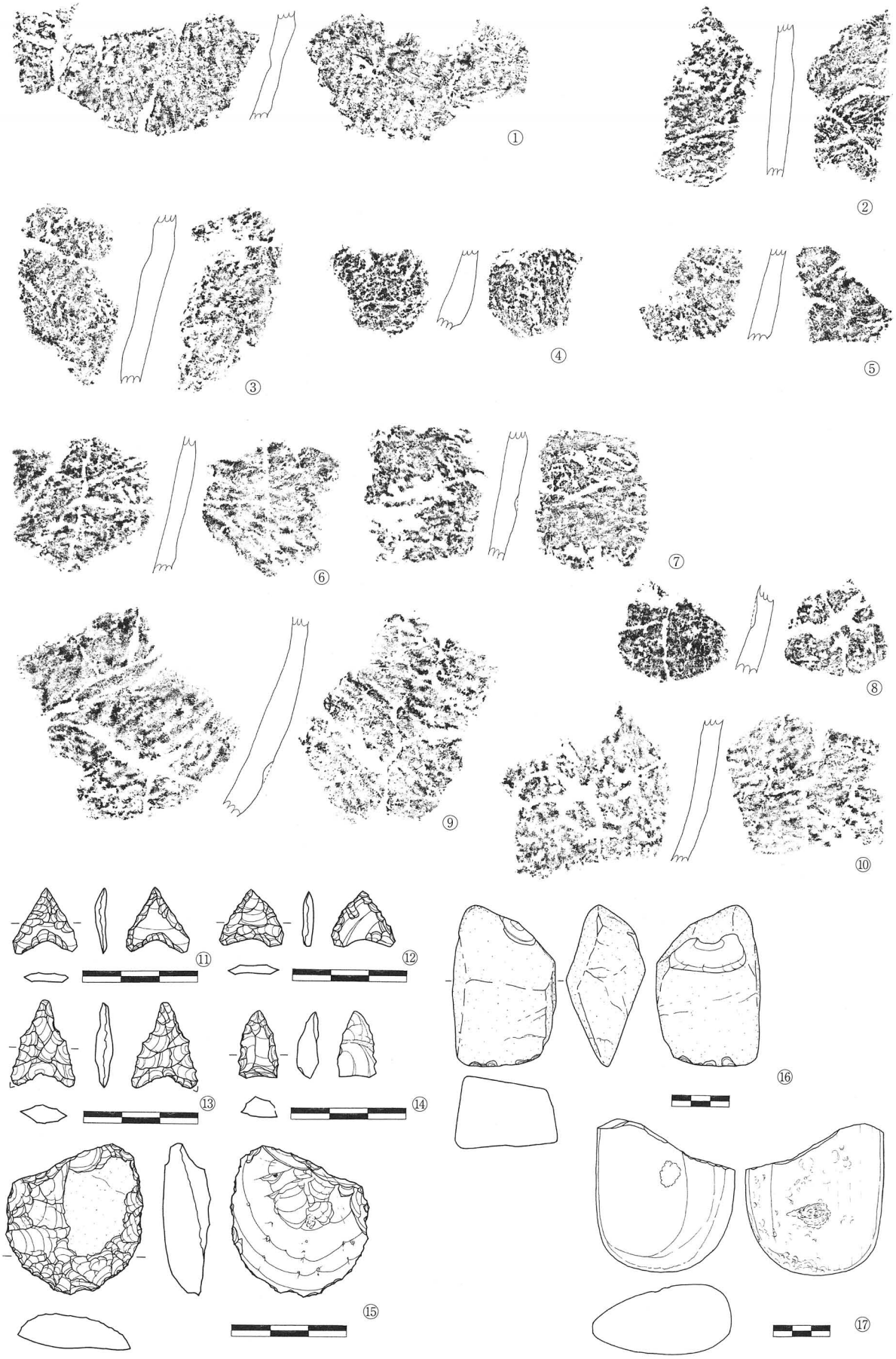




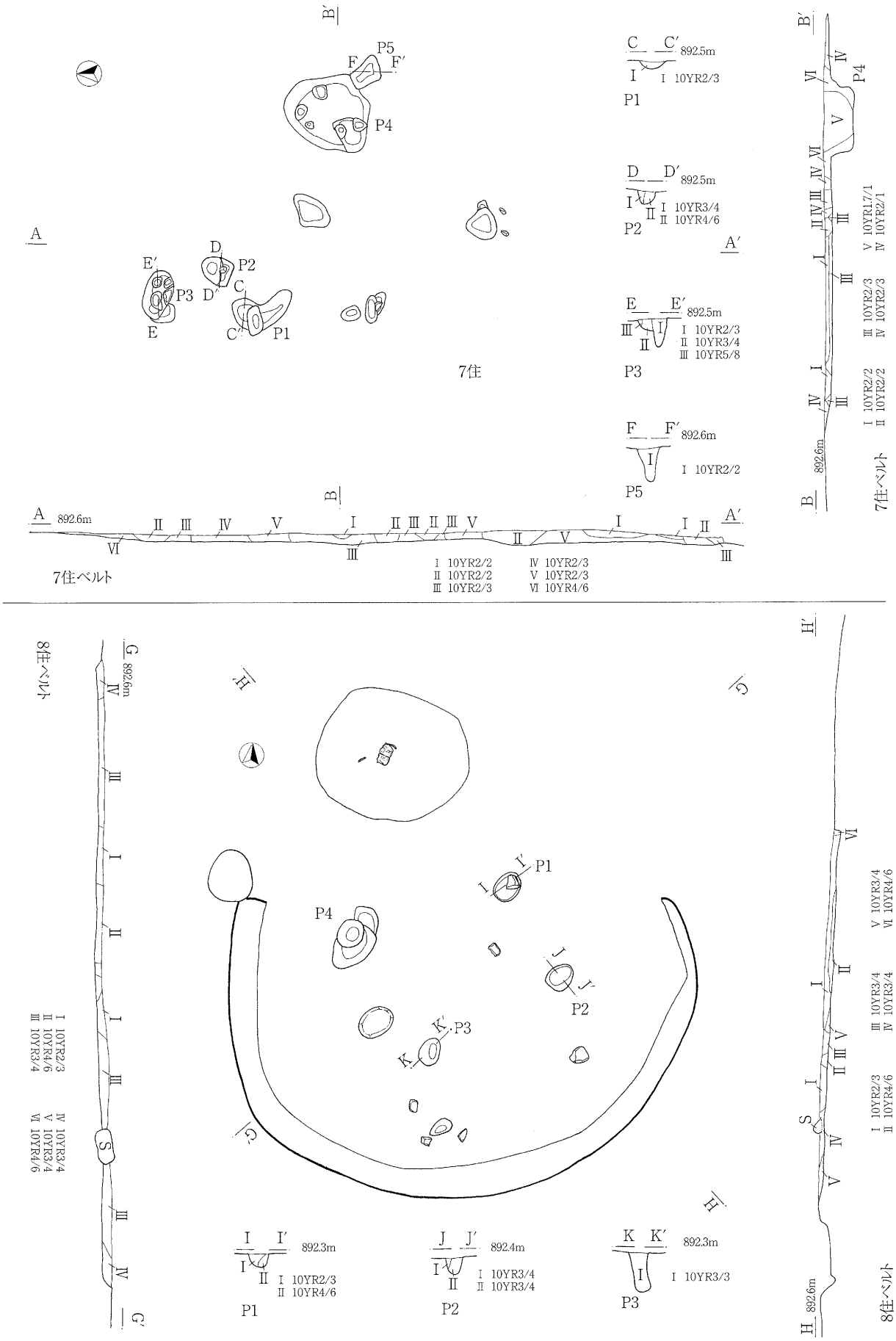
第18図　第５号住居址遺物(1/5)



第19図　第６号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



第20図　第６号住居址遺物(1/3)、⑪⑫⑬⑭⑯(2/3)



第21図　第７号住居址(1/60)、第８号住居址(1/60)

7．第７号住居址（第21上図、図版17）

本址は台地西側肩に位置するGH－９グリッドで確認されたものである。長径約７m×短径約4.5mのぼんやりした隅丸長方形の落ち込みが見られたことから住居址として調査に取り組んだ。この覆土内には極細かい黒曜石の細片が混じっていたが掘り方を確認するため下げたところプランは不明になってしまった。掘り方底面も軟弱で壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットの検出もない。本址の北側から２基の集石炉が検出されているのでこれに伴う施設の可能性もある。

図化できる遺物の出土は無かった。時期についても不明である。

8．第８号住居址（第21下・22図、図版18）

本址は調査区のJ－８グリッドで確認されたものである。住居址は台地の平坦面に位置し、132号土坑と切り合い関係があり新旧は住居が新しい。北側は耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは長径約5.2mの円形を呈すと思われる。壁は最大で12cmの高さがあるが周溝は遺存していない。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。焼土の検出もないが中央やや西寄りに台石が据えられていた。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は132号土坑上面から口唇に４単位の突起が付き、口縁から胴部が全周し底部を欠損する擦痕のある厚手で繊維を多量に含む土器が全周して復元ができており、他の土器片も多量の繊維を含んでおり、図上器形復元以外の総重量は250gが出土している。石器は黒曜石の石錐、緑色岩系の刃部調整痕を持つ礫と台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

9．第９号住居址（第23上図、図版19）

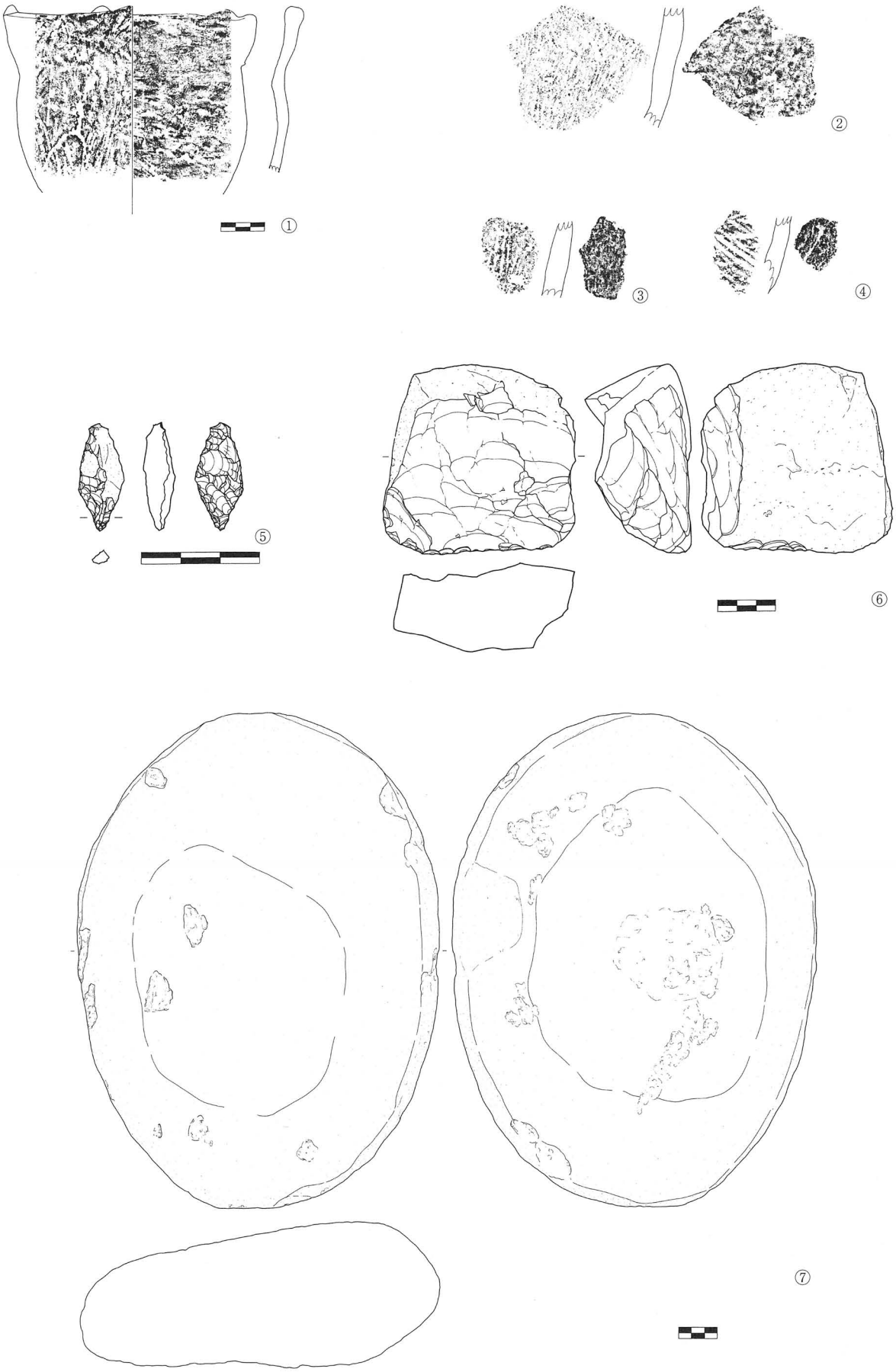
７号住居址の西側F－９グリッドの台地肩斜面で確認されたものである。平面プランは歪んだ楕円形で、長径2.75m×短径2.23m×深さ0.5mで、長軸方向はN－27°－Wを示す。内部構造は床、壁面ともに堅く締まり、底面は破砕帯の礫層まで達している。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。焼土の検出はなく、東側は段状になる。

遺物は図化していないが３点、30gの繊維土器片が出土しており、石器は黒曜石の石鏃が１点出土している。本址の時期は早期末前期初頭に帰属すると思われる。

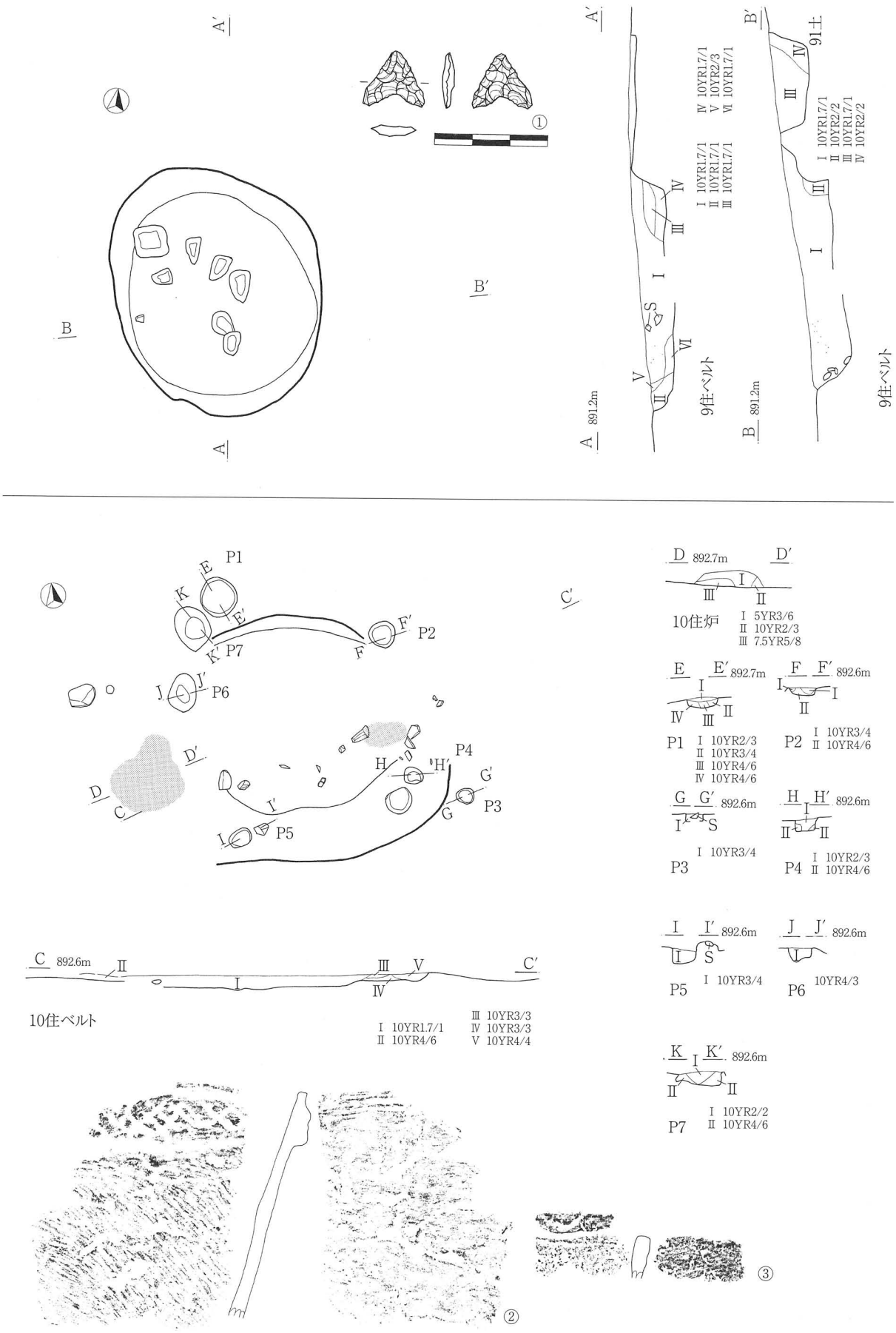
10．第10号住居址（第23下・24上図、図版20）

８号住居址東側のK－８グリッドで確認された住居址で台地の平坦面に位置し東側の15号住居址、北側の溝址１と切り合い関係がある。本址周辺から北側は耕作による攪乱が著しく切り合いによる遺構の新旧関係が判断できない住居址が多い。本址も全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居の中央部の長径約2.7mの円形を呈すと思われる部分で西側の上層面で地床炉の焼土を確認している。内部構造は住居址上面全体が、攪乱を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。地床炉の検出状況から床面下まで耕作による削平を受けており、掘り方は緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪み、検出状況は軟弱である。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。

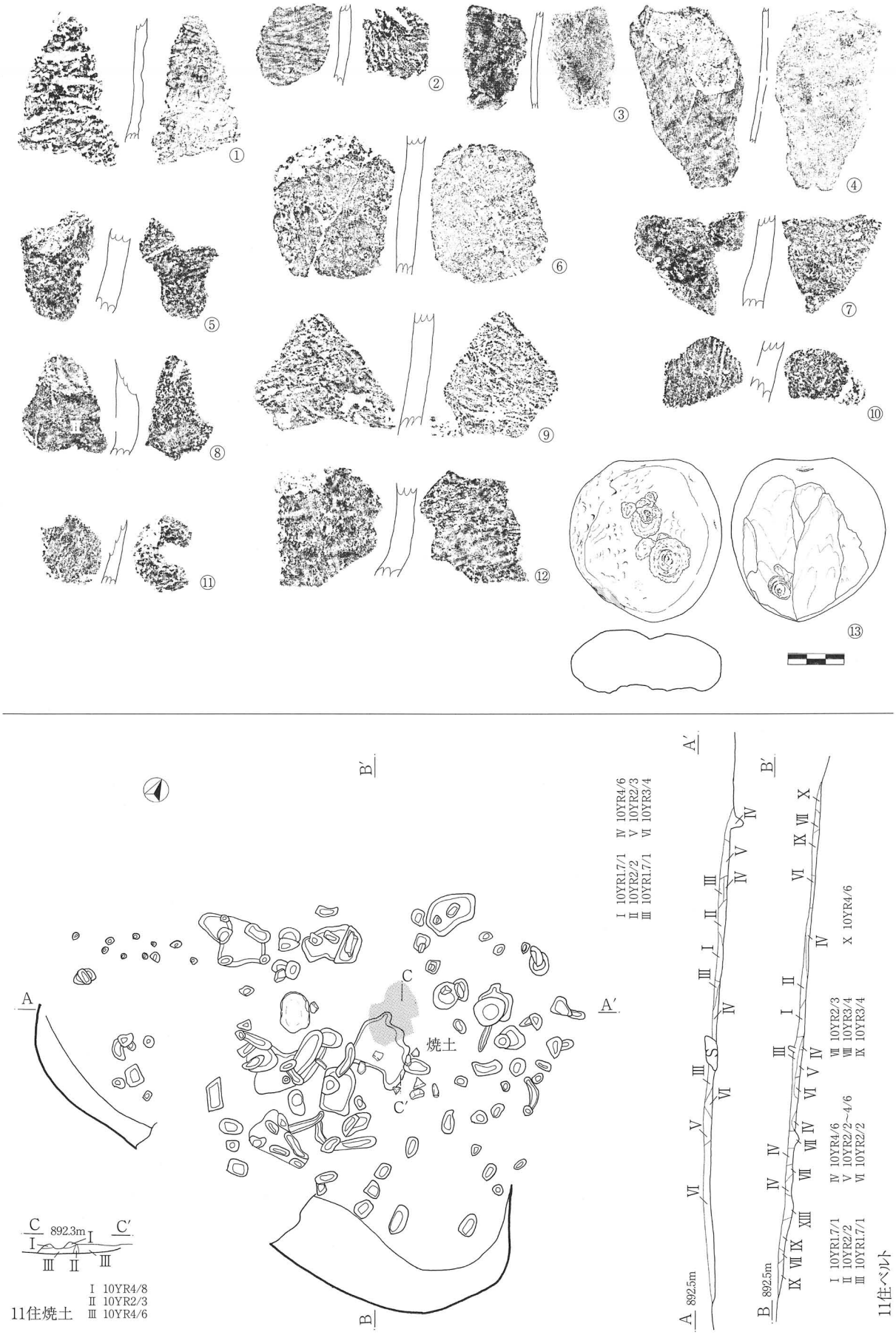
遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む篦状工具による斜格子目が刻まれた隆帯付き条痕文土器口縁の破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片があり、総重量は700gが出土している。石器は緑色岩系の凹石が出土している。在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。



第22図　第８号住居址遺物(1/3)、①(1/4)、⑦(1/5)、⑤(2/3)



第23図　第９号住居址(1/60)、同遺物①(2/3)、第10号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



第24図　第10号住居址遺物(1/3)、第11号住居址(1/60)

第25図　第11号住居址遺物(1/3)、⑦(2/3)、⑧(1/5)

11. 第11号住居址（第24下・25図、図版21）

本址は10号住居址北側K－7・8グリッドで確認されたもので15号住居址と切り合い関係にある。住居址は台地の平坦面に位置する。全体が耕作により削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から残存していたのは住居南側の壁と中央部付近の焼土で長径は5.7m以上になる。内部構造は耕作による攪乱が著しく床面にも凹凸が多い。検出している壁と床の一番低いところの比高差は25cmを測る。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。北側の床面は削平も受けているが、掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。ほぼ中央と思われる付近で焼土を検出しており、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土の南西側から台石が出土している。

遺物は土器が厚手で繊維を含む胴下部破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片があり、総重量は300gが出土している。石器は黒曜石の掻器と安山岩の台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

12. 第12号住居址（第26・27・28図、図版22）

本址は5号住居址北側IJ－11グリッドで確認されたもので台地の平坦部から西側に向かい傾斜する肩に位置する。西側が耕作により攪乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかった。残存していたのは住居の東側で、壁の検出面と皿状の床の最深部との比高差は26cmを測る。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝は遺存しておらず、明らかに主柱穴になると思われるピットや焼土は検出されていない。住居の北側から台石が出土している。

遺物は小規模な住居であるが多様性に富み、土器が厚手で繊維を多量に含む条痕整形した1/3周ほど残存し器形が図上復元できた胴部破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片、沈線文、羽状縄文の土器片が出土しており、図上器形復元以外の総重量は1,400gが出土している。石器は磨石、台石が出土している。本址は前期初頭に帰属しよう。

13. 第13号住居址（第29上図、図版23）

本址は調査区北西向き斜面のE－6グリッドで確認した平安時代の住居である。一部を除き耕作等による攪乱で失われているため平面プランを把握することはできなかった。残存していたのは住居の北東側、東側壁付近だけで床の一部は礫層に達しており、竈の火床も検出している。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。

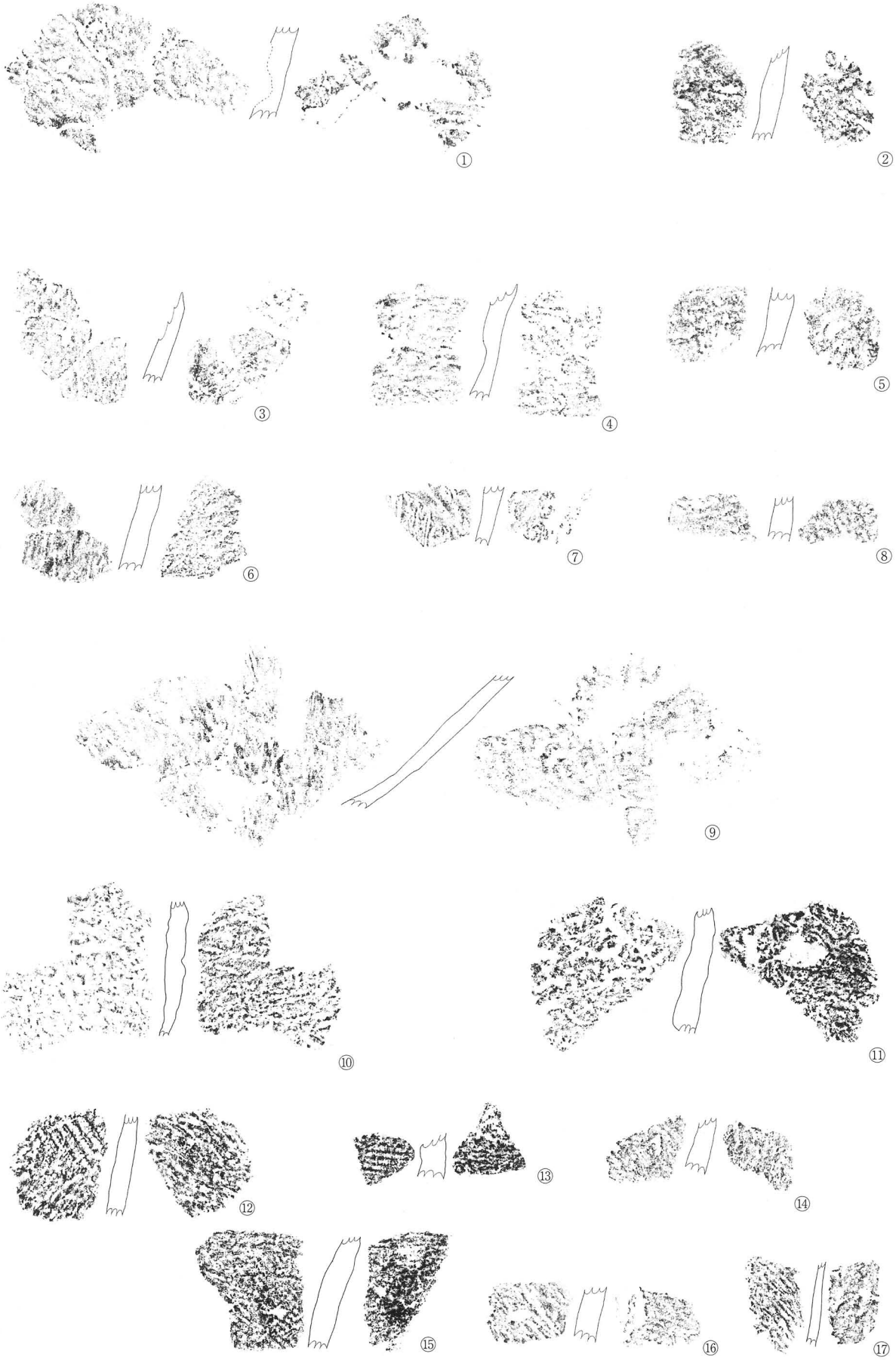
遺物は灰釉陶器皿の器形が図上復元できている。他に土師器坏、同甕に繊維土器が混在しており、総重量は160gが出土している。

14. 第14号住居址（第29下図、図版24）

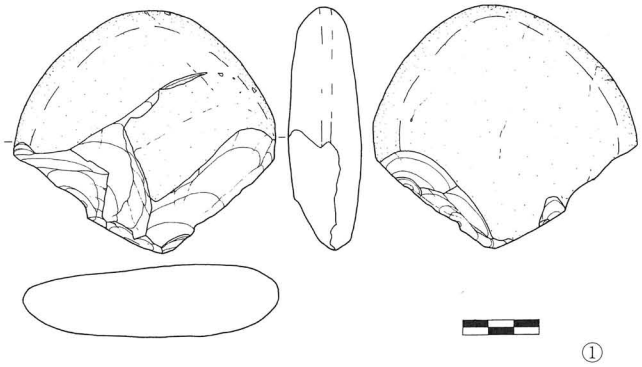
8号住居址北側J－7・8グリッドで確認されたもので台地の平坦面に位置し17・20号住居址と切り合い関係にあり17住に対しては14住が新であるが20住については北西側が耕作等により攪乱されているために新旧関係は判明できず、全体の平面プランも把握することはできなかったが、長径は6.2m以上を測る。内部構造は地床炉を検出しており、焼土の検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

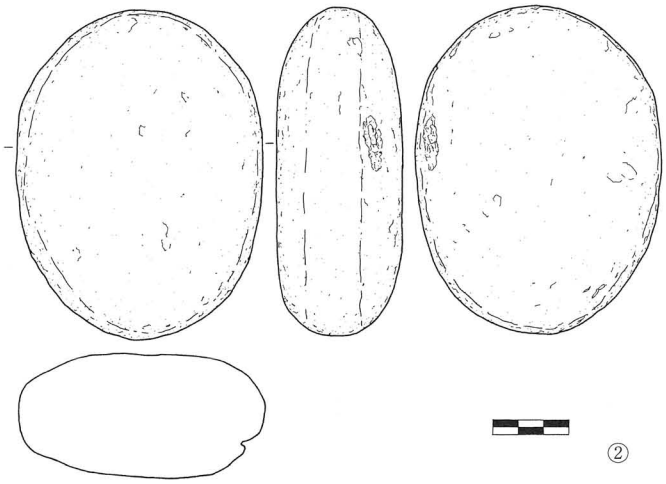
土器は細片が多く接合もできなかったことから図化していないが厚手で繊維を多量に含む多様性に富む破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土している。繊維土器には3cm以下ではあるが尖底土

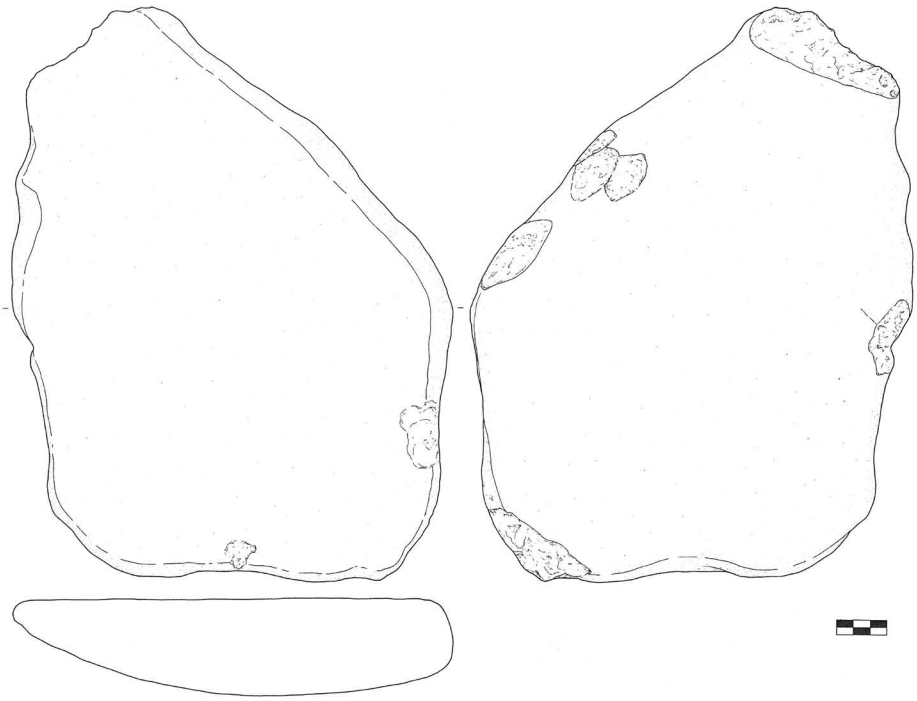
第26図　第12号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



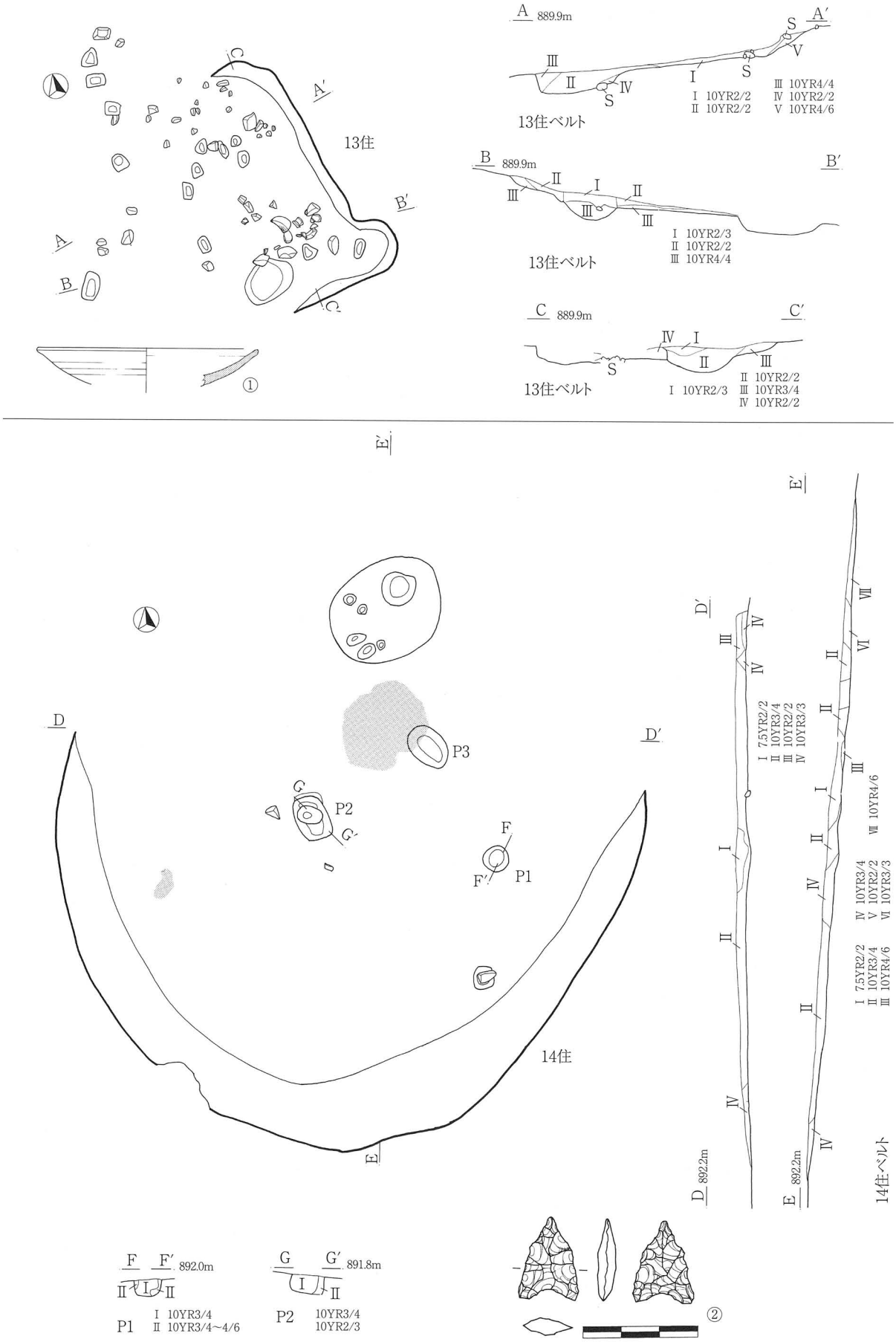
第27図　第12号住居址遺物(1/3)



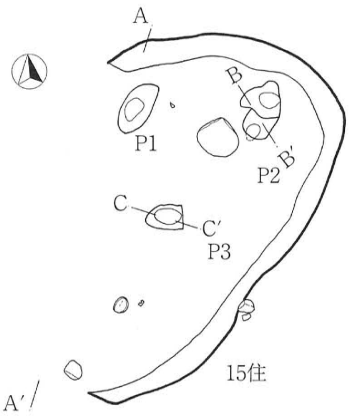


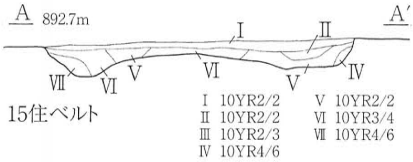


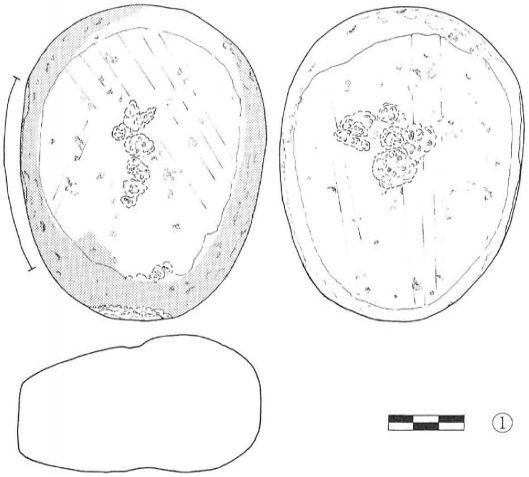
第28図　第12号住居址遺物(1/3)、③(1/5)

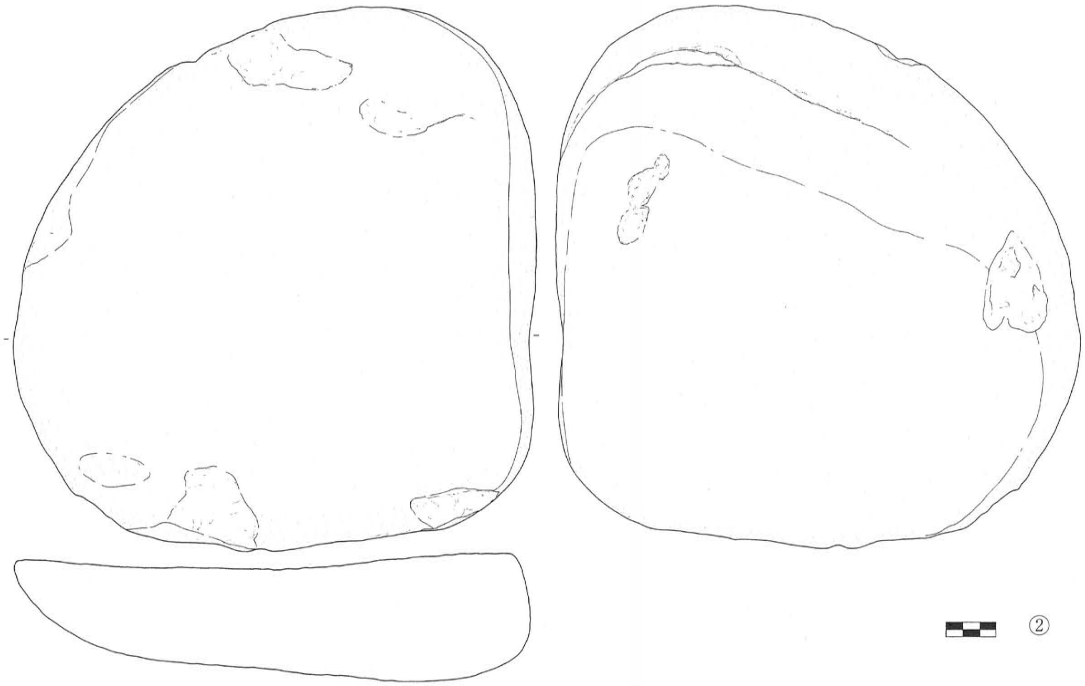


第29図　第13号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第14号住居址(1/60)、同遺物(2/3)









第30図　第15号住居址(1/60)、同遺物①(1/3)、②(1/5)

器の底部もあり、総重量は300gが出土してある。石器は石鏃が1点出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

15. 第15号住居址（第30図、図版25）

本址は10号住居址東側、11号住居址南側と切り合っている。全体が耕作等により攪乱されているために切り合いの新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかったが、東側に残存していたのは住居の一部を確認しており長径は3.1m以上になる。残存部からは台石が出土している。

遺物は台石の他に縁辺に炭化物が付着した凹石が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

16. 第16号住居址（第31上図、図版26）

本址は14号住居址南西側のI－7・8グリッドで確認されたものである。平面形プランは長径6.20m×短径5.82mのほぼ円形を呈していた。長径方向はN－90°－Eを示す。内部構造は最大の比高差14cmで壁を検出しており、床の掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝、明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。中央から西側にかけて細長く焼土を検出しており、検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。焼土は加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもある。

掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。遺物は図化できる土器はなく、黒曜石の石鏃1点が出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

17. 第17号住居址（第31下・32図、図版27）

本址は調査区のJK－7・8グリッドで確認され14号住居址と溝址1と切り合い関係にあり、本址、14住、溝1の順に新しくなる。切り合いと耕作による攪乱で全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出状況から長径6.4m以上を測る。内部構造は住居址北側が、攪乱を受けているため不明な点が多く明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。焼土を南側の東と西から検出している。加熱を受け硬化したブロックが認められるがローム面までは達していないため炉は攪乱部にあると思われる。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む在地系下吉井式土器と薄手の東海形土器が図上復元できており、図上器形復元以外の総重量は1,360gが出土している。石器は黒曜石の石鏃と台石が出土しており、本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

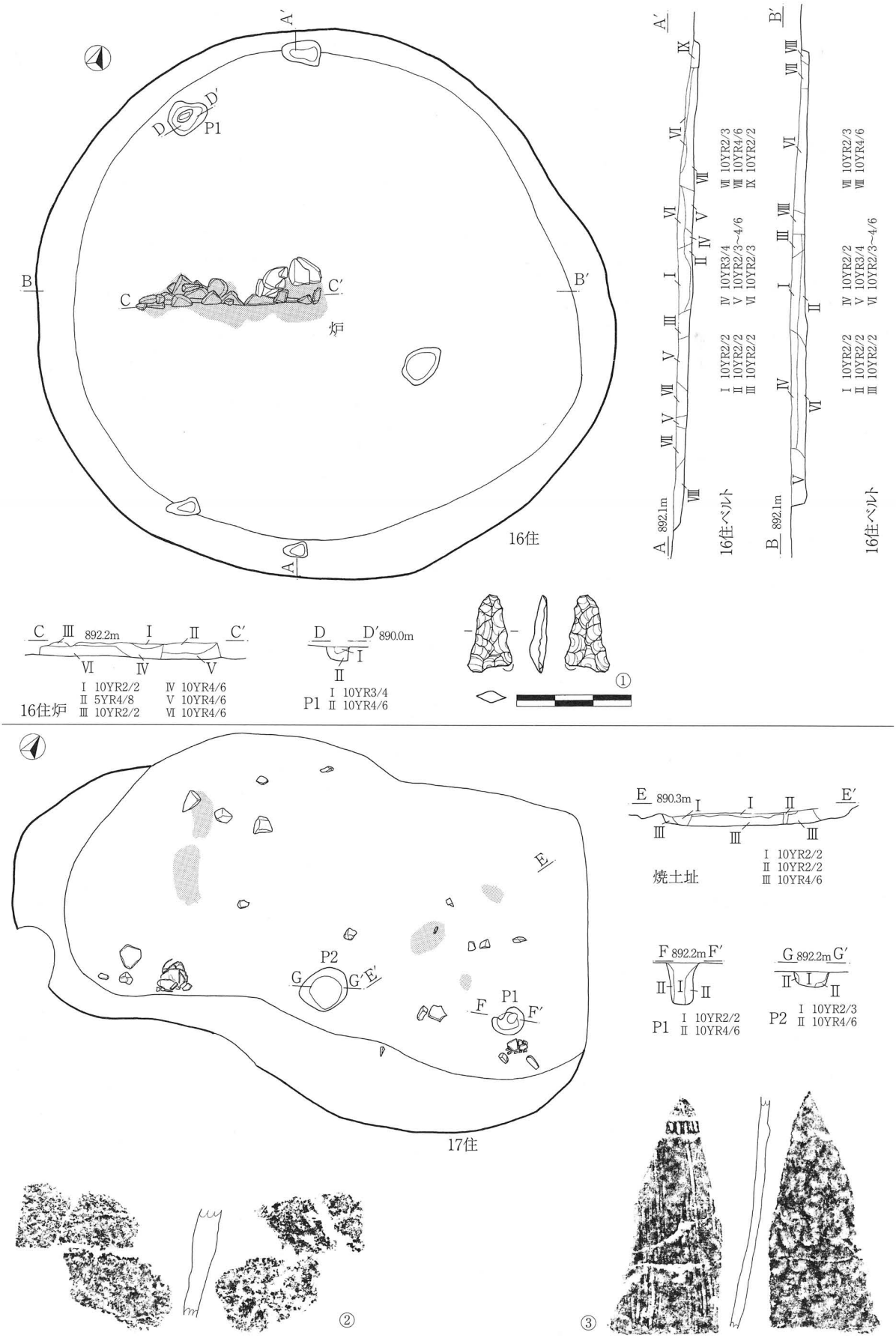
18. 第18号住居址（第33上図、図版28）

本址は15年度調査区北端GH－4・5グリッド台地肩の平坦面で確認された平安時代の住居址である。耕作等により床下まで削平されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、主柱穴の検出状況から長軸5.88m主軸方向はN－56°－Eを示す。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは7本を確認でき、南西側3本、南東側2本、北東側2本で南西側では3個所竈の火床を確認している。住居中央の床下土坑内から1点ではあるが甕胴部の破片が出土している。

遺物は灰釉陶器の皿、碗の器形と土師器高台付坏の高台部が図上復元できた他に土師器の坏、甕の破片が出土しており、総重量は300gが出土している。

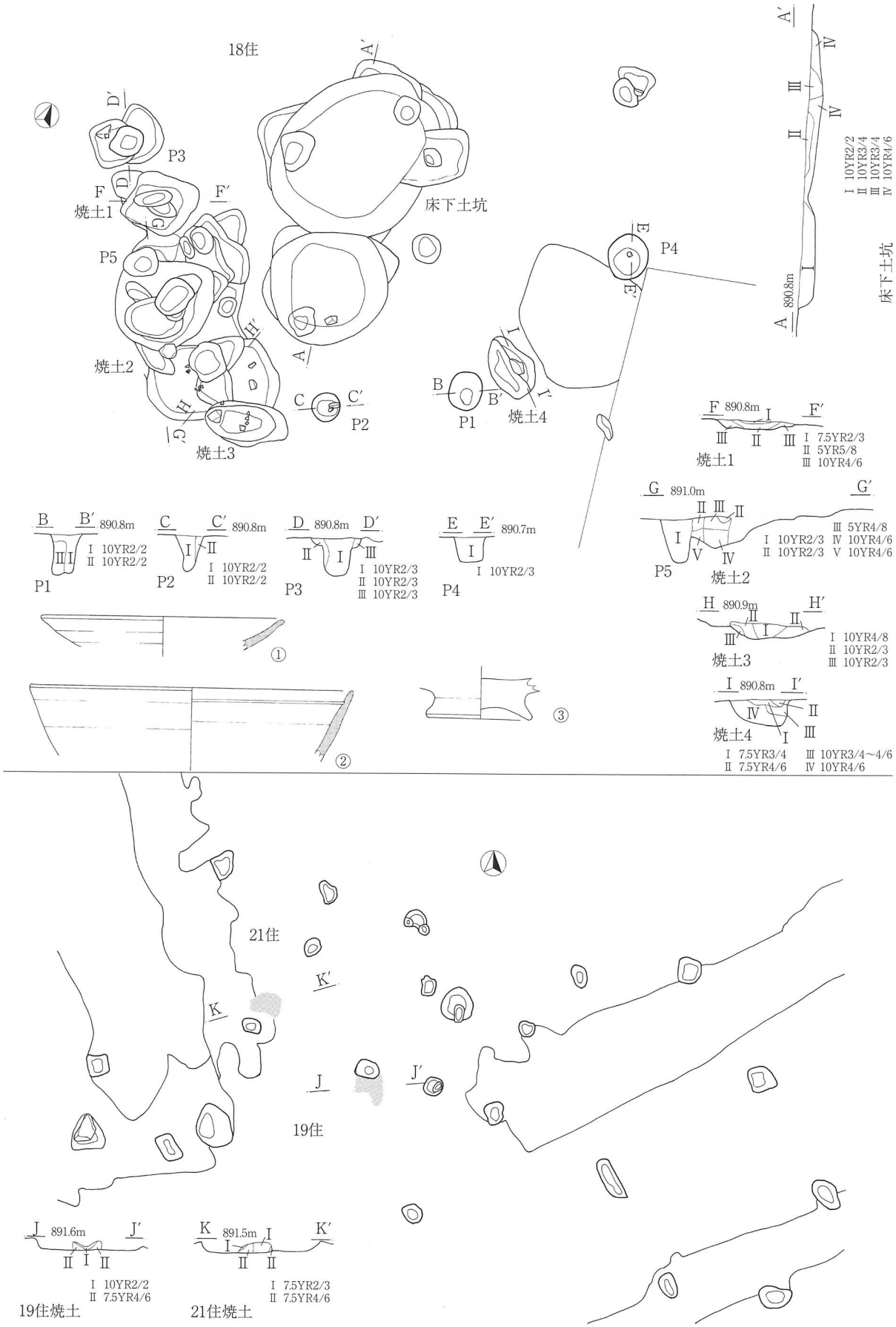
19. 第19・21号住居址（第33下図、図版29）

19号住居址は11号住居址北側K－6・7グリッドで確認されたものである。全体が耕作による攪乱で遺構として捉えられたのは焼土だけで、K－7グリッドで確認した21号住居址と切り合い関係にあるが21住も攪

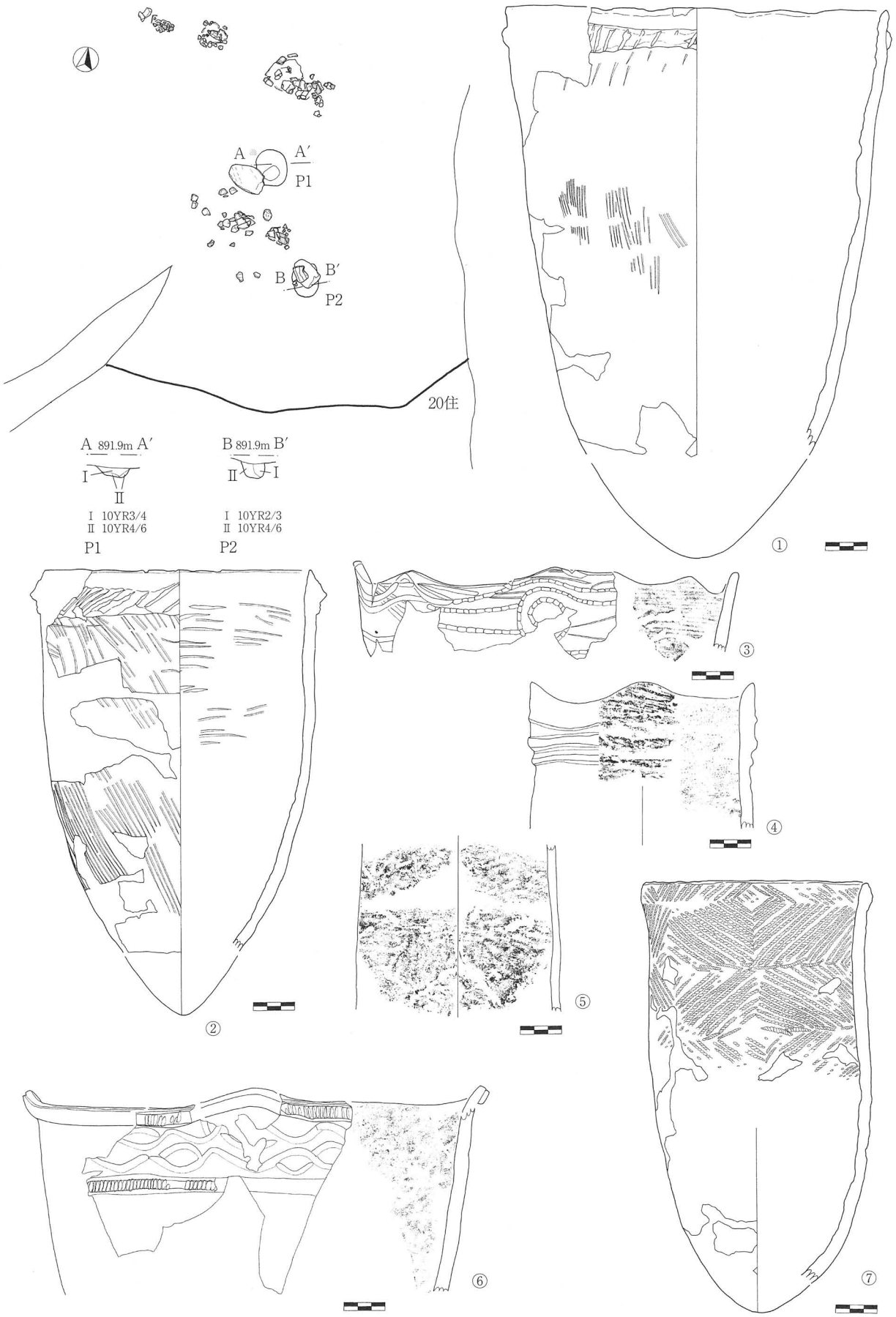


第31図　第16号住居址(1/60)、同遺物(2/3)、第17号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

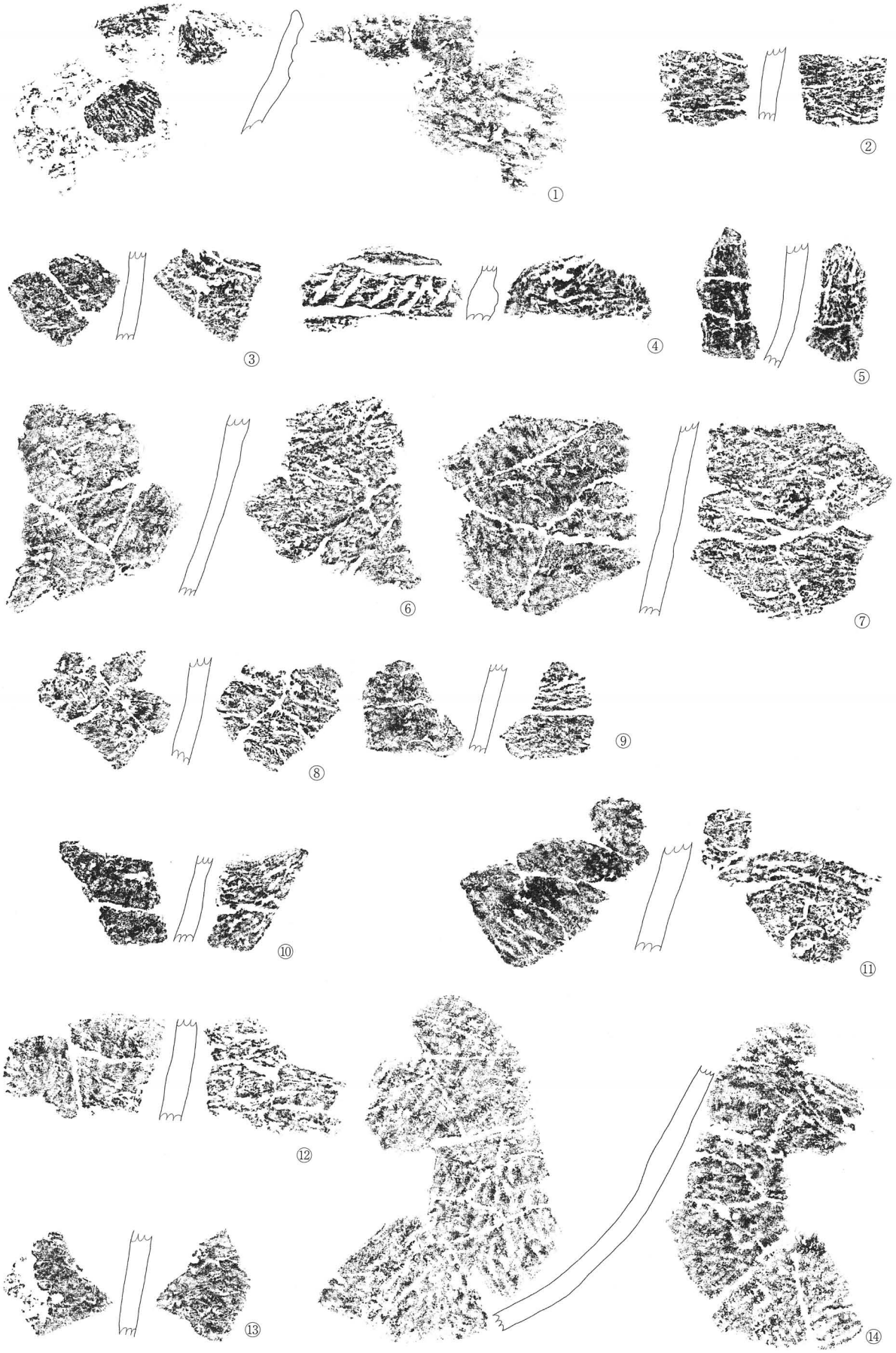
第32図　第17号住居址遺物(1/4)、③(2/3)



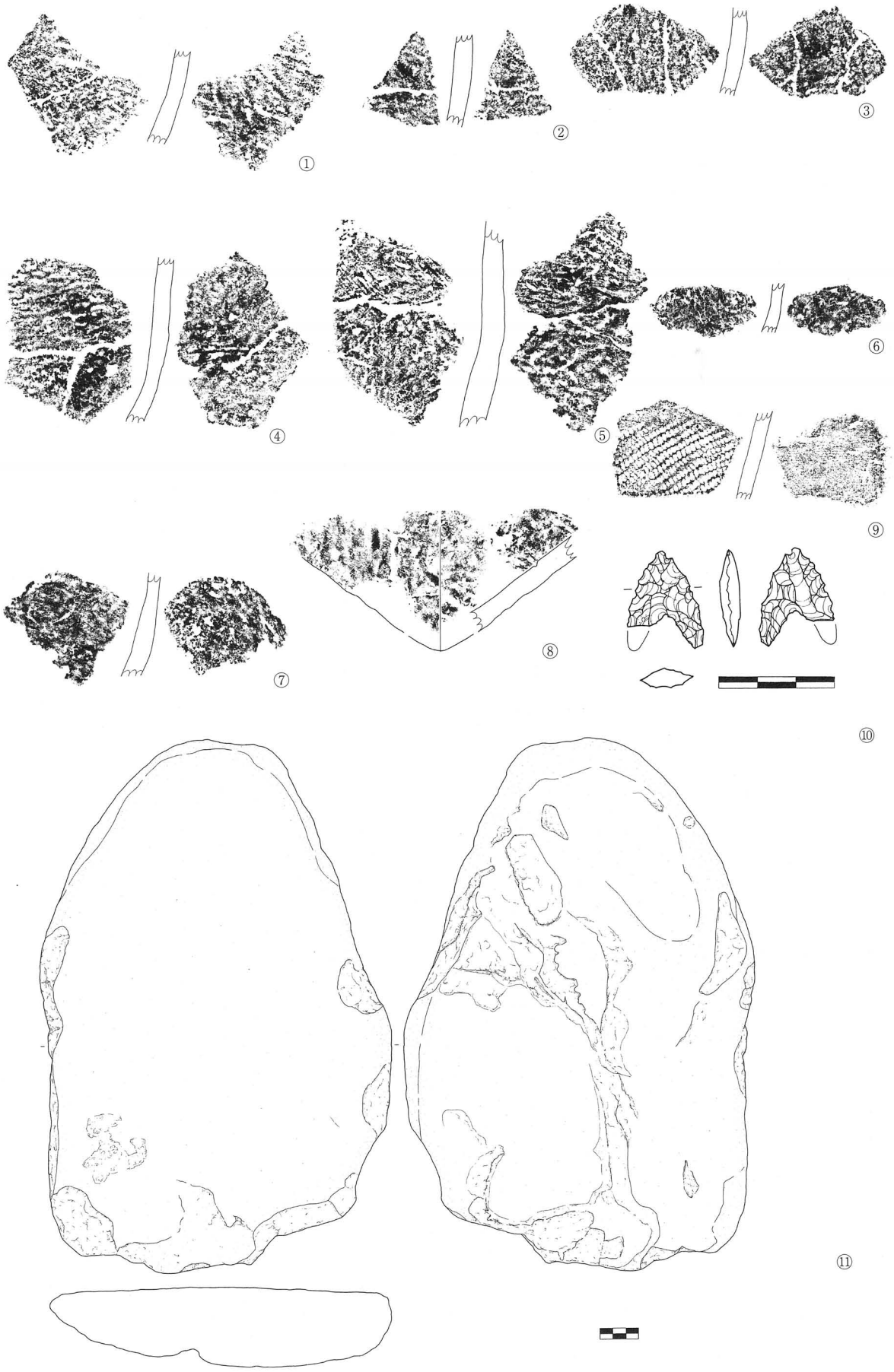
第33図　第18号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第19号・21号住居址(1/60)



第34図　第20号住居址(1/60)、同遺物(1/4)



第35図　第20号住居址遺物(1/3)



第36図　第20号住居址遺物(1/3)、⑩(2/3)、⑪(1/5)

乱が著しく遺構として捉えられたのは19住と同じく焼土はロームまで達している地床炉の一部であろう。

遺物は繊維を多量に含む土器片が少量出土しているがいずれも耕作によるローリングを受け割れ口は丸くなっており、総重量は800gが出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属すると思われる。

20. 第20号住居址（第34・35・36図、図版30・31）

本址は14号住居址の北側と切り合い関係にあるJ－7グリッドで確認されたもので平成15年度調査区の中では遺物が最も出土した住居である。上面が耕作により攪乱されているために全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時の状況から長径は4m以上になる。掘り方を確認するため掘り下げたところ淡く見えていたプランは消えてしまった。検出状況は軟弱である。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。遺物が出土している中央付近に据え置かれたような台石があり、下のピット内から少量の焼土を検出しており、台石北側は狭い範囲であるがロームまで焼土が達している所がある。

遺物は台石の南東側から肥厚口縁で羽状縄文の尖底土器が押し潰れてはいたがほぼ完形で出土しており、中から別個体の羽状縄文土器の破片（第36図⑨）が出土している。器形を図上復元できた土器が他に6点あり、図上器形復元以外の総重量は2,980gが出土している。本址からは2点底部の形状が分かる土器片があり丸底と鈍角の尖底部が出土している。遺跡全体の土器の種類、個体数に対し、底部の出土点数は他の時期の住居に比べると著しく少ない。石器は石鏃と台石などが出土している。下吉井・花積下層式併行、在地系下吉井式土器の出土量が多いことから本址は前期初頭に帰属しよう。

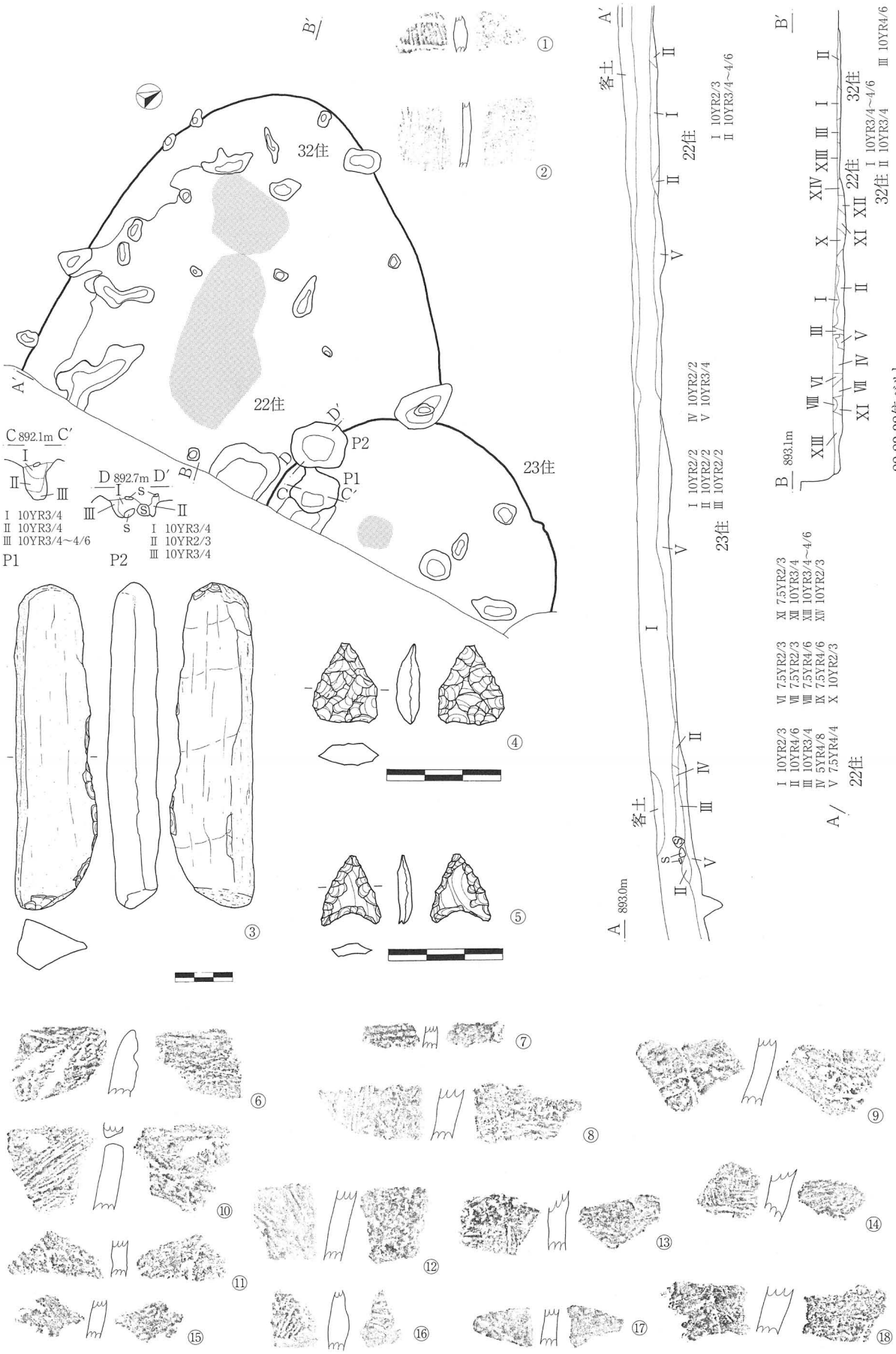
21. 第22・23・32号住居址（第37図、図版32・33・10―①）

第22号住居址から16年度調査区となる。22号住居址は遺跡を縦断する市道脇のNO－9グリッドで確認されたもので北側が32号住居址、東側が23号住居址と切り合い関係にあり、南側は調査区外となっている。遺構検出時に広く焼土を検出したため1軒の住居として調査を開始したが北側の焼土付近は南側に比べ掘り方が浅いことから別の住居と判明し32号住居として設定した。いずれの焼土も検出状況から遺構検出面より上層にも存在していた可能性が高い。切り合い、未調査区があるため平面プランは不明であるが長径は4.4m以上を測る。焼土の厚さは最大12cmである。掘り方は焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。北側の32号住居址もNO－9グリッドで確認されたもので掘り方が極めて浅く焼土に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状で僅かに窪む。検出状況は軟弱である。平面プランは不明であるが長径は2.6m以上を測る。焼土の厚さは最大10cmで周囲の掘り方より掘り込まれている。32号住居が22号住居を切っているため時間差は新である。23号住居はO－9グリッドで確認されたもので22号住居と西側が切り合っているが境の付近にローム層内まで客土が成されていたため新旧関係は判別できなかった。平面プランも南東側半分以上が調査区外となるため不明であるが長径は3.2m以上を測る。掘り方の中央やや西寄りで焼土を検出している。住居は3軒とも掘り方は浅く、攪乱が深く及んでいるところもあり、壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。

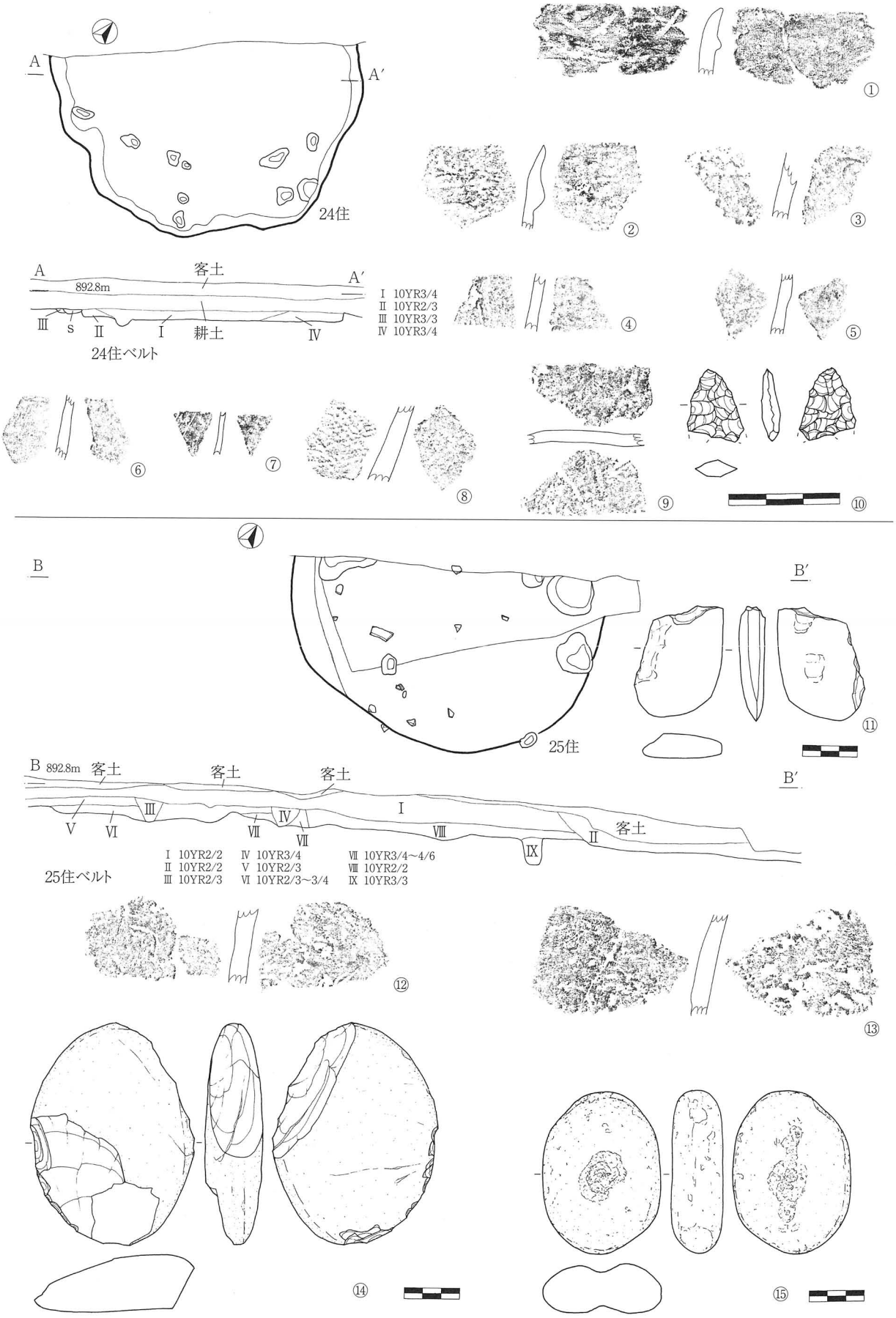
遺物は22号住居址から厚手で繊維を多量に含む条痕文土器の細片や薄手で繊維を含まない東海系の土器などがあり、150gが出土しており、石器は石鏃、砥石が出土。23号住居址からは厚手で繊維を多量に含む絡条帯圧痕文、条痕文土器などがあり、総重量は330gが出土している。32号住居址からも薄手で繊維を含まない東海系の土器細片があり、総重量は40gである。時期はいずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

22. 第24号住居址（第38上図、図版34・10―①）

22号住居址北西のN－8グリッドで確認されたものである。東側が26号住居と切り合っており、検出時に



第37図　第22号・23号・32号住居址(1/60)、第22号住居址遺物①②③(1/3)、第23号住居址遺物(1/3)、④⑤(2/3)



第38図　第24号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第25号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

は土色で新旧関係が分かり、本址が新である。住居の北西側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.8m以上を測れたが掘り方で確認した際には長径3.3m以上であった。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。南側で台石様の礫が出土しているが検出状況から判断すると攪乱で紛れ込んだ可能性がある。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む条痕文と沈線文の土器破片と少量の薄手で繊維を含まない東海系の土器片が出土しており、総重量は440gである。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

23. 第25号住居址（第38下図、図版35・10―①）

本址は24号住居址の北東O－8グリッドで確認されたものである。南側が26号住居と切り合っているが耕作の攪乱で新旧関係は判明しなかった。住居の北西側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできず長径は3.4m以上を測れたが、境は掘り方の下まで方形に攪乱されており、調査区外まで続いている。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。

遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む土器破片があり、総重量は130gが出土している。石器は基部を欠損した磨製石斧、剥離痕のある礫、凹石などが出土している。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

24. 第26・33号住居址（第39・40図、図版36・10―①）

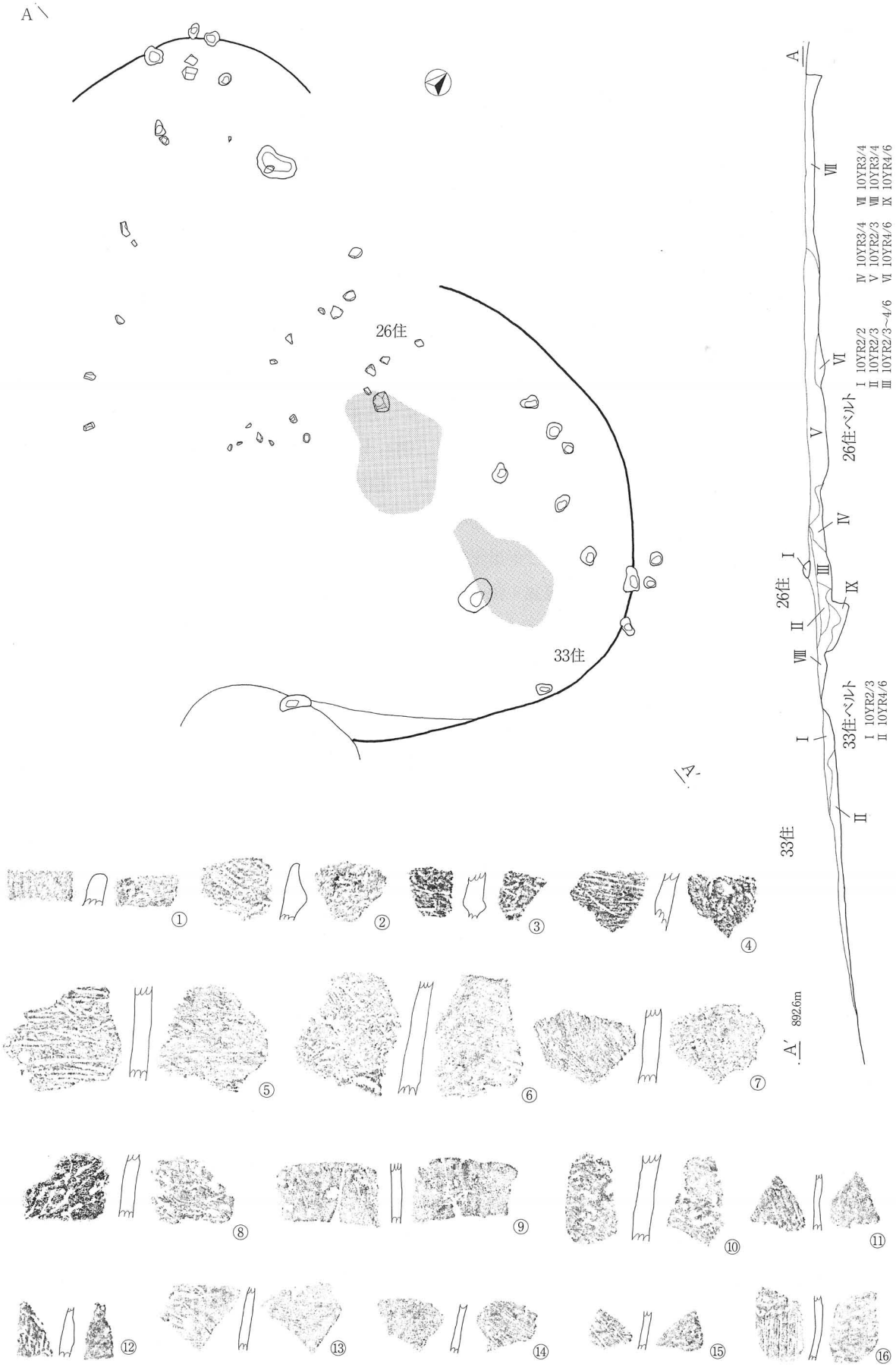
26号住居址は23号住居址北側のO－8・9グリッドで確認されたもので東側が33号住居と切り合っている。検出時には周囲が22・24・25号住居と接し、いずれの住居址からも切られているため本址が一番旧いと考えられる。耕作による攪乱が著しかったため当初1軒の住居として調査を進めたが24・32号住居の状況から2軒であることが判明した。しかし新旧関係については判断できなかった。平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.4m以上を測れたが東については全く不明である。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土部が地床炉になると思われるが焼土下に186号土坑が存在している。遺物は焼土より西側に集中している。

33号住居址はO－8・9グリッドで確認されたもので26号住居同様の攪乱のため全体の平面プランを把握することはできなかったが、掘り方から長径3.7m以上を測る。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているため壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は焼土に向かってごく緩やかな傾斜を持ち、浅い皿状に窪み、検出状況は軟弱である。この焼土は26号住居の焼土と近接しているが加熱を受け硬化したブロックが認められ、一部はローム面まで達しているところもあり地床炉である。地床炉周辺から遺物の出土はなかった。

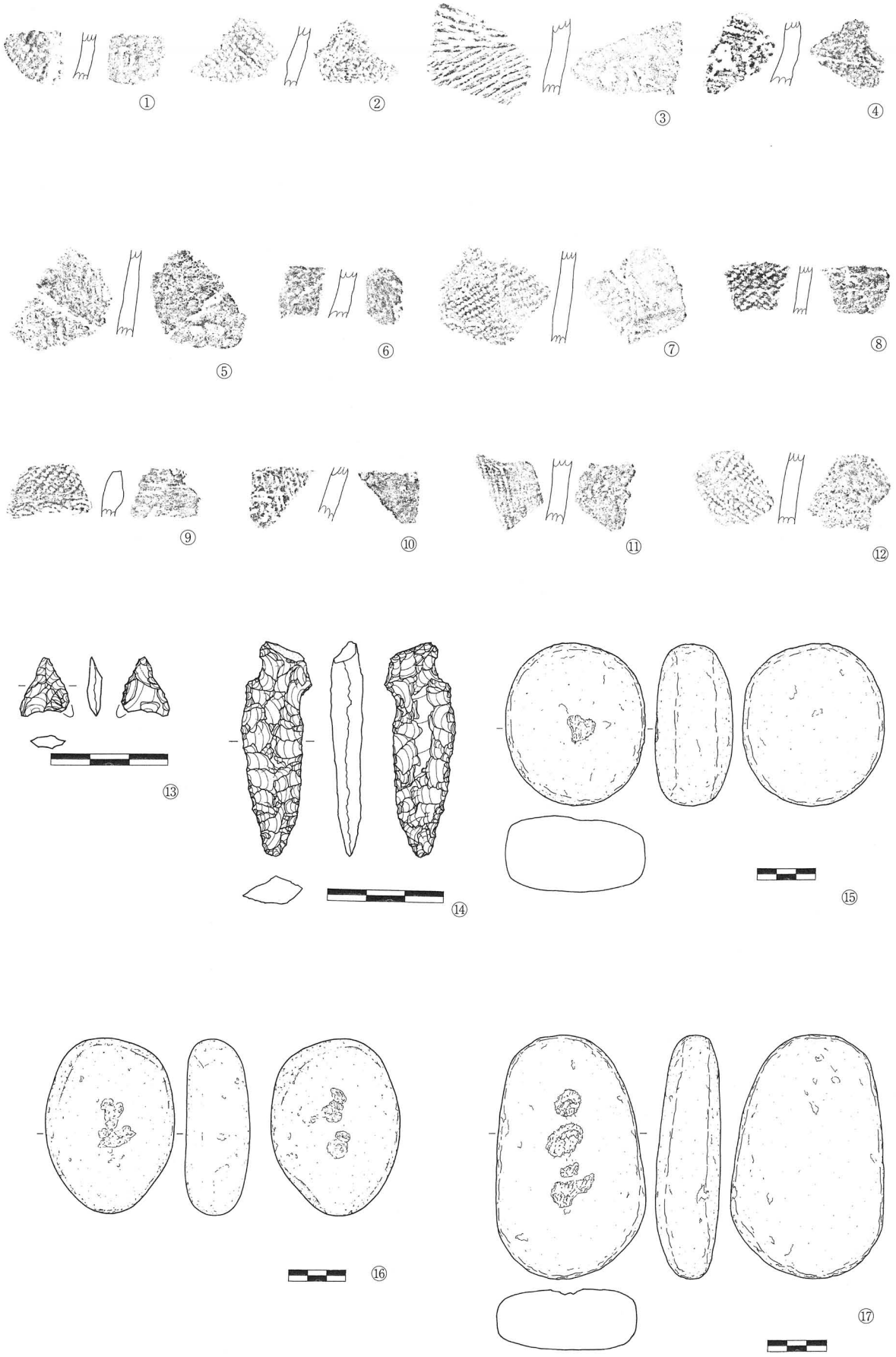
遺物は26号住居から土器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の土器片があり、総重量は1,130gが出土している。石器は黒曜石の縦型石匙、石鏃と凹石が出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

25. 第27・28号住居址（第41・42図、図版37・38・10―①）

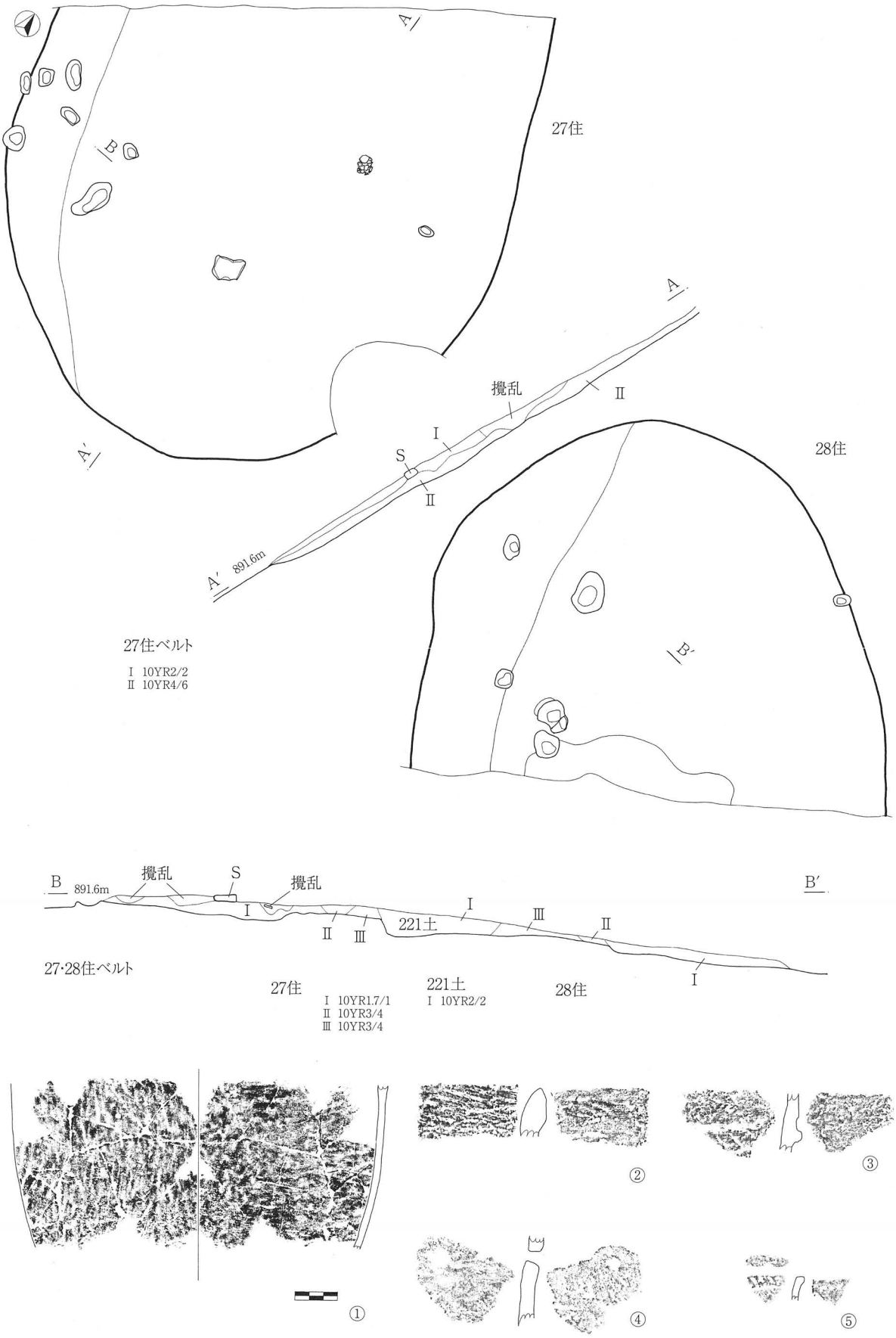
27号住居址は25号住居址北東側のP－7・8グリッドで確認されたもので南東側が28号住居と近接している。耕作による攪乱が著しく、ローム内までトレンチャーによる深耕の痕が残っていた。北側が調査区外となるため平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径5.1m以上を測れた。内部構造は西側に緩やかで僅かな壁の立ち上がりが認められるが周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴にな



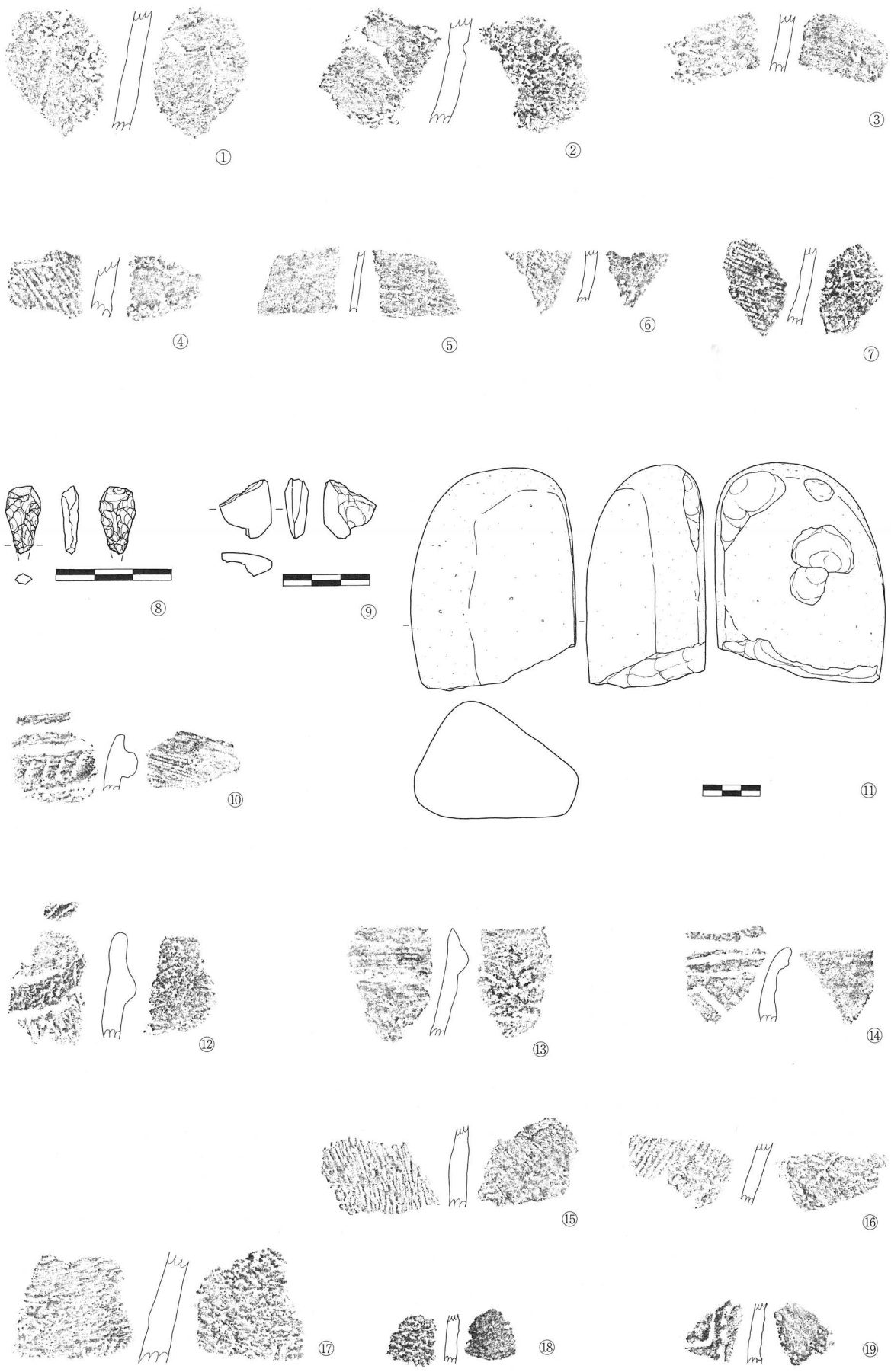
第39図　第26号・33号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、



第40図　第26号住居址遺物(1/3)、⑭⑮(2/3)



第41図　第27号・28号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、①(1/4)



第42図　第27号・28号住居址遺物(1/3)、⑧⑨(2/3)

ると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土は検出されていない。遺物は中央やや東寄りから図上器形復元できる薄手指頭圧痕土器が出土している。

28号住居址はPQ－７・８グリッドで確認されたもので27号住居同様の攪乱と南側が調査区外となるため全体の平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径4.9m以上を測っている。内部構造は住居址上面全体が、削平を受けているが北西側で12cmの壁の立ち上がりを確認している。周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かってごく緩やかな傾斜を持ち、浅い皿状に窪み、検出状況は軟弱である。住居のほぼ中央付近、調査区外にかけて攪乱の穴があいている。焼土址は検出されていない。

遺物はいずれの住居からも土器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の土器片が出土しており、27号住居址からは、図上器形復元以外で総重量は470gが、28号住居からは総重量は400gが出土している。石器は27号住居址から黒曜石の石錐と敲打痕のある磨石が出土している。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

26. 第29号住居址（第43上図、図版39・10―①）

本址は28号住居址北東側のQR－７グリッドで確認されたもので南東側は調査区外となっている。耕作による攪乱が著しくローム内までトレンチャーによる深耕の痕が残っており、焼土址も切られていた。このような状況で平面プランを把握することはできなかったが、検出時には長径3.5m以上を測れた。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。焼土部が地床炉になる。遺物は焼土周辺より集中して出土しており、厚手で繊維を多量に含む土器と少量の東海系の土器片が出土しており、総重量は220gである。時期は早期末前期初頭に帰属しよう。

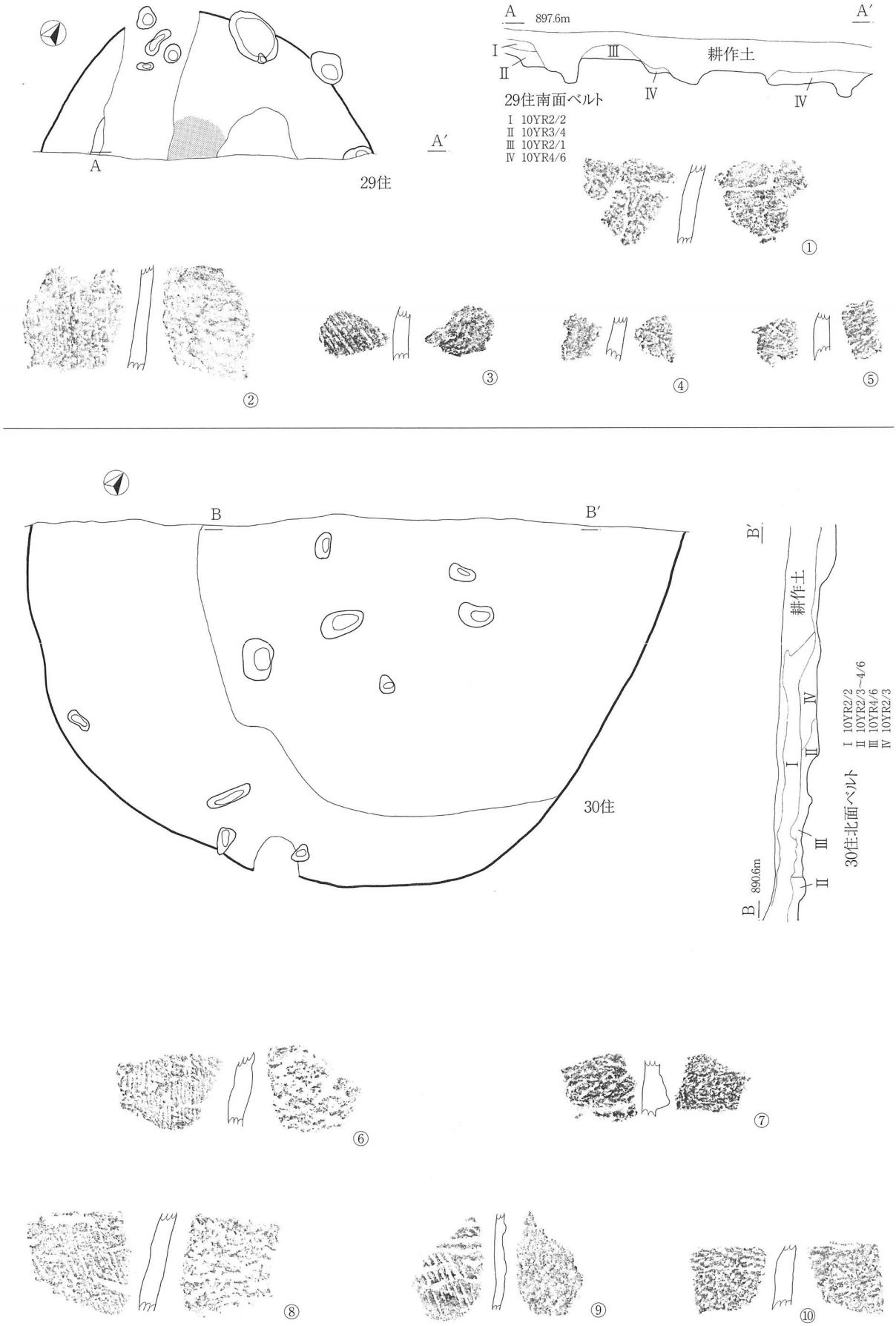
27. 第30号住居址（第43下図、図版40・10―①）

本址は29号住居址北西側のQR－６・７グリッドで確認されたものである。耕作による攪乱が著しくローム内までトレンチャーによる深耕の痕が残っていた。平面プランは北西側が調査区外となるため把握することはできなかったが、検出時には長径6.9m以上を測れた。内部構造は壁や周溝は遺存しておらず不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットは検出されていない。掘り方は中央に向かって皿状に窪み、検出状況は軟弱である。焼土は検出されていない。

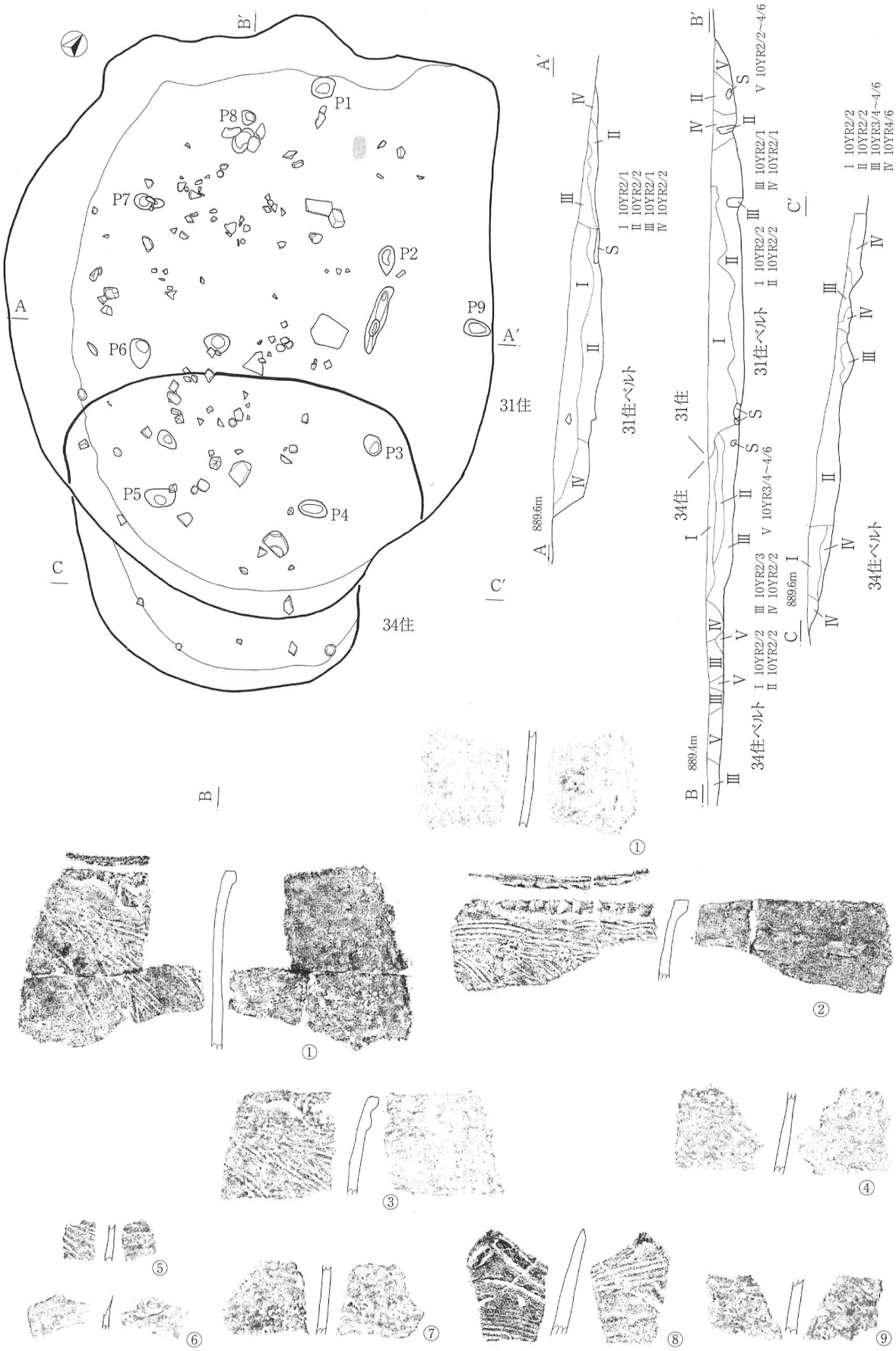
遺物は土器が厚手で繊維を多量に含む破片と少量の東海系の土器片が出土しており、総重量は400gを測る。いずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

28. 第31・34号住居址（第44・45・46・47・48図、図版41・42・10―①）

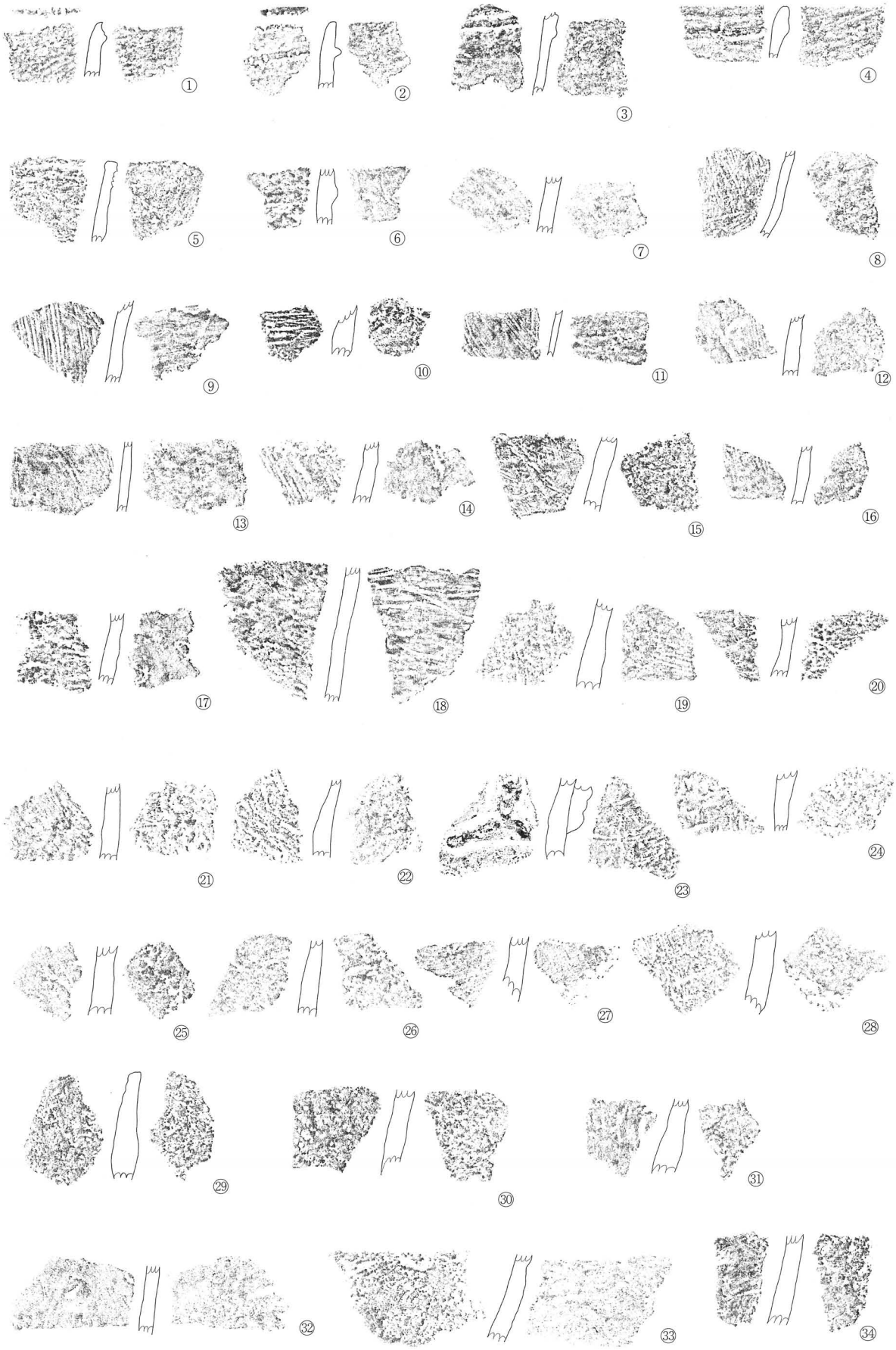
31号住居址は30号住居址北側のR－６グリッドで確認されたもので南東側が34号住居址と切り合っている。検出時には当初１軒の住居として調査を開始しようとしたが南東側が張り出したようになっていたため、断面観察用のベルトを十字ではなく‡に設定した。本址は墓地脇で耕土も厚く他の住居に比べると耕作による攪乱は確認面まで及んでいなかった。調査を進めると２軒であることが判明し、新旧関係については34号住居址で出土した遺物のレベルが31号住居址より明らかに高く、34住南西隅の床とほぼ同じか上の高さから出土しているため本址が旧で上面に小形の34住が重複していると判断した。平面プランは長径6.30m×短径5.04m、長径方向はN－31°－Wを示す歪んだ楕円形を呈す。壁高は最大38cmを測る。床は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱である。周溝は遺存していない。明らかな主柱穴



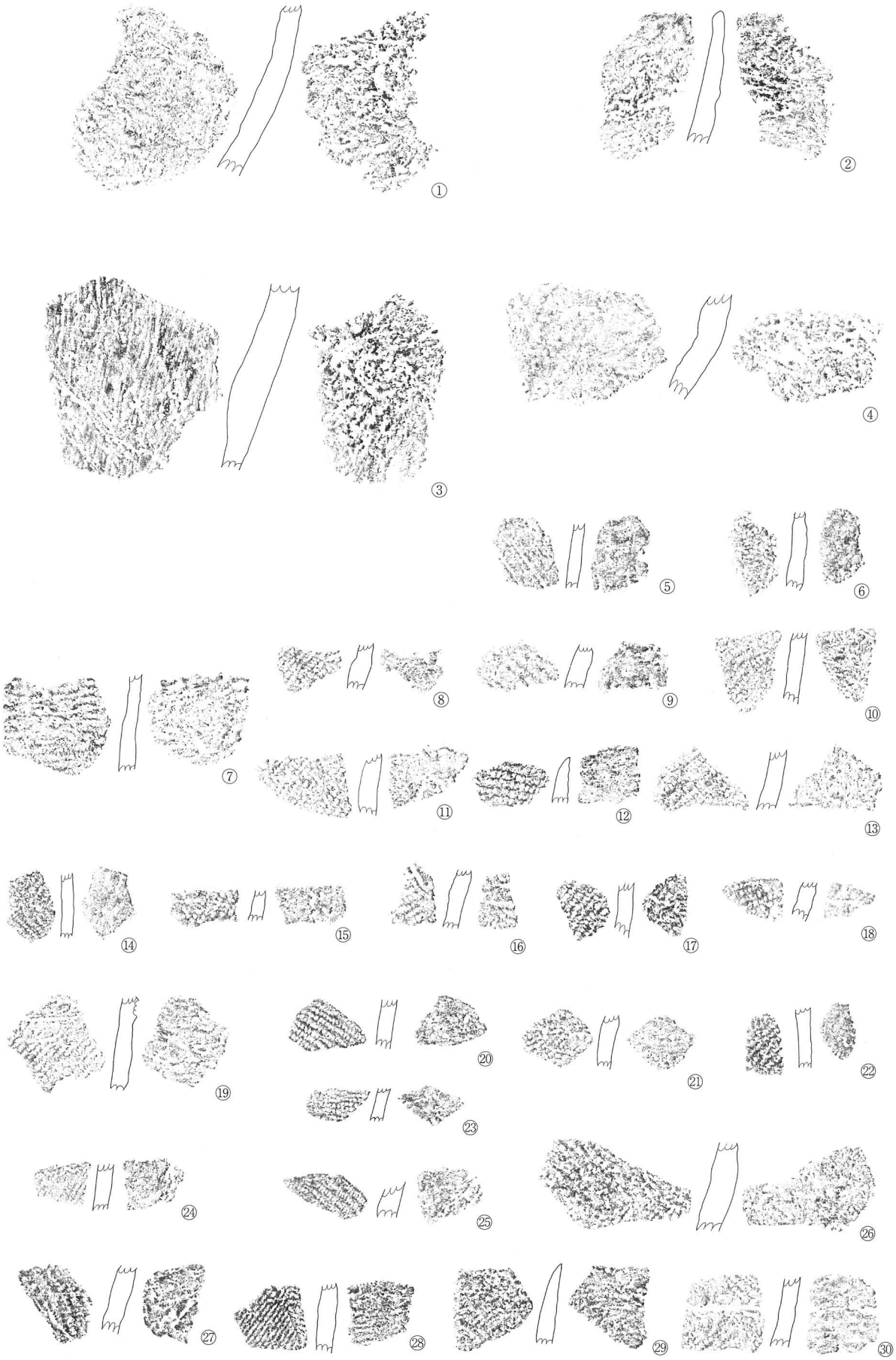
第43図　第29号住居址(1/60)、同遺物(1/3)、第30号住居址(1/60)、同遺物(1/3)



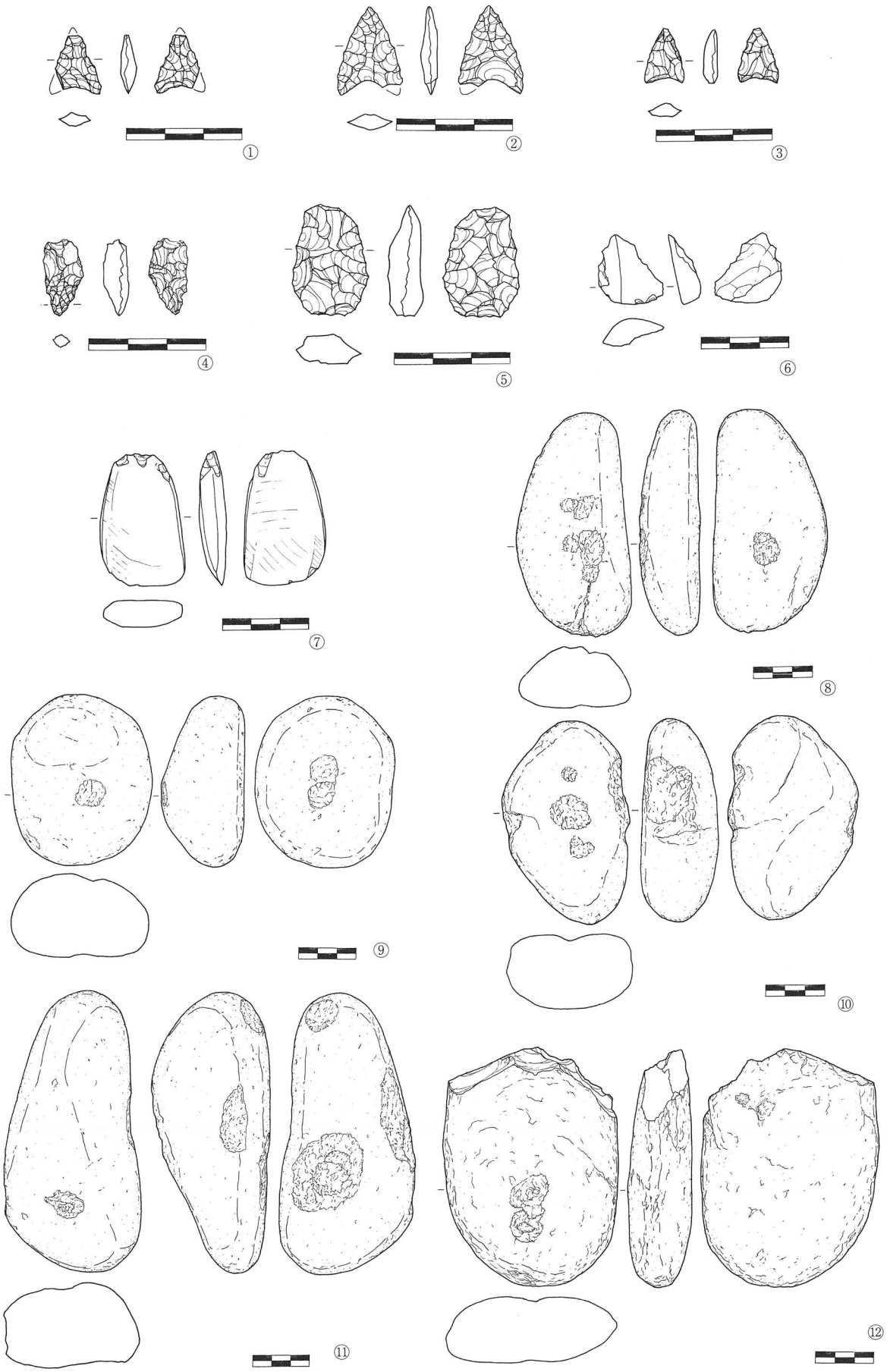
第44図　第31・34号住居址(1/60)、第31号住居址遺物(1/3)



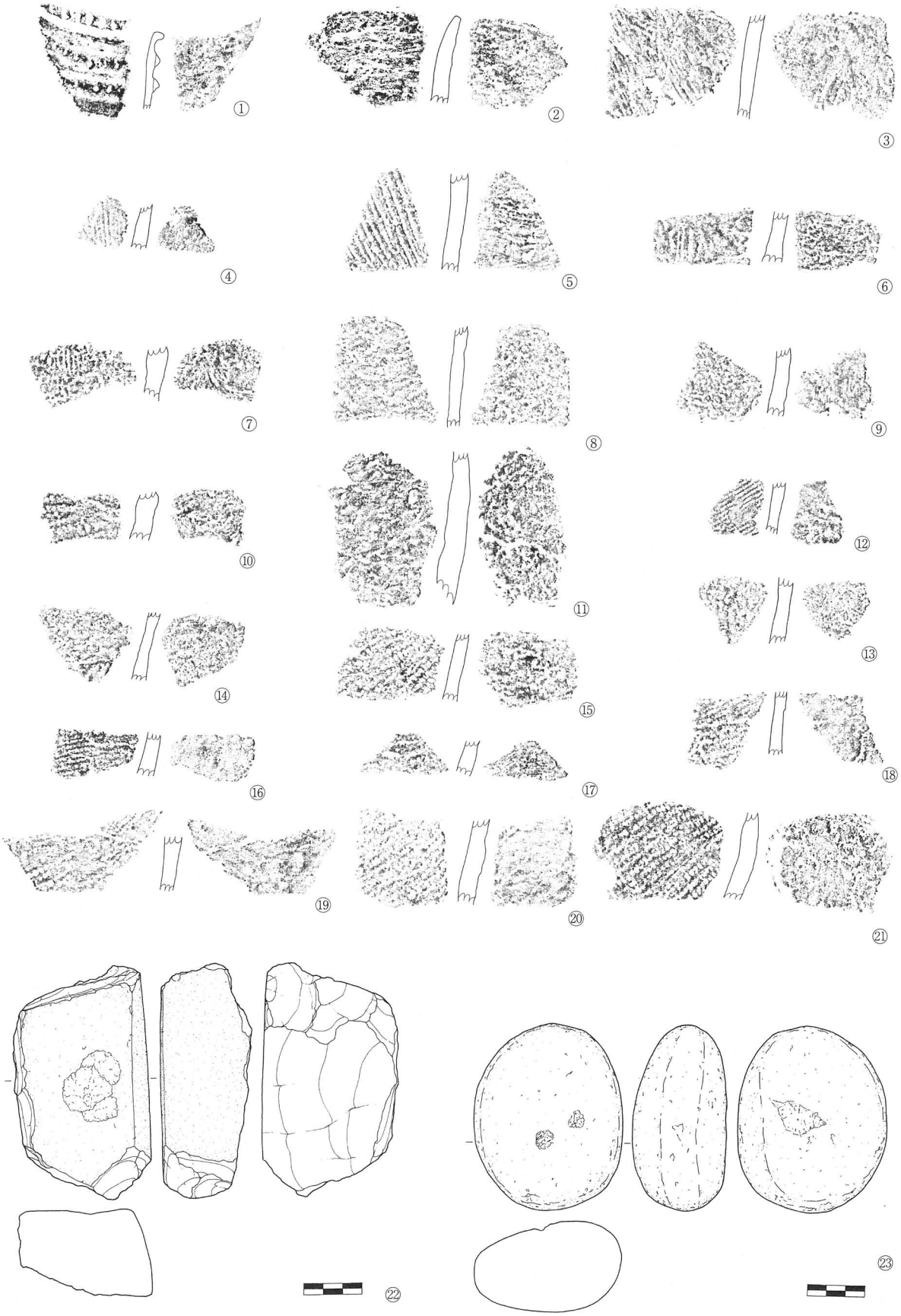
第45図　第31号住居址遺物(1/3)



第46図　第31号住居址遺物(1/3)



第47図　第31号住居址遺物(1/3)、⑧(1/2)



第48図　第34号住居址遺物(1/3)

は検出されていない。柱穴になると思われるピットはP1、P2、P3、P4、P5、P6、P7、P8になると思われるがP2、P3、P4、P5、P9の壁下から底面にかけては西南西－東北東方向に亀裂の痕が検出されている。中央やや東寄りから平らな板状の礫が出土しているが擦痕は見られない。焼土址の検出はなかった。遺物は34号住居址北側の境付近から北側の床に近い高さから多く出土しており、土器の総重量は3,600gが出土している。

34号住居址は31号住居址の上面に掛かって確認されたもので検出時の平面プランは長径3.78m×短径3.34mを測り、長径方向はN－70°－Eを示す。壁高は最大17cmを測る。床は中央に向かって緩やかな傾斜を持ち、皿状に窪む。検出状況は軟弱で切り合い部分は明瞭ではない。周溝は遺存していない。明らかに主柱穴と判断できるピットの検出はない。焼土址の検出はなかった。土器の出土は前述のように34号住居址の床に近い高さからで総重量は800gを計る。

遺物は31号住居址から薄手で櫛状の器具で波状の文様を施した東海系の土器片や波状口縁で繊維をあまり含まない条痕文の土器片、口縁部に横走、縦走する隆帯を持つ繊維土器、厚手で繊維を多量に含む土器など多様な破片が出土している。石器は黒曜石の石鏃、磨製石斧、凹石などが出土している。34号住居址からも同様の土器が出土しているが東海系の土器片は大幅に減り、前期初頭に属する土器が増えている。時期はいずれも早期末前期初頭に帰属しよう。

29. 第35号住居址（第49上図、図版43－①②・9－①）

本址は18号住居址東北東側のK－2・3グリッドで確認されたもので西側が芥沢遺跡を縦断している市道により削り取られている。耕作による攪乱がロームまで達しているため検出できたのは床の一部分と竈の火床、床下土坑である。内部構造は壁や周溝が遺存していないため不明である。明らかに主柱穴になると思われるピットの検出もない。

遺物は灰釉陶器の皿が図上器形復元できているがほかに土師器の高台付き坏、小形甕などが出土している

30. 第36号住居址（第49左中図、図版43－③・9－①）

本址は35号住居址東側のM－2グリッドで確認されたもので溝址2により切られている。耕作による攪乱は35号住居址より深いロームまで達しているため検出できたのは竈の火床底だけである。

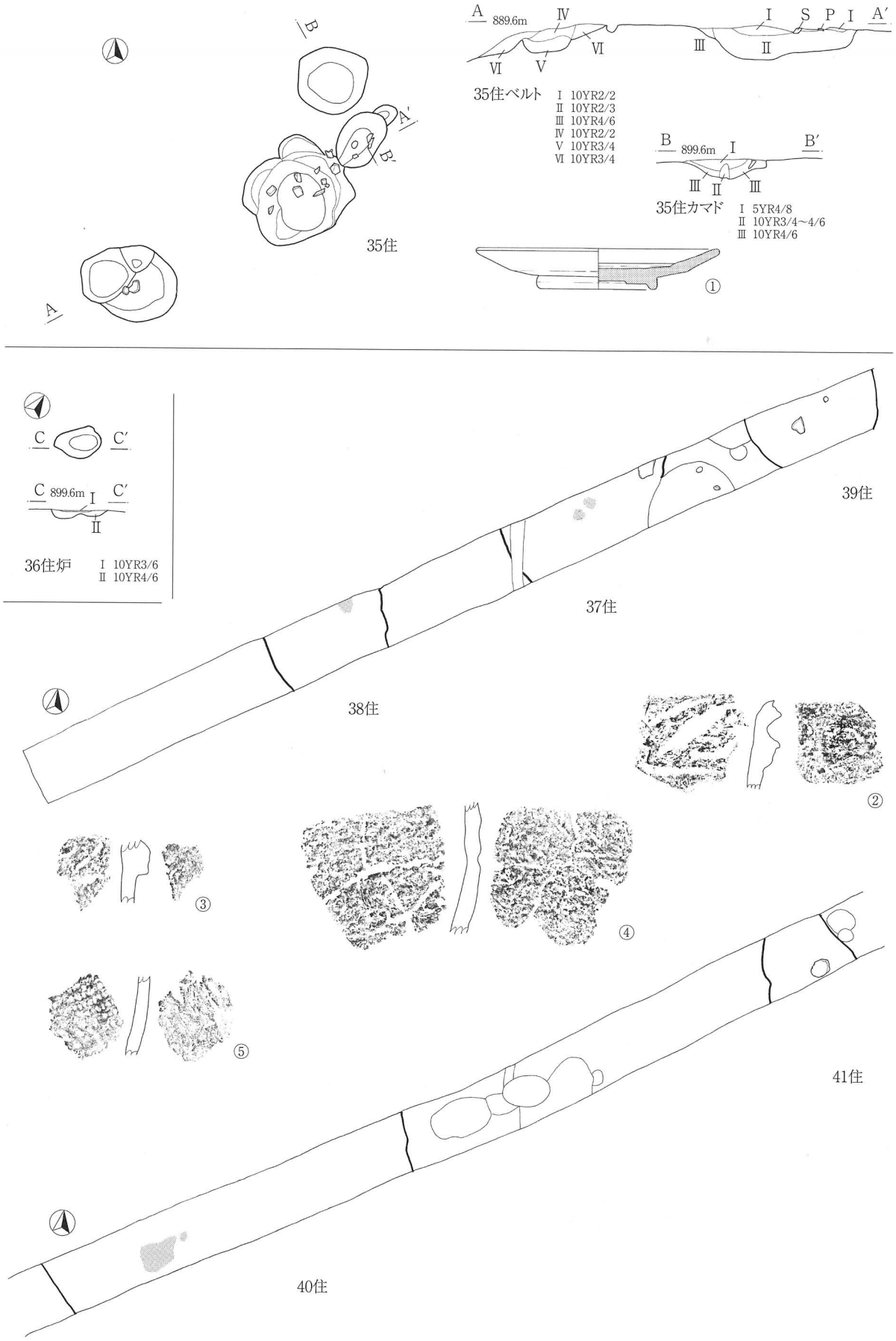
検出時以後に伴う作業では遺物の出土がなかった。但し、表土剥ぎの際に本址付近から平安時代の灰釉陶器碗、瓶頸部の破片などが出土している。

31. 第38号住居址（第49下図、図版10－①）

本址から、長野県教育委員会文化財・生涯学習課の指示により行ったトレンチによる遺構の確認調査で検出した住居址となるが保存地区内の調査のため作業で取り上げたのは時期決定の土器片だけで石器類はそのまま埋め戻してある。土器片を取り上げる際にもトレンチ外への拡張作業は行っていない。24号住居址北側のN－7グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.9m以上を測れた。北側の境界に掛かり焼土を検出しており、焼土付近から繊維土器が出土しており、重量は50gを計る。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

32. 第37号住居址（第49下図、図版10－①）

38号住居址北東側のN－6・7グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径4m以上を測れた。西側壁の立ち上がりは斜めにトレンチャーによる攪乱を受けており、東側も他の遺構により切られている。遺物は繊維土器の集中部が2個所あり、総重量は300gが出土している。平板状の礫が調査区外に続いた状態で検出されている。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。



第49図　第35号・第36号・第37号・第38号・第39号・第40号・第41号住居址(1/60)、同遺物(1/3)

33. 第39号住居址（第49下図、図版10ー①）

37号住居址北東側のNO－6グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.9m以上を測れた。東側で炭化物が出土しており、平板状の割れた礫が確認されている。繊維土器を1点確認しているが保存地区に続いているため取り上げていない。本址は早期末前期初頭に帰属しよう。

34. 第40号住居址（第49下図、図版10ー①）

39号住居址北東側のOP－5・6グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径8.3m以上を測っている。しかし東側は攪乱されているため、2軒となるか、焼土が見つかっている西寄りを中心として規模が縮小する可能姓もある。遺物は見つかっていない。

35. 第41号住居址（第49下図、図版10ー①）

40号住居址北東側のPQ－5グリッドで確認されたもので平面プランは不明であるが、検出時には長径2.2m以上を測れた。遺物は平板状の礫が南側から検出されているが土器は出土していない。本址は早期末前期初頭に帰属すると思われる。

第2節　焼土址

検出時に焼土が確認されたがロームまで達しておらず、内部構造の全容を把握するまでには至らなかった遺構を焼土址としているが住居址に伴う焼土と捉えられる可能性が無いとは言い切れない。

1．第3号焼土址（第50図）

本址は2号住居址南東のM－9グリッドで確認されたものである。遺構検出時に焼土を確認したため住居として調査を開始したが焼土がロームまで達していないことから焼土址とした。床や壁も不明であるがローム漸移層で軟弱な面があり、図の輪郭線は特に軟弱な範囲を示す。

遺物は繊維土器、東海系の土器小片と石器で黒曜石の掻器が出土しており、総量は107.1gである。

2．第1・2・4号焼土址（第51上図）

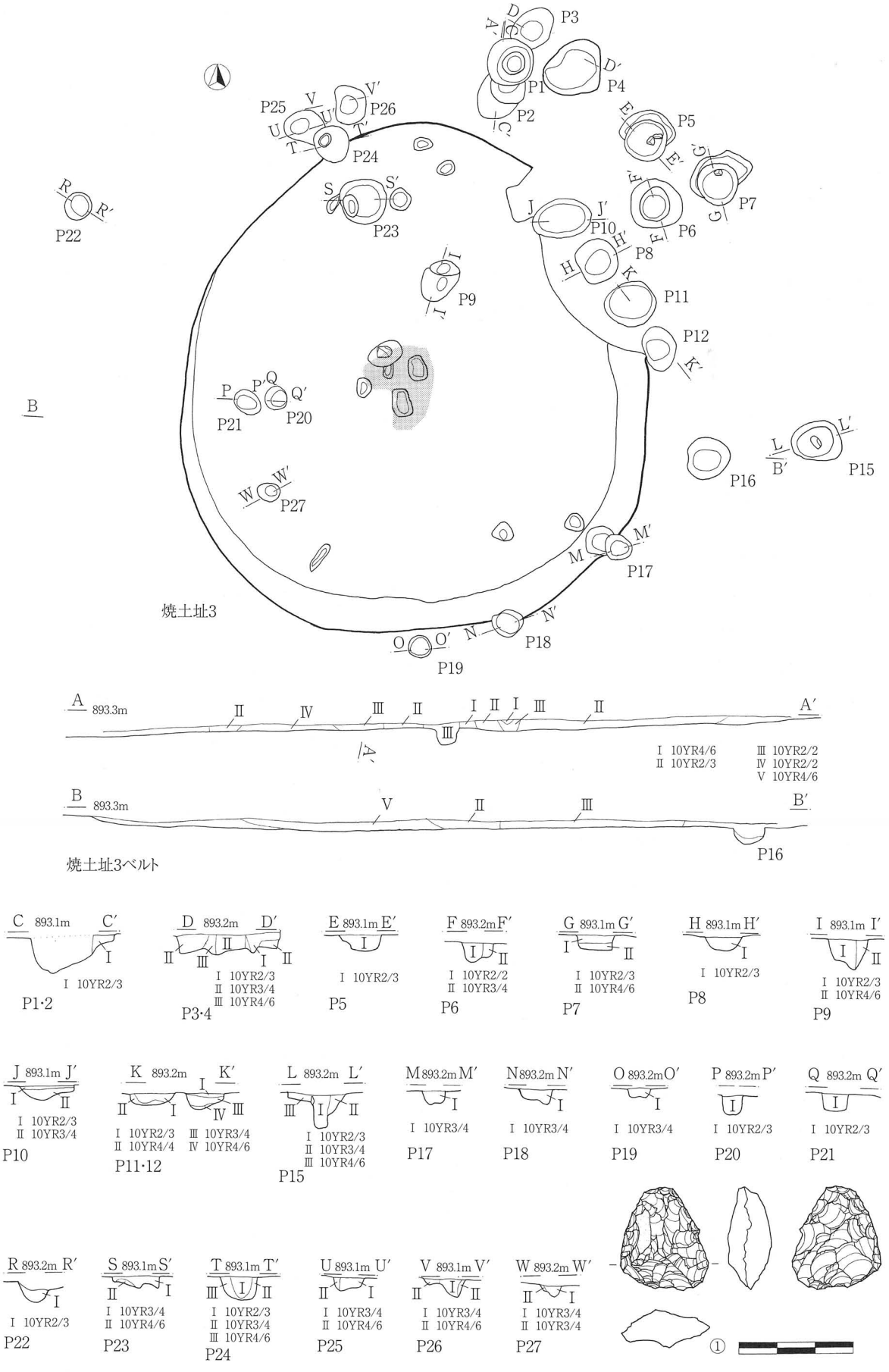
1号焼土址は2号住居址南西のL－9グリッドで確認されたものである。本址の西、約1.5mで開田に伴う切り土の崖となり比高差は40cmである。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から47.5gの黒曜石が出土している。

2号焼土址は1号焼土址の東側、2号住居址寄りのL－9グリッドで確認されたものである。浅い掘り方があるが焼土はロームに達していない。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から繊維土器1点と黒曜石が53.9g出土している。

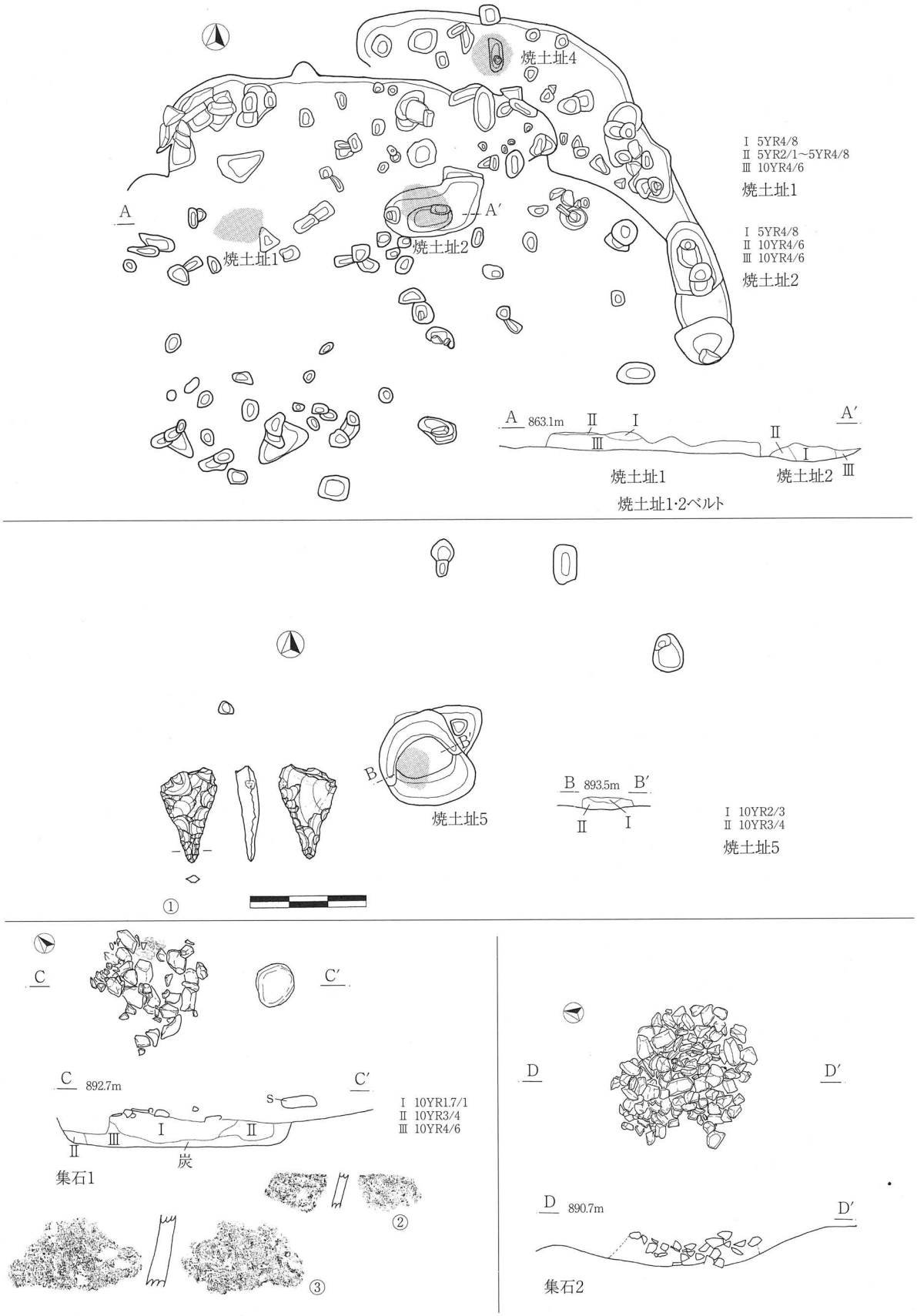
4号焼土址は2号焼土址北側のL－9グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から薄手指頭圧痕細線文土器と黒曜石が16.9g出土している。

3．第5号焼土址（第51中図）

5号焼土址は3号住居址南のL－10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。周辺から繊維土器の小片と黒曜石が6.7g出土している。



第50図　第３号焼土址(1/60)、同遺物(1/3)



第51図　第１号・２号・５号焼土址(1/60)、同遺物(２/3)、第１号・２号集石炉(1/60)

4．第6・7・8号焼土址

6号焼土址は1号住居址北西のK－10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランは試掘の際にトレンチで切ってしまったため把握することはできなかった。周辺から繊維土器の小片と黒曜石が6.7g出土している。

7号焼土址は3号焼土址南東のM－10グリッドで確認されたものである。全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランは南側が調査区外に続いているため把握することはできなかった。遺物の出土はない。

8号焼土址は2号住居址東のM－9グリッドで確認されたものである。耕作用道路と市道の取り付け部に当たり、全体が耕作等により攪乱されているために周辺遺構との新旧関係、及び全体の平面プランを把握することはできなかった。遺物の出土はない。

第3節　集石

芥沢遺跡を主構成する縄文時代早期末前期は屋外炉から屋内に炉が入ってくる過渡期にあたる。調査した住居にも地床炉を持つ家、持たない家があるが火を用いた調理施設の一種として集石炉が見つかっている。集石炉は赤変した拳大位の被熱破砕礫からなり本遺跡の場合2基検出されているがいずれも台地先端の肩に立地している。

1．第1号集石炉（第51左下図、図版76－①②）

本址は7号住居址北、16号住居址西側で調査区のG－8グリッドで確認されたものである。集石炉の北西約2mの付近から開田により1.5mロームが削り取られていた。本址は水田の直下で検出したため構成する礫の上面には床土が食い込んでいる。重複関係を有している遺構はない。平面プランは長軸方向がN－42°－Wを向く長軸82cm、短軸82cmを測るが短軸側は約60cm幅で残りは集石炉を使用したときの移動によると見ることができる。被熱破砕を受けている影響で構成している礫の総数は47個である。礫は1層で検出されているため上部は削られてしまっている可能性がある。掘り方は皿状で礫との間には炭を含み、中心の20cm程の範囲では特に炭の量が多くなる。集石の南東側に30cm離れて台石状の河床礫がある。

遺物は南西隅から厚手の繊維土器と中から東海系の土器片が出土している。

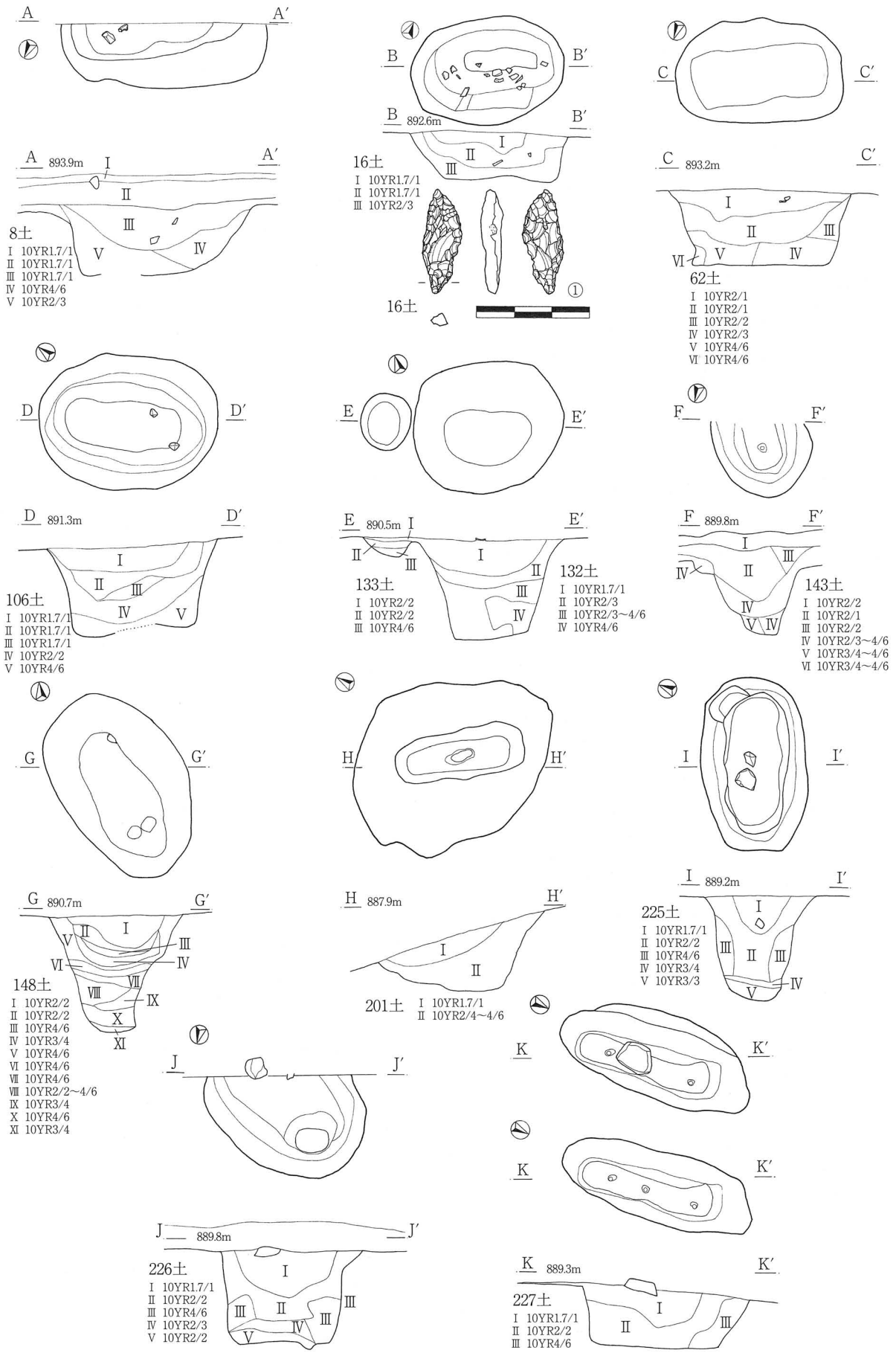
2．第2号集石炉（第51右下図、図版76－③）

本址は18号住居址西側で調査区のG－4グリッドで確認されたものである。水田造成された平場と原地形の斜面との境に位置している。重複関係を有している遺構はないが、平面プランは長軸方向がN－11°－Wを向く長軸104cm、短軸102cmを測るほぼ円形で、被熱破砕を受けている影響で構成している礫の総数は195個である。礫は下側が膨らむ凸レンズ形を呈し中心部は3～5個が折り重なり3mm以下の炭化物少量が間に挟まっている。掘り方は皿状で坑底の中心は礫の最も厚く重なっている所から約30cm西側に寄る。西側の掘り方は斜面により削られている。

遺物は出土していない。

3．第1号石囲炉（図版77）

本址は溝址2に接するL－2グリッドで確認されたものである。竈の火床の位置から判断すると床下まで削平されている36号住居址と重複関係があると思われる。平面プランは長軸方向がN－65°－Eを向く長軸58cm、短軸48cm、深さ16cmを測るほぼ楕円形で、坑底には平らになるように3枚の石を敷き、花弁状に上部



第52図　第８・16・62・106・132・133・143・148・201・225～227号土坑(1/60)

が開く形に石を立て巡らしてある。同様の遺構は隣の天狗山遺跡からも見つかっているが焼土、炭化物の検出はなかったため配石遺構としてあった。本址は内部から1.3cm以下の炭化物が見つかったことといずれの礫も被熱により赤変していることから炉と捉えた。

炉内から遺物の出土はなかったが炉西側で溝址Ⅱとの間から長さ11.1cm、幅4.7cm、厚さ2.2cm、重量95.6gの狭長な黒曜石の剥片が出土している。

第4節　土坑

土坑としたものは人工的に土中に穿たれた穴の中で近世以後の金属製農耕具で掘られた穴を除き、形状、遺物の出土状況で設定している。整理番号は239番まで付しているが住居内の土坑で整理作業段階において住居に伴う施設と判断した土坑の出土遺物は住居址の出土遺物として図化してある。個々の土坑については巻末に一覧表としてある。

1．落し穴（第46図、図版44～50）

形状から性格付けがなされている土坑に落し穴がある。茅野市における落し穴の考古学的研究は1965年と古く北山の城之平遺跡で宮坂英弐が23個所の竪穴の発掘を行った。宮坂はこの竪穴を「落し穴」に該当するものと考察し、更に集団的な狩猟の存在まで指摘していることに始まる。近年の大規模開発に伴う発掘調査で市内の落し穴の様相については2006年守矢昌文がまとめている。

芥沢遺跡で調査した落し穴は標高887～893mの間に11基あり、平面形は検出面が楕円あるいは長円形になり、底面形は上面を細長くした形状か隅丸長方形となり、円形あるいは隅丸正方形になる土坑は1基もない。壁面、底面はいずれも堅く締まっている。坑底まで最も深いのは第106号土坑で遺構検出面から157cmを測る。106号土坑は調査中に鹿が落ちた跡が残っており（図版46－②）土坑の縁には脚を掛け逃げだした時に付いた蹄の痕（図版46－③）があった。本来はこの上に有機物の分解した暗褐色土が堆積していたため2m近い深さがあり、十分落し穴としての機能をもっていたと思われる。底面の長軸方向から北東－南西方向に長軸を持つ第8・62・16・225号土坑が1組、北西－南東方向に長軸を持つ第106・148・143・201号土坑が1組、この中間の東－西方向に長軸を持つ第132・226号土坑が1組となり、これに直交する北－南方向に長軸を持つ第227号土坑がある。坑底ピットは第143.201.227号土坑で検出されており、第132・225・226・227号土坑内からは猟に用いられたと思われる礫が出土している。

2．第9号土坑（第53図9土、図版51－①②）

本址は1号住居址北で試掘の際に確認されていた。K－10グリッドに位置し、台地中央の頂部に近い付近に占地する。本址と重複関係を有している遺構はない。平面プランは長径方向がN－26°－Wを向く長径1.15m、短径1.07mのほぼ円形を呈する。掘り方はしっかりしており、壁は直線的に外反する形で立ち上がり、深さは確認面より16cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪むが、全体的には平坦で堅緻である。土層の状況は：覆土は4層に分層でき、Ⅰ、Ⅱ層は後からの掘削によるものである。遺物が出土したのはⅢ層の底面付近からで粒子は細かく締まりがあり強い粘性を有し2mm以下のローム粒子を全体に含む黒褐色土で3mm以下の炭化物少量を含んでいる。出土しているのはいずれも緑色岩の石器類で打製石斧の刃部1点と剥片2点である。その状況より人為的に埋め戻しているものと捉えられる。緑色岩による石器（図版83）は本址を中心とするJK－10・11グリッドを中心とする範囲から出土している。石器の特徴として剥片、礫を刃部調整までしていても使用痕がほとんど認められず稜は鋭いが表面は風化している石器類が多い。形状として定形を

持つのは本址出土の基部で折れている打製石斧の刃部（第53図９土④、図版83最上段左から２番目）がある。

３．第54号土坑（第55図54土、図版55ー②）

本址は調査区のIJ－11グリッドで確認されたものである。台地の西側肩に近い範囲に占地し、南東側に12号住居址が近接する。切り合いはなく、平面プランは長径方向がN－44°－Wを向く長径2.20m、短径2.05mの長楕円形を呈する。土坑の掘り方はしっかりしており、上がりは垂直に近い形で立ち上がり、深さは確認面より26cmを測る。坑底は微妙に中央部が窪む傾向が認められるが、全体的には平坦である。

遺物は隆帯付き条痕文土器、東海系の土器片が出土しており、焼土の検出はなかったが住居の可能性もある。本址は出土している土器から早期末前期に帰属しよう。

４．第189・190号土坑（第60図189・190土、図版73ー②③、74ー①②③）

189号土坑は東端調査区のX－－２グリッドで確認されたもので北東に延びている台地支脈の痩尾根頂部から僅か南東側に傾斜し始める斜面に占地し、東側は190号土坑と切り合い、周辺には北側に第191・223号土坑、東側に第192・224号土坑、西側に第188号土坑等、同じ形状の群として捉えられるような土坑が集中する。

本址と190号土坑の底面には地割れの痕（図版74③）が残されている。重複は切り合っている所にちょうどピットが位置するため新旧関係は不明である。２基の土坑底に残されている地割れは西北西－東南東方向に走っている。芥沢遺跡と同じ金沢地区内にあり約2.5km北側に離れている阿久尻遺跡から見つかった地割れがほぼ同方向に走っている。これについては平成５年度刊行されている報告書で松島信幸、寺平宏が分析の結果、地震による開口地割れで、発生を6,300～6,500前の縄文時代前期としている。土坑同士による切り合いは不明であるが地割れ溝による段差は坑底になく、土坑の形状も歪んでいないことから地割れの発生は本址形成以前であることは間違いないであろう。

遺物の出土はなかったが土坑下の斜面から寛永通宝と文久永宝が１枚ずつ出土している。

第５節　溝址

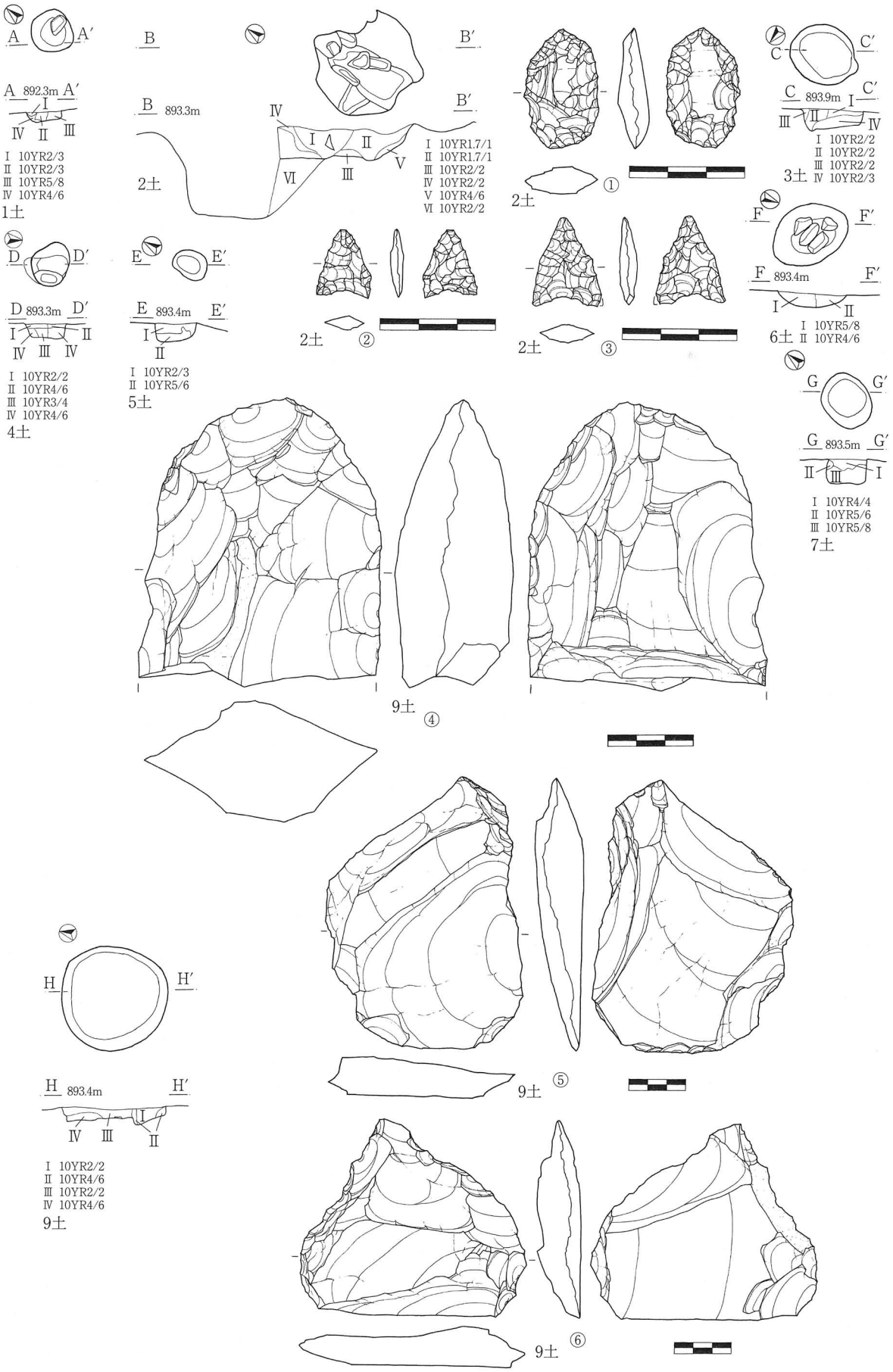
溝址は各年度調査区でそれぞれ１本、計２本を検出している。いずれも南東―北西方向で中野沢川に直交するように見つかっており、これは遺跡内を縦断する市道と同じ方向である。

１．第１号溝址（第62・63左図、図版78）

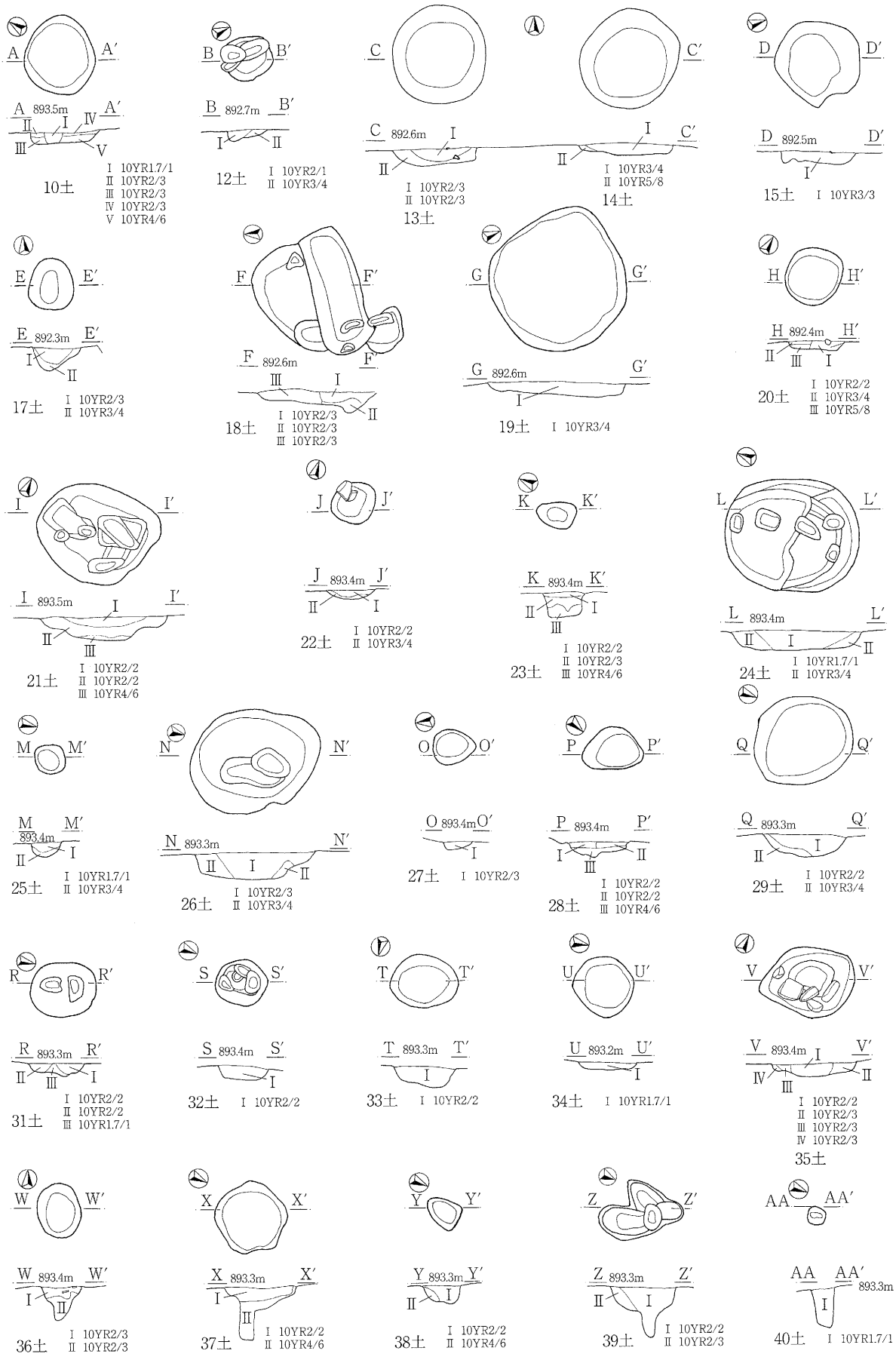
本址は平成15年度調査区のK－８、K－７、J－７、J－６、J－５、J－４、I－３、I－２、H－２グリッドで断続しながら確認されたものである。この溝は1989年調査の溝址１の続きで、今回の調査ではJ－４グリッド内に該当する。検出した始点は切り合い関係にある10号住居址北西側で17号住居址の東側、耕作による攪乱が著しい21・19号住居址西側に接し、走行方向はN－22°－Wで東側に最大７m程湾曲しながら所々で複列になっている。長さ66m、最大幅はI－３グリッドの複列部で2.4m、単列ではJ－６グリッドで1.8m、深さは25cmを測る。遺物は縄文時代早期末前期、中期初頭の土器、15～16世紀の内耳土器、18世紀前半の灰釉陶器鬢盥の一部を含む江戸時代以後の多様な陶磁器の破片と調整痕のある石器が出土している。

２．第２号溝址（第63右図）

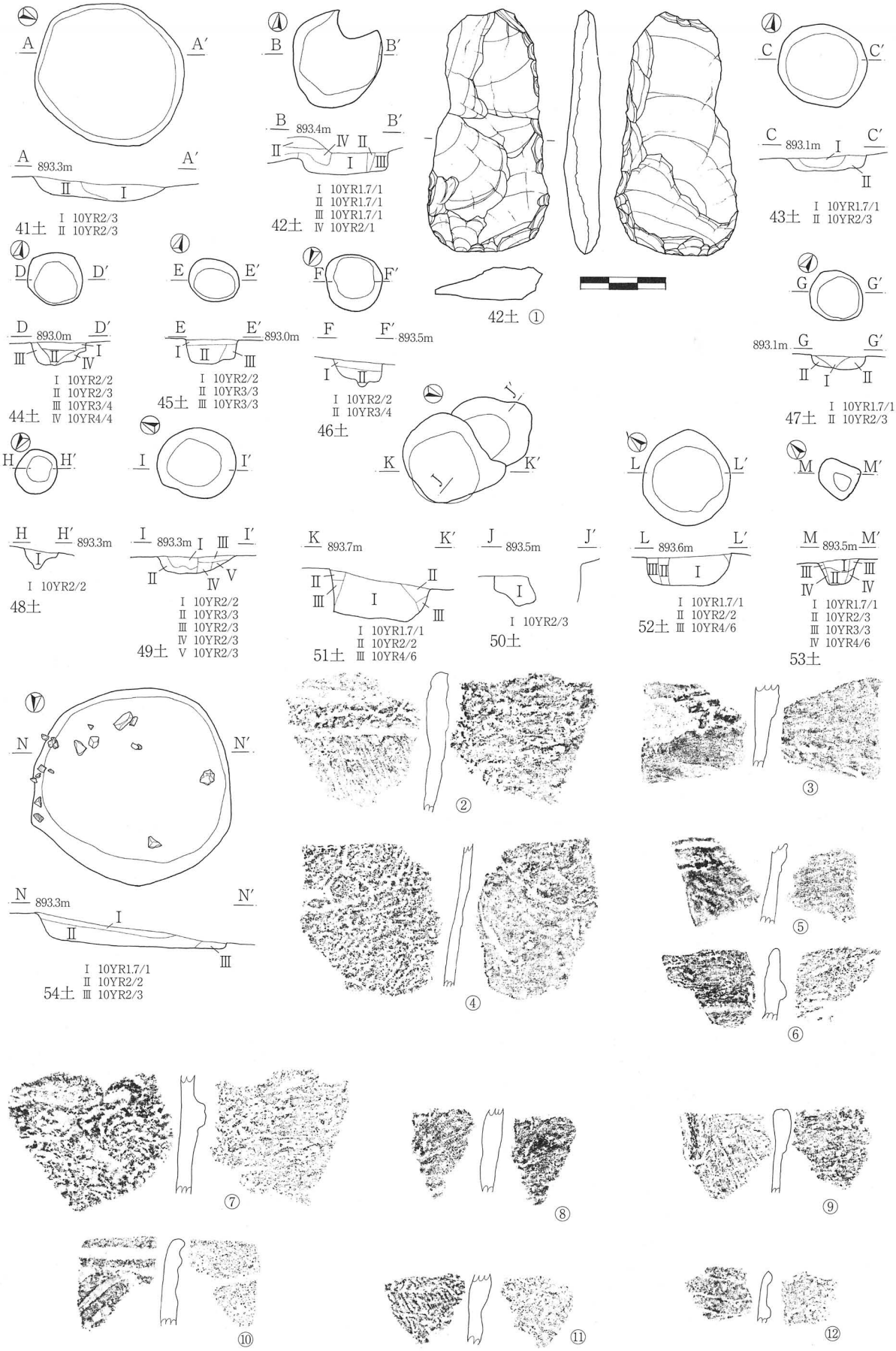
本址は平成16年度調査区のL－２、L－１グリッドで確認されたものである。検出した始点は調査区内であるが保存区内に続いている可能性は高い。16年度の南西側の調査区は続きになる周辺が耕作による攪乱が



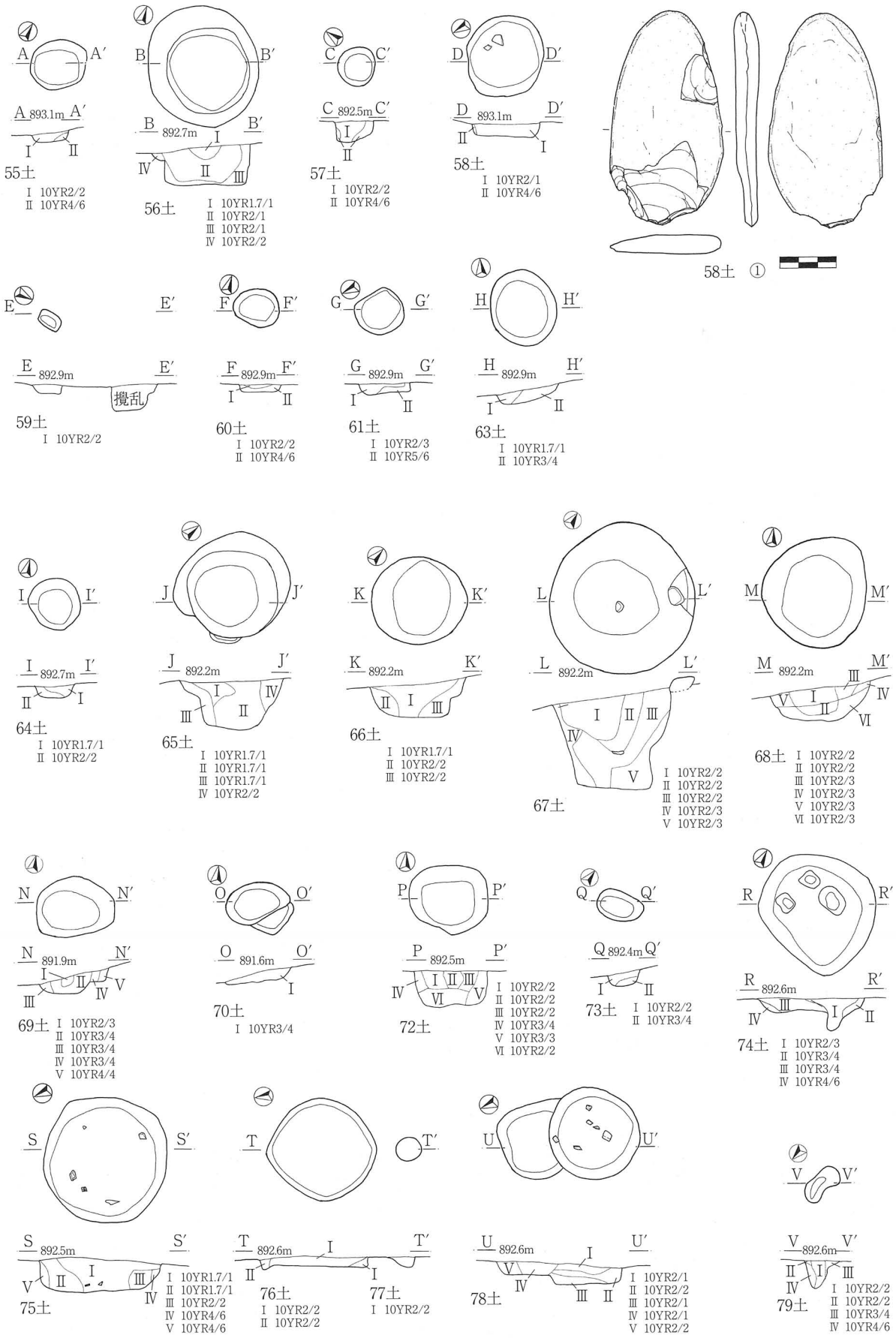
第53図　第１～７・９号土坑(1/60)、遺物①②③(2/3)、④(1/2)、⑤⑥(1/3)



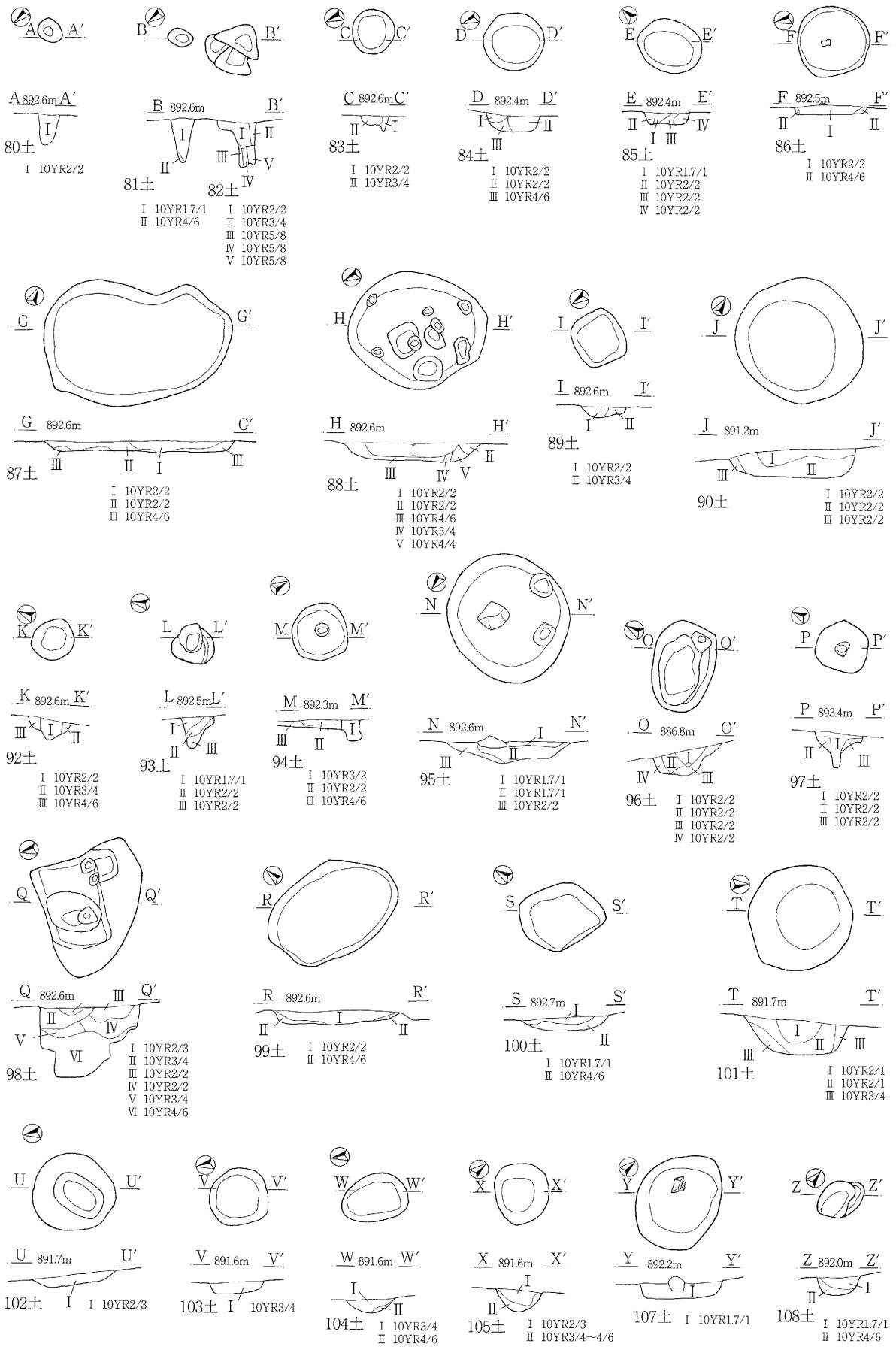
第54図　第10・12～15・17～29・31～40号土坑(1/60)



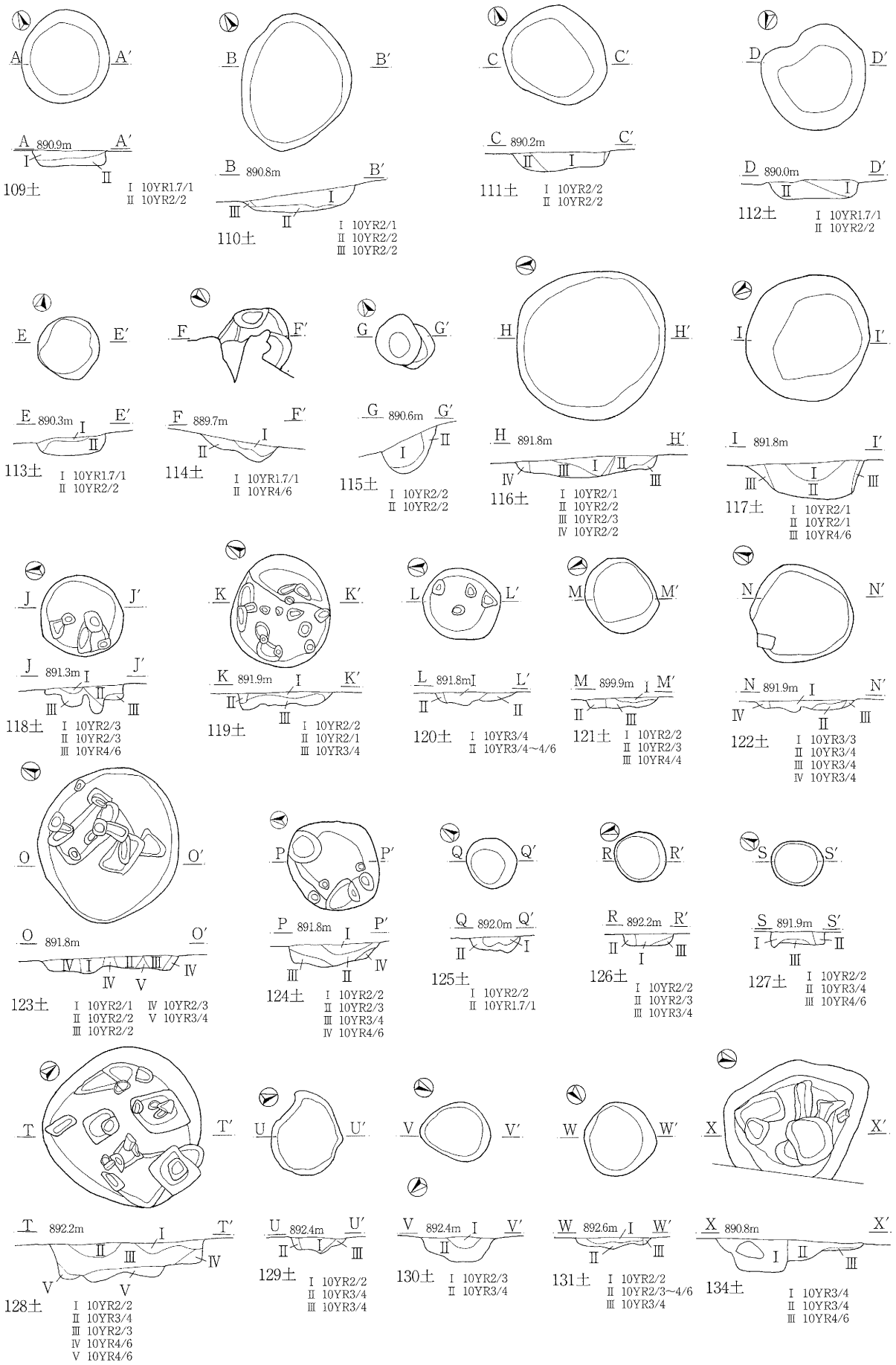
第55図　第41～54号土坑(1/60)、遺物(1/3)



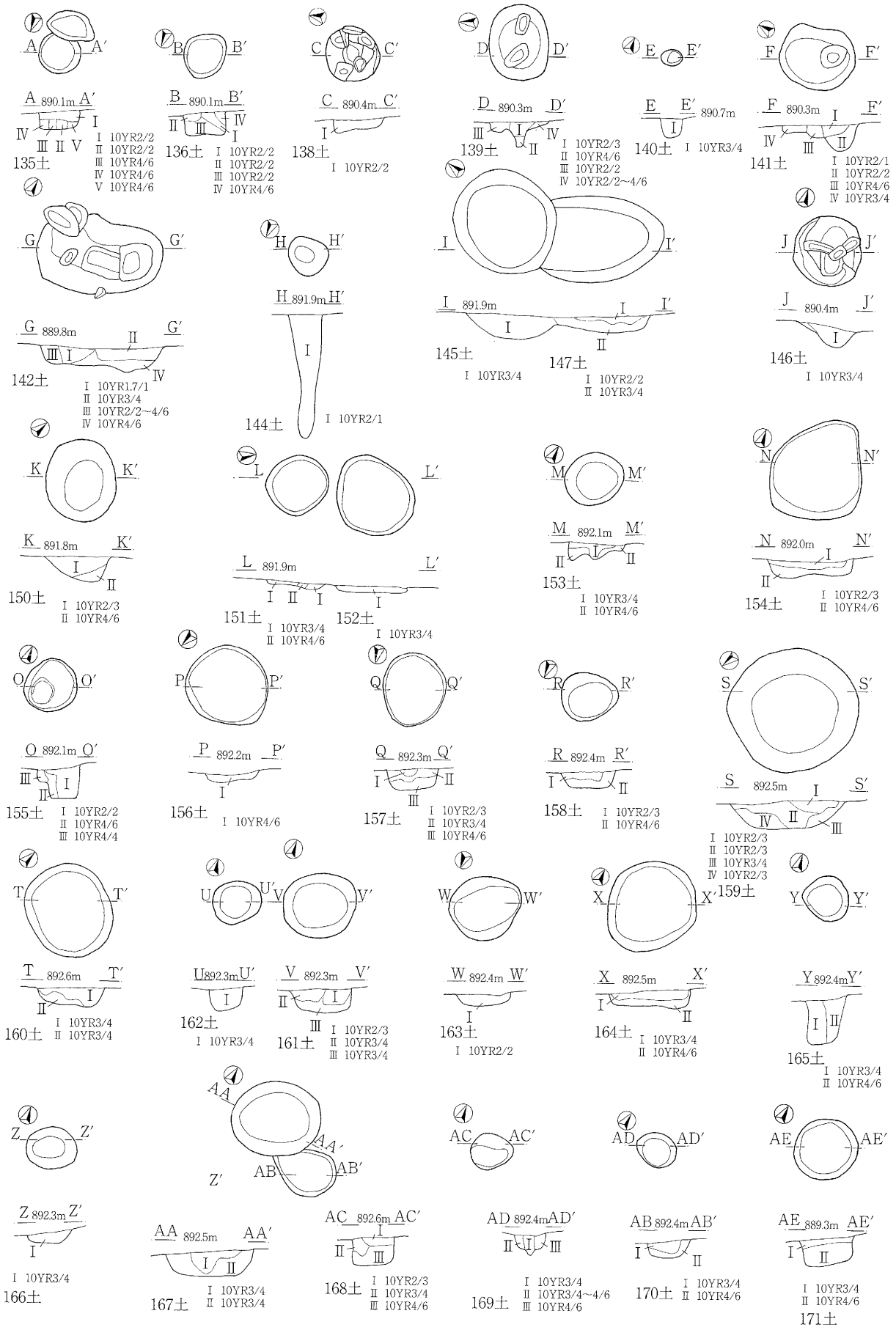
第56図　第55～61・63～70・72～79号土坑(1/60)、遺物(1/3)



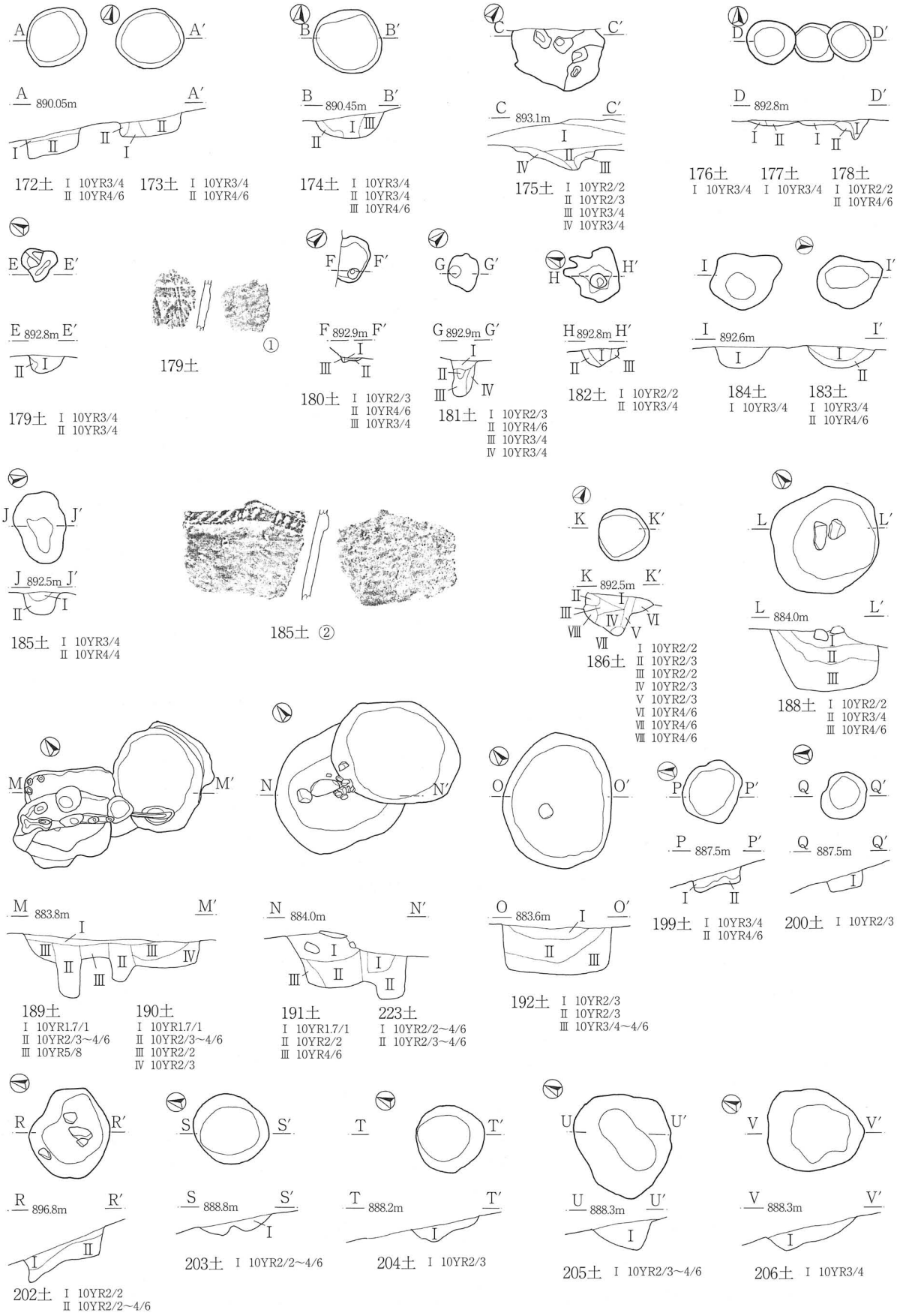
第57図　第80～90・92～105・107・108号土坑(1/60)



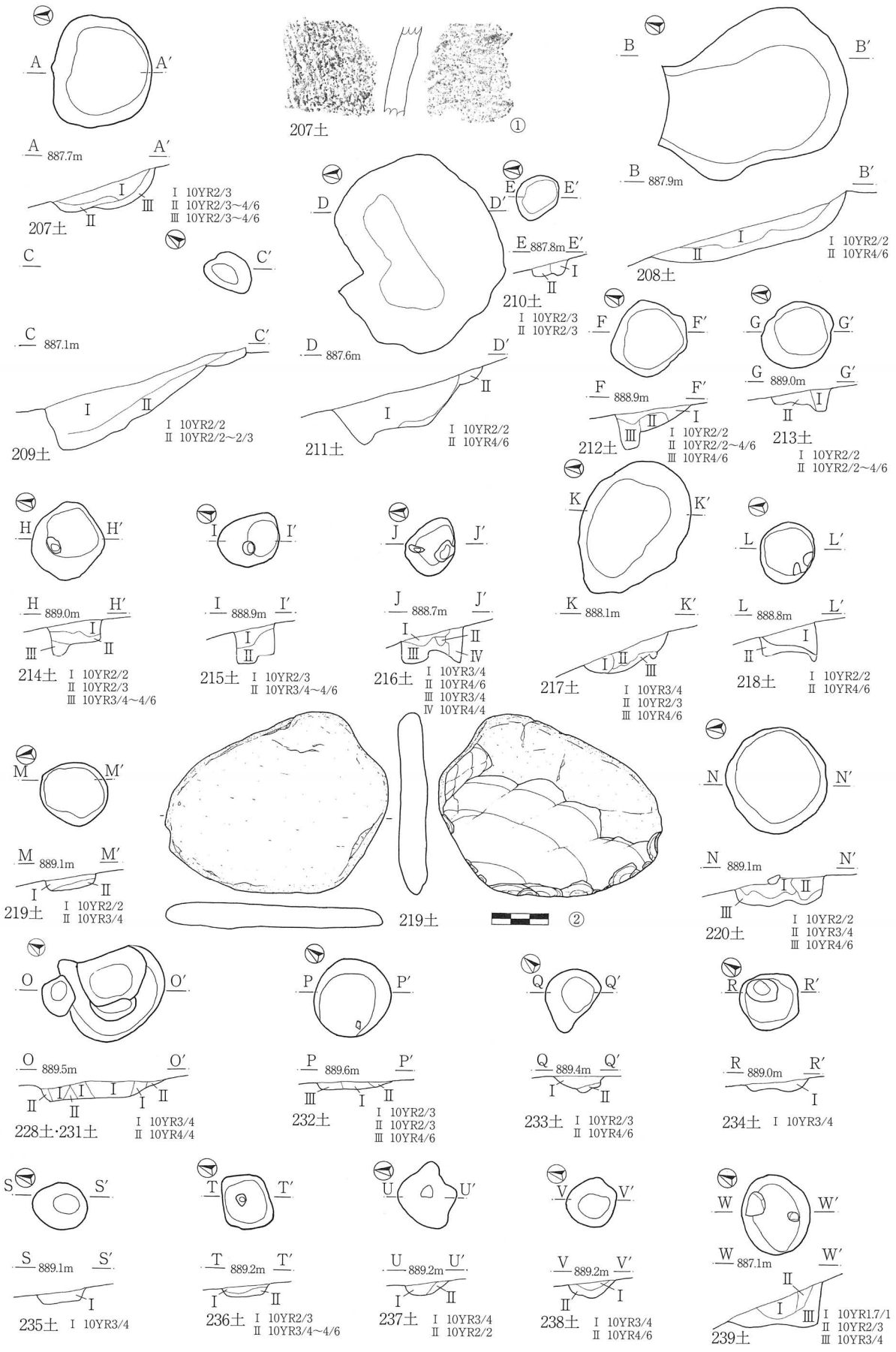
第58図　第109～131・134号土坑(1/60)



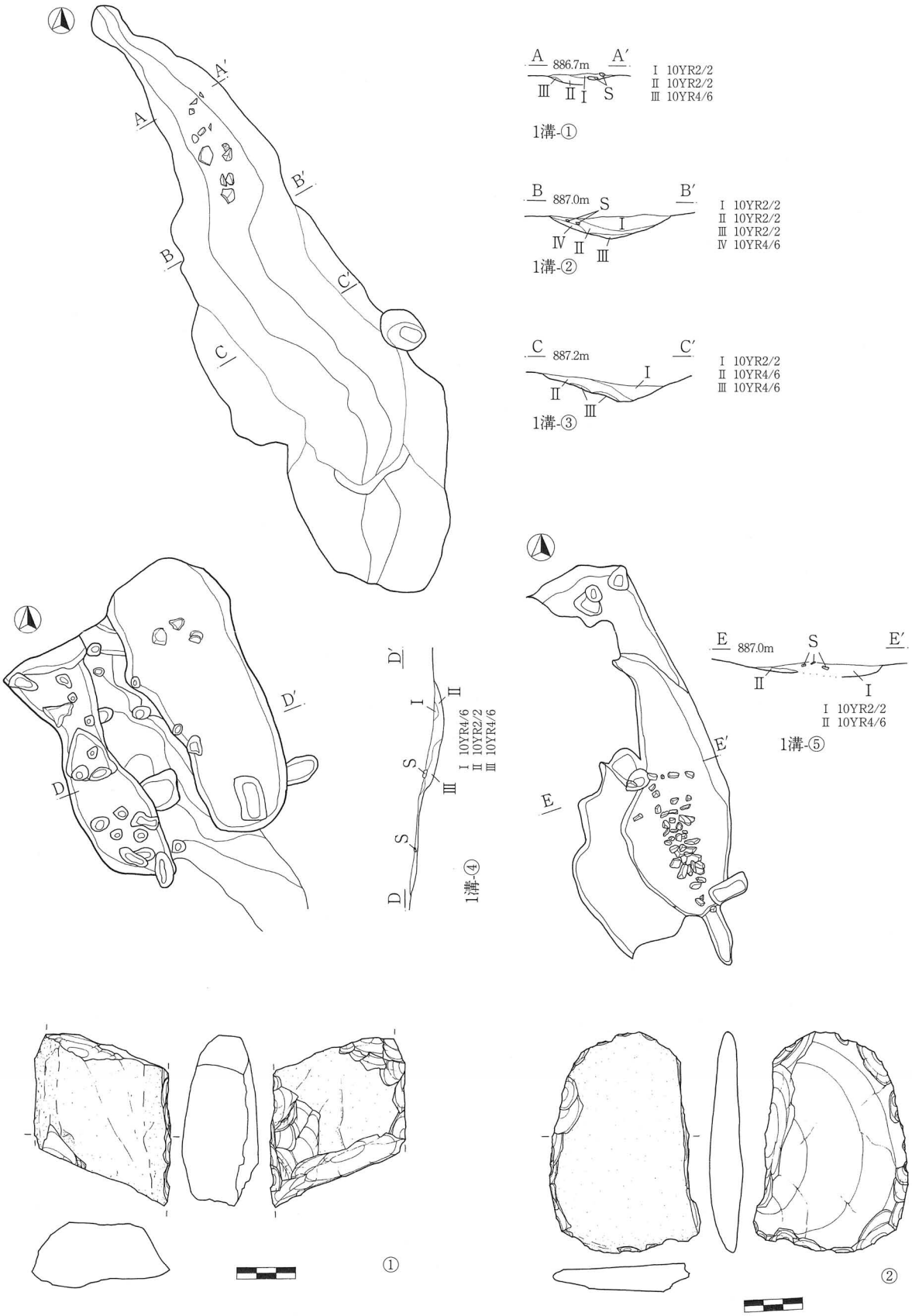
第59図　第135・136・138～142・144～147・150～171号土坑(1/60)



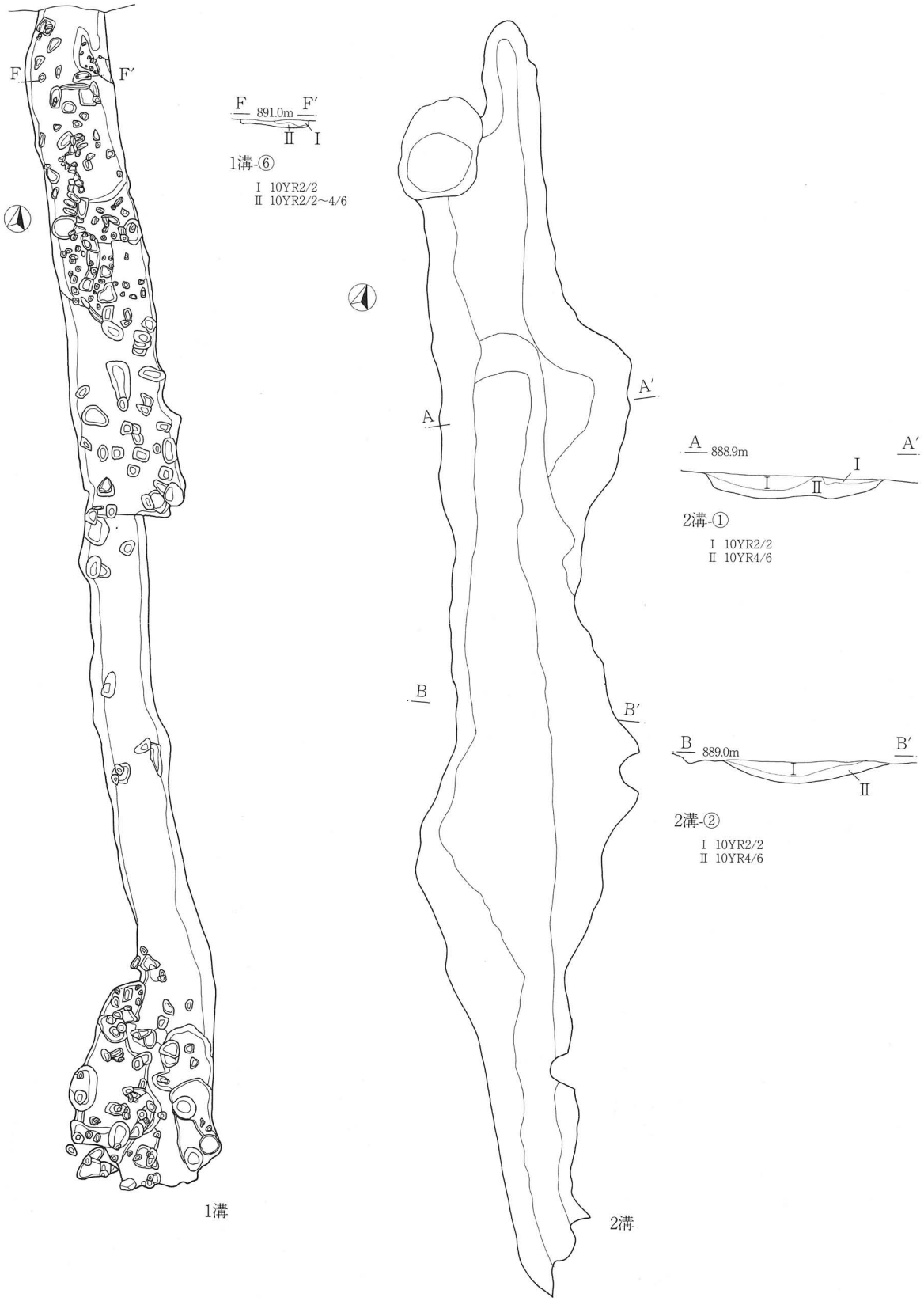
第60図　第172～186・188～192・199・200・202～206号土坑(1/60)、遺物(1/3)



第61図　第207～220・228～239土坑(1/60)、遺物(1/3)



第62図　第１号溝址(1/60)、同遺物(1/3)



第63図　第１号溝址(1/120)、第２号溝址(1/60)

著しいため確認されてはいない。走行方向はN－25°－Wで僅かに蛇行している。長さ12．7m、最大幅は1．9m、深さは26cmを測る。遺物は縄文時代早期末前期の土器が出土している。

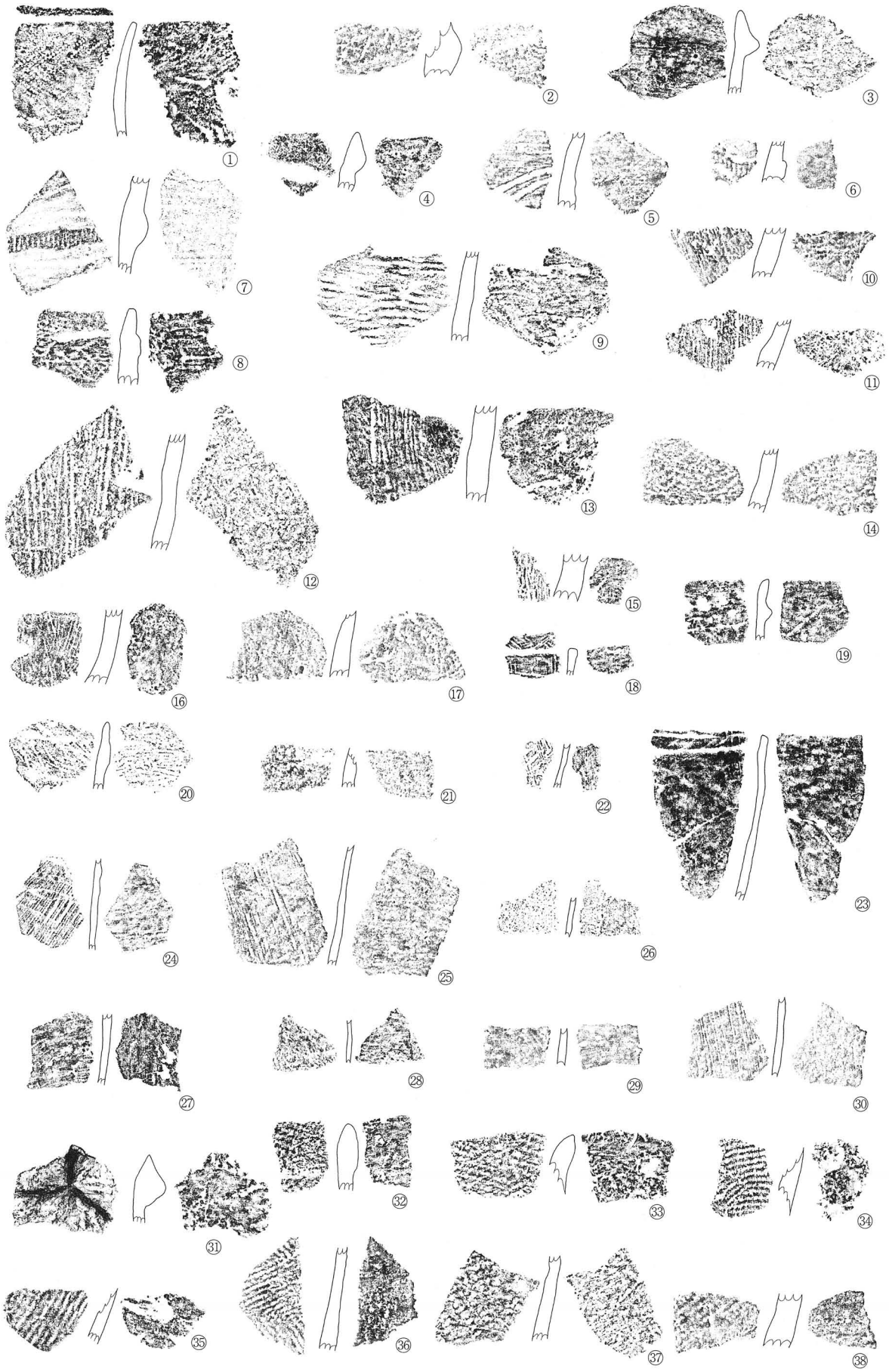
第6節　断層（図版79②③・80）

調査区内で断層に伴う破砕帯とロームの境をI－14、E－6、E－4グリッドのラインで西側に湾曲しながら検出し、F－12、E－6グリッド間ではこれに伴う谷地形を検出した。谷にトレンチを入れて断面の観察を行ったが底面は平らで礫層になっており、覆土は強い圧力で砕けた礫、及びその転石と砂からなる。本工事の際、調査区外西側で立合を行ったが水田の床土を剥ぐと全面が同様の礫層で検出境界から約100m離れた西側の山裾までこの状態が続き、山裾には厚さ1m程で灰白色の粘土層が断層方向に続いていた。

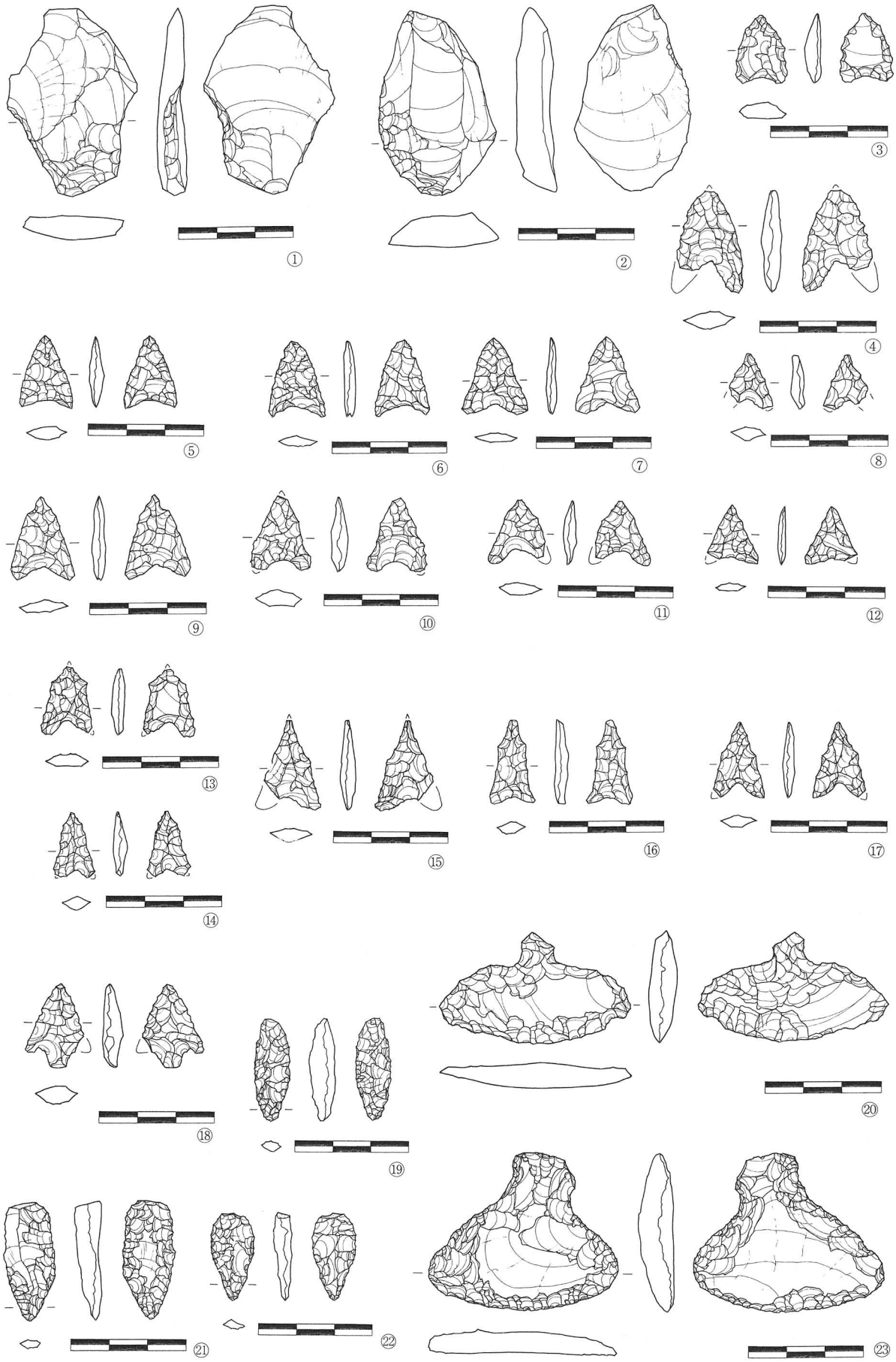
礫層内から遺物の出土はないがH－15グリッドで水田床土と礫層の境界から乳棒状磨製石斧の基部が1点出土している。

第7節　その他

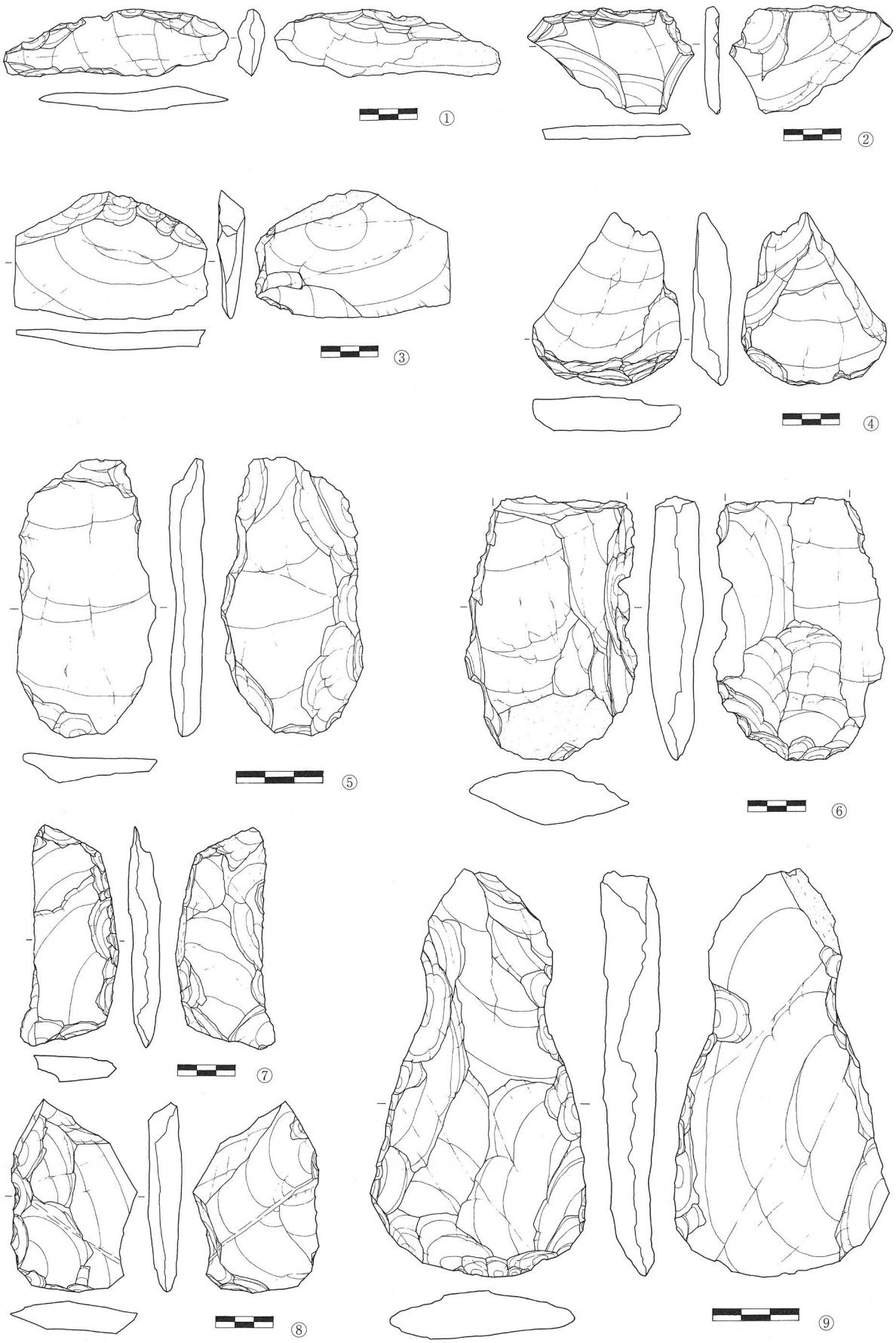
J－11グリッドの攪乱部から旧石器時代後期のナイフ形石器（第65①図）が出土したため出土地点を中心に10m四方の深堀を平成15年12月8～10日の3日間にわたって実施した。深さはローム検出面から平均50cm下げたが遺物は黒曜石細片も出土することがなかったため、礫層には達しなかったが検出作業を終了した。



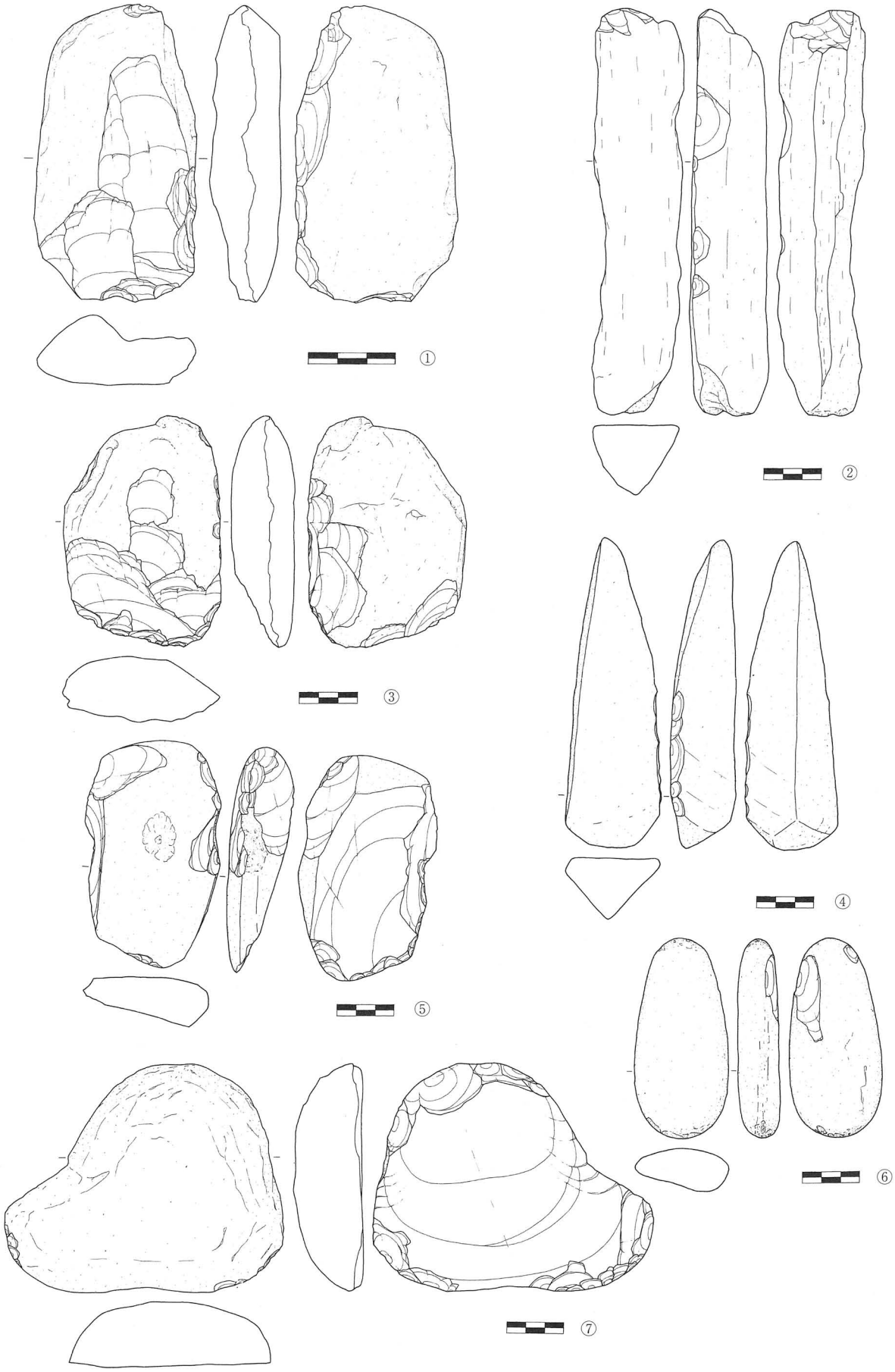
第64図　グリット遺物(1/3)



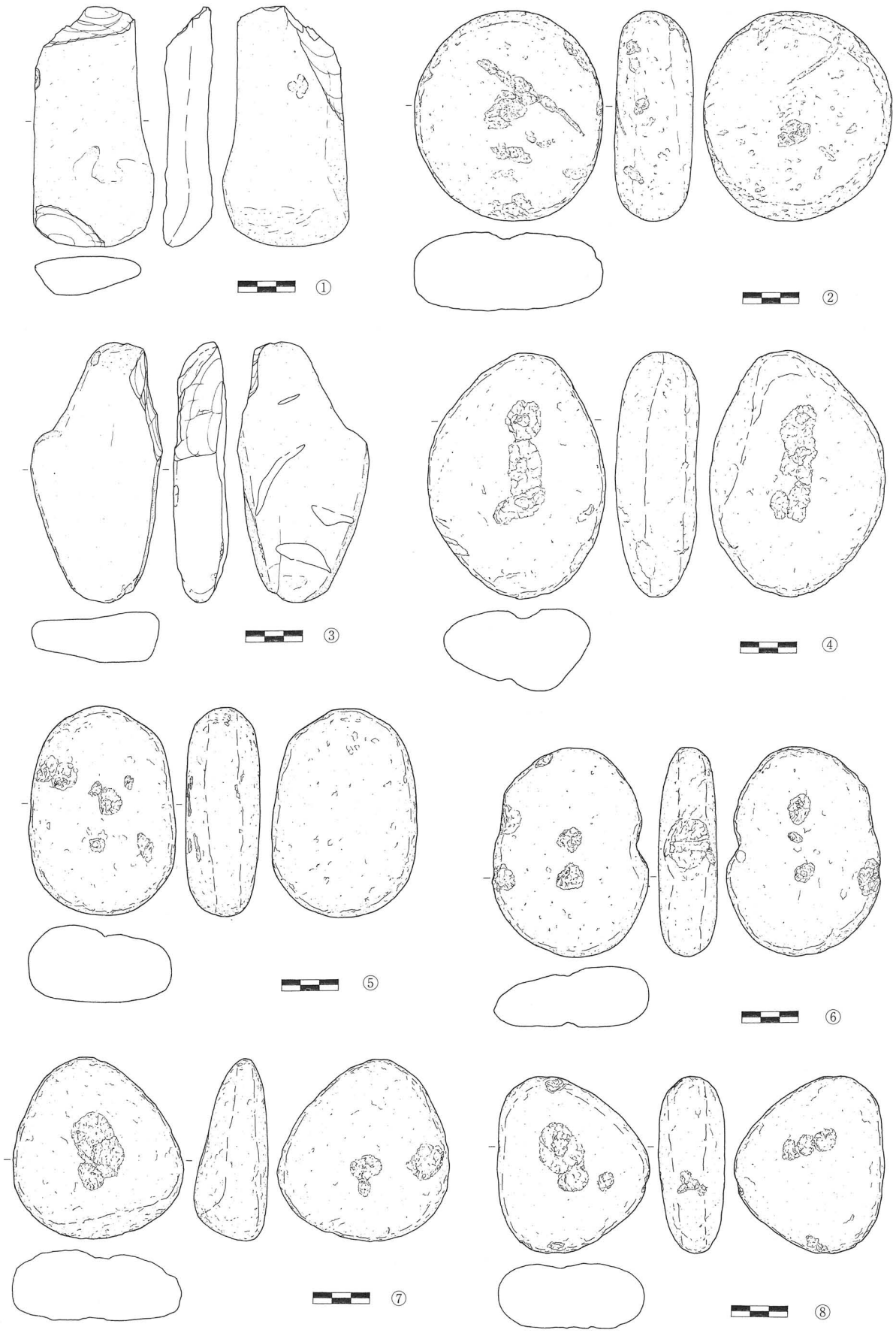
第65図　グリット遺物(2/3)



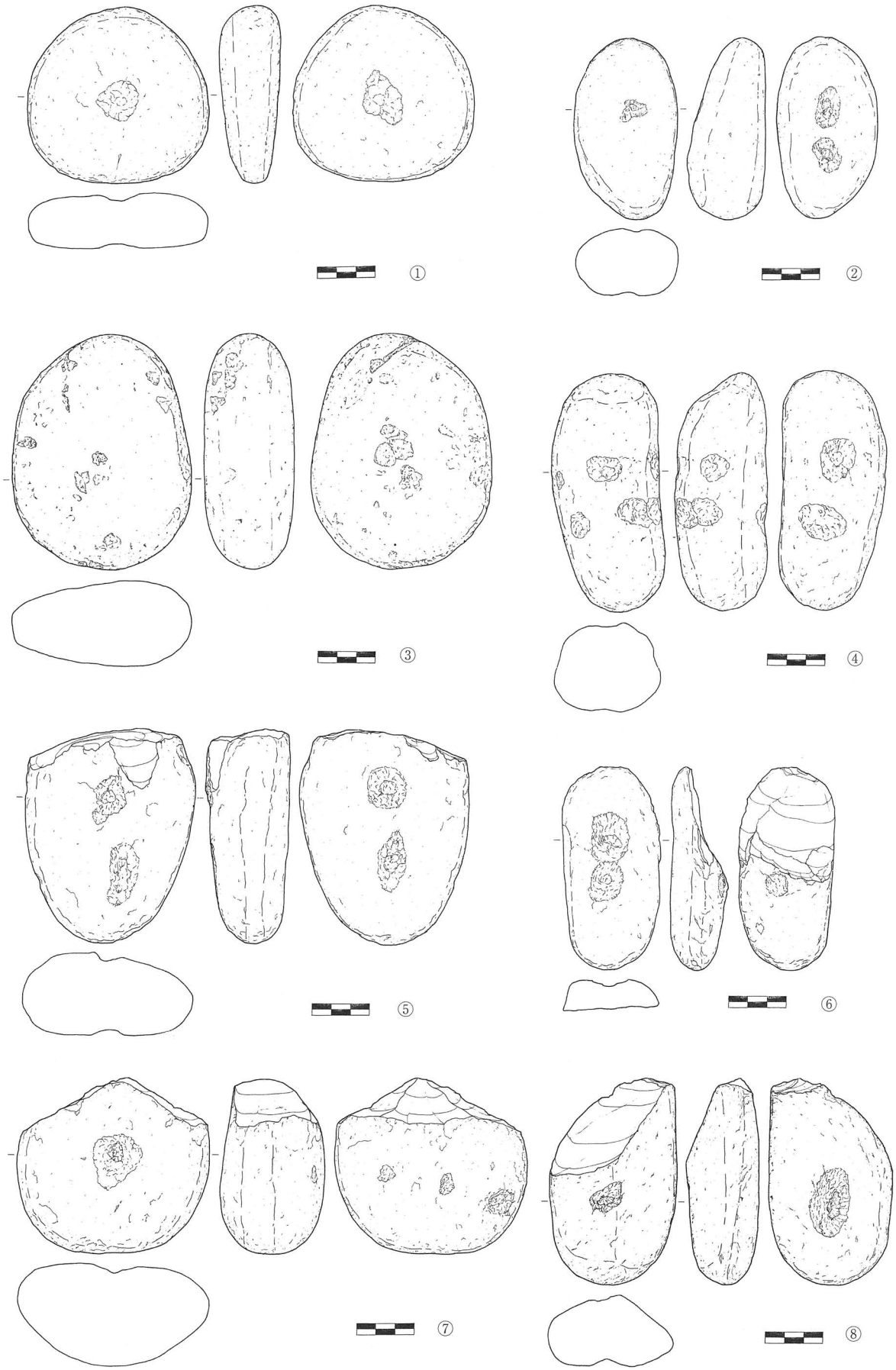
第66図　グリット遺物(1/3)、⑤⑨(1/2)



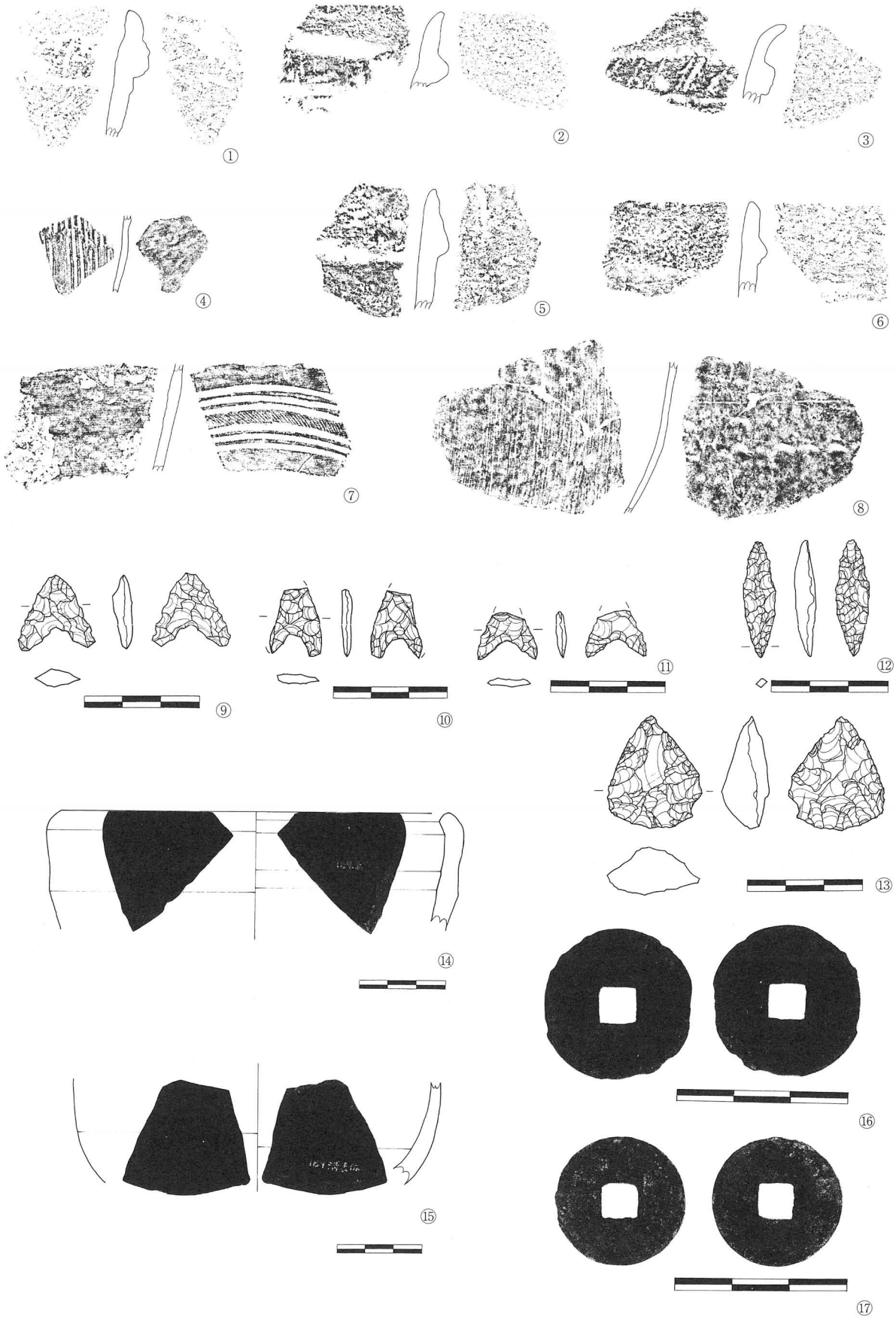
第67図　グリット遺物(1/3)、①(1/2)



第68図　グリット遺物(1/3)



第69図　グリット遺物(1/3)



第70図　表採(1/3)⑨～⑬(2/3)⑭～⑰(1/1)

まとめ

芥沢遺跡は赤石山系支脈の大沢山山麓で武田信玄により開発されたと伝えられている金鶏金山の裾を流れる大沢川と中野沢川に形作られた丘陵上に広がっている。周囲には向坂遺跡、ハゴヤ遺跡、柏木遺跡、天狗山遺跡など縄文時代と平安時代を主とする遺跡があり、1924年に信濃教育會諏訪部會が発行した『諏訪史第一巻』諏訪郡先史時代遺物発見地名表の金沢村の項には既に記載がある古くから知られている遺跡である。

1951年小発掘が諏訪考古学研究所によって試みられて、道路沿いのごく狭い範囲を発掘して縄文時代早期末から前期初頭の住居址の一部を確認したとされている。この時出土した土器については、1983年再分類がなされて、出土した土器は縄文時代早期末前期初頭の隆帯系と沈線系の両者が存在していることが明確になっている。1989年に水道に係る小規模な発掘調査を茅野市教育委員会で実施し、前回の発掘と同時期の土器が見つかっている。この調査により芥沢遺跡における同期土器群の編年的な位置や系統関係の内容充実が図られている。更に発掘の際、金山伝承に関わる可能性もある中世以降の遺物も出土している。1992年に中野沢川対岸の旭ヶ丘宅地造成に伴う天狗山遺跡の発掘調査を実施したところ、縄文時代早期から平安時代末期までの断続的な生活址を確認した。落し穴も複列で検出しており、時期によって居住域、生産域が入れ替わる生活域となっていた遺跡であったことが判明した。2002年、芥沢遺跡の南西400m で今回と同じ調査原因により柏木遺跡の発掘を行い落し穴が調査されており、芥沢遺跡、天狗山遺跡と極めて深い関係を持つ生産域の遺跡として捉えられている。

芥沢遺跡及び周辺遺跡の調査成果をもとに今回の発掘調査に取り組んだ。調査区の標高は884m～894m の遺跡内では低い地区にあたる。検出されている遺構で時期決定が可能なものは縄文時代早期末前期初頭と平安時代に帰属する竪穴住居址があり、時期不明の遺構として焼土址、集石炉、落し穴を含む土坑などがある。平成15年度の調査では住居址、土坑のほかに調査区の西側において糸魚川・静岡構造線破砕帯の一部も見つかっている。居住域の住居址と生産域である落し穴が併存することから時期によりムラが造られ、また別の時期には狩り場として使われたことが判明してきている。前述のように周辺で発掘を実施している天狗山遺跡からは本遺跡を主構成している縄文時代早期末～前期前半にかけてのムラと落し穴が同様に切り合い関係をもって見つかっており、遺構の立地から居住域と生産域が交互に換わったと考えられる。

芥沢遺跡の集落について　発掘対象となったのは集落の北側半分であるが住居址は41軒を調査。縄文時代早期末前期初頭の住居37軒、平安時代の住居４軒を発掘した。試掘の成果を含めると盛り土保存した地区、及び南側半分の事業地外にかけて同期の集落が環状を呈して存在している可能性が想定できるようになった。平成15年度調査区は開田により、平成16年度調査区は遺構検出面までの深さが最も浅いところで12cm、平均しても約20cmしかなく、耕土直下はすぐ検出面という状況で、耕作による攪乱が床下やローム層内まで及んでいる所もかなりあるため遺構の残存率は良好ではなかった。平成16年度調査予定区の半分以上が盛り土により保存されることになったため、発掘面積が減少、細長い調査区となった。保存部分については平成14年度の試掘と平成16年度のトレンチによる試掘調査の結果、相当数の住居が弧状に廻って存在していることを確認している。環状集落北側外周端の標高は890～891m で、この端から20～30m は北側に向かってなだらかに傾斜しているが途中から急傾斜になって中野沢川に落ち込んでおり、川沿いでは水田耕作がされていた。今回調査区外となっている南側は大きな地形の改変は見られず耕土も厚いため遺構の保存状態は発掘調査区に比べ良好に残っていると思われる。

芥沢遺跡で見つかっている多くの縄文時代早期末前期初頭の住居は中央が緩やかに窪む床面を持ち、遺構

検出面が床と重なるところもあって壁が検出されず、床も軟弱であった。同じ時期の遺跡で軟弱な床を持つ住居の検出例は平成８年から発掘調査された富士見町の坂平遺跡にも見ることができる。

住居址の形態は、次のように大別が可能である。①炉を持つものと無いもの、②遺物の出土量の多い住居址と少ない住居址、③固定式石皿が有る家、無い家。④土器の出土はほとんど無く、砂より細かい黒曜石の細片が多数出土するものなどの特徴がある。この時期は住居に炉が外から屋内に入ってくる移行期にあたり、火を焚くための穴や石囲いも無く、遺構検出の際に住居内から焼けた土がまとまって堀方より上で検出されている。地床炉は一般的にロームの床上に設けられ焼土の形成はローム内まで達しているが、本遺跡のように遺構検出時に見つかるということは火災住居の可能性、あるいは生活面の床がローム層直上より上にあったことを示唆すると思われるが焼土の検出状況から後者と判断している。また柱穴については後の時期のように重量が掛かる桁や梁を支えることに堪えうると考えられる柱穴は見つからず、炭化材の出土も無い、床下の堀方には多数の無秩序な穴が穿たれた跡が確認できただけである。この傾向は中野沢川を挟んだ天狗山遺跡の発掘でも同様に見ることができた。

以上のことから芥沢遺跡における同期の集落は①住居は建てる際に竪穴を掘ってから、有機物が分解してできた暗褐色の土とロームが混じる床を造る。床土の中には遺物や大きなロームブロックがほとんど混じらず、硬い状態で床は残っていない。床土を除くと凹凸の激しいローム面が現れプランも不明瞭になってしまうことから掘ってすぐ振陸修正していたと考えられる。②住居の件数が他の時期に比べ多く形状も様々であることから用途によって別棟になっていた可能性があり、また居住が短期間であったため床面や壁面が軟弱で堅固な柱も必要なかったとするのが妥当であろう。③構造線に直交する方向の開口地割れを確認している住居址と土坑がある。集落東端、第31号住居址のピット内側で壁から底に掛けて構造線と直交する方向に地割れの確認ができる。他に地割れ方向が分かる遺構は東端の墓地脇の土坑群にもある。縄文時代前期の時代観を変えたといわれている国史跡の阿久遺跡に隣接し、本遺跡から約2.5km北側に離れているが同じ金沢地区内の縄文時代前期前半の遺跡として阿久尻遺跡がある。国史跡の阿久遺跡とともに縄文時代前期前半の集落論について多くの問題点を投げかけているが、同遺跡で見つかっている地割れも芥沢遺跡と同じ西北西－東南東方向に走っている。阿久尻遺跡の地割れについては6,300～6,500年前に発生した地震による開口地割れとしており、縄文時代前期が該当する。芥沢遺跡は12,000㎡以上の広範囲に及び２年度にわたる発掘調査の結果、縄文時代早期末前期初頭までを契機として中期後半と後期の土器は散在が明らかに縄文時代の同期後と分かる遺構は今回の調査では見つかっていない。構造線の内側にあった芥沢の集落は縄文時代前期の地割れを伴う地震により壊滅に至ってしまったのであろうか。

遺物は、器形復元できる土器は少ないが箍状の隆帯付き繊維土器の他に東海系の土器も入り込んできている。石器は以前より黒曜石の石鏃が多く拾える遺跡として有名だったこともあり、今回の踏査、試掘調査、発掘調査を通じて黒曜石の出土量は多い。石材にはチャートや水晶を用いた石器もあり、水晶は原産地として金峰山を中心とする山梨県が有名で諏訪に原産地は確認されていないため搬入品である。小形の磨製石斧が出土している住居内もある。

平安時代の住居はいずれも残存状況が良くないため遺構として見つかっているのは僅かな壁、床下土坑、竈など住居の一部分で、床まで削平されてしまっている住居では竈の火床の一部や柱穴が検出されただけである。遺物は灰釉陶器の皿、土師器坏などの出土はあるが住居の残存状況が良好ではないため１軒に占める遺物出土量は極めて少なく、竈の火床だけを検出した住居は表土剥ぎの際に出土した遺物の状況から住居址と判断したものが１軒ある。

落とし穴について　平成15年度に発掘調査の終えた落し穴に鹿が落ちて逃げた痕を見つけたことがあったが、平成16年度も夜になると鹿が出てきたため朝になると調査区内には鹿の足跡が並んで残っていることが頻繁にあった。落し穴は検出面が長径約２m、短径1.2～1.3mの楕円形か長円形で、坑底に向かって擂鉢か漏斗状に掘られており、坑底は長径1.3～1.4m、短径20～70cmと狭長になっている。最も深い落し穴は遺構が検出されたローム直上面からでも1.8mを測り、尾根の延びている方向に対し長径が直交するように設けらる傾向があり、これは、柏木遺跡の落し穴でも同様で、落し穴の種類が多かった天狗山遺跡で検出している同類の落し穴とも同じ傾向を示す。平成16年度に調査した４基の中で倒木痕と重なっている１基を除く３基には人頭大の石が入っており、落し穴による狩猟道具のひとつとして礫が用いられたとも考えられる。前年度調査区の落とし穴も含めて実際に鹿が歩いた跡を見ると楕円形の長径方向が鹿の進路に対して直交して並んでいることが判明した。２年度にわたり実際の鹿道を確認できたことは当時の人々が獣道をよく知ってワナとなる落し穴の設置をしていたことを再確認した。

土坑について　東端の調査区で土坑群が見つかっている。馬の背状の南側緩やかな斜面に位置し、直径は１～1.5m、深さが40～70cmであたかも桶のような形をしており、石が入っている土坑や上面をロームで張り、蓋をしたようにしていた土坑もある。地割れと重なっている土坑から判断すると明らかに地割れが古い。土坑群の見つかった調査区の東側に隣接して大沢の旧家である名取家の墓地が隣接してある。この墓地内には中世の五輪塔が祀られている。なお、土坑群直下の調査区境付近からは文久永宝が一枚出土している。

溝について　遺跡を南北に縦断する道路とほぼ同じ方向に平成15年度調査区で１本、６個所、平成16年度調査区でも１本、１個所の溝址が見つかっている。時期の特定はできていないが礫がまとまって検出しており、内耳土器破片の出土もあった。新田である大沢は南北方向に細長く区画された地割りを持つ特徴があり、集落内は東西方向の幹線道路が分断している。地割りはこの道路に交差して南北に数本の小路が延びており、南端には同族「まき」の祝神、幹線周辺の上の小路と下の小路の間は「まき」の家々が並んでおり、北側にやや離れて墓域が形成されている。今回の発掘調査区は墓域と中野沢川の間であるが、かつてはこの地割りに続いて南北方向に長く分割されていたようである。しかし過去に行われた水田整備による改変でその面影は若干失われ、更に今回の整備事業により様相は一変してしまっている。溝址はこの地割りに伴う遺構の可能性もあるが断続している点や検出した深さも浅く判明はしなかった。

地元における芥沢遺跡は関心が高く、今回の発掘調査に当たっては関係各位からご高配、ご協力を頂き、大沢区だけでなく茅野市の歴史を知る上で一定の成果を上げることができた。1951年諏訪考古学研究所によって行われた１回目の発掘について藤森栄一は『旧石器の狩人』に掲載した写真のキャプションに「昭和26年芥沢遺跡調査のとき。たのしいころだった。」と付けている。この調査に参加した戸沢充則は平成15年、寒風吹き荒ぶ中で来跡した際に現地で「我が青春の芥沢」と熱く語られ貴重な話を伺え、その後「当時の発掘は５人位の少人数で行った。藤森先生はよく写真に直接字を書いており、芥沢発掘と記されている写真の文字は藤森先生によるもの」と発掘調査の状況や大沢式の設定に至った出土土器についても再三話を聞く機会を得ることができた。しかし調査担当者が整理作業中も、他の発掘調査も行わなければならない状況となったため、本書において教示いただいた事を生かし切れているとは言えず、更に分析、考察面にも不十分な点がある。芥沢遺跡の全容は見つかった遺構、遺物だけでなく、隣接する糸魚川・静岡構造線上に位置する諏訪地方の遺跡を含めて解析していくことが、縄文時代早期末前期初頭の八ヶ岳西南麓における社会構造を復元する鍵となろう。出土している土器の時間差、石器の用途などには未だ不明な事も多々あり課題を残す結果となっており、今後稿を改める予定である。

引用参考文献

八幡一郎「信濃國金澤村竪穴」『東京人類學雜誌』37ノ9號　東京人類學會　1922

鳥居龍藏『諏訪史　第一巻』信濃教育會諏訪部會　1924

諏訪史談會諏訪郡史編纂部『金澤村史料』　1934

戸澤充則編集「小報」『諏訪考古学第8号』諏訪考古学研究所　1952

戸沢充則・藤森栄一「先史原始時代」『川岸村誌』川岸村誌刊行会　1953

大場磐雄監修『信濃史料第1巻上』『信濃史料第1巻下』信濃史料刊行會　1956

藤森栄一「諏訪考古学研究所」『旧石器の狩人』学生社　1965

宮坂英弐・宮坂虎次「別編城之平竪穴群遺構遺跡」『蓼科尖石考古館研究報告叢書第Ⅱ冊』茅野市尖石考古館　1966

小林一史「大沢遺跡紹介」『「かやの」創刊号』茅野高社会科考古班　1975

長野県教育委員会『八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書　昭和54年度』　1980

小林秀雄他「判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市・原村（その3）昭和51・52年度―』長野県教育委員会　1981

笹沢浩他『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―原村その5昭和51・52・53年度―〈阿久遺跡〉本文編』長野県教育委員会　1982

長崎元廣他［長野県における縄文時代早期末・前期初頭土器集成図集］「（シンポジゥム'83）縄文時代早期末・前期初頭の諸問題土器資料集成図集」『神奈川考古第17号』神奈川考古同人会　1983

神奈川考古同人会「シンポジウム縄文時代早期末・前期初頭の諸問題記録・論考集」『神奈川考古第18号』　1984

守矢昌文「高風呂遺跡出土縄文土器の分類と変遷―特に縄文早期末から前期初頭にかけて―」『高風呂遺跡―昭和59年度県営圃場事業湯川地区内埋蔵文化財発掘調査報告―』茅野市教育委員会　1986

宮坂虎次他「縄文時代」『茅野市史上巻原始・古代』茅野市教育委員会　1986

宮下健司「縄文時代早期の土器」『長野県史　考古資料編全一巻(四)　遺構・遺物』長野県史刊行会　1988

守矢昌文「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について―高風呂遺跡出土の縄文施文系の土器群を中心として―」『会報3』諏訪考古学研究会　1989

守矢昌文『芥沢遺跡―諏訪南インター林間工業団地上水道施設用地に係わる埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　1990

茅野市教育委員会　1991　『茅野市遺跡台帳』

宮坂武夫「原始と古代」『信州金沢の歴史』金沢村史刊行会　1992

松島信幸・寺平宏「阿久尻遺跡の地形地質」『阿久尻遺跡―県営金沢工業団地建設に伴う造成工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　1993

百瀬一郎『天狗山遺跡―「金沢住宅団地」宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』茅野市教育委員会1993

下平博行「「塚田式」の設定とその様相について」『塚田遺跡』御代田町教育委員会　1994

守矢昌文『上の平遺跡―平成6年度県営圃場整備事業米沢地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　1995

守矢昌文『梵天原遺跡―平成7年度県営圃場整備事業槻木地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　1996

小野正文「山梨県の考古学編年2縄文時代の編年(3)早期」『山梨県史資料編2原始・古代2』山梨県　1999

百瀬一郎『下尾根遺跡―県営ほ場整備事業笹原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　2001

百瀬一郎『柏木遺跡―中山間総合整備事業御柱の里地区に伴う発掘調査報告書―』茅野市教育委員会　2003

百瀬一郎「茅野市芥沢遺跡」『第16回諏訪地区遺跡調査研究発表会』諏訪考古学研究会　2004

小林公明「坂平遺跡の時代」『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』長野県富士見町教育委員会 2004
小松隆史「縄文時代の遺構・遺物土器」『坂平八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』長野県富士見町教育委員会 2004
百瀬一郎「茅野市芥沢遺跡」『第17回諏訪地区遺跡調査研究発表会』諏訪考古学研究会 2005
百瀬一郎「芥沢遺跡の調査について」『速報縄文の里茅野を掘る Vol.2 '01～'05』茅野市尖石縄文考古館 2006
守矢昌文「八ヶ岳西南麓・霧ヶ峰南麓における縄文時代の落し穴について」『新尖石縄文考古館開館5周年記念考古論文集』茅野市尖石縄文考古館 2006
澁谷昌彦「坂平式土器の設定」『長野県考古学会誌118 樋口昇一追悼号』長野県考古学会 2006

①土坑一覧

土坑No.	図番号	図版番号	グリッドNo.	上端		下端		深さ(cm)	長軸方向	図化した遺物	その他（未図化の遺物他）
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
1	53図1土		L9	46	42	26	25	14	N－11°－W	－	
2	53図2土		L9	110	108	(70)	45	32	N－89°－E	石鏃	（条痕文、縄文の繊維土器、薄手指頭圧痕細線文土器）
3	53図3土		N9	73	60	57	43	24	N－77°－E	－	（沈線文の繊維土器）
4	53図4土		L9	40	40	48	25	16	N－18°－W	－	
5	53図5土		L10	39	24	25	8	14	N－2°－W	－	
6	53図6土		L10	84	62	47	33	12	N－47°－W	－	
7	53図7土		L10	58	47	38	35	26	N－13°－E	－	
8	52図8土	44－②	L10	220 (70)	168 (40)	122	34	69	N－65°－E	－	落し穴
9	53図9土	51－①、②	K10	115	107	93	87	16	N－26°－W	打製石斧、剥離痕のある剥片	
10	54図10土		K10	85	74	67	62	11	N－50°－E	－	（繊維土器）
11		51－③	J8	112	90	70	66	15	N－29°－W	－	（繊維土器）
12	54図12土		K9	56	46	48	33	8	N－0°	－	（繊維土器、薄手指頭圧痕細線文土器）
13	54図13土	51－①	I9	116	103	76	62	15	N－40°－E	－	
14	54図14土		J9	116	96	81	73	11	N－42°－E	－	
15	54図15土		I9	93	90	65	55	20	N－88°－E	－	落し穴
16	52図16土	44－③ 45－①	K9	167	118	138	84	109	(N－56°－E)	石錐	（条痕文繊維土器、薄手指頭圧痕細線文土器）
17	54図17土		J8	53	48	30	20	14	N－20°－E	－	
18	54図18土		L9	73	56	58	48	22	N－33°－E	－	（羽状縄文繊維土器）
19	54図19土	52－②	K・L9	156	146	138	128	14	N－45°－W	－	（条痕文繊維土器、薄手指頭圧痕細線文土器）
20	54図20土	52－③	I8	65	59	47	43	10	N－27°－E	－	
21	54図21土		J10・11	144	125	120	103	26	N－83°－E	－	
22	54図22土		J10	47	41	33	26	10	N－25°－E	－	
23	54図23土		J10	40	26	24	16	26	N－12°－W	－	
24	54図24土		J10	142	116	126	83	25	N－13°－W	－	
25	54図25土		J11	39	32	27	20	16	N－18°－E	－	
26	54図26土	53－①、②	J10	140	110	118	85	28	N－34°－W	－	
27	54図27土		J10	45	37	30	31	8	N－8°－W	－	
28	54図28土		J10	67	45	47	35	16	N－45°－W	－	
29	54図29土		J10	115	95	102	75	27	N－64°－W	－	
31	54図31土		J11	70	57	58	44	14	N－16°－W	－	
32	54図32土		J10	57	48	45	29	15	N－21°－W	－	
33	54図33土		J11	78	52	46	35	22	N－81°－W	－	
34	54図34土		J11	76	67	57	54	8	N－84°－W	－	
35	54図35土		J10・11	102	75	88	64	14	N－46°－E	－	
36	54図36土	53－③	K11	58	45	42	30	34	N－30°－W	－	
37	54図37土		J11	77	75	62	61	56	N－82°－E		
38	54図38土		J11	33	22	20	13	18	N－10°－E	－	
39	54図39土		J11	74	37	63	25	54	N－8°－E	－	
40	54図40土		J11	20	18	14	7	40	N－2°－W	－	
41	55図41土		I・J10 I・J11	160	150	145	135	16	N－5°－E	－	（薄手指頭圧痕細線文土器、中期中葉の土器）
42	55図42土		J12	125	110	90	88	22	N－50°－E	打製石斧	
43	55図43土	54－①	J12	95	89	79	65	14	N－75°－E	－	
44	55図44土		J12	59	55	43	40	24	N－52°－E	－	
45	55図45土		J12	55	45	30	26	20	N－60°－E	－	
46	55図46土		J13	60	59	43	42	17	N－70°－E	－	
47	55図47土		J12	58	51	48	45	14	N－58°－E	－	

土坑No.	図番号	図版番号	グリッドNo.	上端		下端		深さ(cm)	長軸方向	図化した遺物	その他(未図化の遺物他)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
48	55図48土		J13	46	40	26	23	16	N－10°－W	－	
49	55図49土		J12	84	75	56	47	15	N－15°－W		
50	55図50土	54－③	J12	90	(60)	50	36	32	N－13°－E		
51	55図51土	54－②、③	J12	80	70	80	70	44	N－31°－E		
52	55図52土	55－①	J12	102	95	80	73	30	N－32°－E		
53	55図53土		J13	40	35	20	15	20	N－14°－W		
54	55図54土	55－②	IJ11	220	205	190	178	26	N－44°－W	土器（縄文前期初頭）	(条痕文繊維土器、結節沈線文土器)
55	56図55土		I11	59	50	50	35	10	N－42°－E		
56	56図56土	55－③ 56－①	I11	130	110	90	84	42	N－45°－W		
57	56図57土		I11	49	44	27	25	23	N－47°－E		
58	56図58土		I11	97	82	70	63	14	N－15°－W	剥離痕のある扁平礫	(繊維土器、中・後期の風化の進んだ土器)
59	56図59土		L 9	35	23	12	8	10	N－37°－W		
60	56図60土		L 8・9	49	40	33	28	7	N－81°－W		
61	56図61土		M 8	53	48	47	37	12	N－19°－E		
62	52図62土	45－②、③	L 9	178	112	146	58	72	N－62°－E		落し穴、(羽状縄文繊維土器)
63	56図63土		J11	80	74	69	59	12	N－32°－W		
64	56図64土		J11	55	40	40	34	12	N－46°－W		
65	56図65土	56－②、③	G10	126	110	66	62	51	N－30°－E		
66	56図66土	57－①	G 9	100	92	75	63	38	N－65°－E		
67	56図67土	57－②、③	G 9	160	155	90	73	102	N－31°－W		
68	56図68土	58－①、②	G 9	115	110	85	73	33	N－15°－W		(底部)
69	56図69土		F 9	85	62	62	40	20	N－70°－E		
70	56図70土		F 9	68	38	48	28	12	N－68°－E		
72	56図72土		G 9	89	70	60	47	40	N－73°－W		
73	56図73土		G10	50	30	35	18	16	N－70°－E		
74	56図74土		H 9	135	123	105	93	34	N－33°－W		
75	56図75土	58－③ 59－①	H10	135	134	110	104	31	N－55°－W		(繊維土器底部、薄手指頭圧痕細線文土器、中期半截竹管門土器)
76	56図76土		I10	122	117	101	98	11	N－70°－W		
77	56図77土		I10	25	14	19	6	10	N－17°－E		
78	56図78土	59－②、③	H10	100	93	84	78	22	N－19°－E		(中期中葉の風化が進んでいる土器)
79	56図79土		H10	41	18	27	7	28	N－ 8°－W		
80	57図80土		I10	27	22	11	9	32	N－88°－E		
81	57図81土		H・I10	27	18	10	9	48	N－38°－E		
82	57図82土		H 2	43	29	18	13	48	N－84°－E		
83	57図83土		I10	44	39	27	24	18	N－ 8°－W		
84	57図84土		HI10	60	58	39	30	15	N－14°－W		
85	57図85土		H10	72	49	35	27	12	N－16°－W		
86	57図86土	60－①	H10	136	105	133	108	10	NO－40°－E		(薄手指頭圧痕文土器)
87	57図87土	60－②	H 9	190	125	180	100	15	N－62°－E		
88	57図88土	60－③	H 9	149	126	125	100	21	N－29°－E		
89	57図89土	61－①	H 9	65	60	52	45	14	N－58°－E		
90	57図90土	61－②	F 9	138	131	95	90	32	N－75°－E		
91	57図91土	61－③	F 9	103	102	65	60	39	N－68°－E		
92	57図92土		K 8	38	17	32	16	20	N－42°－W		
93	57図93土		L 8	45	43	22	21	34	N－ 0°		
94	57図94土		H10	60	53	46	36	20	N－13°－W		
95	57図95土	62－①、②	H 8・9	139	131	106	104	22	N－37°－W		
96	57図96土		I 2	95	65	80	51	27	N－80°－W		

土坑No.	図番号	図版番号	グリッドNo.	上端		下端		深さ(cm)	長軸方向	図化した遺物	その他(未図化の遺物他)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
97	57図97土		L10	63	52	10	8	34	N－1°－E		
98	57図98土	62－③	K8	45	38	29	15	74	N－25°－E		
99	57図99土	63－①	K8	145	102	130	80	12	N－70°－W		(条痕文、羽状縄文の繊維土器、薄手指頭圧痕細線文土器)
100	57図100土		L8	92	74	72	54	16	N－23°－W		(薄手指頭圧痕文土器)
101	57図101土	63－②	L7	118	82	70	63	34	N－55°－W		
102	57図102土	63－③	J7	86	82	56	36	12	N－40°－W		
103	57図103土		J7	66	51	47	47	13	N－34°－W		
104	57図104土		J6	67	53	51	33	19	N－22°－E		
105	57図105土		J6・7	65	58	36	35	25	N－43°－W		
106	52図106土	46－①、②、③	J6	193	146	108	58	158	N－27°－W		落し穴、(条痕文繊維土器)
107	57図107土	64－①、②	G9・10	105	85	70	65	14	N－23°－W		
108	57図108土		G10	42	33	30	18	22	N－15°－W		
109	58図109土	64－③	F8	98	93	77	72	21	N－2°－E		
110	58図110土	65－①	F8	148	116	129	98	20	N－32°－E		
111	58図111土	65－②	E・F7	109	97	98	67	21	N－25°－W		
112	58図112土		E7	115	108	75	72	20	N－13°－W		
113	58図113土		F7	66	65	55	52	20	N－20°－W		
114	58図114土		F5	74	(28)	64	(24)	19	N－40°－W		
115	58図115土		F5	55	47	27	21	36	N－27°－E		
116	58図116土		I7	165	160	148	135	20	N－58°－W		
117	58図117土	65－③	H・I7	131	128	86	25	40	N－57°－W		
118	58図118土	66－①	H7	98	95	72	70	31	N－43°－E		
119	58図119土		H7	121	109	100	95	17	N－57°－E		
120	58図120土		I7	81	76	60	58	24	N－16°－E		
121	58図121土	66－②	I7	80	70	64	62	10	N－59°－E		
122	58図122土	66－②	I7	105	102	92	92	13	N－59°－E		
123	58図123土	66－③	I7	160	150	150	130	16	N－58°－E		
124	58図124土	67－①	J4	130	105	90	75	22	N－43°－E		
125	58図125土		H7・8	54	51	34	31	15	N－0°		
126	58図126土		I8	56	53	46	42	12	N－75°－W		
127	58図127土	67－②	H7	53	50	43	42	17	N－26°－E		
128	58図128土	67－③	H8	172	158	153	140	41	N－63°－W		
129	58図129土		H10	86	74	76	62	17	N－61°－W		
130	58図130土		H8	74	60	60	52	24	N－30°－W		
131	58図131土	68－①	G8	81	80	70	64	12	N－45°－E		
132	52図132土	47－①、②	J8	160	155	75	68	147	N－56°－E		落し穴、(条痕文、縄文繊維土器)
133	58図133土		J8	61	56	42	35	23	N－0°		
134	58図134土		H4	167	(120)	100	85	35	N－38°－W		(薄手指頭圧痕細線文土器)
135	58図135土		H7	128	98	100	68	19	N－28°－W		
136	59図136土		H7	55	45	38	35	23	N－54°－E		
137			M10	73	(35)	52	(29)	17	N－70°－E		
138	59図138土		J8	70	58	60	52	13	N－27°－E		
139	59図139土		J8	82	65	58	45	27	N－80°－E		
140	59図140土		K8	23	20	13	13	20	N－70°－E		
141	59図141土		J7・8	81	78	63	53	27	N－55°－W		(条痕文繊維土器)
142	59図142土		I7	156	89	116	39	25	N－0°		
143	52図143土	47－③、48－①	H3	100 55	(85) (60)	(55)	38	110	N－30°－W		落し穴
144	59図144土		H7	45	38	25	22	122	N－65°－W		
145	59図145土		H7・8	138	135	111	110	26	N－48°－W		

土坑No.	図番号	図版番号	グリッドNo.	上端		下端		深さ(cm)	長軸方向	図化した遺物	その他(未図化の遺物他)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
146	59図146土		J 5	77	72	69	59	20	N－42°－W		
147	59図147土		H 8	(115)	95	(100)	68	16	N－25°－W		
148	52図148土	48－②	K 5	207	135	132	50	124	N－28°－W		落し穴、(風化が著しい繊維土器)
150	59図150土		J 7	90	76	52	40	25	N－57°－W		
151	59図151土	68－②	J 7	68	64	58	53	7	N－0°		
152	59図152土	68－②	J 7	93	79	81	73	8	N－70°－E		
153	59図153土		J 7	63	56	44	40	15	N－47°－E		(薄手土器小片)
154	59図154土	68－③	H 7	123	103	110	87	20	N－32°－E		
155	59図155土		H 7	60	52	23	21	33	N－43°－E		
156	59図156土	69－①	H 7	89	85	80	75	10	N－56°－E		
157	59図157土	69－②	H 8	78	69	75	64	25	N－10°－W		
158	59図158土		G 8	60	52	46	38	21	N－60°－E		
159	59図159土	69－③	G 8	140	132	92	85	21	N－25°－E		
160	59図160土	70－①	FG 8	103	89	87	73	20	N－77°－W		
161	59図161土	70－②	G 8	81	73	56	50	27	N－38°－E		
162	59図162土	70－②	G 8	52	44	35	33	24	N－42°－E		
163	59図163土		G 8	80	70	70	44	13	N－38°－E		
164	59図164土	70－③	G 9	105	96	85	79	23	N－2°－W		
165	59図165土		G 9	50	49	38	35	51	N－24°－W		
166	59図166土		G 9	57	45	35	20	13	N－59°－E		
167	59図167土	71－①	G 9	97	80	75	53	29	N－50°－E		
168	59図168土		G 9	48	40	(42)	20	30	N－53°－E		(風化、剥落の激しい土器)
169	59図169土		G 9	36	35	26	25	22	N－60°－E		
170	59図170土	71－①	G 9	(62)	50	(55)	40	19	N－80°－E		
171	59図171土	71－②	G 9	72	65	56	52	25	N－35°－E		
172	60図172土		F 9	65	60	52	50	20	N－66°－E		
173	60図173土		F 9	72	65	60	54	15	N－65°－E		
174	60図174土	71－③	G 9	70	67	59	55	25	N－41°－W		
175	60図175土	72－①	N 8・9	92	(75)	(45)	40	22	N－55°－E		
176	60図176土	72－②	N 9	(52)	46	30	30	5	N－80°－W		
177	60図177土	72－②	N 9	50	45	35	35	5	N－40°－W		
178	60図178土	72－②	N 9	50	42	35	32	21	N－45°－W		
179	60図179土		N 9	34	12	20	5	15	N－60°－W	薄手指頭圧痕細線文土器	
180	60図180土		N 9	50	(32)	40	(30)	8	N－42°－W		
181	60図181土		N 9	33	30	15	12	38	N－25°－E		(薄手指頭圧痕細線文土器)
182	60図182土	72－③	N 9	58	52	33	32	19	N－30°－E		
183	60図183土		O 9	70	60	43	25	24	N－30°－W		(繊維土器)
184	60図184土		O 9	75	62	31	30	22	N－29°－W		(繊維土器)
185	60図185土	73－①	O 9	75	45	37	16	24	N－80°－W	条痕文土器	
186	60図186土		O 8	54	53	50	40	44	N－35°－W		
187	－		O 8	30	23	14	13	42	N－65°－E		
188	60図188土		X－2	123	105	90	70	44	N－79°－E		
189	60図189土	73－②、74－②、③	X－2	118	105	104	77	68	N－85°－W		
190	60図190土	73－③、74－①、②、③	X－2	118	109	93	82	60	N－23°－E		
191	60図191土	74－④、⑤ 75－①	X－2	205	125	100	100	56	N－89°－E		
192	60図192土	74－⑥、⑦、75－①	X－2	150	138	135	100	50	N－15°－W		
193		75－③	X－3	155	138	116	82	27	N－28°－W		
194		75－③	X－3	(83)	(88)	(51)	(49)	37	N－38°－W		

土坑No.	図番号	図版番号	グリッドNo.	上端		下端		深さ(cm)	長軸方向	図化した遺物	その他(未図化の遺物他)
				長軸(cm)	短軸(cm)	長軸(cm)	短軸(cm)				
199	60図199土		Q 1	68	65	60	45	16	N－65°－E		
200	60図200土		Q 1	52	48	32	31	16	N－30°－W		
201	52図201土	48－③	P・Q 1	140	50	110	32	75	N－28°－W		落し穴
202	60図202土		P 1	90	75	72	52	28	N－65°－W		
203	60図203土		P 1	75	68	60	55	15	N－43°－E		
204	60図204土		P 1	73	72	52	48	28	N－25°－E		
205	60図205土		P 1	108	98	73	32	33	N－29°－E		
206	60図206土		P 1	102	85	63	60	20	N－19°－W		
207	61図207土		P 1	120	112	100	78	27	N－55°－W	撚糸縄文土器	
208	61図208土		P 1	(188)	149	(167)	100	26	N－17°－W		
209	61図209土		P 1	50	38	28	17	54	N－13°－W		青磁
210	61図210土		O・P 1	50	40	42	30	15	N－45°－W		
211	61図211土		O・P 1	200	148	126	34	49	N－15°－W		
212	61図212土		O 1・2	76	72	65	60	39	N－65°－W		
213	61図213土		O 1・2	80	68	52	50	27	N－40°－W		
214	61図214土		O 1・2	83	73	54	52	27	N－0°		
215	61図215土		O 1	65	50	35	34	38	N－27°－W		
216	61図216土		O 1	64	42	42	35	40	N－60°－W		
217	61図217土		O 1	155	106	108	70	26	N－60°－W		
218	61図218土		O 1	65	56	50	50	29	N－89°－W		
219	61図219土		N 1	71	69	62	55	13	N－15°－W	剥離痕のある扁平礫	繊維土器
220	61図220土	75－④	N 1	113	105	97	86	28	N－85°－E		
221			P 7	155	145	136	130	28	N－72°－W		
223	61図223土	74－⑤、75－①、②、③	X－2								191土と切り合い
224		74－④、75－①	X－2								192土と切り合い
225	52図225土	49－①、②、③	K 2	185 150	115 67	135	55	101	N－75°－W		落し穴
226	52図226土	50－①	L 3	150 (110)	(130) 108	(95)	70	100	N－37°－E		落し穴、(条痕文繊維土器、薄手指頭圧痕土器)
227	52図227土	50－②、③	M 1・2	215 155	71 42	142	25	93	N－4°－W		落し穴、(沈線文繊維土器)
228	61図228土	75－⑥	K 3	45	35	20	18	14	N－75°－E		
229	61図229土	75－⑥	K 3	110	(90)	90	(70)	19	N－59°－W		
230	61図230土		K 3	74	44	44	30	17	N－48°－W		
231	61図231土	75－⑥	K 3	49	(35)	35	(20)	8	N－30°－W		
232	61図232土	75－⑦	K 3	85	75	(70)	(60)	8	N－86°－W		
233	61図233土		M 2	62	47	33	32	19	N－89°－W		
234	61図234土		M 1	61	60	50	45	11	N－30°－W		
235	61図235土		M 1	56	50	26	20	11	N－74°－E		
236	61図236土		M 1	59	50	45	40	13	N－65°－E		
237	61図237土		M・N 1	70	56	13	10	13	N－83°－E		
238	61図238土		N 1	53	50	32	25	17	N－90°－W		
239	61図239土	75－⑧	J 1	85	75	70	45	46	N－55°－E		

②土器観察表

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
11－①	1住	深鉢	口縁、2本の隆帯が廻り、口唇と隆帯に左上から右下に斜行する刻目	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維を含む			
11－②	1住	深鉢	口縁、口唇厚く、やや外反する条痕による調整	暗褐 10YR4/6	繊維を含む			11－④と接合
11－③	1住	深鉢	沈線文　胴部	明褐 7.5YR5/6	繊維を含む			
11－④	1住	深鉢	条痕による調整　胴部	暗褐 10YR4/6	繊維を含む			11－②と接合
11－⑤	1住	深鉢	条痕による調整　胴部	灰黄褐 10YR4/2	繊維を含む			
11－⑥	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	胴下部、上部条痕による調整、底部欠損するが尖底になると思われる	褐 7.5YR4/6	繊維を含む			
11－⑦	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	指頭圧痕、薄手細線文、頸部に波状粘土紐　帖付、胴体	明黄褐 10YR6/6	－			
11－⑧	1住、1住下、1住1、1住3	深鉢	羽状縄文　胴部	橙 7.5YR6/6	繊維を含む			
12－①	2住	深鉢	口縁、口唇、隆帯に貝殻腹縁が施されている、器面は条痕	褐 7.5YR4/6	繊維少量含む			
12－②	2住	深鉢	縄文、胴部	暗褐 10YR3/4	繊維を含む			
12－③	2住	深鉢	羽状縄文　胴部	灰黄褐 10YR6/2	繊維を含む			
12－④	2住	深鉢	羽状縄文　胴部	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維を含む			
13－①	3住1	深鉢	口縁、断面三角形の隆帯1本廻り、擦痕で調整	灰黄褐 10YR4/2	繊維を含む			
13－②	3住	深鉢	口縁、口唇肥厚、縦に貝殻腹縁を施文	褐 10YR4/4	繊維を含む			
13－③	3住	深鉢	口縁、断面三角隆帯2本が廻る、薄手指頭圧痕	褐 10YR4/4	繊維を含む			
13－④	3住	深鉢	口縁、口唇、隆帯に貝殻腹縁が施されている器面は条痕	褐 7.5YR4/4	繊維を含む			
13－⑤	3住	深鉢	口縁、口唇外側に開き低い隆帯、貝殻腹縁を斜めに施文	暗褐 10YR3/3	繊維を含む			
13－⑥	3住	深鉢	口縁、横に大沈線が廻る、絡条体圧痕口唇外側に連続した山形の絡条体	赤褐 5YR4/6	繊維を含む			
13－⑦	3住	深鉢	口縁、縄文、外側に開く	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維を含む			
13－⑧	3住1	深鉢	口縁口唇平縁、外側に張り出す、羽状縄文	明黄褐 10YR6/6	繊維を含む			
13－⑨	3住	深鉢	胴部、縄文	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維を含む			
13－⑩	3住	深鉢	胴部、条痕	橙 7.5YR6/8	繊維を含む			
14－①	3住	深鉢	胴部、条痕	明褐 7.5YR5/6	繊維を含む			
14－②	3住	深鉢	胴部、条痕	黒褐 10YR3/2	繊維を含む			
14－③	3住	深鉢	胴部、条痕	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維を含む			
14－④	3住	深鉢	胴部、絡条	黄褐 10YR5/6	繊維を含む			
14－⑤	3住	深鉢	胴部、条痕	にぶい黄橙 10YR7/4	繊維を含む			
14－⑥	3住	深鉢	底部、擦痕	褐 7.5YR4/4	繊維を含む			
14－⑦	3住	深鉢	波状粘土紐、帖付、指頭圧痕、薄手細線文	にぶい黄褐 10YR5/3	－			
14－⑧	3住	深鉢	粘土紐帖付、指頭圧痕、薄手細線文	にぶい黄褐 10YR5/4	－			
14－⑨	3住	深鉢	粘土紐帖付、指頭圧痕、薄手細線文	褐 7.5YR4/3	－			
14－⑩	3住	深鉢	粘土紐帖付、指頭圧痕、薄手細線文	にぶい褐 7.5YR5/4	－			
14－⑪	3住	深鉢	粘土紐帖付、指頭圧痕、薄手細線文	灰黄褐 10YR6/2	－			
14－⑫	3住	深鉢	指頭圧痕、薄手細線文	にぶい黄褐 10YR5/3	－			
14－⑬	3住	深鉢	指頭圧痕、薄手細線文	灰黄褐 10YR5/2	－			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
14－⑭	3住	深鉢	羽状縄文、胴部	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
14－⑮	3住	深鉢	羽状縄文、胴部	橙　7.5YR6/6	繊維を含む			
14－⑯	3住1	深鉢	羽状縄文、胴部	橙　7.5YR6/6	繊維を含む			
14－⑰	3住	深鉢	羽状縄文、胴部	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
14－⑱	3住	深鉢	羽状縄文、胴部	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
14－⑲	3住	深鉢	条痕、胴部	にぶい褐　7.5YR5/4	繊維を含む			
14－⑳	3住	深鉢	羽状縄文、胴部	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
14－㉑	3住	深鉢	縄文、胴部	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
14－㉒	3住	深鉢	条痕、先底部	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
15－①	4住	深鉢	口縁、粘土紐帖付内側貝殻腹縁	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
15－②	4住	深鉢	隆帯、条痕	黒褐　10YR1/3	繊維を含む			
15－③	4住	深鉢	隆帯	黒褐　10YR1/3	繊維を含む			
15－④	4住	深鉢	隆帯、条痕	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
15－⑤	4住	深鉢	口縁、口唇に粘土紐帖付斜行する刻目有り、薄手細線文	にぶい黄橙　10YR6/3	－			
15－⑥	4住	深鉢	口縁、口唇に粘土紐帖付	にぶい黄橙　7.5YR5/4	－			
15－⑦	4住	深鉢	口縁、口唇に刻み、薄手細線文	褐　10YR4/4	繊維を含む			
15－⑧	4住	深鉢	口縁、細かい波状口唇	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
15－⑨	4住	深鉢	口縁、粘土紐上、平行細線	明黄褐　10YR7/6	－			
15－⑩	4住	深鉢	口縁、口唇と隆帯に貝殻腹縁	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
15－⑪	4住	深鉢	薄手細線文	黒褐　10YR3/2	－			
15－⑫	4住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
15－⑬	4住	深鉢	縄文	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
15－⑭	4住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
15－⑮	4住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
15－⑯	4住	深鉢	条痕、底部に近い	黄褐　10YR5/8	繊維を含む			
15－⑰	4住	深鉢	羽状縄文	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
15－⑱	4住	深鉢	条痕	褐　10YR4/6	繊維を含む			
15－⑲	4住	深鉢	羽状縄文	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
15－⑳	4住	深鉢	条痕	黄褐　10YR5/8	繊維を含む			
15－㉑	4住	深鉢	羽状縄文	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
15－㉒	4住	深鉢	条痕	にぶい褐　10YR4/3	繊維を含む			
15－㉓	4住36土	深鉢	尖底土器底部、指頭による圧痕	褐　10YR4/6	繊維を含む			
16－⑧	5住42	深鉢	口縁、隆、斜刻右上から左下、条痕	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
16－⑨	5住③	深鉢	口縁、低い隆帯、斜格子目、擦痕	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
16－⑩	5住21	深鉢	口縁、波状口縁、縄文	暗褐　7.5YR3/4	繊維を含む			
16－⑪	5住18	深鉢	口縁、口唇隆帯帖付、条痕	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
16－⑫	5住	深鉢	口縁、口唇斜刻、絡条	褐　10YR4/4	繊維を含む			
16－⑬	5住	深鉢	口縁、口唇、隆帯、擦痕	にぶい黄褐　10YR5/4	繊維を含む			
17－①	5住18	深鉢	胴部、条痕	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
17－②	5住10	深鉢	胴部、縄文	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
17－③	5住	深鉢	胴部、薄手細線文	にぶい黄褐　10YR5/4	－			
17－④	5住	深鉢	胴部、条痕	黒褐　7.5YR3/1	繊維を含む			
17－⑤	5住10	深鉢	底部、条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
17－⑥	5住6	深鉢	胴部、羽状縄文	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
17－⑦	5住18	深鉢	口縁、縄文	にぶい黄橙 10YR6/4	繊維を含む			
17－⑧	5住49	深鉢	口縁	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			中期
17－⑨	5住	深鉢	口縁	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			中期
17－⑩	5住6	深鉢	口縁	暗褐　7.5YR3/4	繊維を含む			中期
17－⑪	5住14	深鉢	口縁	にぶい黄橙 10YR7/4	繊維を含む			中期
17－⑫	5住14	深鉢	口縁	にぶい黄橙 10YR7/4	繊維を含む			中期
19－①	6住1600	深鉢	指頭圧痕、口縁は口唇が波状、2条の粘土紐、細線文	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
19－②	6住2	深鉢	口縁、口唇は欠損するが、左上から右下に斜行する刻み目が入った隆帯、高い隆帯を持ち、条痕	明褐　7.5YR5/6	多量に含む			
19－③	6住3	深鉢	口縁、薄手細線文	にぶい黄橙 10YR6/3	繊維を含む			
19－④	6住12	深鉢	口唇欠損断面三角隆帯、擦痕	にぶい黄橙 10YR5/4	繊維を含む			
19－⑤	6住	深鉢	口唇、擦痕	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
19－⑥	6住	深鉢	口唇欠損、薄手細線文、胴部	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
19－⑦	6住	深鉢	口縁縄文	灰黄褐　10YR4/2	繊維を含む			
19－⑧	6住	深鉢	擦痕	明黄褐　10YR6/6	多量に含む			
19－⑨	6住	深鉢	擦痕	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維を含む			
19－⑩	6住	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR5/4	多量に含む			
19－⑪	6住14	深鉢	擦痕	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
19－⑫	6住	深鉢	条痕	暗褐　7.5YR3/3	繊維を含む			
19－⑬	6住、6住14	深鉢	擦痕	明黄褐　10YR6/6	多量に含む			
19－⑭	6住14	深鉢	擦痕	明褐　10YR5/6	繊維を含む			
20－①	6住19	深鉢	擦痕	暗褐　7.5YR3/3	繊維を含む			
20－②	6住14	深鉢	擦痕	明黄褐　10YR6/6	多量に含む			
20－③	6住	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	多量に含む			
20－④	6住、6住19	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	多量に含む			
20－⑤	6住14	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/8	多量に含む			
20－⑥	6住14	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/8	多量に含む			
20－⑦	6住14	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/8	多量に含む			
20－⑧	6住	深鉢	擦痕	褐　10YR4/4	多量に含む			
20－⑨	6住、6住19	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	多量に含む			
20－⑩	6住	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	多量に含む			
22－①	8住（132土）	深鉢	底部欠損、4単位の突起有り、条痕、外側斜行・内側頸部上横	褐　10YR4/4	繊維を含む			
22－②	8住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/8	繊維を含む			
22－③	8住	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
22－④	8住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
23－②	10住	深鉢	口縁、口唇下に斜格子目の刻みが入った隆帯、条痕文	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			補修孔有り
23－③	10住	深鉢	口縁、口唇に小突起	黒褐　7.5YR3/1	繊維を含む			
24－①	10住	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	多量に含む			
24－②	10住	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
24－③	10住	深鉢	薄手細線文	褐　10YR4/1	繊維を含む			
24－④	10住	深鉢	薄手細線文	褐灰　10YR4/1	繊維を含む			
24－⑤	10住4	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
24－⑥	10住	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
24－⑦	10住	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
24－⑧	10住	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
24－⑨	10住	深鉢	条痕	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維を含む			
24－⑩	10住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
24－⑪	10住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
24－⑫	10住４	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
25－①	11住16	深鉢	口縁	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
25－②	11住５	深鉢	口縁、条痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
25－③	11住Ｐ１	深鉢	縄文	褐　10YR4/4	繊維を含む			
25－④	11住11	深鉢	沈線	褐　10YR4/4	繊維を含む			
25－⑤	11住	深鉢	擦痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
25－⑥	11住	深鉢	薄手指頭圧痕	褐灰　10YR4/1	繊維を含む			
26－①	12住51		条痕	褐　7.5YR4/6				
26－②	12住51	深鉢	口縁、条痕、隆帯格子目の刻み	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
26－③	12住51	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
26－④	12住51	深鉢	条痕	褐灰　10YR4/1	繊維含む			
26－⑤	12住24	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
26－⑥	12住51	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
26－⑦	12住	深鉢	口縁、口唇連続山形の刻み、薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄橙 10YR7/3	繊維含む			
26－⑧	12住51	深鉢	薄手指頭圧痕細線	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維含む			
26－⑨	12住51	深鉢	条痕	灰黄褐　10YR4/2	繊維含む			
26－⑩	12住51	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
26－⑪	12住、12住51	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
26－⑫	12住51	深鉢	条痕	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
26－⑬	12住51	深鉢	条痕	灰褐　7.5YR5/2	繊維含む			
26－⑭	12住51Ｉ－11	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
27－①	12住51	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
27－②	12住51	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
27－③	12住51	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維含む			
27－④	12住、12住51	深鉢	条痕	灰黄褐　10YR4/2	繊維含む			
27－⑤	12住51	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR3/6	繊維含む			
27－⑥	12住51	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
27－⑦	12住51	深鉢	薄手指頭圧痕細線	黒褐　7.5YR3/1	繊維含む			
27－⑧	12住51	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
27－⑨	12住51	深鉢	条痕	褐色　7.5YR4/4	繊維含む			
27－⑩	12住、12住43	深鉢	縄？	にぶい黄橙 10YR7/3	多量に含む			
27－⑪	12住、12住46	深鉢	縄？	にぶい黄橙 10YR7/4	多量に含む			
27－⑫	12住42	深鉢	羽状縄文	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
27－⑬	12住14	深鉢	縄文	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
27－⑭	12住	深鉢	擦痕	暗褐　7.5YR3/3	繊維含む			
27－⑮	12住	深鉢	縄文	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
27－⑯	12住51	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
27－⑰	12住51	深鉢	薄手指頭圧痕沈線	橙　7.5YR6/8	繊維含む			
31－②	17住No３下層	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
31－③	17住54、Ｊ－９	深鉢	薄手指頭圧痕細線	明褐　7.5YR5/6	－			
32－①	17住、17住No３、17住下層	深鉢	隆帯１本が巡る、条痕文土器、隆帯上に指頭圧痕が散在	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
32－②	17住	深鉢	口縁に４単位の突起、口唇と頸部に隆帯、薄手指頭圧痕細線	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
33－①	18住Ｆ２－１	灰釉陶器皿	ロクロによる水引き、内湾気味に大きく開く	灰白　7.5Y7/1	極わずか砂利を含む	13.0	(2.2)	
33－②	18住３	灰釉陶器碗	ロクロによる水引き	灰白　7.5Y7/2	砂粒を含む	17.5	(4.5)	
33－③	18住Ｄ４	高台付土師器	ロクロによる水引き、高台内側はわずかに盛上がる	にぶい黄橙 10YR7/4	砂粒を含む			
34－①	20住13下	深鉢	口唇下に太い隆帯右上から左下へ斜行する刻み目がつく、条痕	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
34－②	20住13	深鉢	太い隆帯がめぐり右上から左下へ斜行する刻み目がつく、条痕下部交差している	明褐　7.5YR5/8	繊維を含む			
34－③	20住15	深鉢	口縁調整は条痕、８単位の波状口縁、沈線による横方向区画の中に渦まき、波状のモチーフが引かれる	褐　7.5YR4/3	繊維少量			
34－④	20住２	深鉢	４単位の波状口縁、隆帯２本	にぶい黄褐　4/3	繊維を含む			
34－⑤	20住３	深鉢	胴部、擦痕、下方が赤変	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
34－⑥	20住上	深鉢	口縁、波状口縁、口唇とその下隆帯、沈線の横方向、波状のモチーフが引かれる	明褐　7.5YR5/6	繊維少量			
34－⑦	20住１下	深鉢	肥厚口縁、羽状縄文土器	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
35－①	20住13下	深鉢	口縁、剥落のはげしい、条痕	褐　10YR4/4	多量			
35－②	20住13	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
35－③	20住14	深鉢	条痕	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維を含む			
35－④	20住13下	深鉢	口縁、太い隆帯がめぐり右上から左下へ斜行する刻み目がつく	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
35－⑤	20住14	深鉢	条痕	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維を含む			
35－⑥	20住14	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維を含む			
35－⑦	20住14下	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維を含む			
35－⑧	20住13	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維を含む			
35－⑨	20住14下	深鉢	擦痕、剥落著しい	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
35－⑩	20住14	深鉢	擦痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
35－⑪	20住14下	深鉢	擦痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
35－⑫	20住14	深鉢	擦痕	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維を含む			
35－⑬	20住13	深鉢	擦痕、剥落著しい	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維を含む			
35－⑭	20住２、20住３	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む、多量の砂粒を含む			
36－①	20住３	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
36－②	20住２	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
36－③	20住３	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
36－④	20住３	深鉢	条痕（内側）	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
36－⑤	20住13	深鉢	条痕（内側）	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
36－⑥	20住２	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
36－⑦	20住２	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
36－⑧	20住14下	深鉢	擦痕、底部	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
36－⑨	20住	深鉢	縄文	黒褐　10YR2/2	繊維含む			20住１下の中から出土
37－①	22住１	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
37－②	22住１	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	褐　7.5YR4/4	少量			
37－⑥	23住５	深鉢	口縁、格条体圧痕斜行する刻み目	にぶい黄橙 7.5YR6/4	繊維を含む			
37－⑦	23住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
37－⑧	23住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
37－⑨	23住 6	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
37－⑩	23住	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			補修孔有り
37－⑪	23住	深鉢	なで、擦痕	褐　10YR4/6	繊維を含む			
37－⑫	23住	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
37－⑬	23住	深鉢	隆帯部分に刻み有り	黒褐　10YR3/1	繊維を含む			
37－⑭	23住	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/1	繊維を含む			
37－⑮	23住	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/1	繊維を含む			
37－⑯	23住	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
37－⑰	23住	深鉢	薄手	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
37－⑱	23住 7	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
38－①	24住 1	深鉢	口縁、隆帯と口唇の間に格子状の刻み	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
38－②	24住 9	深鉢	口縁、隆帯と口唇の間へらによる刻み	明黄褐　10YR6/6	繊維を含む			
38－③	24住12	深鉢	擦痕	褐　10YR4/4	繊維を含む			
38－④	24住 7	深鉢	薄手、擦痕	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
38－⑤	24住 9	深鉢	薄手指頭圧痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
38－⑥	24住 8	深鉢	薄手指頭圧痕、細線文	暗褐　7.5YR3/3	繊維を含む			
38－⑦	24住	深鉢	薄手指頭圧痕、細線文	にぶい橙　7.5YR6/4	繊維を含む			
38－⑧	24住12	深鉢	交差する条痕文	橙　7.5YR6/6	繊維を含む			内側に炭化物多量に付着
38－⑨	24住 8	深鉢	底部	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
38－⑫	25住10	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
38－⑬	25住 9	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
39－①	26住	深鉢	口縁、磨耗著しく不明	橙　7.5YR6/8	繊維を含む			
39－②	26住	深鉢	口縁、口唇直下に隆帯有り	明褐　7.5YR5/8	繊維を含む			
39－③	26住	深鉢	口縁、隆帯部	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
39－④	26住	深鉢	条痕	褐　10YR4/6	繊維を含む			
39－⑤	26住	深鉢	条痕	褐灰　10YR4/1	繊維を含む			
39－⑥	26住	深鉢	沈線	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
39－⑦	26住20	深鉢	沈線	暗褐　7.5YR3/3	繊維を含む			
39－⑧	26住33	深鉢	擦痕	褐　10YR4/4	多量			
39－⑨	26住	深鉢	薄手指頭圧痕	暗褐　10YR3/4	繊維を含む			
39－⑩	26住	深鉢	沈線	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
39－⑪	26住	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	黄褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
39－⑫	26住	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄橙　10YR7/4	繊維を含む			
39－⑬	26住	深鉢	薄手指頭圧痕細線文、隆帯付	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
39－⑭	26住19	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
39－⑮	26住	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	褐　7.5YR4/6	繊維を含む			
39－⑯	26住	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	黒褐　10YR3/2	繊維を含む			
40－①	26住	深鉢	縄文	にぶい黄褐　10YR5/4	繊維を含む			
40－②	26住	深鉢	縄文	にぶい黄褐　10YR5/4	繊維を含む			
40－③	26住26	深鉢	条痕文	黒褐　10YR3/1	繊維を含む			
40－④	26住	深鉢	条痕	褐　10YR4/4	繊維を含む			
40－⑤	26住	深鉢	条痕	橙　7.5YR6/8	繊維を含む			
40－⑥	26住	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
40－⑦	26住	深鉢	羽状縄文	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
40－⑧	26住	深鉢	縄文	黒褐　10YR3/1	繊維を含む			
40－⑨	26住	深鉢	肥厚口縁、縄文	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
40－⑩	26住	深鉢	撚糸文	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
40－⑪	26住43	深鉢	撚糸文	褐　7.5YR4/3	繊維を含む			
40－⑫	26住	深鉢	縄文	褐灰　10YR4/1	繊維を含む			
41－①	27住２	深鉢	薄手指頭圧痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
41－②	27住Ｅ	深鉢	肥厚口縁、条痕	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
41－③	27住	深鉢	口縁、口唇部欠損、隆帯左上から右下に斜行する刻み目	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
41－④	27住Ｅ	深鉢	擦痕	灰黄褐　10YR4/2	繊維を含む			補修口有り
41－⑤	27住Ｅ	深鉢	口縁、口唇に格目、薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄褐　10YR5/3	繊維を含む			
42－①	27住Ｅ	深鉢	擦痕	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
42－②	27住Ｅ	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	繊維を含む			
42－③	27住Ｅ	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
42－④	27住Ｅ	深鉢	沈線	明褐　7.5YR5/6	繊維を含む			
42－⑤	27住２	深鉢	薄手指頭圧痕	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維を含む			
42－⑥	27住Ｅ	深鉢	薄手	明褐　7.5YR5/8	繊維を含む			
42－⑦	27住	深鉢	撚糸	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
42－⑩	28住	深鉢	口縁、口唇に隆帯、右上から左下に刻み目のち横なで、条痕	暗褐　10YR3/3	繊維を含む			
42－⑫	28住Ｅ	深鉢	口縁、口唇下に刻み目、羽状隆帯、刻み目右上から左下	灰黄褐　10YR4/2	繊維を含む			補修口有り
42－⑬	28住	深鉢	口縁、口唇下に隆帯	褐　7.5YR4/4	繊維を含む			
42－⑭	28住３	深鉢	口縁半截竹管	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
42－⑮	28住９	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
42－⑯	28住	深鉢	縄文	にぶい黄褐　10YR5/3	繊維含む			
42－⑰	28住10	深鉢	擦痕	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維含む			
42－⑱	28住10	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
42－⑲	28住６	深鉢	半截竹管	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維含む			
43－①	29住１	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
43－②	29住	深鉢	条痕	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
43－③	29住	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維含む			
43－④	29住	深鉢	薄手	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
43－⑤	29住	深鉢	条痕	褐灰　7.5YR4/1	繊維含む多量			
43－⑥	30住１	深鉢	貝殻腹縁	褐　7.5YR4/4	繊維含む多量			
43－⑦	30住１	深鉢	口縁、口唇部欠損、隆帯右上から左下に刻み目	暗褐　7.5YR3/4	繊維含む			
43－⑧	30住１	深鉢	貝殻腹縁	褐　7.5YR4/4	繊維含む多量			
43－⑨	30住	深鉢	頸部、平行及び波状の粘土紐貼付け、薄手指頭圧痕、細線文	灰黄褐　10YR4/2	－			
43－⑩	30住	深鉢	縄文	灰黄褐　10YR5/2	繊維含む多量			
44－①	31住７	深鉢	口縁、粘土紐貼付け、薄手指頭圧痕、波状細線文	黒褐　10YR2/2	繊維含む			
44－②	31住35	深鉢	口縁、口唇に粘土紐状結節、薄手指頭圧痕、波状細線文	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
44－③	31住11	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
44－④	31住23	深鉢	薄手指頭圧痕	黒褐　10YR3/2	繊維含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
44－⑤	31住	深鉢	薄手指頭圧痕、波状細線	黒褐　10YR2/2	繊維含む			
44－⑥	31住 NE	深鉢	薄手指頭圧痕	黒褐　10YR3/1	繊維含む			
44－⑦	31住 SW	深鉢	薄手指頭圧痕	褐　10YR4/4	繊維含む			
44－⑧	31住17	深鉢	波状口縁内外条痕文	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
44－⑨	31住	深鉢	条痕	黒褐　7.5YR3/1	繊維含む			
45－①	31住 SW	深鉢	口縁、口唇に刻み目、口唇下に断面三角の隆帯、条痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－②	31住17	深鉢	口縁、口唇外側に刻み目、断面三角の隆帯状に刻み目、なで	暗褐　10YR3/4	ほとんど含まず			
45－③	31住 SW	深鉢	口縁、口唇欠損、薄手指頭圧痕	褐　7.5YR4/4	ほとんど含まず			
45－④	31住	深鉢	口縁、口唇下に隆帯、条痕	褐　7.5YR4/4	ほとんど含まず			
45－⑤	31住	深鉢	口縁、口唇外側に斜め刻み、口唇直下に隆帯有	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
45－⑥	31住	深鉢	口縁、口唇部欠損、隆帯	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
45－⑦	31住 SW	深鉢	胴部、条痕、なで	橙　7.5YR6/6	繊維含む			
45－⑧	31住 SW	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
45－⑨	31住18	深鉢	条痕	褐　10YR4/4	繊維含む			
45－⑩	31住19	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
45－⑪	31住	深鉢	条痕		繊維含む			
45－⑫	31住 SW	深鉢	条痕、なで	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－⑬	31住	深鉢	条痕		繊維含む			
45－⑭	31住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－⑮	31住34	深鉢	条痕	暗赤褐　5YR3/6	繊維含む			
45－⑯	31住 NE	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/2	繊維含む			
45－⑰	31住	深鉢	条痕	褐灰　10YR4/1	繊維含む			
45－⑱	31住 5	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	繊維含む			
45－⑲	31住 SW	深鉢	条痕	暗褐　10YR3/3	多い			
45－⑳	31住 SW	深鉢	擦痕	暗褐　7.5YR3/4	多い			
45－㉑	31住 SW	深鉢	沈線	にぶい黄褐　10YR5/4	繊維含む			
45－㉒	31住 SW	深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
45－㉓	31住	深鉢	口縁、口唇欠損横走縦走する隆帯、隆帯状に刻み目、縦走する隆帯基部に絡条帯圧痕	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
45－㉔	31住 SW	深鉢	擦痕	褐灰　10YR4/1	繊維含む			
45－㉕	31住 SW	深鉢	沈線	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－㉖	31住 SW	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－㉗	31住 8	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
45－㉘	31住	深鉢	沈線	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
45－㉙	31住21	深鉢	口縁、条痕上擦痕	黒褐　10YR2/3	繊維含む			
45－㉚	31住24	深鉢	撚糸文	にぶい黄褐　10YR4/3	繊維含む			
45－㉛	31住23	深鉢	擦痕	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
45－㉜	31住13	深鉢	薄手指頭圧痕、細線文	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
45－㉝	31住13	深鉢	擦痕	にぶい赤褐　5YR4/4	繊維含む			
45－㉞	31住 7	深鉢	条痕	暗褐　7.5YR3/4	繊維含む			
46－①	31住26	深鉢	条痕	灰褐　7.5YR5/2	多量			46－④同一
46－②	31住 4	深鉢	口縁、口唇部に条痕、隆帯以下剥落	褐灰　10YR4/1	多量			
46－③	31住23	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	多量			
46－④	31住24	深鉢	条痕	灰褐　7.5YR5/2	多量			46－①同一
46－⑤	31住 SW	深鉢	沈線	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
46－⑥	31住43	深鉢	条痕	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維含む			
46－⑦	31住 SW	深鉢	縄文	褐灰　10YR4/1	多量			
46－⑧	31住	深鉢	羽状縄文	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
46－⑨	31住 6	深鉢	羽状縄文	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
46－⑩	31住 SW	深鉢	縄文	黒褐　10YR3/2	多量			
46－⑪	31住 6	深鉢	縄文	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
46－⑫	31住 NE	深鉢	口縁、縄文	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
46－⑬	31住 SW	深鉢	縄文	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
46－⑭	31住 7	深鉢	羽状縄文	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
46－⑮	31住	深鉢	縄文	橙　7.5YR6/6	繊維含む			
46－⑯	31住14	深鉢	羽状縄文	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
46－⑰	31住 7	深鉢	縄文	暗褐　10YR3/3	多量			
46－⑱	31住	深鉢	縄文	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
46－⑲	31住 9	深鉢	縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46－⑳	31住 SW	深鉢	縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46－㉑	31住 SW	深鉢	縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46－㉒	31住 NE	深鉢	縄文	にぶい褐 7.5YR5/4	繊維含む			
46－㉓	31住14	深鉢	縄文	暗褐　10YR3/4	繊維含む			
46－㉔	31住 SW	深鉢	羽状縄文	にぶい黄橙 10YR3/3	繊維含む			
46－㉕	31住	深鉢	縄文	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
46－㉖	31住23	深鉢	縄文	明褐　7.5YR5/6	多量			
46－㉗	31住	深鉢	縄文	黒　7.5YR2/1	多量			
46－㉘	31住	深鉢	羽状縄文	にぶい黄橙 10YR6/3	繊維含む			
46－㉙	31住 8	深鉢	縄文	明褐　10YR6/6	繊維含む			
46－㉚	31住 SW	深鉢	縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維含む			
48－①	34住16	深鉢	口縁、薄手指頭圧痕、波状口縁、粘土紐２本貼り付、口唇粘土紐の刻み目	にぶい赤褐 45YR4/4	繊維含む			
48－②	34住11	深鉢	口縁、擦痕	黒褐　10YR3/2	多量			
48－③	34住 7	深鉢	条痕	明褐　7.5YR5/6	繊維含有			
48－④	34住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/3	繊維含有			
48－⑤	34住	深鉢	条痕	褐　7.5YR4/3	繊維含有			
48－⑥	34住11	深鉢	条痕	黒褐　0YR3/2	繊維含有			
48－⑦	34住21	深鉢	沈線	にぶい黄褐 10YR6/3	繊維含有			
48－⑧	34住	深鉢	擦痕	にぶい赤褐 5YR4/4	繊維含有			
48－⑨	34住15	深鉢	縄文	明黄褐　10YR6/6	繊維含有			
48－⑩	34住	深鉢	縄文	明黄褐　10YR6/8	繊維含有			
48－⑪	34住24	深鉢	擦痕	黄褐　10YR5/6	多量			
48－⑫	34住	深鉢	撚糸	黒褐　10YR3/1	繊維含有			
48－⑬	34住16	深鉢	縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維含有			
48－⑭	34住16	深鉢	縄文	にぶい黄褐 10YR5/3	繊維含有			
48－⑮	34住	深鉢	縄文	黒褐　10YR3/1	繊維含有			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
48－⑯	34住11	深鉢	縄文	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維含有			
48－⑰	34住16	深鉢	縄文	灰黄褐　10YR4/2	繊維含有			
48－⑱	34住11	深鉢	縄文	褐　10YR4/4	繊維含有			
48－⑲	34住11	深鉢	羽状縄文	褐　10YR4/6	繊維含有			
48－⑳	34住17	深鉢	縄文	明黄褐　10YR6/6	繊維含有			
48－㉑	34住24	深鉢	縄文	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維含有			
49－①	35住１、３	灰釉陶器 段皿	ロクロによる水引き、高台内に回転糸切痕が残る、底部から直線的に開き、段が付いた所から若干立上る	胎土10YR8/1灰白 釉 2.5YR8/2灰白	砂粒を含む	13.0	2.2	釉薬漬掛け
49－②	37住Ｅ	深鉢	口縁、斜行する隆帯の下を全周する、貝殻腹縁	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
49－③	37住Ｗ	深鉢	口縁、口唇部欠損、隆帯状格子目の刻み	黒褐　10YR3/1	繊維含む			
49－④	37住Ｅ	深鉢	条痕	にぶい褐 7.5YR5/3	繊維含む			
49－⑤	37住Ｅ	深鉢	羽状縄文	灰褐　7.5YR4/2	繊維含む			
55－②	54土	深鉢	口縁、口唇部欠損、格子目の刻みのある隆帯、条痕文	にぶい黄褐 10YR4/2	多量			
55－③	54土	深鉢	結節隆帯、条痕文	明褐　7.5YR5/6	ごく少量			55－⑤と同一
55－④	54土３	深鉢	縄文	明褐　7.5YR5/8	繊維含む			
55－⑤	54土	深鉢	結節隆帯、条痕文	明褐　7.5YR6/6	ごく少量			55－③と同一
55－⑥	54土２	深鉢	口縁、隆帯付、条痕文	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
55－⑦	54土	深鉢	口縁、口唇に刻み有、低い隆帯に格子目の刻み目	褐　7.5YR4/3	多量			
55－⑧	54土４	深鉢	羽状縄文	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
55－⑨	54土	深鉢	口縁、口唇からわずかに垂下する小隆帯有り、なで	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
55－⑩	54土	深鉢	口縁、結節沈線	橙　7.5YR6/8	ほとんど含まず			
55－⑪	54土	深鉢	条痕	黄褐　10YR5/6	繊維含む			
55－⑫	54土	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄褐 10YR6/3	繊維含む			
60－①	179土	深鉢	薄手指頭圧痕細線文、貼付けの粘土紐は直線波状で巡る	にぶい黄褐 10YR6/3	繊維含む			
60－②	185土	深鉢	薄手指頭圧痕、貼付け粘土紐上を斜行結節沈線	灰黄褐　10YR5/2	繊維含む			
61－①	207土	深鉢	条痕	にぶい黄橙 10YR7/4	繊維含む			
64－①	F11	深鉢	表裏縄文土器、羽状を呈す、口唇も縄文有	灰黄褐　10YR6/2	繊維含む			
64－②	８－Ｑ	深鉢	口縁、隆帯、口唇欠損、浅い格子目の刻み	にぶい黄褐 10YR4/3	多量			
64－③	Ｋ－９	深鉢	波状口縁、隆帯断面三角、なで、擦痕	褐　10YR4/4	繊維含む			
64－④	1600－１	深鉢	口縁、口唇隆帯貼付け	明黄褐　10YR7/6	繊維含む			
64－⑤	1896－Ｎ	深鉢	条痕、沈線	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
64－⑥	９－Ｏ	深鉢	条痕、粘土紐、貝殻腹縁	褐　7.5YR4/6	繊維含む			
64－⑦	８Ｋ	深鉢	条痕、低い隆帯状を貝殻腹縁	にぶい赤褐 5YR4/3	繊維含む			
64－⑧	J12	深鉢	口縁、隆帯付	明赤褐　10YR7/6	繊維含む			
64－⑨	Ｊ８	深鉢	条痕	黄褐　10YR5/6	多量			
64－⑩	Ｐ－０	深鉢	沈線	にぶい黄褐 10YR4/3	多量			
64－⑪	８Ｋ	深鉢	沈線	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
64－⑫	Ｋ－９	深鉢	条痕	明黄褐　10YR6/6	多量			

図番号	出土区注記	器　種	技法・形態の特徴	色　調	胎　土	口径cm	高さcm	備考
64－⑬	K－9	深鉢	条痕	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
64－⑭	6－V	深鉢	擦痕	黒褐　10YR3/2	多量			
64－⑮		深鉢	条痕	黒褐　10YR3/2	繊維含む			
64－⑯	K－9	深鉢	沈線	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
64－⑰	2Z	深鉢	沈線	褐灰　10YR4/1	多量			
64－⑱	8K	深鉢	口縁、薄手指頭圧痕、細線文、口唇に交差する沈線	褐　7.5YR4/4	繊維含む			
64－⑲	L－9	深鉢	薄手指頭圧痕、口唇下に波状隆帯	にぶい黄褐 10YR5/4	繊維含む			
64－⑳	K9	深鉢	口縁、交差する沈線、内側貝殻条痕	褐　7.5YR4/3	繊維含む			
64－㉑	K－9	深鉢	口縁、口唇部欠損	橙　7.5YR6/6	繊維含む			
64－㉒	8K	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	明褐　7.5YR5/6	繊維含む			
64－㉓	6U	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	褐　10YR4/4	繊維含む			
64－㉔	8K	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄橙 10YR6/3	繊維含む			
64－㉕	5－J	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	明赤褐　5YR5/6	繊維含む			
64－㉖	K8	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄橙 10YR7/3	繊維含む			
64－㉗	8K	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	灰黄橙　10YR4/2	繊維含む			
64－㉘	8K	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄橙 10YR5/3	繊維含む			
64－㉙	P－9	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	灰黄褐　10YR5/2	繊維含む			
64－㉚	P－9	深鉢	薄手指頭圧痕細線文	にぶい黄褐 10YR4/3	繊維含む			
64－㉛	J2	深鉢	口縁、波状頂部から垂下する隆帯、横縦する隆帯、撚糸	褐　7.5YR4/4	多量			
64－㉜	J－9	深鉢	口縁、肥圧、縄文	黄褐　10YR5/6	多量			
64－㉝	8K	深鉢	口縁、口唇外に開く、縄文	明褐　7.5YR5/6	多量			
64－㉞	K9	深鉢	撚糸	明褐　7.5YR5/8	多量			
64－㉟	K－9	深鉢	縄文	橙　7.5YR6/8	繊維含む			
64－㊱	2N	深鉢	羽状縄文	明黄褐　10YR6/6	繊維含む			
64－㊲	K－9	深鉢	貝殻条痕	橙　7.5YR6/6	繊維含む			
64－㊳	6－V	深鉢	縄文	橙　7.5YR7/6	繊維含む			
70－①	表	深鉢	口縁、隆帯付	褐　7.5YR4/3	多量に含む			
70－②	表	深鉢	口縁、隆帯状、直行する刻み	褐　7.5YR4/3	多量に含む			
70－③	表	深鉢	口縁、口唇外側に開く、隆帯右上から左下に斜行する刻み目沈線	褐　7.5YR4/3	多量			
70－④	表	深鉢	薄手細線文	褐　7.5YR4/3	多量			
70－⑤	表	深鉢	口縁、隆帯剥落、条痕	褐　7.5YR4/3	多量			
70－⑥	表	深鉢	口縁、隆帯付、擦痕	褐　7.5YR4/3	多量			
70－⑦	表	浅鉢	内側に沈線	褐　10YR4/4	繊維含む			後期
70－⑧	表		薄手指頭圧痕細線文	暗褐　10YR3/3	繊維含む			
70－⑭	表	椀	横縞の天目	暗褐　10YR3/4	－			
70－⑮	溝表採	椀	天目	黒　10YR2/1	－			

③石器分類表

図番号	出土区注記	分　類	石　材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備　　考
11－⑨	1住6	刃部調整の有る礫	緑色岩	11.28	9.88	2.94	336.8	ほぼ完形	
14－㉓	3住b	石鏃	黒曜石	1.83	1.82	0.34	0.8	ほぼ完形	片脚欠損、頭部衝撃剥離有り
14－㉔	3住a	石鏃	黒曜石	1.62	1.2	0.32	0.5	完形	
14－㉕	3住14	調整痕のある剥片	緑色岩	7.4	8.92	2.38	104.5		
16－①	4住E	石鏃	黒曜石	3.3	1.77	0.42			
16－②	4住f	石鏃	黒曜石	2.34	1.72	0.46	1.0	ほぼ完形	節理面か？
16－③	4住a	石鏃	黒曜石	1.76	1.5	0.45	0.7	ほぼ完形	
16－④	4住b	石鏃	黒曜石	1.83	1.43	0.38	0.6	ほぼ完形	節理面か？
16－⑤	4住e	石鏃	黒曜石	1.39	1.5	0.38	0.5	ほぼ完形	
16－⑥	4住d	石鏃	黒曜石	2.13	1.17	0.4	0.8	頭部わずかに欠損	両脚欠損
16－⑦	4住－c	石鏃	黒曜石	2.34	1.56	0.47	1.0	片脚欠損	
17－⑬	5住47	刃部調整の有る礫器	絶色岩	13.32	10.37	6.72	1145.0		
17－⑭	5住	打製石斧	変成岩	12.62	5.2	1.82	155.2		
17－⑮	5住46	凹石	安山岩	11.0	7.5	5.0	600		
17－⑯	5住	石錘	黒曜石	3.66	0.9	0.75	1.9	完形	
18－①	5住	固定石皿	安山岩	44.4	27.6	8.7	1850		
18－②	5住49	固定石皿	安山岩	36.5	26.9	10.0	1470		
20－⑪	6住2下	石鏃	黒曜石	1.70	1.64	0.3	0.5	完形	
20－⑫	6住a	石鏃	黒曜石	1.46	1.62	0.28	0.5	ほぼ完形	微細剥離痕有り
20－⑬	6住c	石鏃	黒曜石	1.76	1.04	0.53	0.8	ほぼ完形	
20－⑭	6住b	石鏃	黒曜石	2.23	1.68	0.46	1.0	ほぼ完形	脚部わずかに欠損
20－⑮	6住7	剥離痕のある礫	砂岩	8.5	5.4	4.1	225.3		
20－⑯	6住	拇指状掻器	黒曜石	4.01	3.62	1.2	16.9		
20－⑰	6住27	凹石	安山岩	7.82	7.35	3.34	280		
22－⑤	8住	石錐	黒曜石	2.82	1.20	0.8	1.9		
22－⑥	8住5	刃部調整の有る礫	緑色石	9.7	9.9	5.45	670		
22－⑦	8住7	固定石皿	安山岩	3.86	2.8	1.15	1370		
23－①	9住	石鏃	黒曜石	1.48	1.55	0.31	0.4	完形	
24－⑬	10住1	凹石	緑石岩	8.83	8.01	3.36	440		
25－⑦	11住	掻器	黒曜石	3.80	3.75	1.42	17		
25－⑧	11住1	固定石皿	安山岩	41	33.5	9.0	1800		
28－①	12住12	磨石	硬砂岩	9.64	10.18	2.94	339.9		
28－②	12住45	凹石	安山岩	13.0	9.7	4.95	830		
28－③	12住1	固定石皿	安山岩	34.3	26.0	5.8	7900		
29－②	14住	石鏃	黒曜石	2.20	1.56	0.44	1.1	完形	
30－①	15住②	凹石	安山岩	12.52	9.91	4.98	890		
30－②	15住1	固定石皿	安山岩	32.3	32.0	7.5	9100		
31－①	16住	石鏃	黒曜石	2.06	1.18	0.44	0.6	ほぼ完形	脚部わずかに欠損
32－③	17住35	石鏃	黒曜石	2.02	1.4	0.39	0.9	ほぼ完形	頭部わずかに欠損
32－④	17住	固定石皿	安山岩	30.1	24.0	8.8	7800		
36－⑩	20住13	石鏃	黒曜石	2.55	1.98	0.50	1.5	片脚欠損	
36－⑪	20住9	固定石皿	安山岩	41.9	27.3	6.3	1070		
37－③	22住	調整痕の有る礫	緑色岩	17.0	4.35	2.78	284		
37－④	23住	石鏃	黒曜石	2.14	1.73	0.61	2.0	ほぼ完形	
37－⑤	22住	石鏃	黒曜石	1.80	1.58	0.36	0.7	ほぼ完形	頭部欠損

図番号	出土区注記	分　類	石　材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備　考
38－⑩	24住	石鏃	黒曜石	1.94	1.53	0.48	1.1	両脚欠損	
38－⑪	25住13	磨製石斧		4.0	3.12	0.89	16.4	上部欠損	
38－⑭	25住	剥離痕の有る礫	変成岩	11.86	9.0	3.75	510		
38－⑮	25住5	凹石	安山岩	8.85	6.28	2.74	180		
40－⑬	26住	石鏃	安山岩	1.52	1.24	0.36	0.5	ほぼ完形	
40－⑭	26住	石匙		5.6	1.8	0.8	7.4	完形	
40－⑮	26住a	凹石	安山岩	8.55	7.24	4.03	336.4		
40－⑯	26住12	凹石	安山岩	9.18	6.62	3.32	280		
40－⑰	26住b	凹石	安山岩	12.77	7.85	3.34	494		
42－⑧	27住	石錐	黒曜石	1.76	0.9	0.4	0.6	ほぼ完形	
42－⑨	27住	磨製石斧	青色変成岩	1.98	1.82	0.85	2.4		
42－⑪	27住1	特殊磨石	安山岩	11.45	8.7	6.06	900		
47－①	31住c	石鏃	黒曜石	1.53	1.18	0.42	0.7	頭・脚部欠損	
47－②	31住16	石鏃	黒曜石	2.32	1.65	0.44	1.1	ほぼ完形	
47－③	31住b	石鏃	黒曜石	1.42	1.06	0.38	0.5	完形	
47－④	31住	石錐	黒曜石	2.03	1.04	0.64	1.2	ほぼ完形	
47－⑤	31住a	石鏃	黒曜石	2.9	2.0	0.9	4.5	ほぼ完形	
47－⑥	31住	磨製石斧	変成岩	2.49	2.4	1.0	4		
47－⑦	31住2	磨製石斧	変成岩	4.65	2.84	0.95	20.3	ほぼ完形	
47－⑧	31住3	凹石	安山岩	11.88	6.0	3.28	286.8		
47－⑨	31住	凹石	安山岩	9.03	7.25	4.35	345.0		
47－⑩	31住39	凹石	安山岩	10.73	6.5	4.12	364.7		
47－⑪	31住42	凹石	安山岩	14.72	7.11	6.45	795.0		
47－⑫	31住10	凹石	緑色岩	12.54	9.18	3.41	650		
48－㉒	34住12－b	凹石	砂岩	12.16	7.02	4.65	650	上下裏面欠損	擦面有
48－㉓	34住12－a	凹石	安山岩	9.82	7.80	4.78	492.0		
50－①	F3	掻器	黒曜石	2.75	2.3	1.2	6.3		
51－①	焼土5	石錐	黒曜石	2.42	1.47	0.6	1.4	ほぼ完形	
52－①	16ド	石錐	黒曜石	2.80	1.06	0.56	1.4		
53－①	2ドsc	石錐	黒曜石	3.15	2.0	0.8		古い剥離面	
53－②	2ドsb	石鏃	黒曜石	1.82	1.40	0.33	0.6	先端部、衝撃剥離	
53－③	2ドsa	石鏃	黒曜石	2.33	1.81	0.44	1.3	ほぼ完形	
53－④	9ド1	打製石斧	緑色岩	12.0	8.4	4.15	412.0	下部欠損	
53－⑤	9ド3	調整痕の有る剥片	緑色岩	14.12	10.43	2.52	385.0		
53－⑥	9ド2	調整痕の有る剥片	緑色岩	10.18	11.8	2.3	267.7		
55－①	42ド	打製石斧	粘板岩	8.65	4.25	1.28	25		
56－①	58ド	調整痕の有る扁平円礫	－	11.46	6.0	1.25	11.19		
61－②	219エ	調整痕の有る扁平円礫	－	9.58	11.7	1.65	222.2		
62－①	溝5	調整痕の有る礫	緑色岩	8.6	6.92	3.93	307.3		
62－②	溝5	調整痕の有る剥片	緑色岩	11.3	7.57	1.66	172.2		
65－①	J－11カク乱	ナイフ形石器	黒曜石	5.01	3.42	0.7	9.5		
65－②	K9カク乱	掻器	黒曜石	4.95	3.03	0.95	13.4		
65－③	J7	石鏃	黒曜石	1.81	1.35	0.42	0.9	完形	
65－④	200－13	石鏃	黒曜石	2.73	1.80	0.56	2.0	ほぼ完形	
65－⑤	2－O	石鏃	黒曜石	1.9	1.38	0.38	0.6	完形	

図番号	出土区注記	分　類	石　材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備　　考
65－⑥	1601	石鏃	黒曜石	2.04	1.47	0.32	0.8	ほぼ完形	
65－⑦	NWa	石鏃	黒曜石	2.05	1.68	0.29	0.6	ほぼ完形	
65－⑧	2K	石鏃	黒曜石	1.50	1.15	0.34	0.4	脚部欠損	
65－⑨	9－P	石鏃	黒曜石	2.24	1.67	0.35	0.8	完形	
65－⑩	2Nb	石鏃	黒曜石	2.0	1.57	0.43	0.9	ほぼ完形	
65－⑪	12トレN	石鏃	黒曜石	1.73	1.44	0.34	0.5	脚部欠損	
65－⑫	G12・13	石鏃	黒曜石	1.56	1.34	0.22	0.3	脚部欠損	
65－⑬	F－8	石鏃	黒曜石	1.77	1.32	0.34	0.7	頭・脚部欠損	
65－⑭	3N	石鏃	黒曜石	1.72	1.10	0.39	0.4	脚部欠損	
65－⑮	K－9	石鏃	黒曜石	2.42	1.50	0.40	0.9	脚部欠損	
65－⑯	NWb	石鏃	黒曜石	2.20	1.20	0.39	0.7		
65－⑰	2Na	石鏃	黒曜石	2.02	1.36	0.32	0.6	脚部欠損	
65－⑱	E－8	石鏃	黒曜石	2.25	1.56	0.53	1.2	脚部欠損	
65－⑲	I－3	石錐	黒曜石	2.65	0.94	0.66	1.5	完形	
65－⑳	9Q	石匙	黒曜石	2.95	5.00	0.74			
65－㉑	J7	石錐	黒曜石	2.30	1.08	0.46	1.0		
65－㉒	5J	石錐	黒曜石	3.13	1.32	0.71	2.4		
65－㉓	I－14	石匙		4.18	5.06	0.93	16.5		
66－①	F8	調整痕の有る剥片	緑色岩	3.55	11.80	1.40	55.2		
66－②	K10－B		緑色岩	5.66	8.48	0.75	49.4		
66－③	K10－C		緑色岩	6.62	10.20	1.46	101.9		
66－④	8P－a	調整痕の有る礫	変成岩	9.14	7.60	2.10	146.1		
66－⑤	8P	調整痕の有る礫	変成岩	9.77	4.82	1.30	78.8		
66－⑥	P－6	調整痕の有る礫	変成岩	13.74	8.90	3.00	410		
66－⑦	2P	横刃型石器	緑色岩	11.67	5.12	1.73	116.9		
66－⑧	K10－A	調整痕の有る剥片	緑色岩	10.08	6.58	1.80	142.5		
66－⑨	2K	打製石斧	泥板岩	14.25	7.53	2.10	239.8		
67－①	5N	打製石斧	泥板岩	13.33	5.58	2.48	200.6		
67－②	J－8	砥石	緑色岩	20.35	4.45	4.04	610.0		稜に調整痕有り
67－③	6－P	調整痕の有る礫	変成岩	11.95	8.15	3.30	414.0		
67－④	I－5	調整痕の有る礫	砂岩	16.22	4.86	3.34	27.45		
67－⑤	9Q	凹石	安山岩	11.8	7.2	3.20	295.8	磨石を転用したもの	
67－⑥	8P－6	ハンマー	緑色岩	10.5	4.82	2.24	167.0		
67－⑦	5N	調整痕の有る礫	泥板岩	11.83	14.66	3.50	790.0		
68－①	6－O	調整痕の有る礫	緑色岩	12.5	6.36	2.68	279.8		
68－②	9N－C	凹石	安山岩	11.02	9.80	4.15	520		
68－③	5－O	調整痕の有る礫	砂岩	13.60	6.87	2.9	335.8		
68－④	9N－b	凹石	安山岩	12.98	9.30	4.30	540		
68－⑤	6P－a	凹石	安山岩	11.08	7.80	3.83	4.92		
68－⑥	8P－c	凹石	安山岩	11.10	8.20	3.10	357.5		
68－⑦	9N－b	凹石	安山岩	9.67	9.10	3.90	385.5		
68－⑧	9N－a	凹石	安山岩	9.44	7.94	3.46	310.6		
69－①	L－10	凹石	安山岩	9.14	9.48	3.10	336.1		
69－②	8P－6	凹石	安山岩	9.50	5.27	4.00	236.8		

図番号	出土区注記	分　類	石　材	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重量g	遺存状態	備　　考
69－③	5－N－A	凹石	安山岩	12.18	9.32	4.58	640g		
69－④	I－12	凹石	安山岩	12.53	5.70	4.82	394.7		
69－⑤	6P－b	凹石	安山岩	11.15	8.86	4.42	470	上部欠損	
69－⑥	K－11	凹石	安山岩	10.58	4.98	2.95	196.7	上部裏面欠損	
69－⑦	8P－a	凹石	安山岩	9.04	10.05	5.4	62.0	上部欠損	
69－⑧	9－O	凹石	緑色岩	10.77	6.48	4.16	366.8	上部欠損	一部に調整痕有り
70－⑨	表a	石鏃	黒曜石	1.93	1.96	0.46	1.1	ほぼ完形	
70－⑩	栓	石鏃	黒曜石	1.80	1.36	0.27	0.6	先端部から左側稜にかけて欠損	
70－⑪	表b	石鏃	黒曜石	1.22	1.56	0.25	0.3	先端部欠損	
70－⑫		石錐	黒曜石	3.05	0.85	0.51	1.1		
70－⑬	表	掻器	黒曜石	3.00	2.47	1.25	7.1		

④黒耀石出土量表

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1住居	30.1	48				
2住居	135.3	39				
3住居	1105.4	224	チャート	22.6	2	
4住居	720.4	147	チャート	1.4	1	
5住居	522.4	117				
6住居	294.4	76	チャート	50.9	1	
7住居	22.0	8				
8住居	137.3	27				
9住居	52.5	11				
10住居	137.1	44				
11住居	286.3	16				
12住居	101.4	31				
13住居	4.2	2				
14住居	2.4	2				
15住居	76.1	1				
16住居	0.6	1				
17住居	344.8	100				
18住居	8.9	3				
19住居	2.8	2				
20住居	72.1	23				
22住居	54.9	10				
23住居	45.2	22				
24住居	192.4	52				
25住居	60.5	6				
26住居	368.9	99	チャート	1.0	1	
27住居	302.7	74	チャート	4.4	2	
28住居	95.7	25				
29住居	27.8	16				
30住居	69.0	29				
31住居	618.6	196				
34住居	155.6	55				
37住居	100.1	5				
38住居	1.7	1				
39住居	1.8	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
2土坑	163.5	62				
10土坑	6.3	2				
11土坑	9.6	1				
13土坑	3.9	1				
15土坑	1.8	2				
16土坑	22.2	3				
18土坑	28.6	3				
19土坑	36.0	3				
36土坑	26.0	2				
52土坑	39.6	11				
54土坑	69.4	17				
75土坑	4.3	2				
99土坑	18.1	2				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
100土坑	13.2	1				
106土坑	3.8	1				
131土坑	3.6	2				
134土坑	2.2	1				
141土坑	2.7	1				
143土坑	3.5	1				
148土坑	5.3	2				
175土坑	17.6	8				
178土坑	2.0	1				
182土坑	0.9	1				
183土坑	5.0	3				
185土坑	1.6	1				
219土坑	24.8	8				
226土坑	22.2	3				
227土坑	11.4	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1焼土	43.4	12				
2焼土	53.7	16				
3焼土	107.2	37				
4焼土	16.9	8				
5焼土	5.6	3				
6焼土	92.1	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
集石炉	11.3	3				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1炉	95.6	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1溝2	20.5	8				
1溝4	5.2	2				
1溝5	23.8	6				
1溝6	15.9	4				

グリッド	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
E10	9.9	4				
F8	201.1	67				
F11	29.3	2				
G5	5.5	1				
G10	25.2	11				
G11	134.0	18				
G12・13	54.6	9				
G15	17.7	1				
H7	6.9	1				
H9	121.6	37				
H13	4.8	1				
I3	65.6	5				

グリッド	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
I 4	91.2	14				
I 5	144.7	36				
I11	12.9	4				
I14	30.4	2	チャート	4.5	1	
J 5	50.6	10				
J 6	68.1	16				
J 7	254.2	74				
J 8	117.0	28				
J 9	43.8	12				
J10	47.8	20	チャート	8.0	1	
J11	58.4	13				
J12	68.5	15				
K 1	16.2	2				
K 2	66.2	20				
K 8	169.1	43				
K 9	386.9	34				
K11	251.4	59				
K13	44.9	5				
L 2	41.7	6				
L 4	53.2	23				
L 9	90.8	30				
L10	18.0	6				
M 5	76.8	36				
M10	49.4	9				
N 2	71.9	18				
N 3	52.6	14				
N 7	15.3	1				
N 9	1.0	1				
N10	306.4	65				
O 2	92.9	48				
O 6	45.4	13				
O 7	19.8	1				
O 9	100.4	22				
P 2	22.6	12				
P 6	82.8	25				
P 8	66.2	13				
P 9	318.2	84				
Q 2	30.0	11				
Q 7	7.9	1				
Q 8	116.4	25				
Q 9	4.8	1				
W－2	6.1	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
1600-1番地	620.1	20				
1601番地	0.8	1				
1614-1番地	1319.1	438				
200-13番地	1.9	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
12トレンチ	5.1	4				
29トレンチ	30.1	1				
55トレンチ	36.6	11				

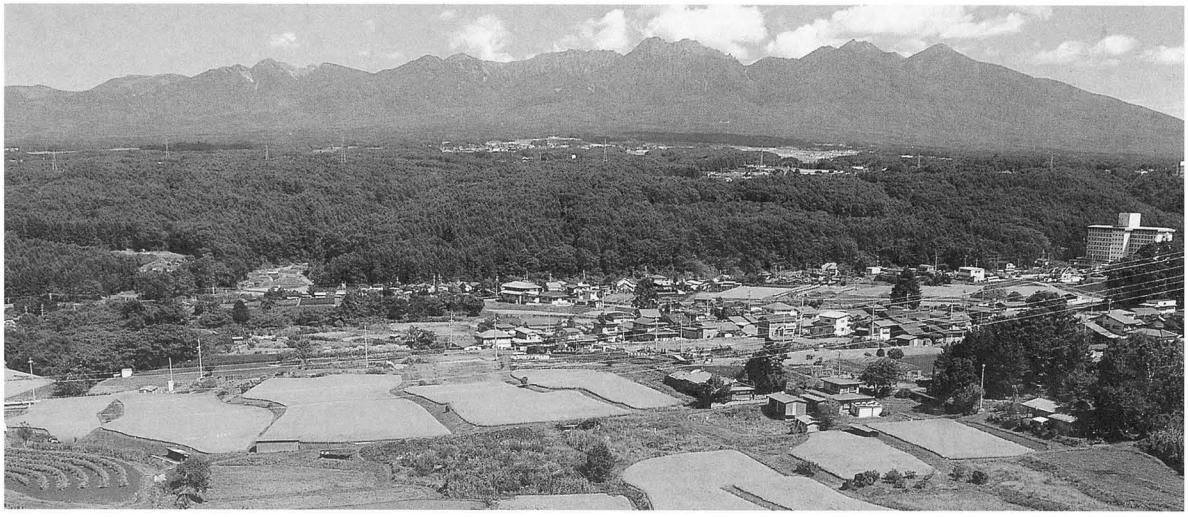
出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
ロームマウンド	0.9	1				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
遺構検出時	89.5	10				

出土位置	重量(g)	点数	その他	重量(g)	点数	備考
表採	1285.4	223	チャート	10.3	2	

総計	14870.3	3501		113.4	13	

図　　版



①芥沢遺跡調査前全景（西側から）左側の水田が平成15年度調査区・奥が平成16年度調査区

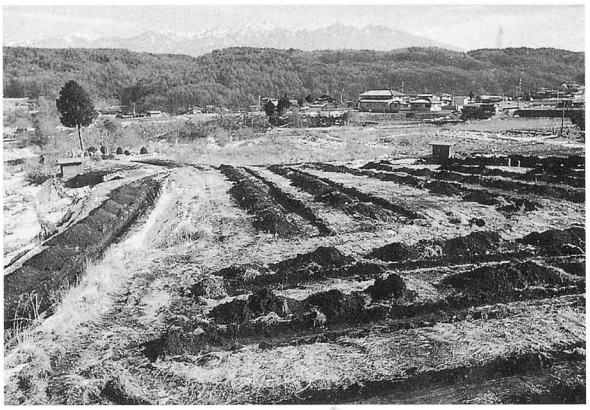
②芥沢遺跡調査前全景（南側から）手前左側の森の中に湧水がある

図版2

①芥沢遺跡遠景航空写真（南側から）左上は諏訪湖

②1947年（昭和22年）の芥沢遺跡周辺（米軍撮影）中央左上が天狗山

①平成14年度試掘調査の表土剥ぎ



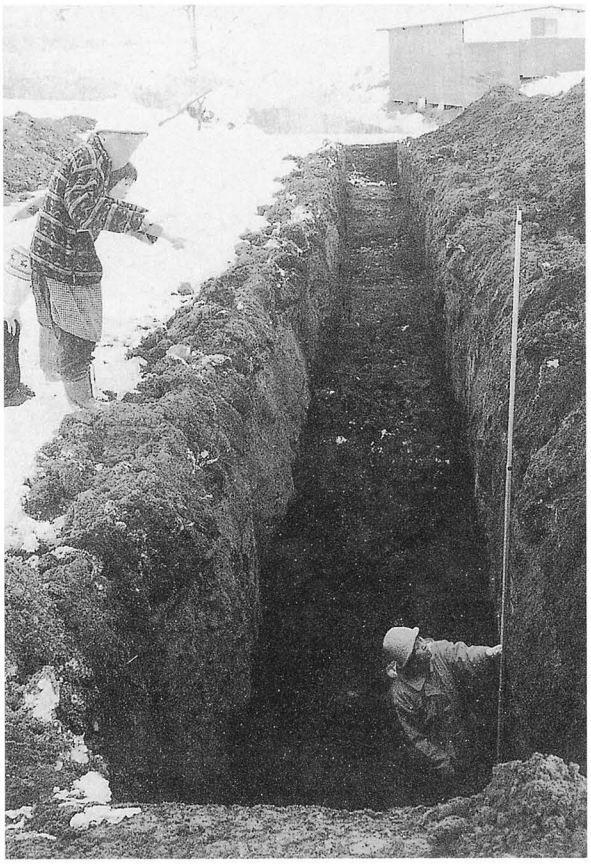
⑤同平成16年度調査区北側（西側から）

②同調査区全景（北東側から）

⑥同平成16年度調査区南側（北西側から）

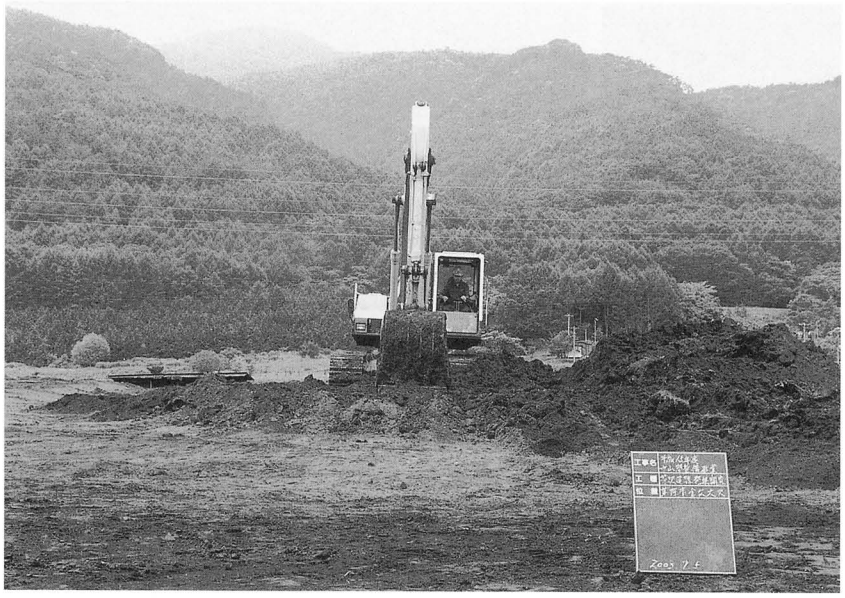
③同平成15年度調査区（東側から）

④同平成15年度調査区北部（西側から）



⑦同北端部計測作業（東側から）

図版4



①平成15年度表土剥ぎ

②平成15年度遺構検出作業

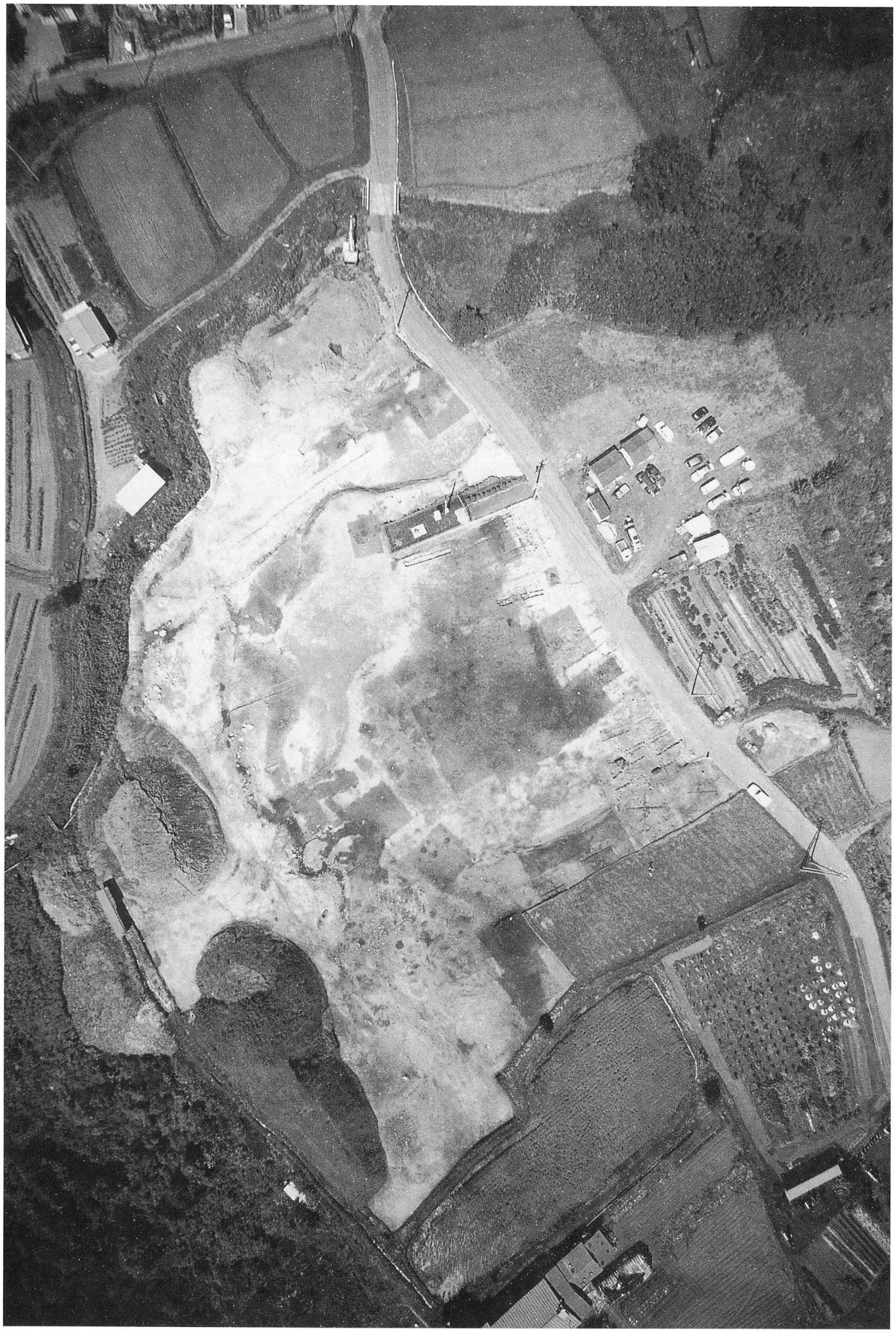
③平成16年度発掘作業

①豊平小6年1部博物館活用指定学級体験発掘

②茅野北部中職場体験

③岡谷北部中職場体験

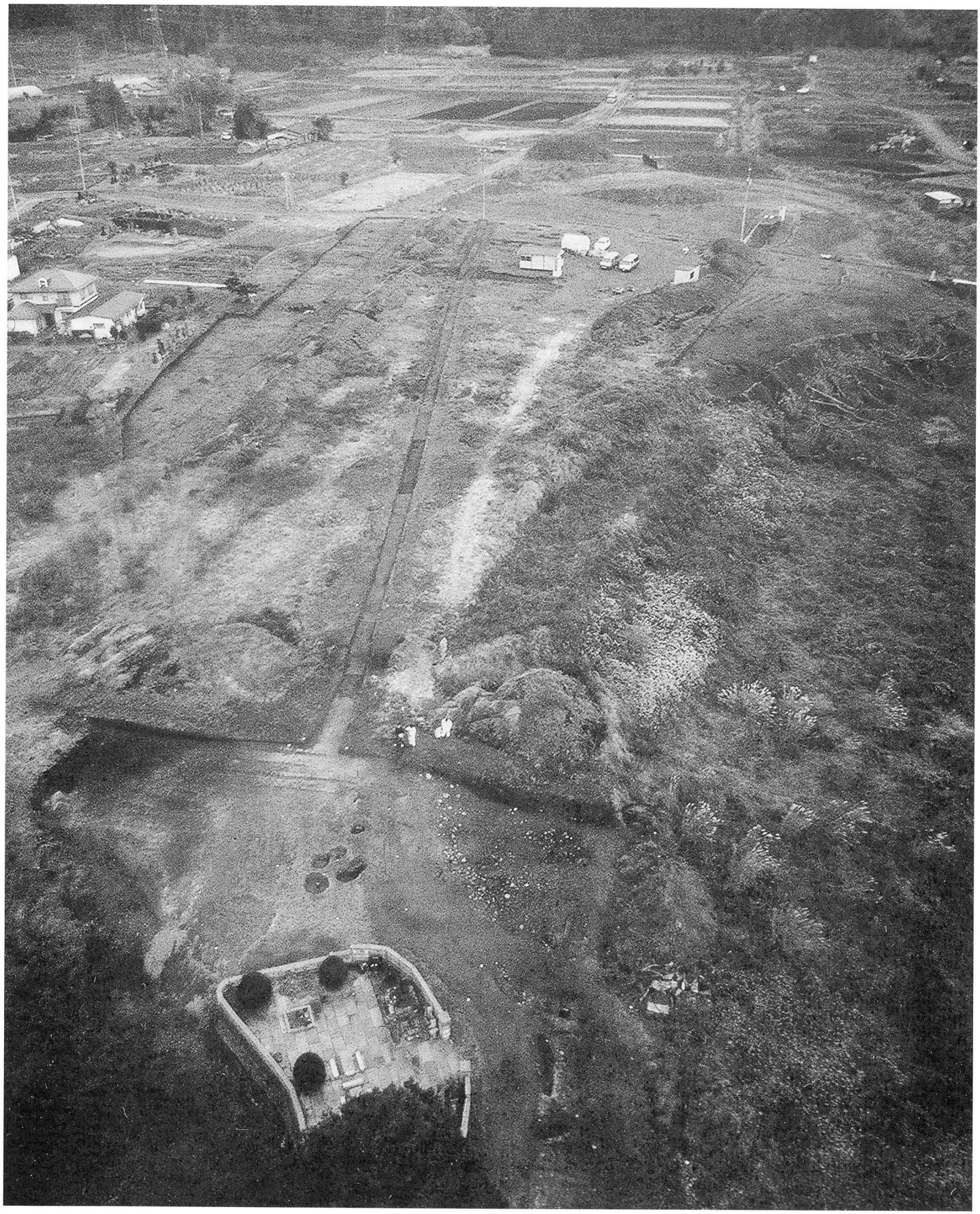
図版6



①平成15年度調査区全景（地形計測時）

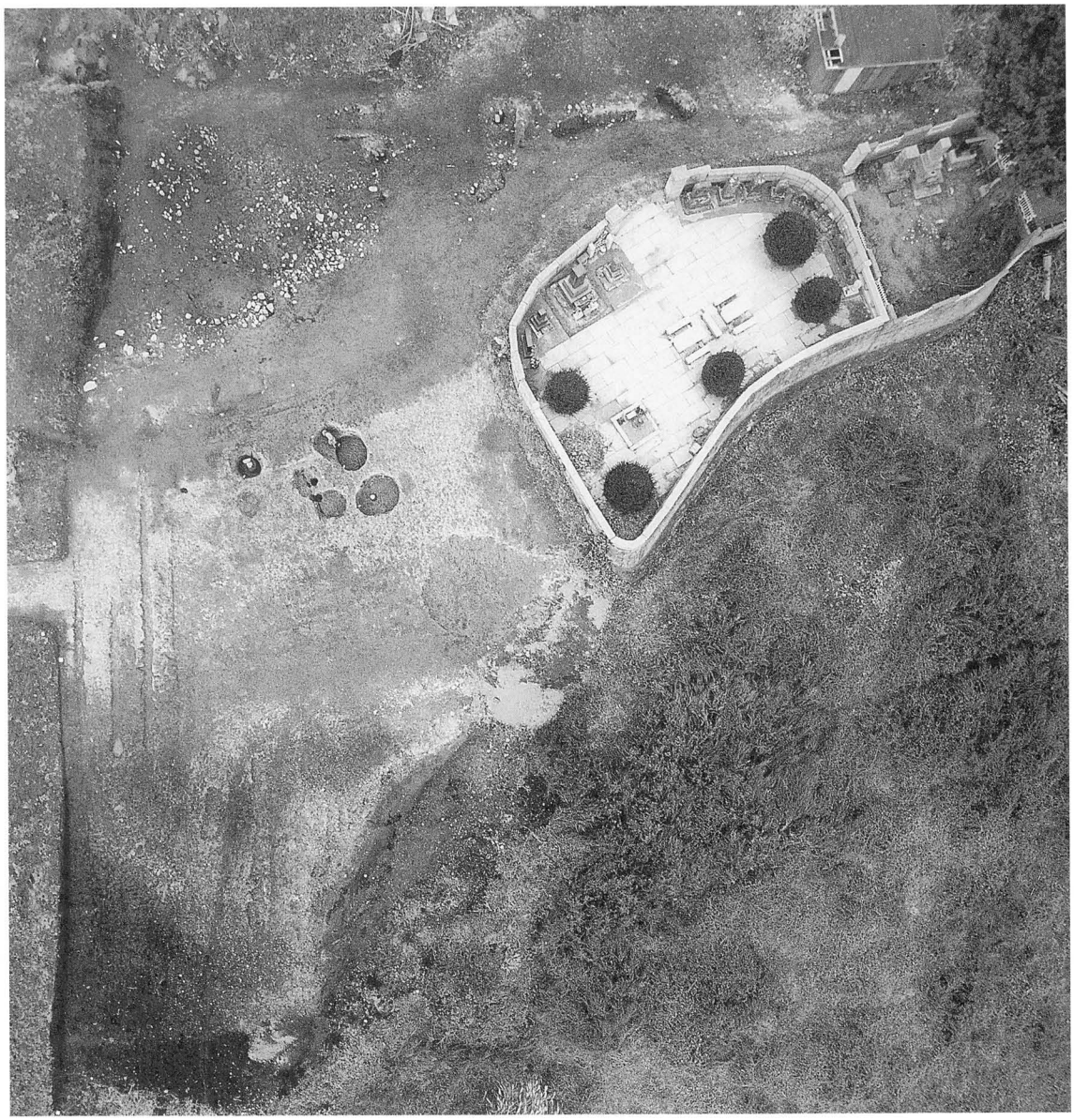
①平成15年度調査区全景（遺構計測時）

図版8



①平成16年度調査区全景（東側から）

①平成16年度北側調査区航空写真

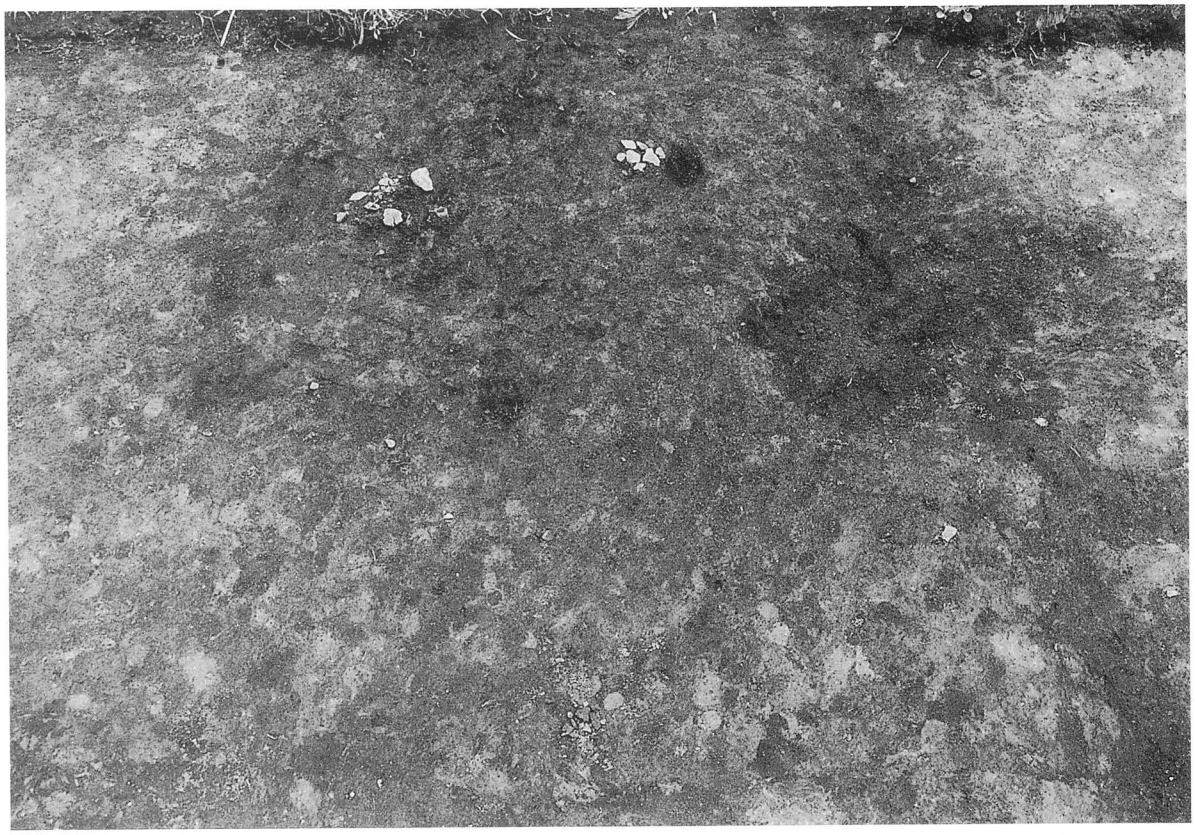


②平成16年度東端調査区航空写真

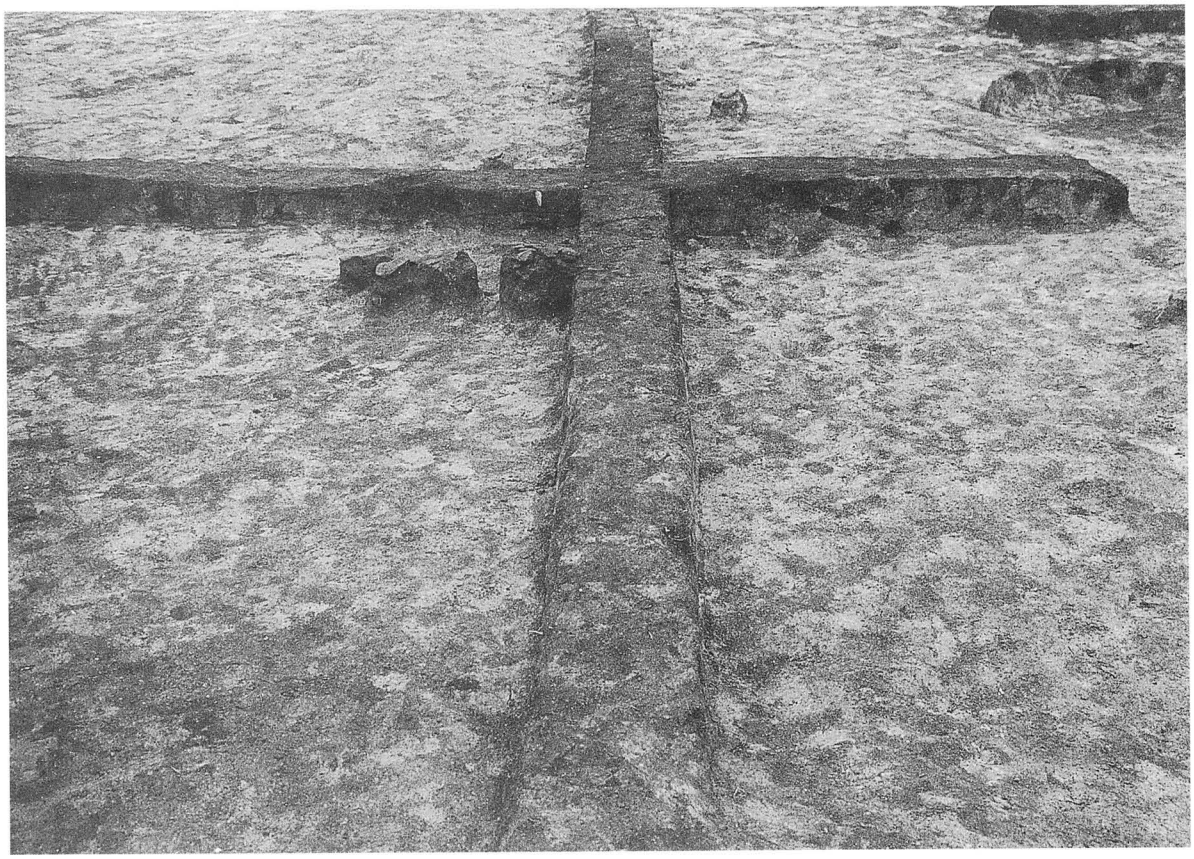
図版10

①平成16年度南側調査区西側及び中央調査トレンチ住居検出部分航空写真

②同東側遺構確認状況航空写真



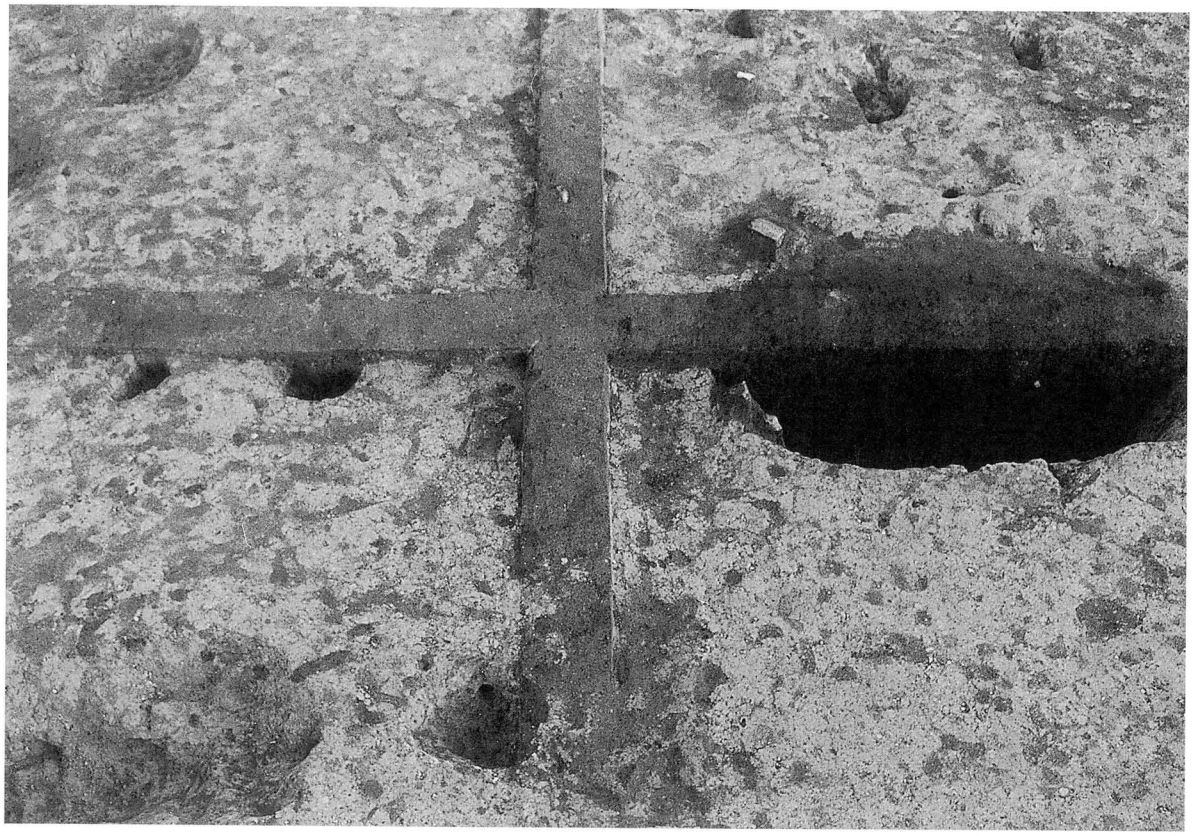
①第１号住居址検出状況（北側から）



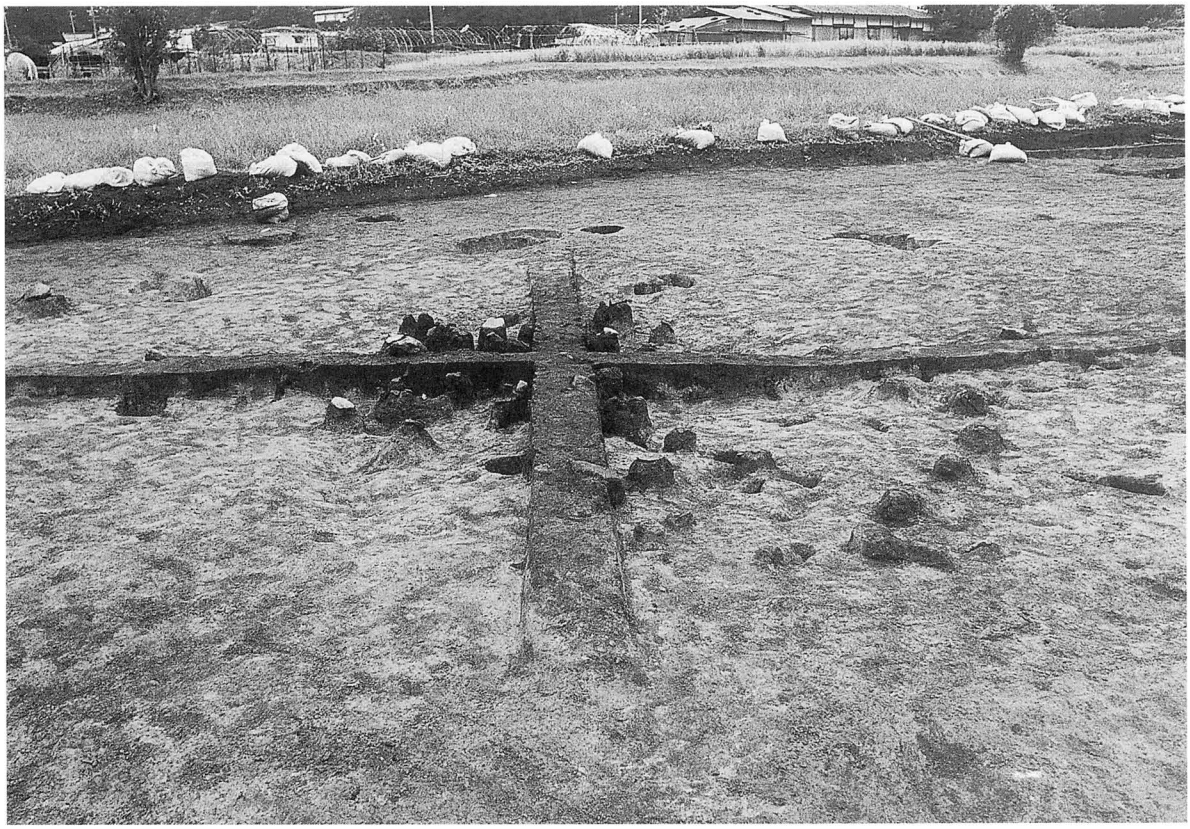
②第１号住居址遺物出土状況（東側から）

図版12

①第２号住居址遺物出土状況（北側から）落し穴との切り合い関係がよく判る



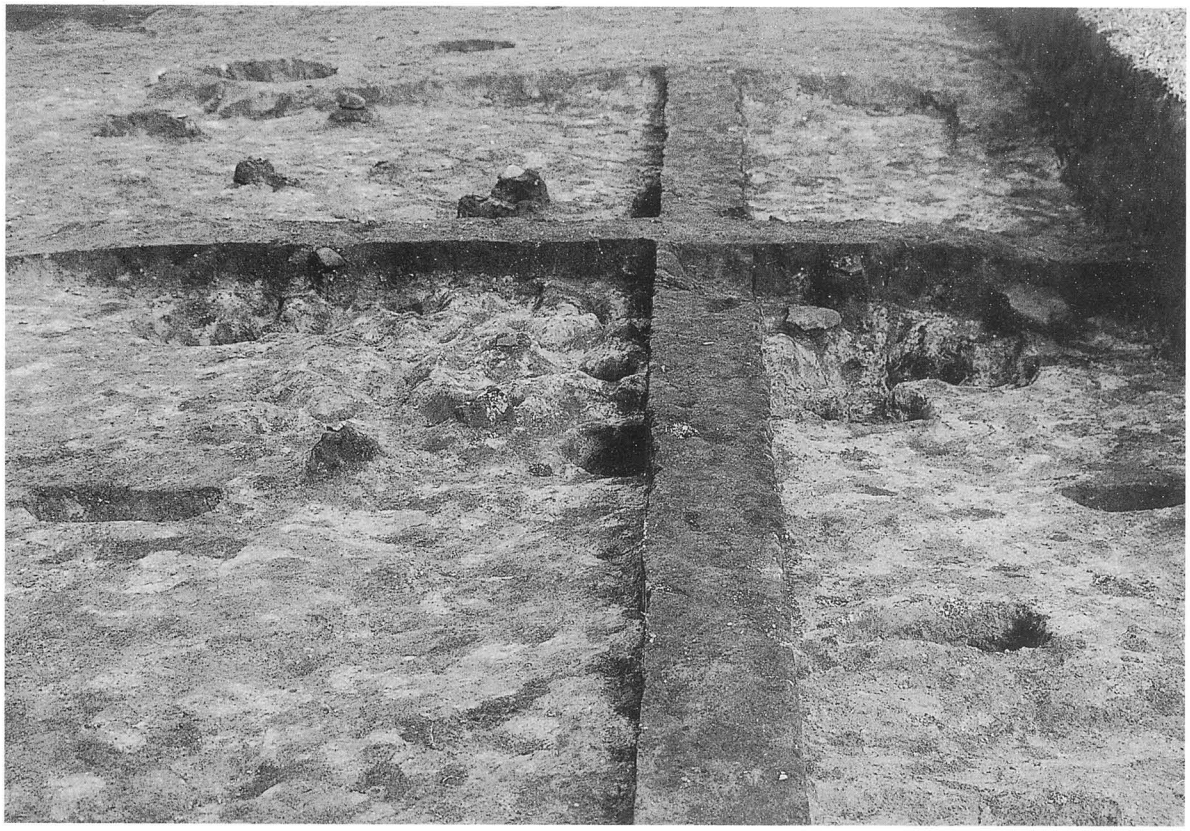
②第２号住居址検出状況（南側から）左側は斬り合っている落し穴



①第３号住居址遺物出土状況（北側から）

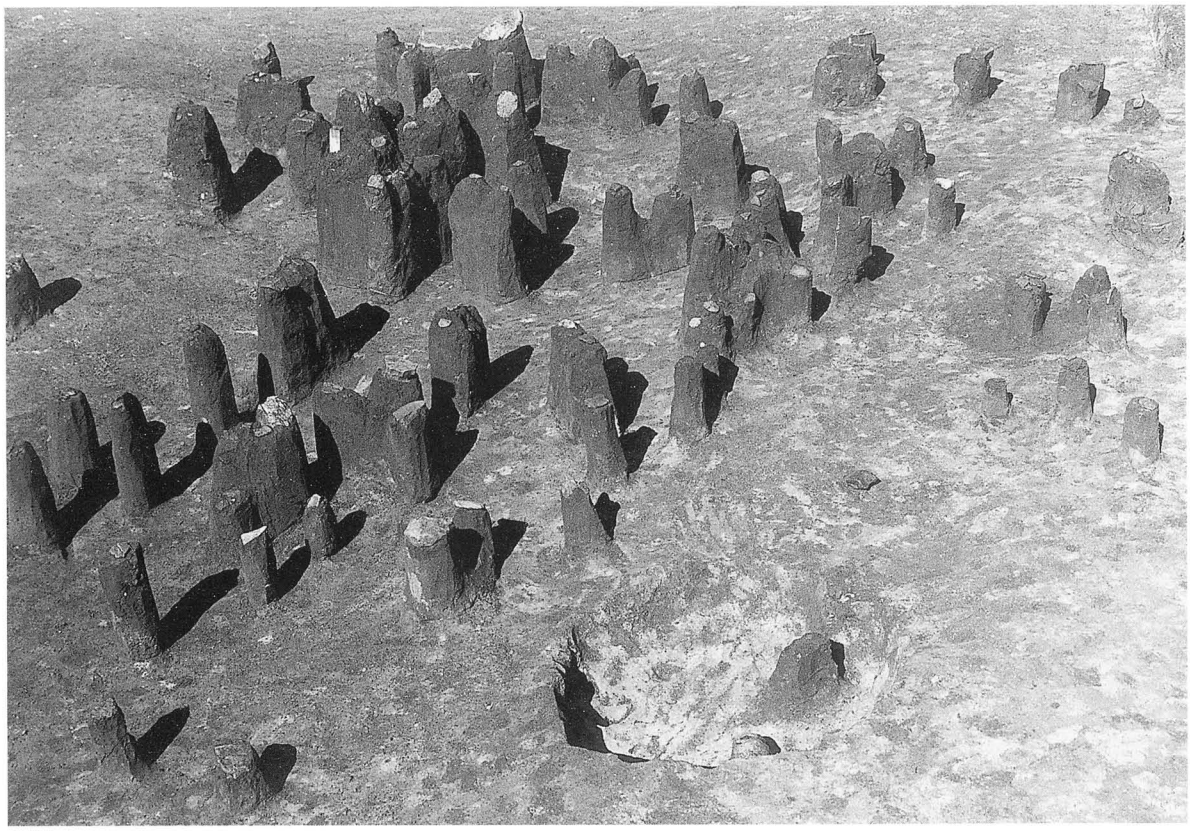
②第３号住居址完掘状況（南側から）

図版14



①第４号住居址遺物出土状況（西側から）

②第４号住居址完掘状況（東側から）

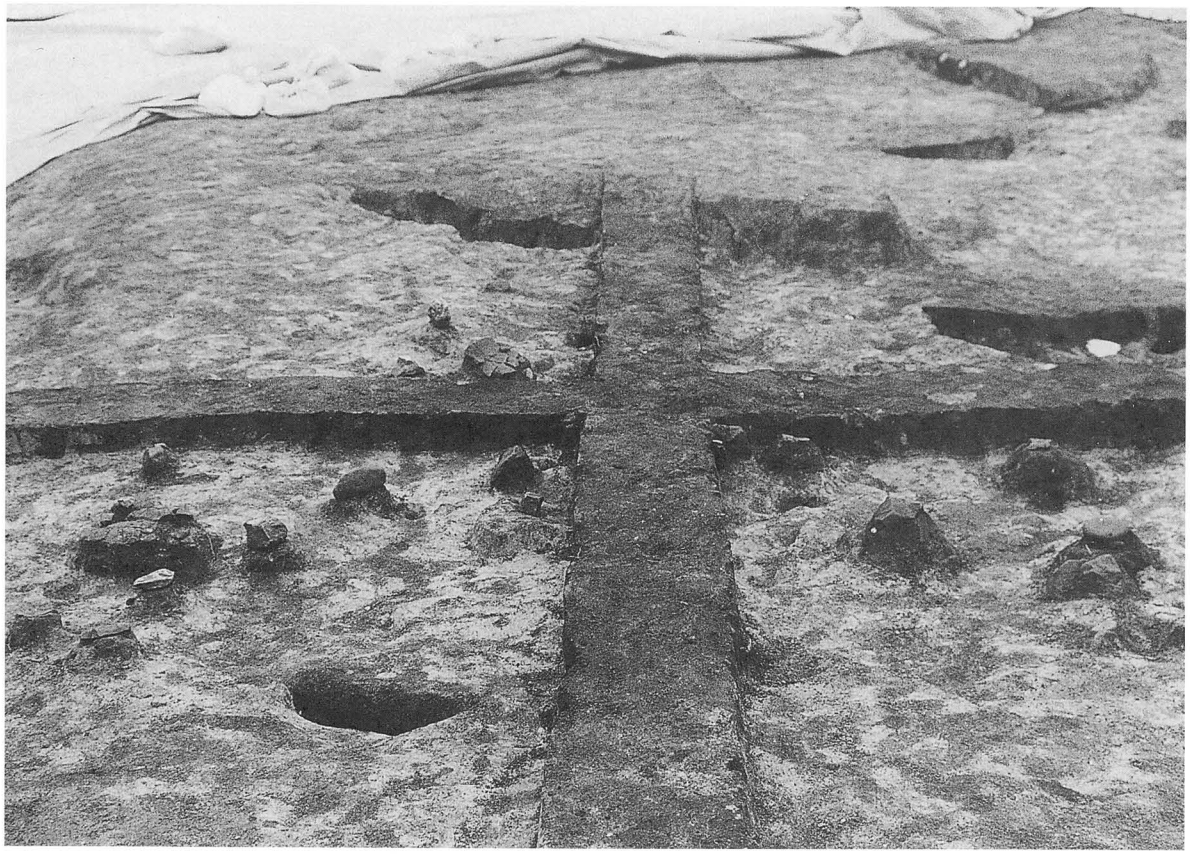


①第５号住居址遺物出土状況（南東側から）

②第５号住居址土器検出状況（北側から）断面に現われた土器胴部

図版16

①第６号住居址検出状況（南側から）



②第６号住居址遺物出土状況（西側から）

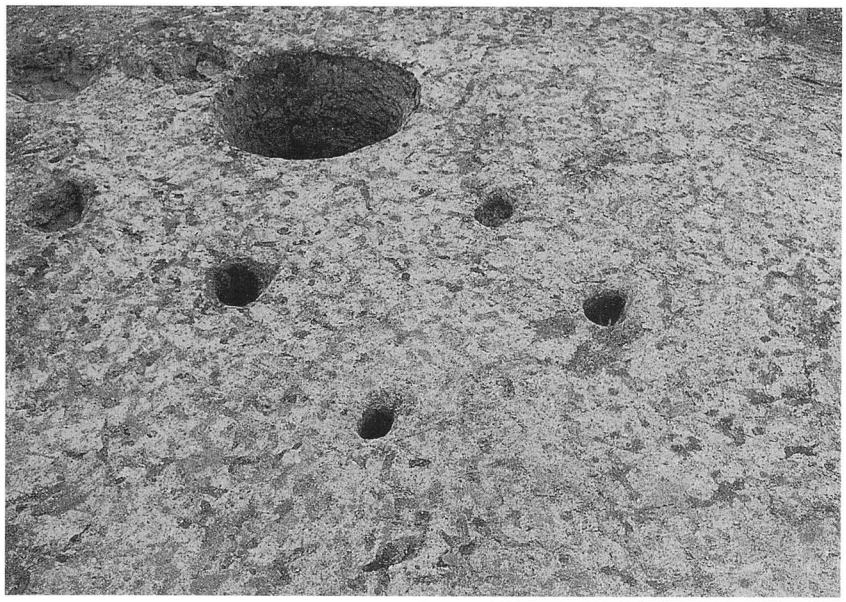
①第７号住居址検出状況（南側から）

②第７号住居址遺物出土状況（北側から）

図版18

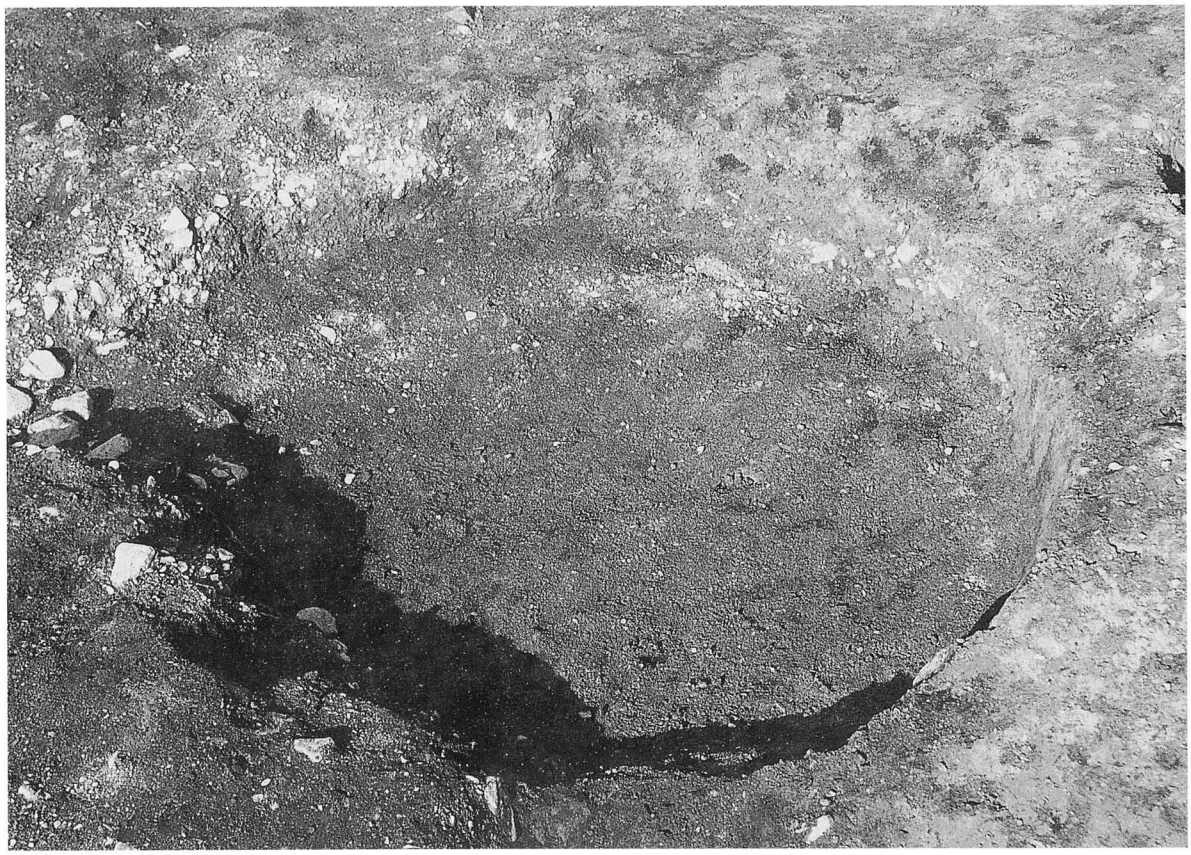
①第8号住居址検出状況（南側から）

②第8号住居址出土土器（南側から）



③第8号住居址完掘状況（南側から）

①第９号住居址断面（南側から）　右は第91号土坑



②第９号住居址完掘状況（南側から）

図版20

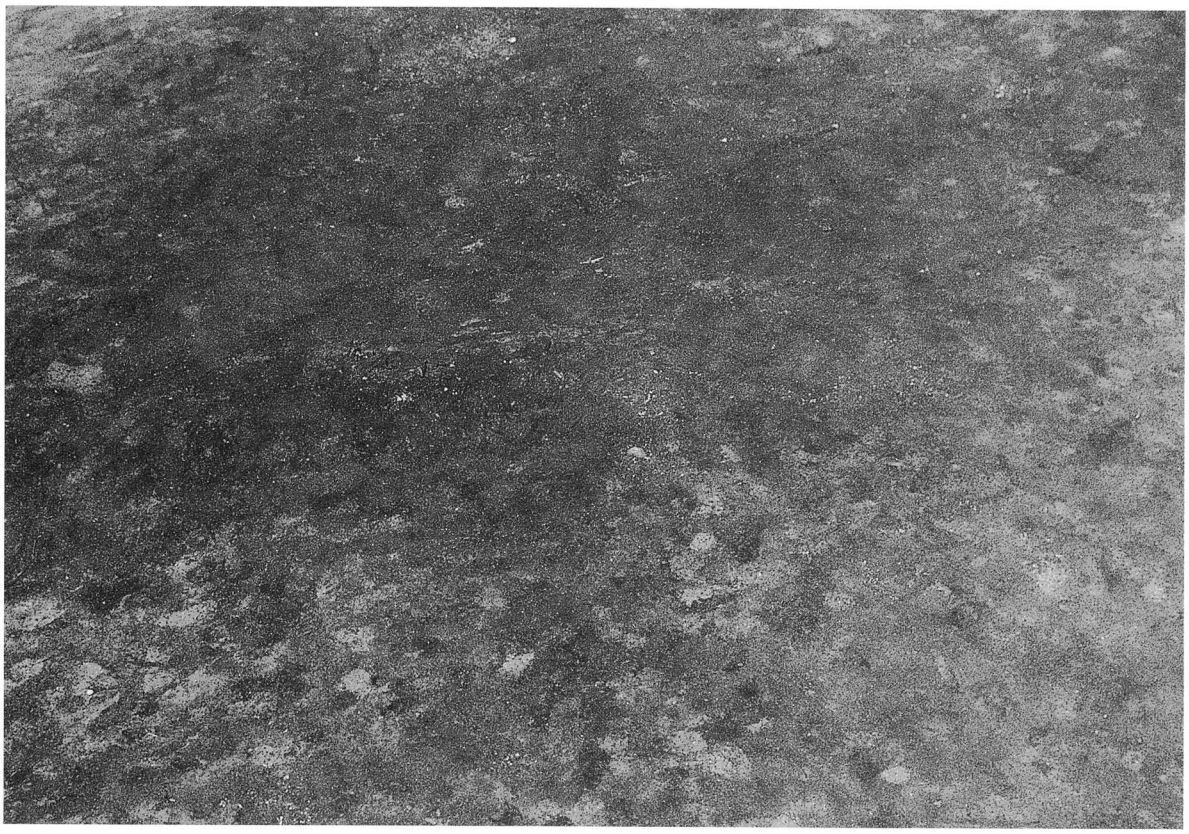
①第10号住居址検出状況（南側から）

②第10号住居址完掘状況（南側から）

①第11号住居址検出状況（南側から）

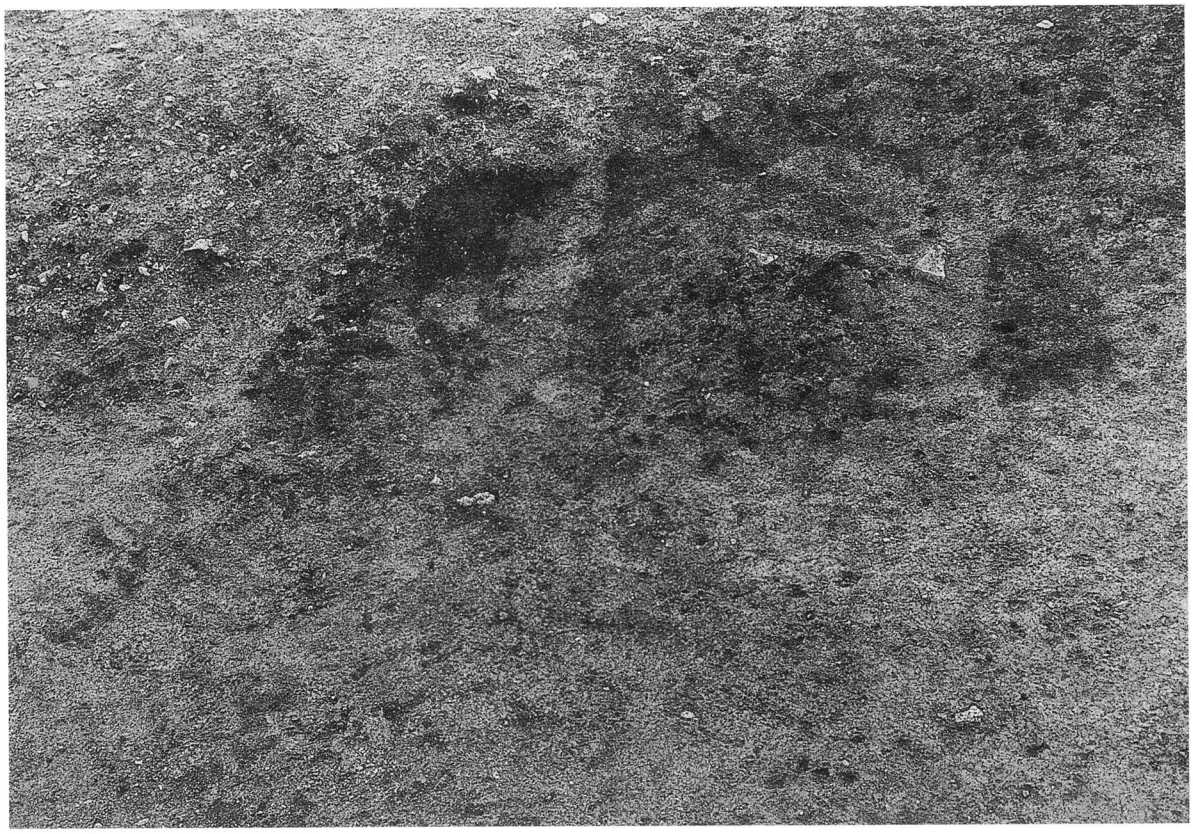
②第11号住居址完掘状況（南側から）

図版22



①第12号住居址検出状況（南側から）

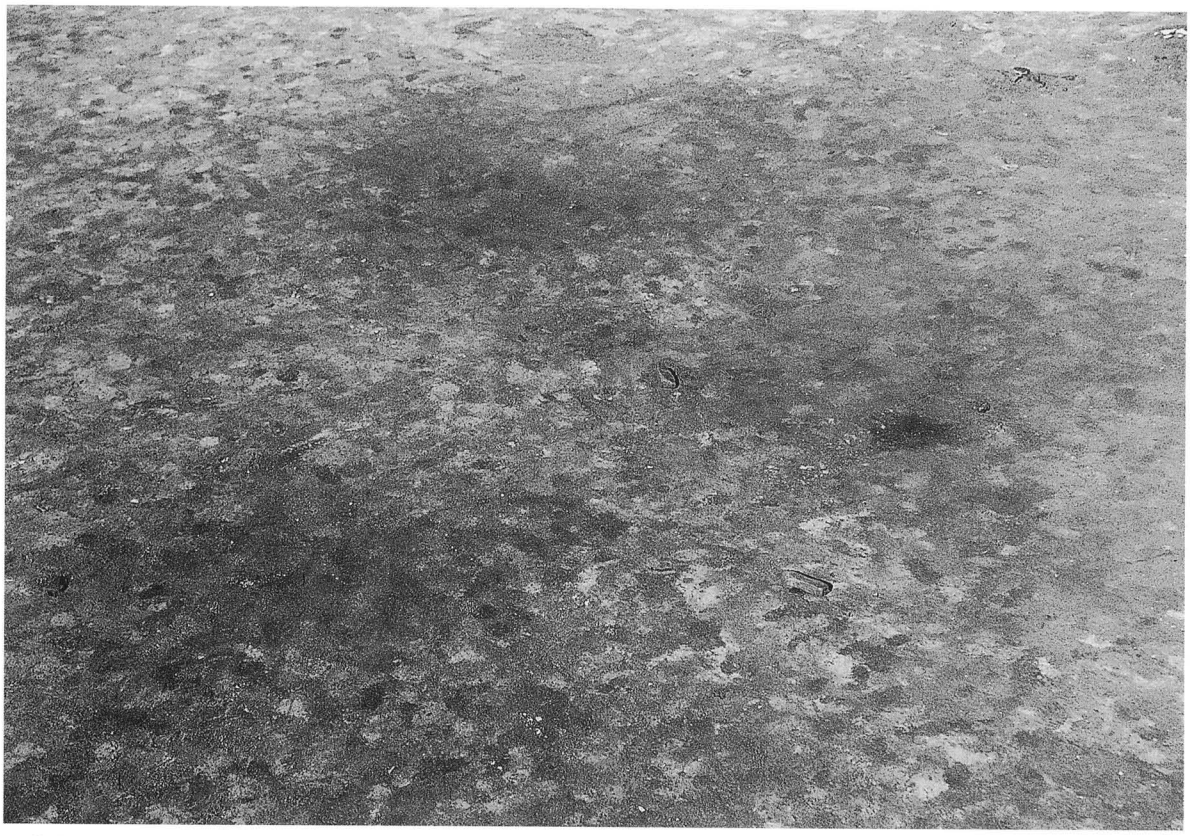
②第12号住居址遺物出土状況（南側から）



①第13号住居址検出状況（西側から）

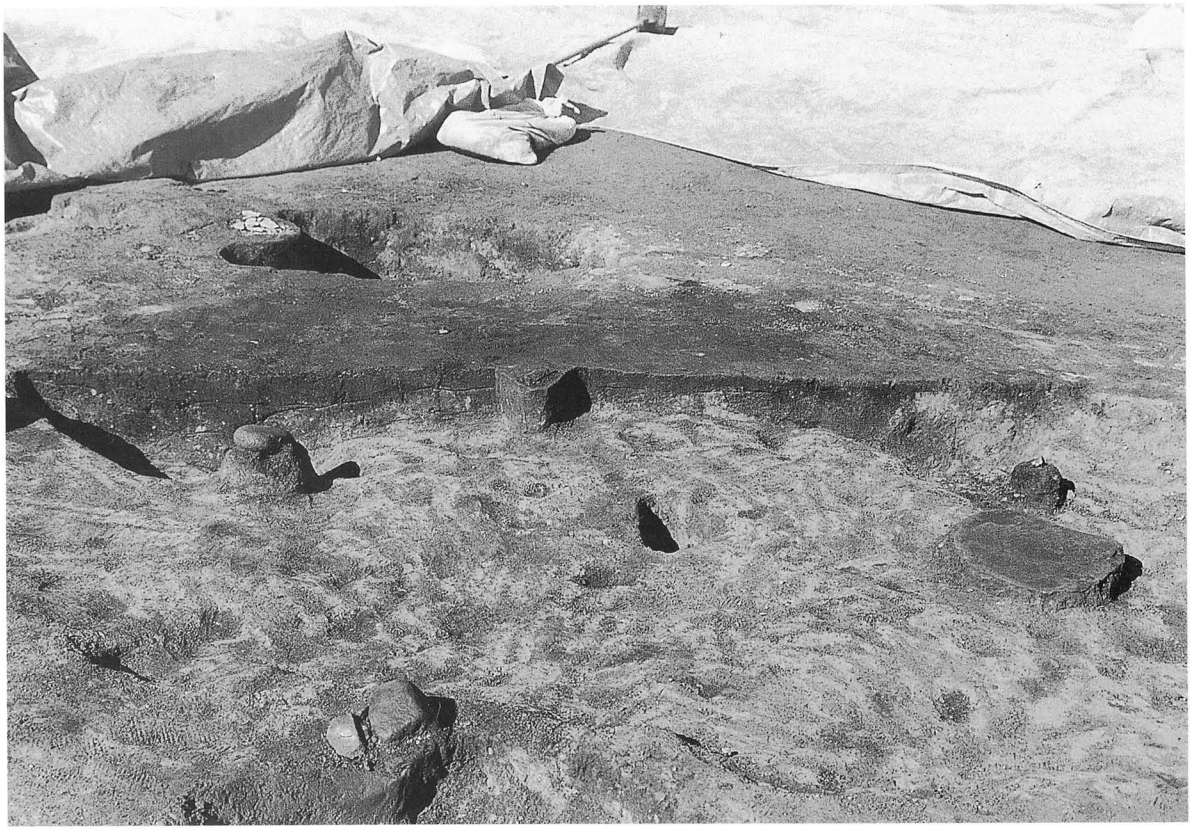
②第13号住居址遺物出土状況（南側から）

図版24



①第14号住居址検出状況（南側から）

②第14号住居址遺物出土状況（南東側から）

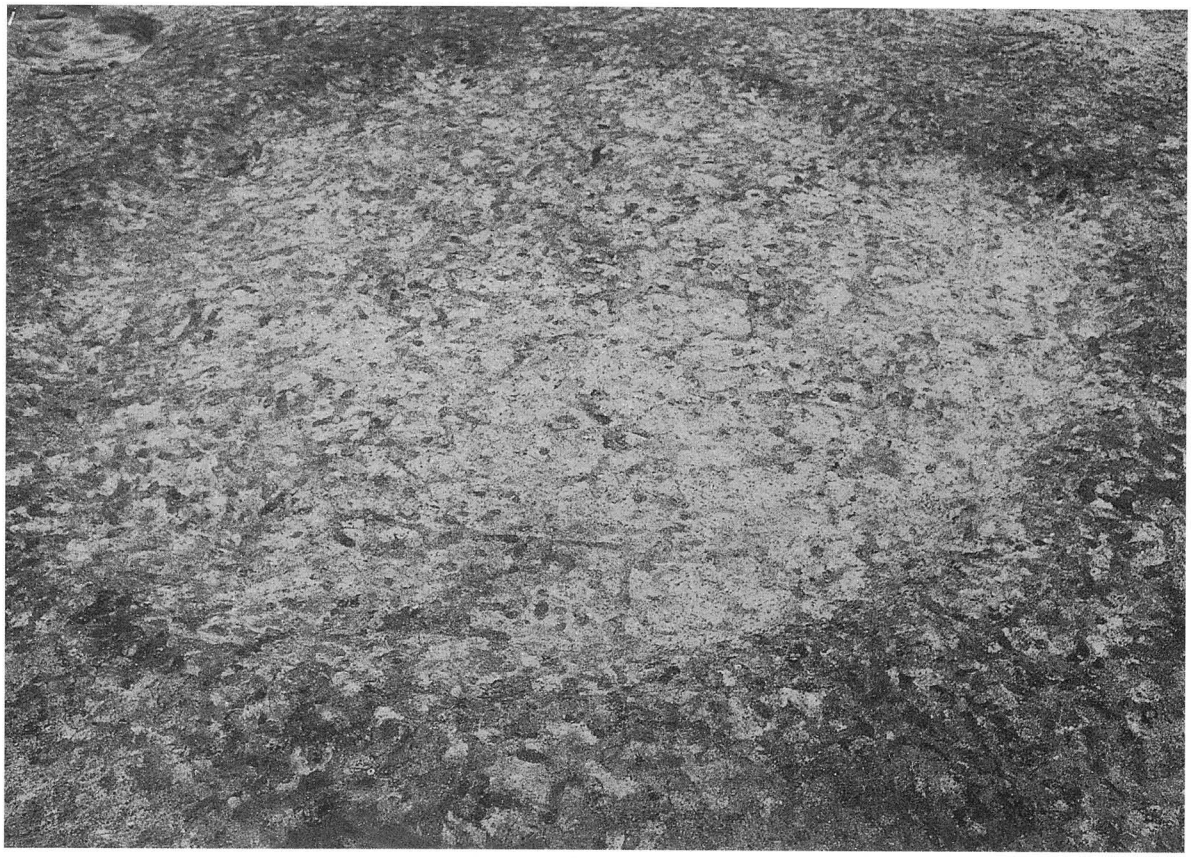


①第15号住居址遺物出土状況（南東側から）

②第15号住居址完掘状況（南側から）

図版26

①第16号住居址検出状況（南東側から）

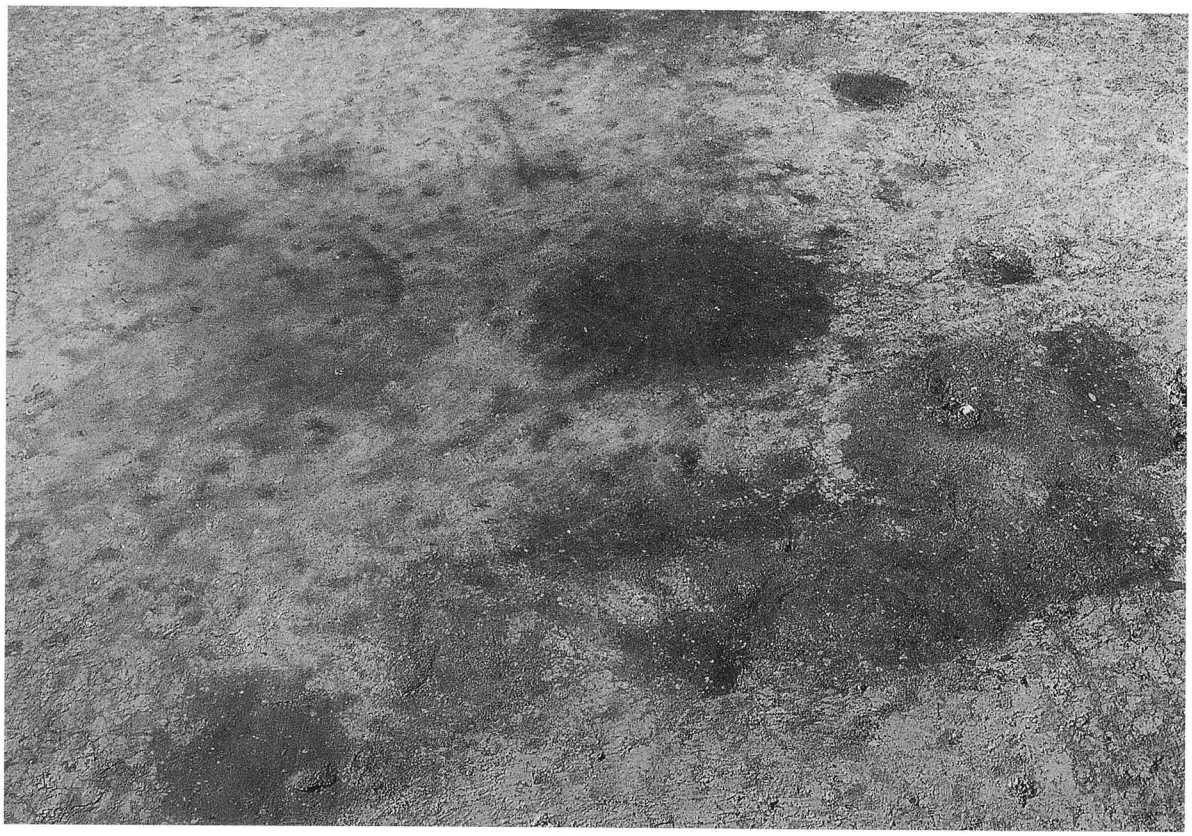


②第16号住居址完掘状況（南側から）

①第17号住居址遺物出土状況（南側から）

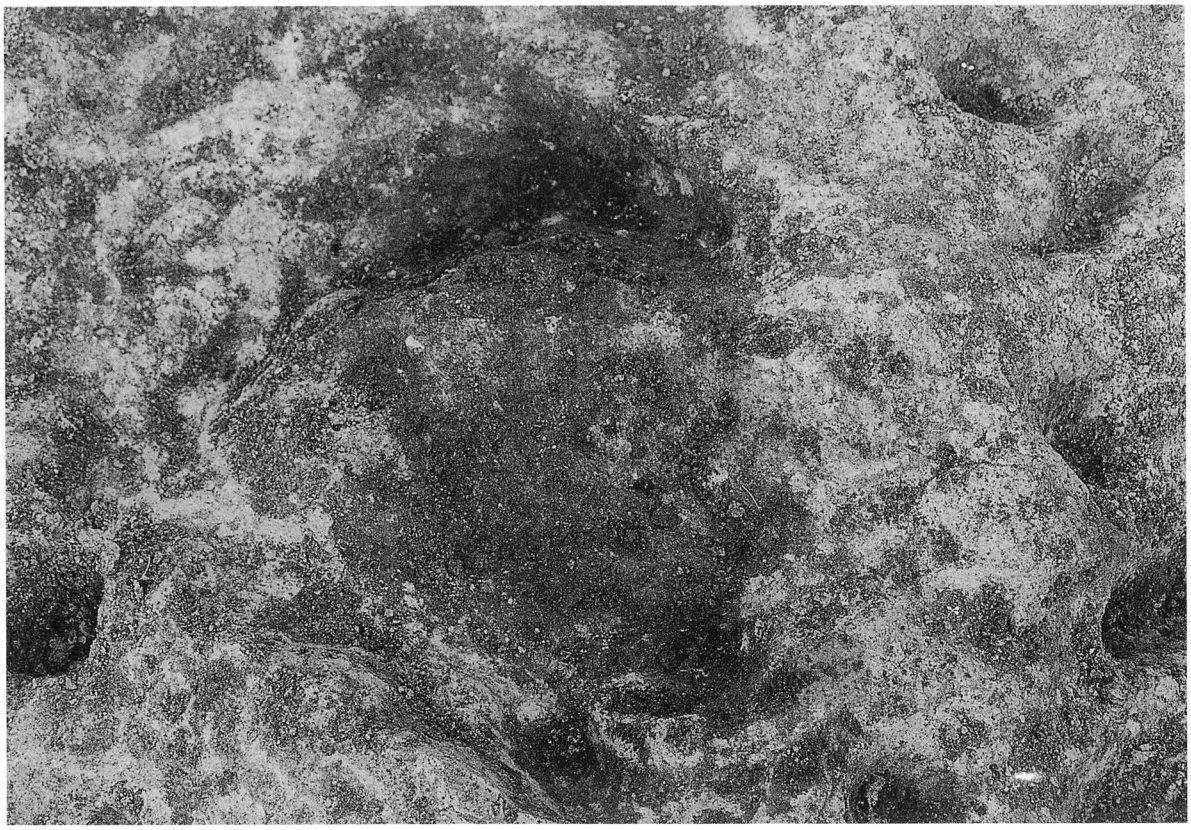
②第17号住居址完掘状況（西側から）

図版28



①第18号住居址検出状況（西側から）

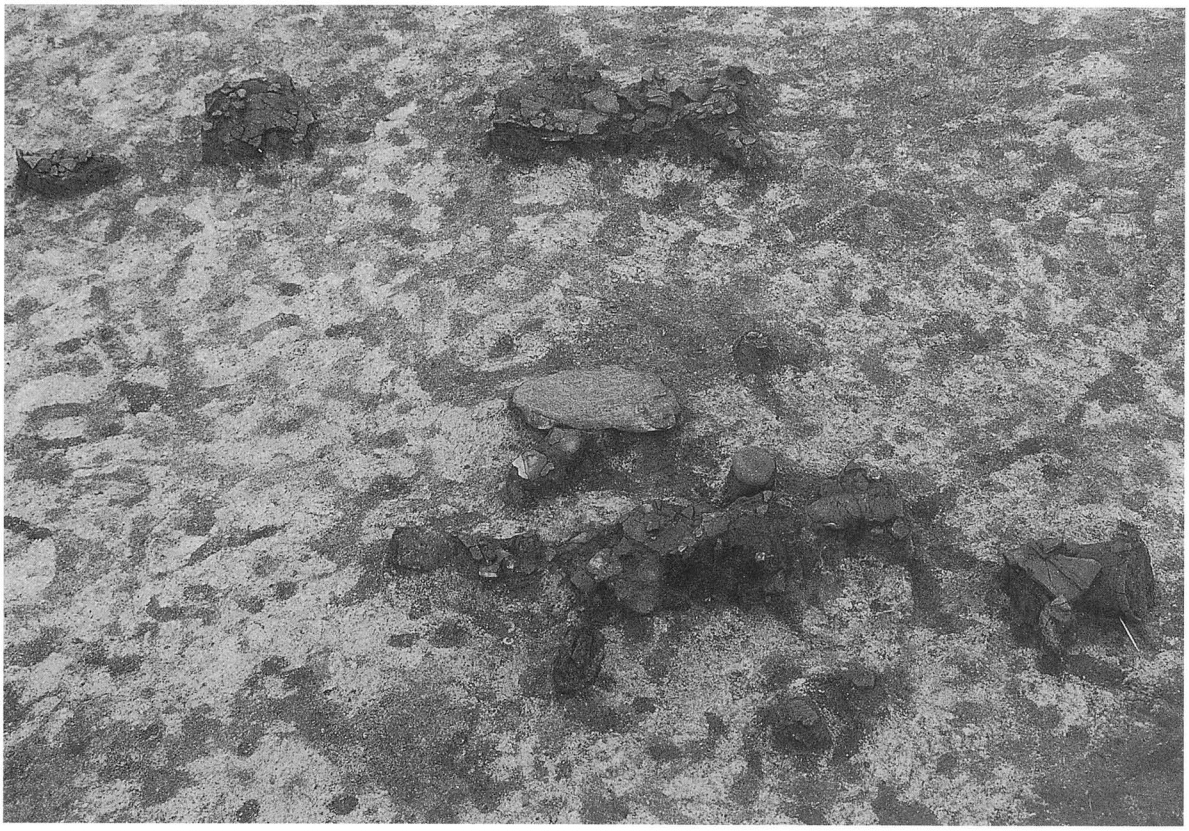
②第18号住居址完掘状況（南側から）



①第19号住居址炉（南側から）

②第19・22号住居址完掘状況

図版30



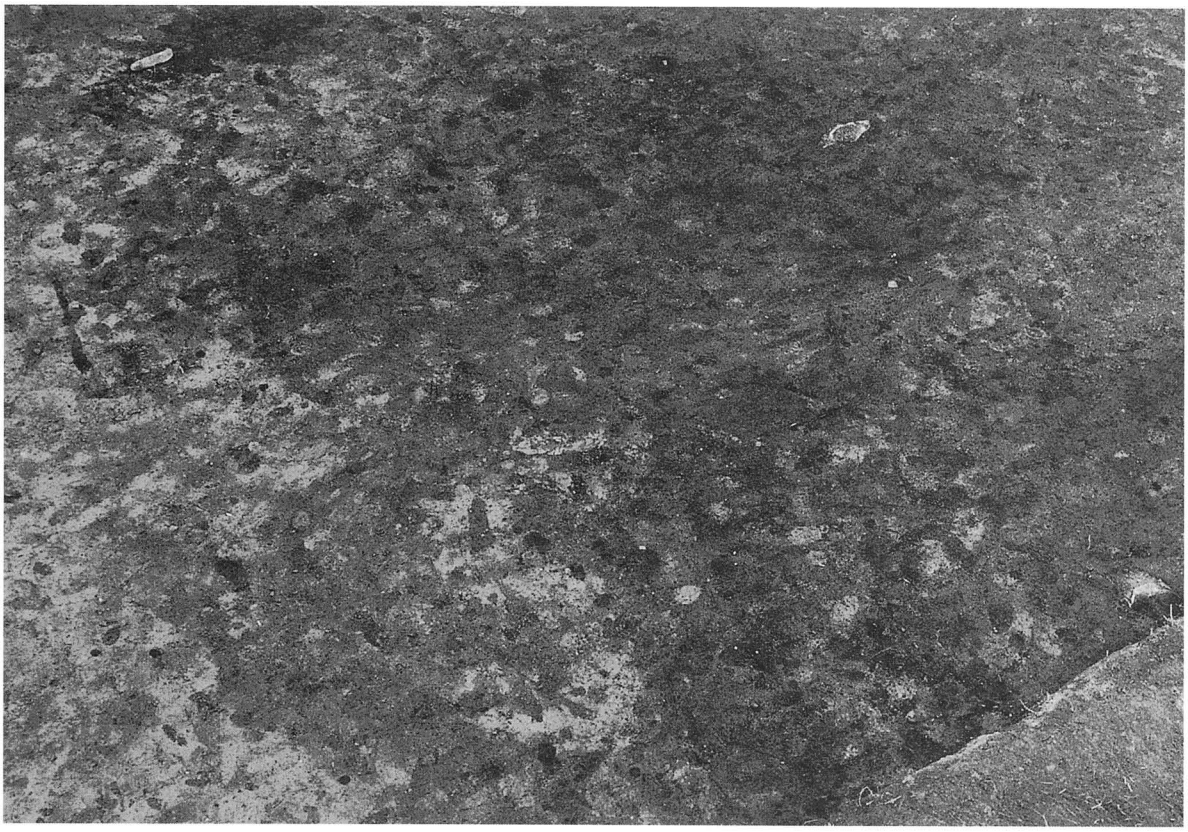
①第20号住居址遺物出土状況（南側から）

②第20号住居址遺物出土状況（北側から）

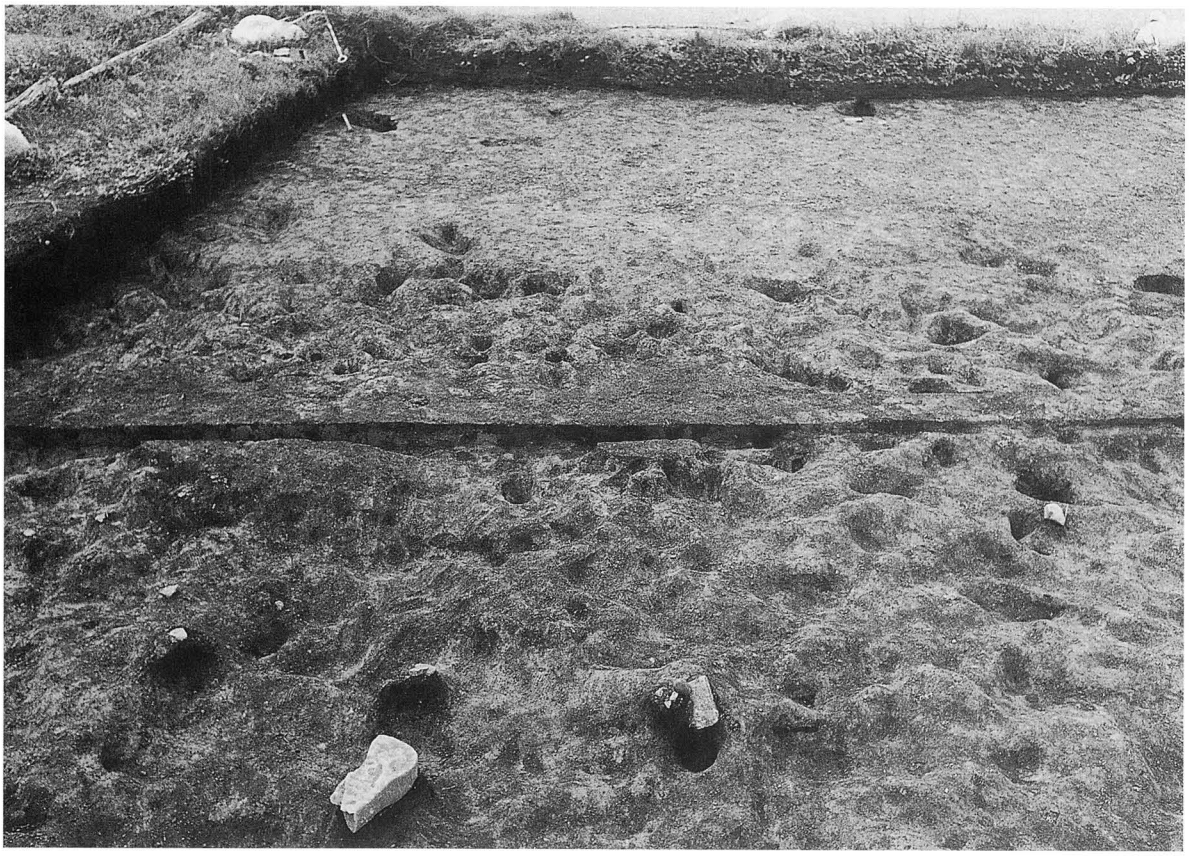
①第20号住居址土器出土状況（北側から）

②第20号住居址完掘状況（南側から）

図版32



①第22・32号住居址検出状況（南側から）



②第22・32号住居址遺物出土状況（北東側から）

①第23号住居址検出状況（南側から）

②第23号住居址遺物出土状況（南側から）

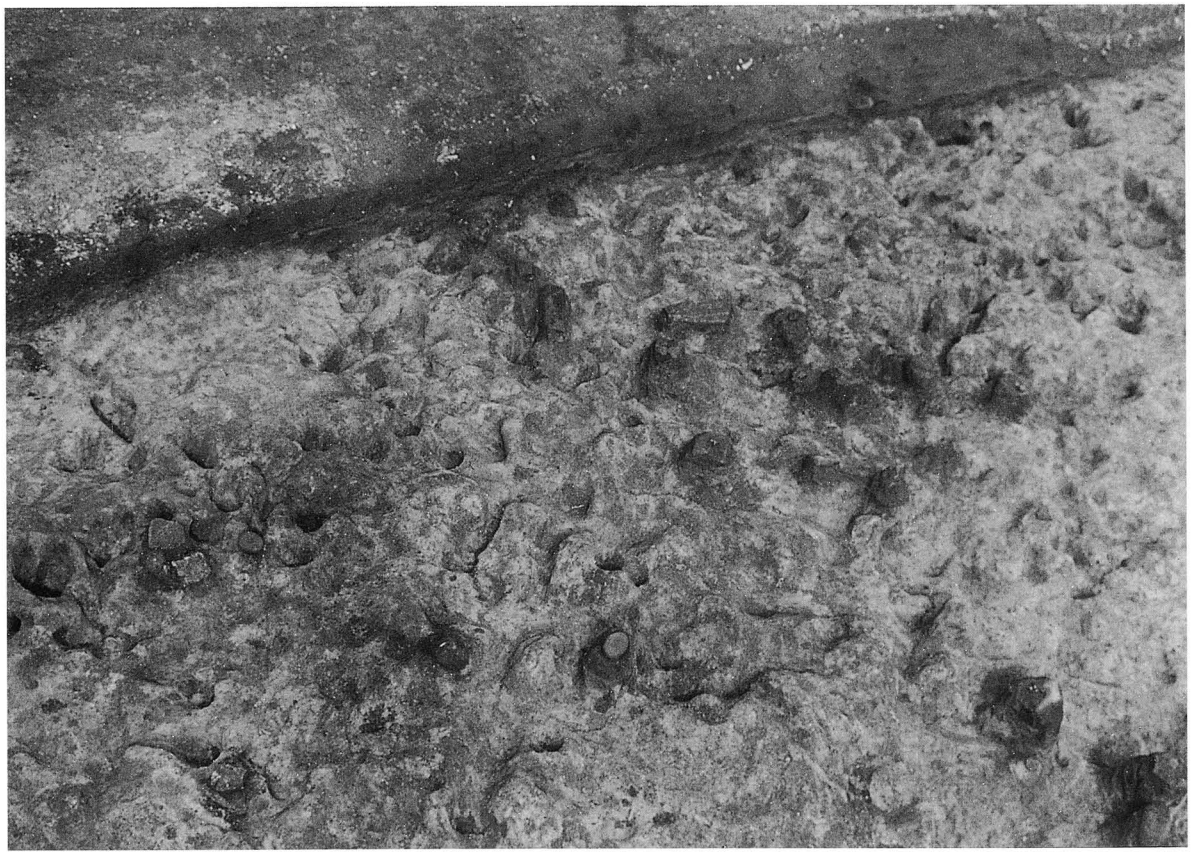
③第23号住居址遺物出土状況

図版34

①第24号住居址検出状況（南側から）

②第24号住居址遺物出土状況（南側から）

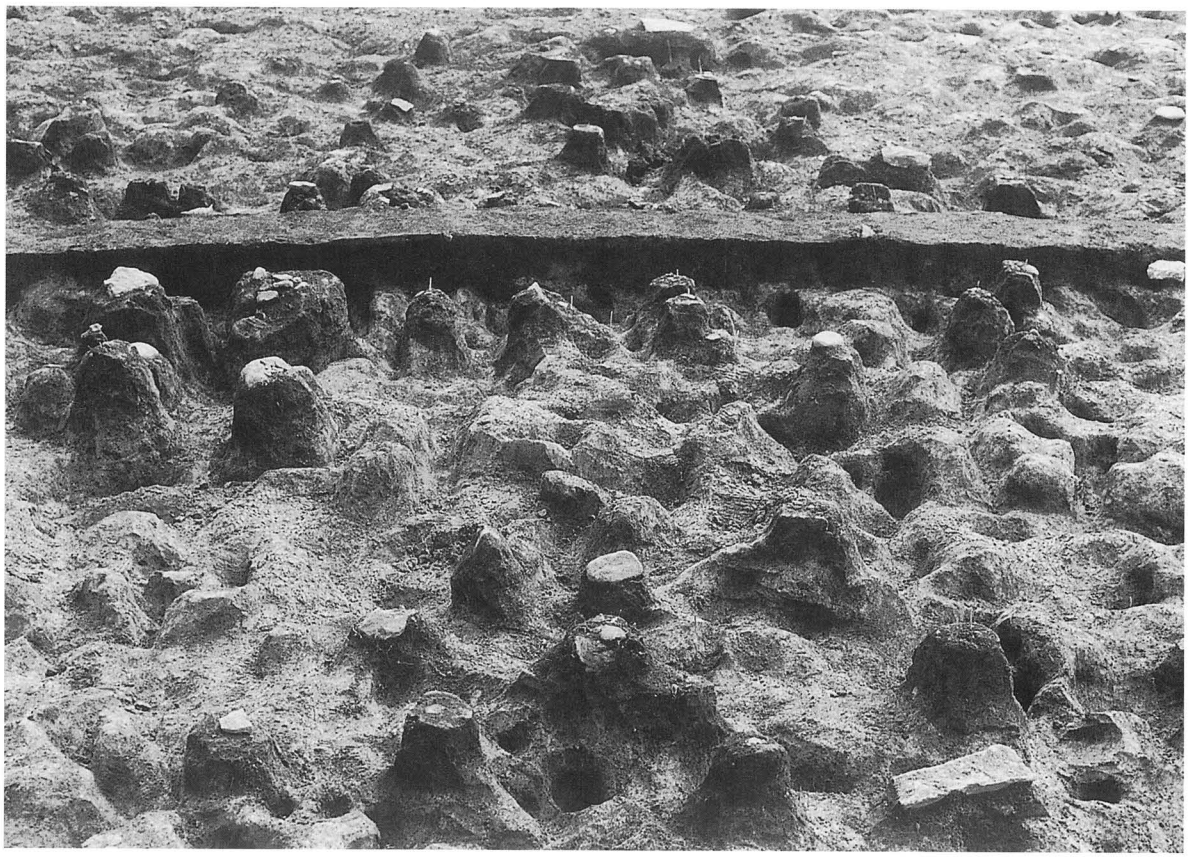
①第25号住居址検出状況（南側から）



②第25号住居址遺物出土状況（南側から）

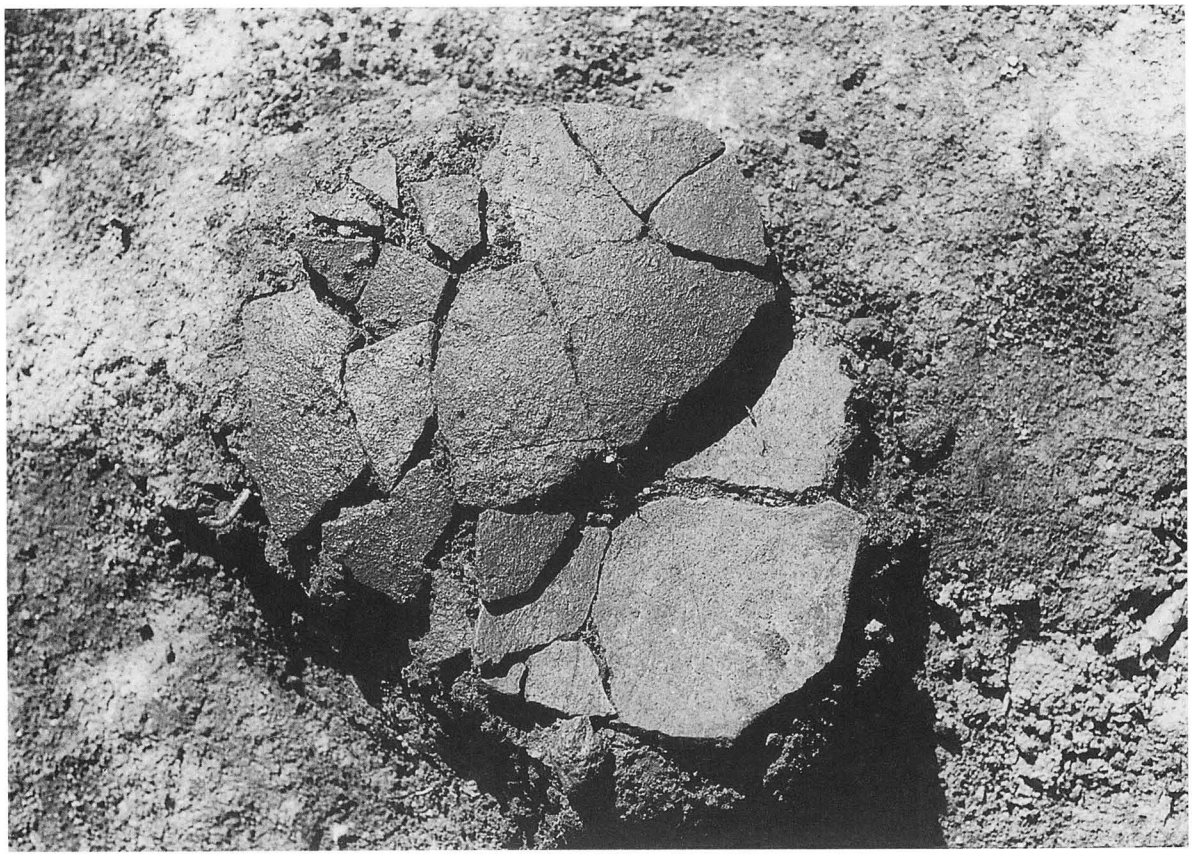
図版36

①第26・33号住居址検出状況（南側から）



②第26号住居址遺物出土状況（北側から）

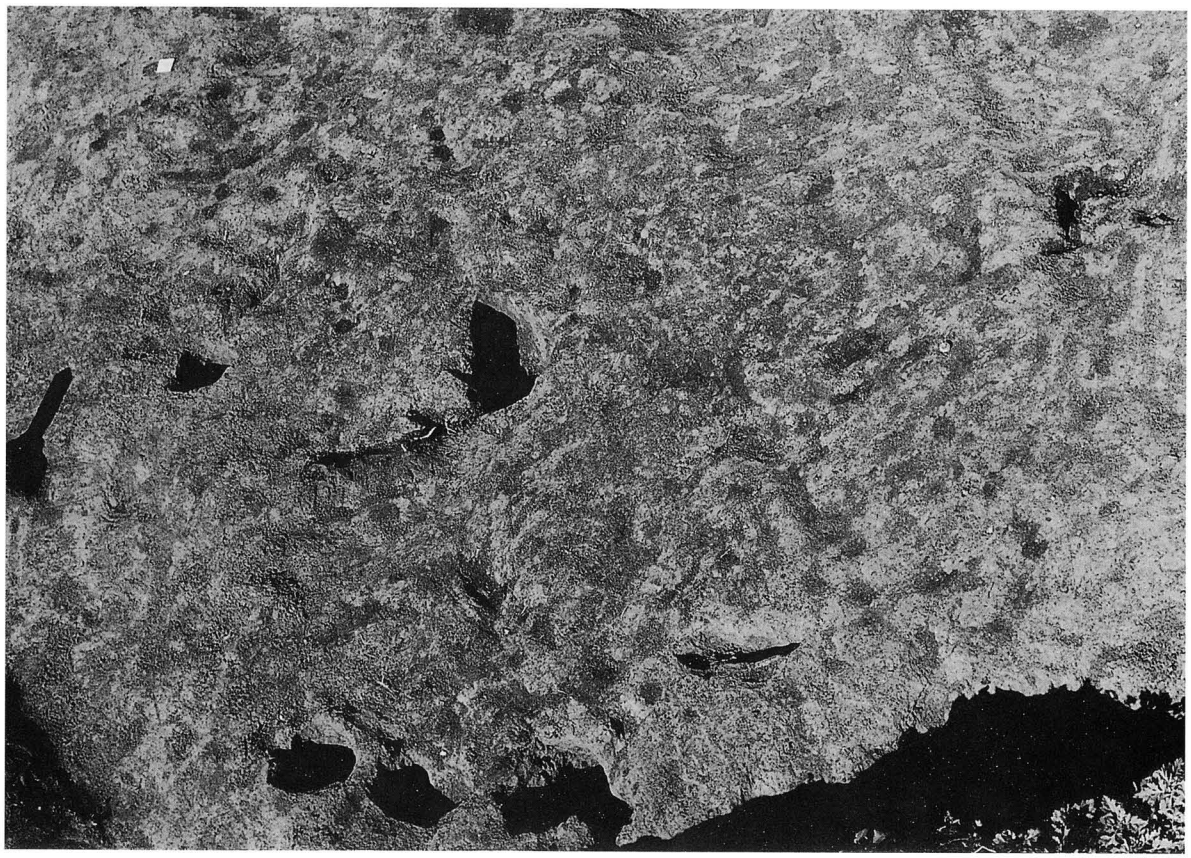
①第27号住居址検出状況（南側から）



②第27号住居址土器出土状況（北側から）

図版38

①第28号住居址検出状況（西側から）



②第28号住居址遺物出土状況（南側から）

①第29号住居址検出状況（西側から）

②第29号住居址（西側から） 焼土を残して掘り上げた状態

図版40

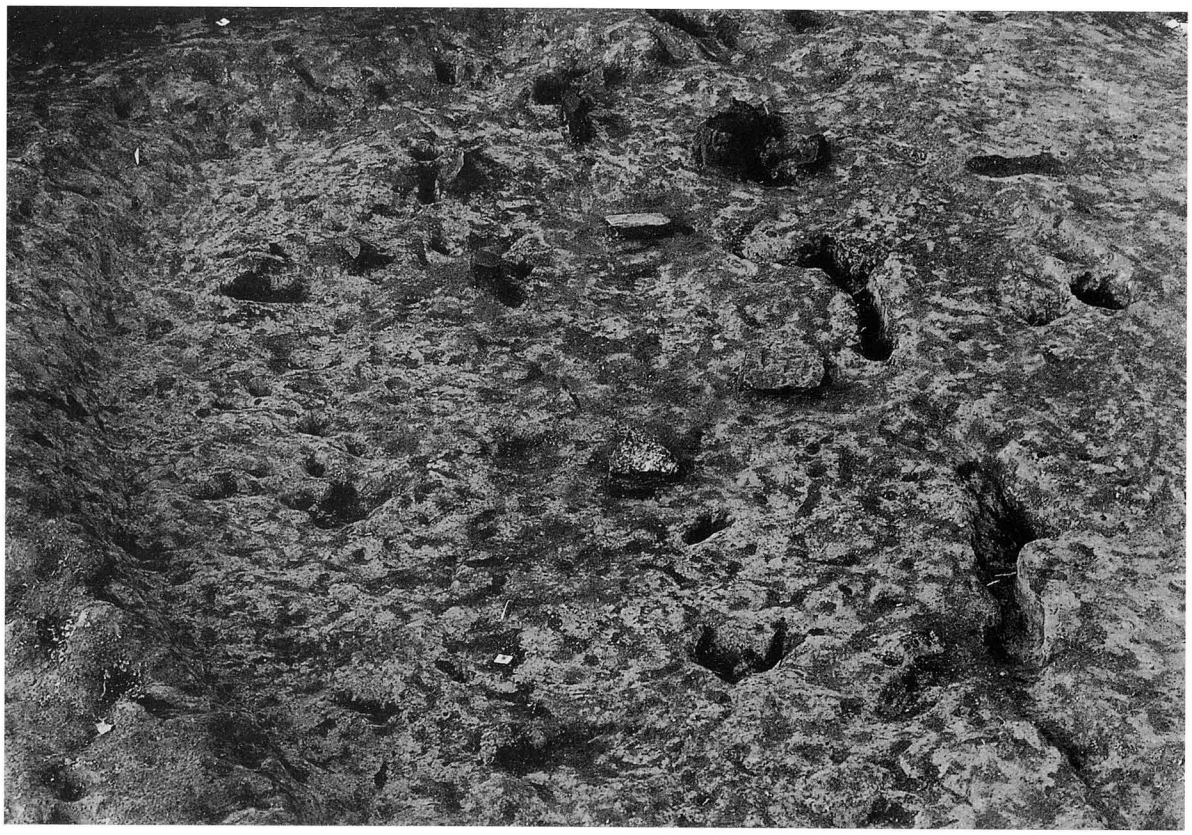
①第30号住居址遺物出土状況（南側から）

②第30号住居址検出状況（南側から）

①第31・34号住居址検出状況（南側から）

②第31・34号住居址遺物出土状況（南側から）

図版42



①第31号住居址床直上遺物出土状況（南側から）

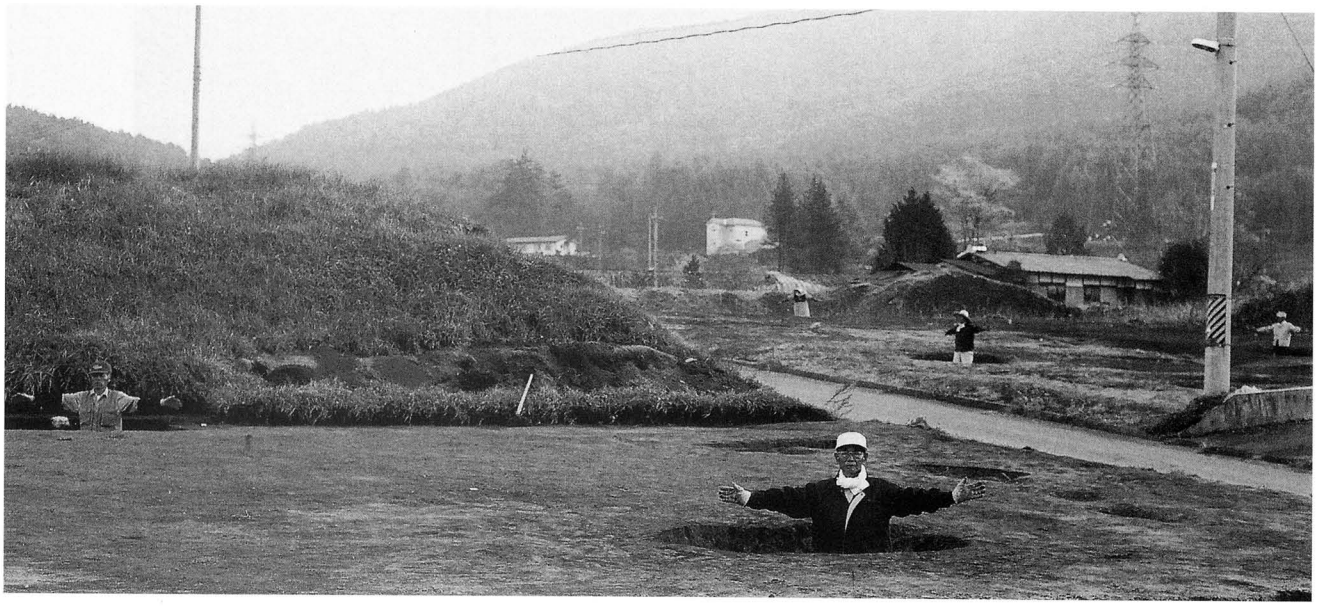
②第31・34号住居址完掘状況（南側から）

①第35号住居址遺物出土状況（西側から）

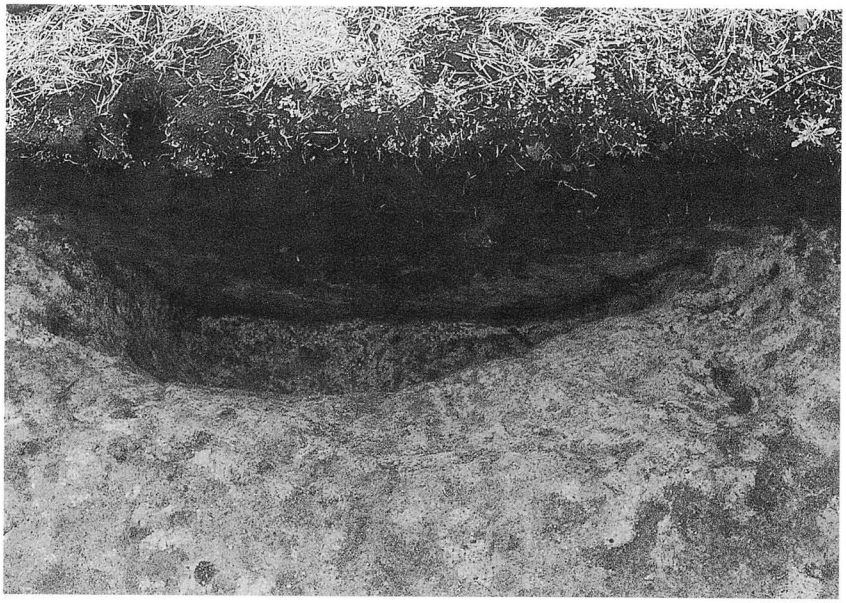
②第35号住居址竈脇土坑遺物出土状況（北側から）

③第36号住居址火床部分（北側から）

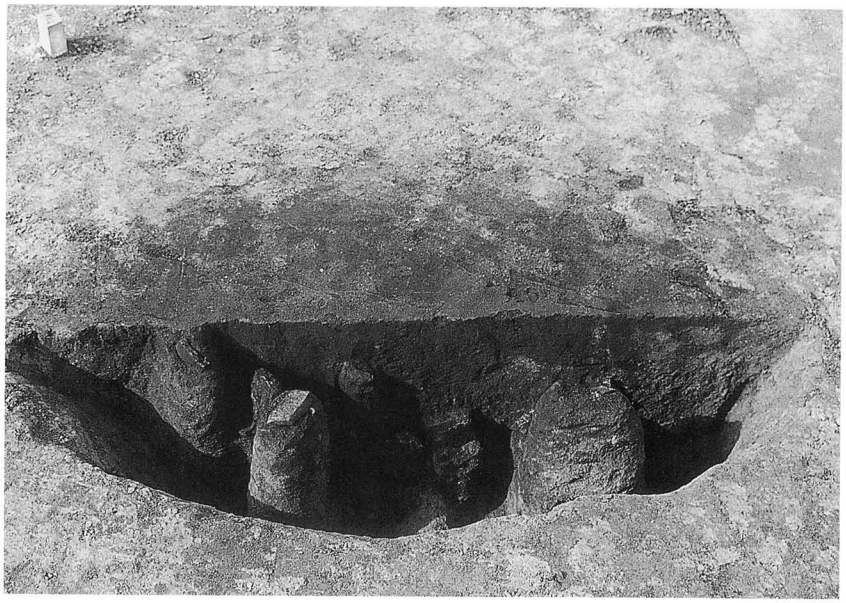
図版44



①２年度にわたる調査区に続く
落し穴位置



②第８号土坑（北側から）



③第16号土坑断面（南側から）

①第16号土坑（北側から）

②第62号土坑断面

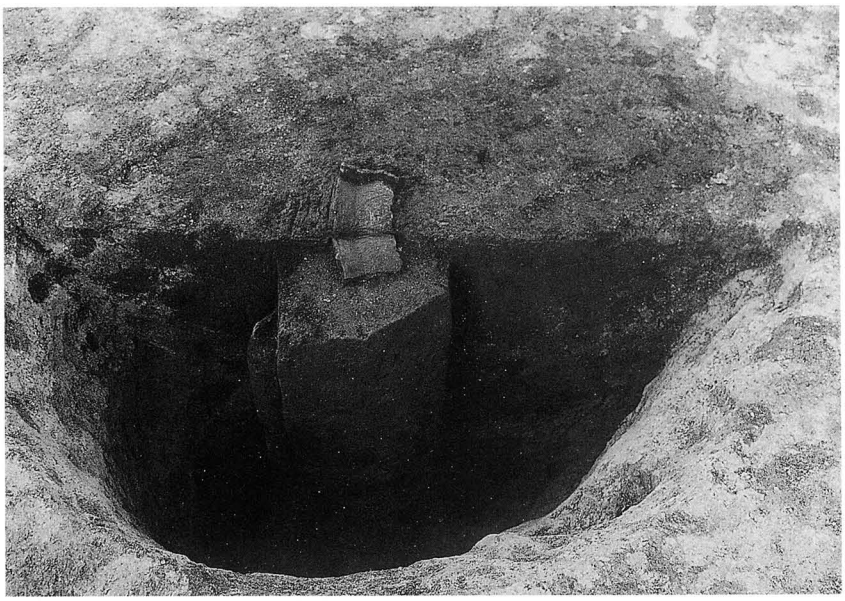
③第62号土坑（北側から）

図版46

①第106号土坑（東側から）

②第106号土坑　鹿の落ちた足跡

③第106号土坑　鹿の逃げ出した足跡



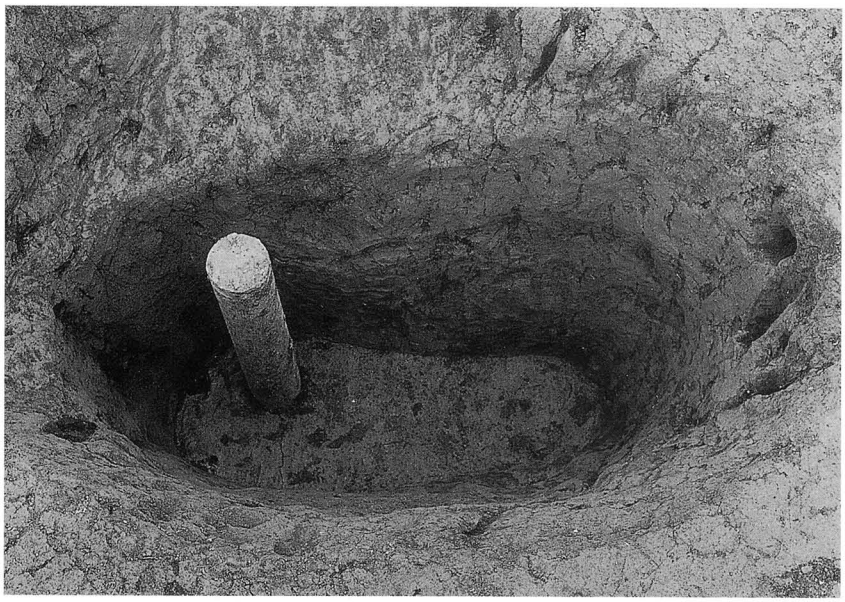
①第132号土坑断面（西側から）

②第132号土坑（南側から）

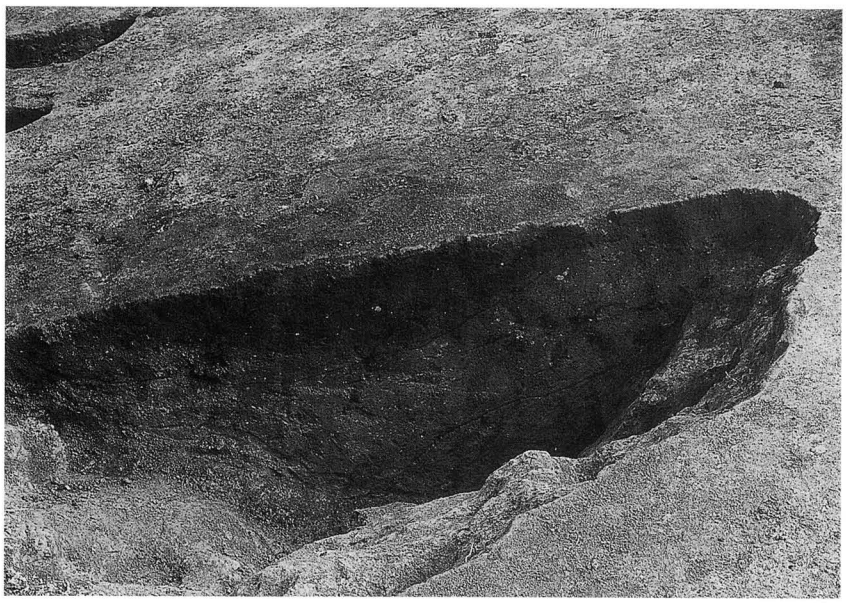
③第143号土坑（北側から）

図版48

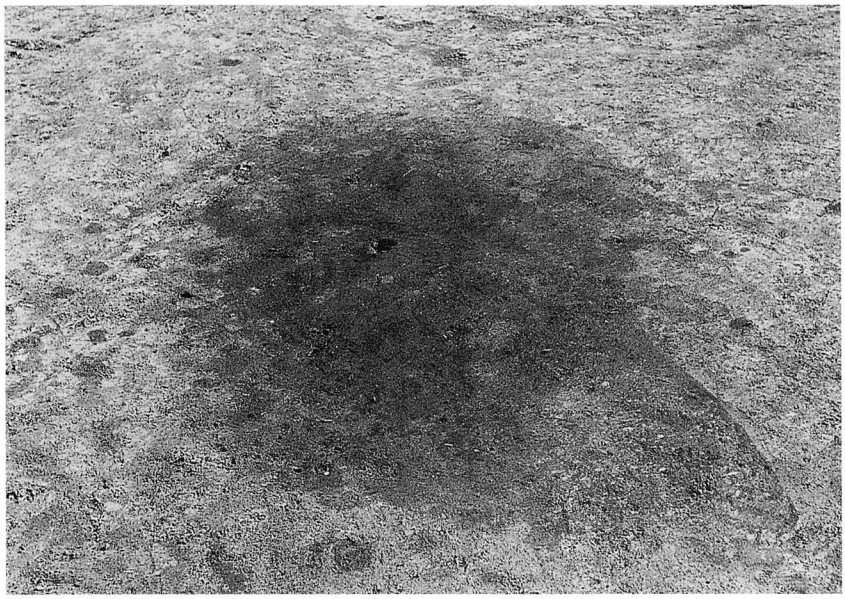
①第143号土坑（東側から）



②第148号土坑（東側から）



③第201号土坑断面（西側から）



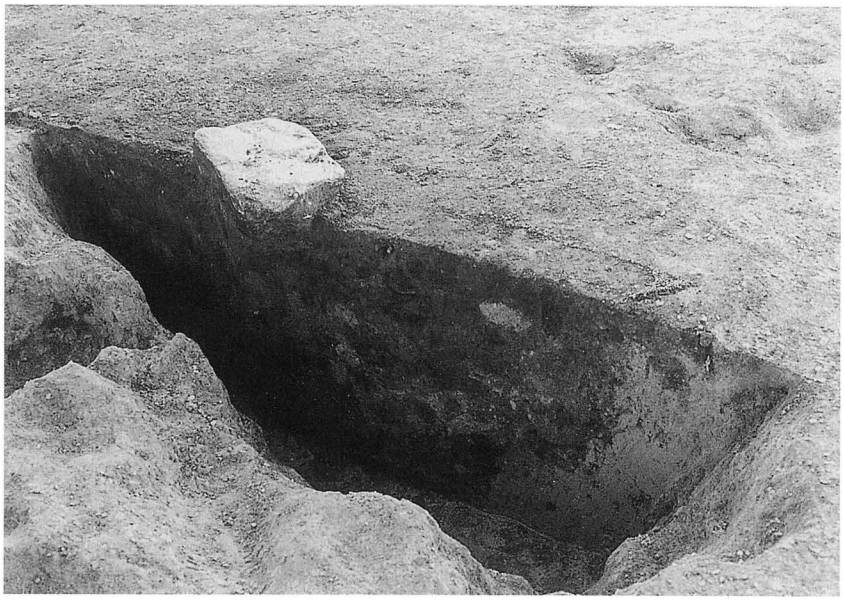
①第225号土坑検出状況（西側から）

②第225号土坑遺物出土状況（南側から）

③第225号土坑完掘状況（南側から）

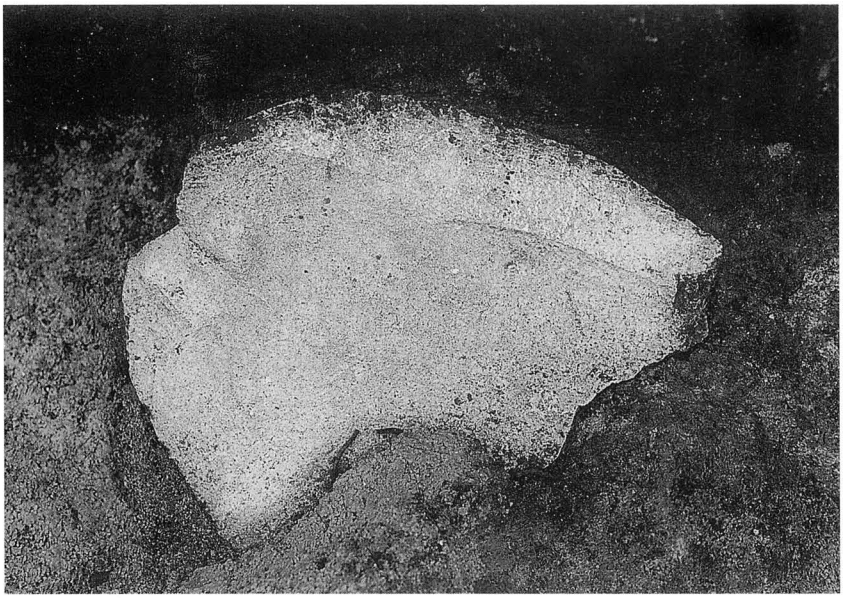
図版50

①第226号土坑断面（北側から）

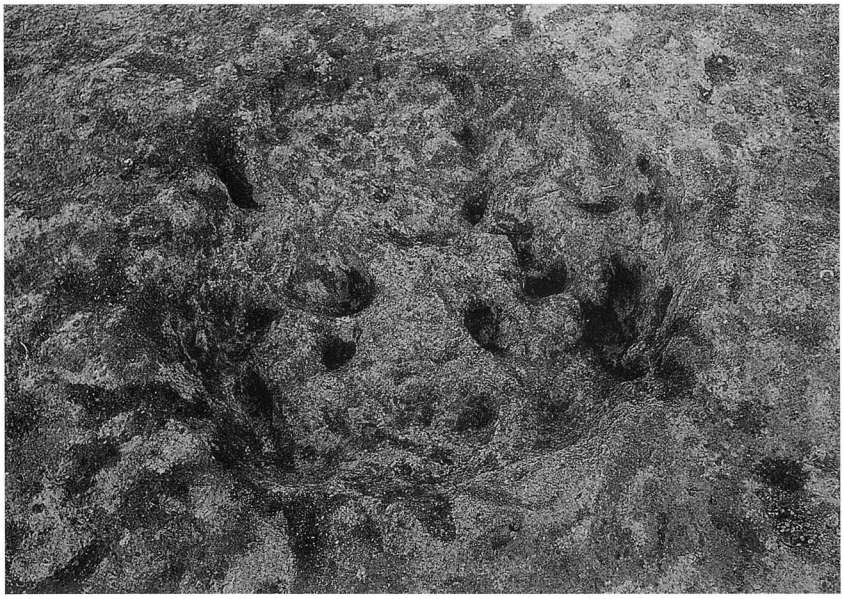


②第227号土坑断面（東側から）

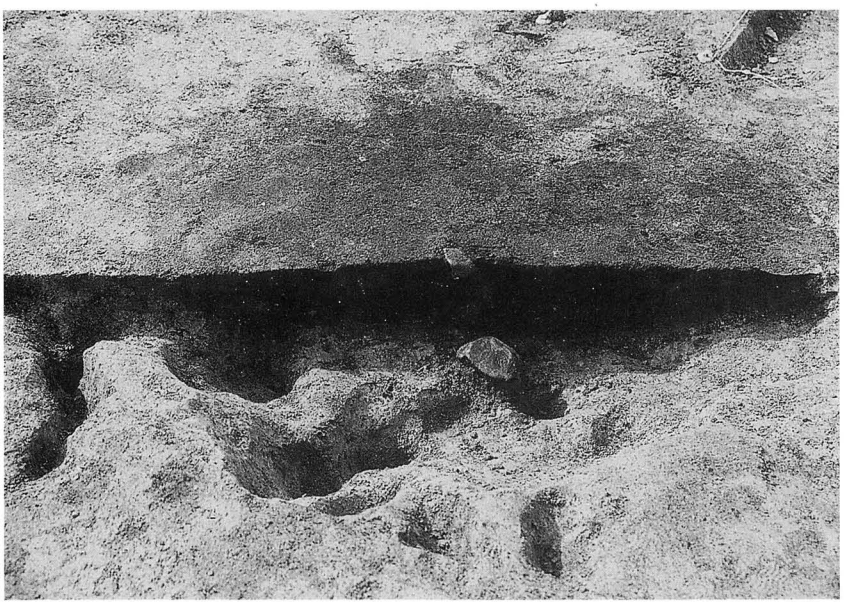
③第227号土坑（西側から）



①第9号土坑出土石器（西側から）

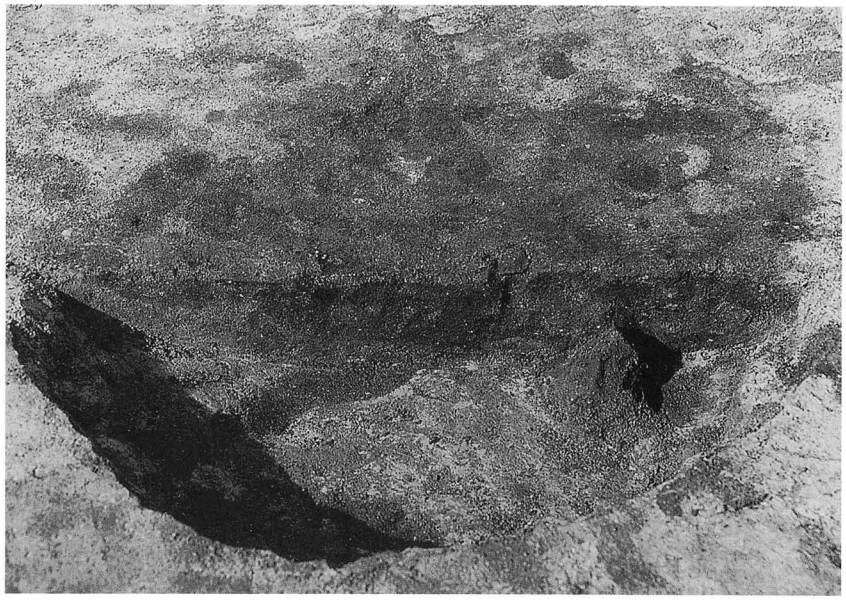


②第9号土坑（西側から）



③第11号土坑断面（南東側から）

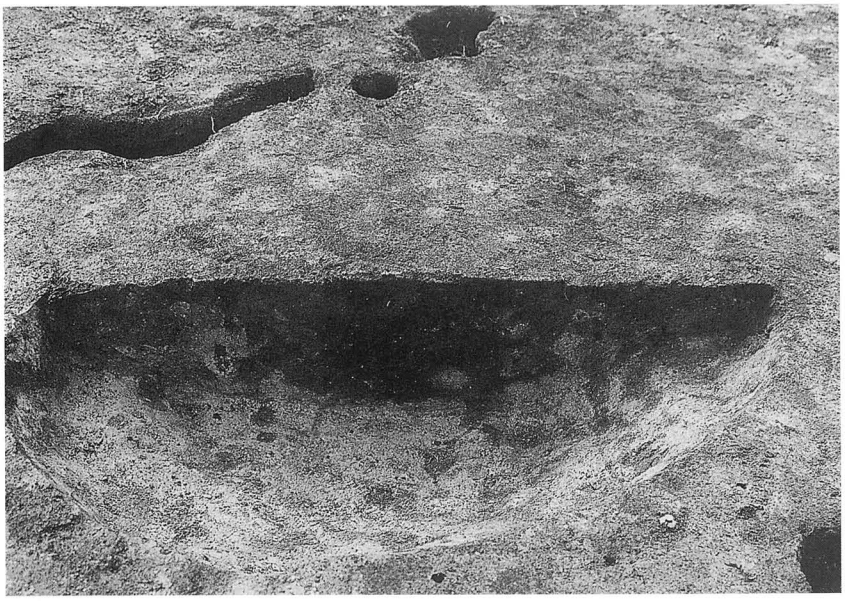
図版52



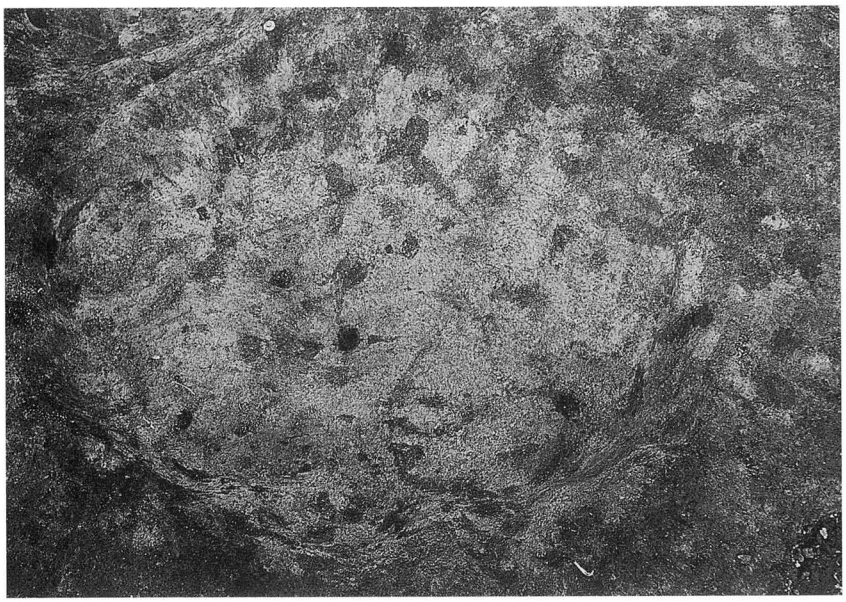
①第13号土坑断面（南側から）

②第19号土坑（西側から）

③第20号土坑断面（南東側から）



①第26号土坑断面（東側から）

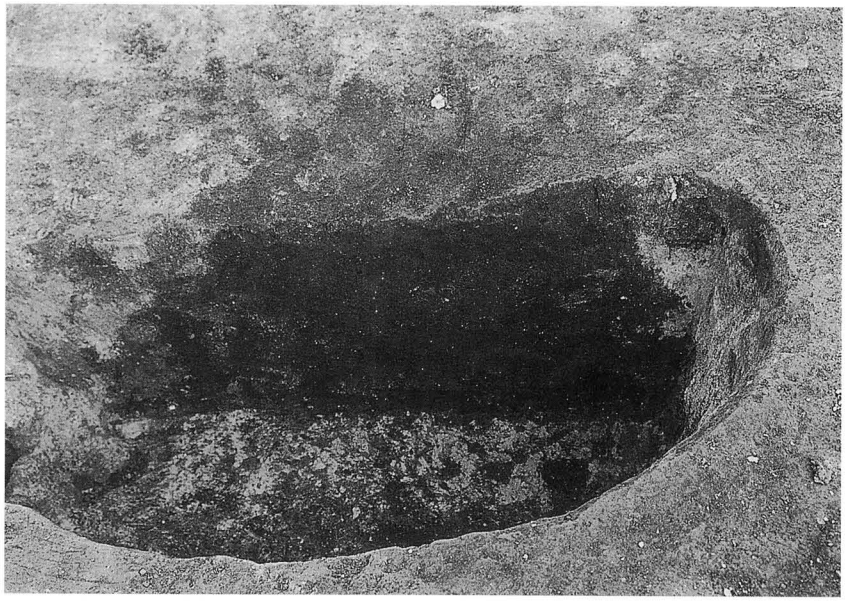


②第26号土坑（西側から）

③第36号土坑断面（南東側から）

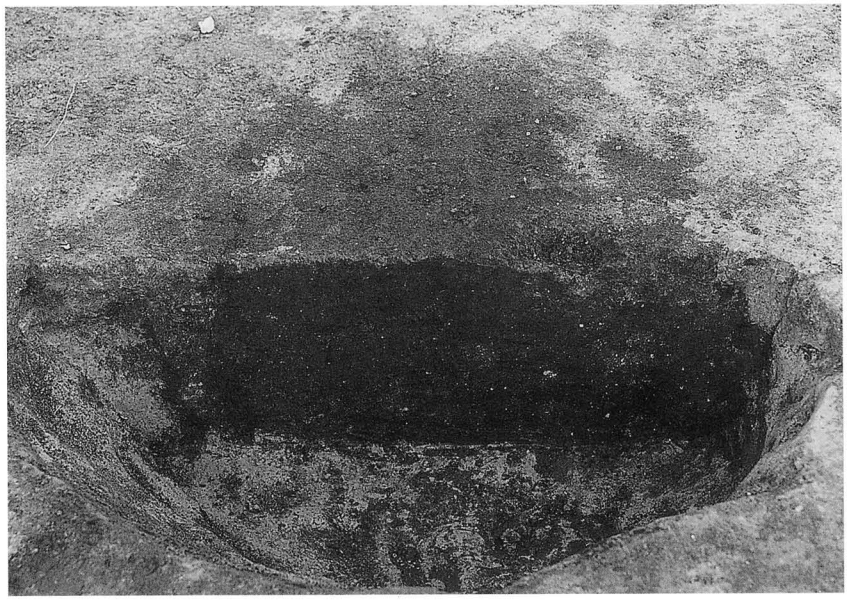
図版54

①第43号土坑（西側から）

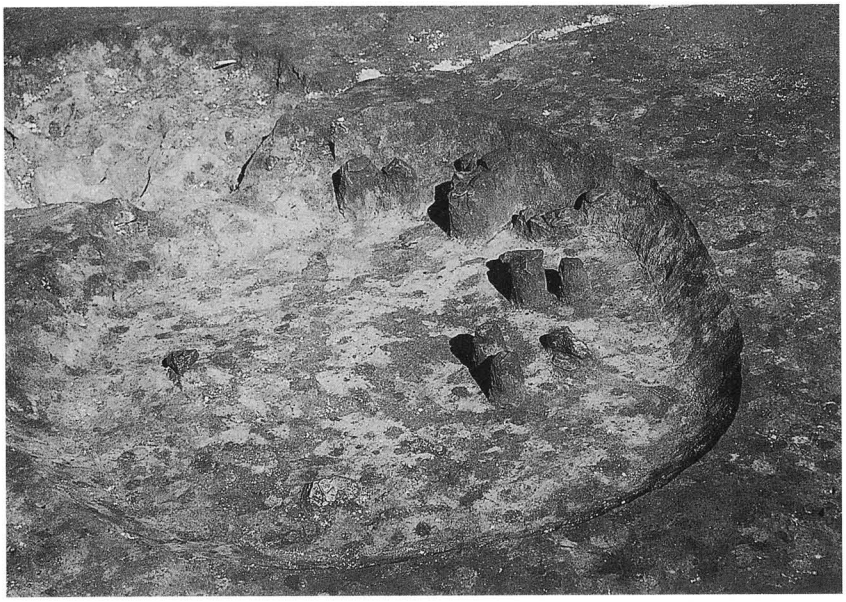


②第51号土坑断面（西側から）

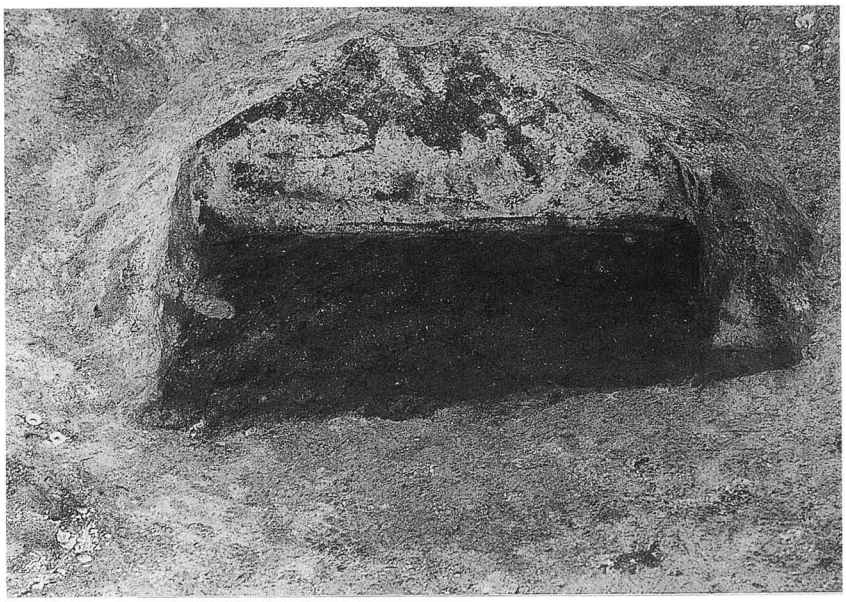
③第50・51号土坑（西側から）



①第52号土坑断面（西側から）



②第54号土坑遺物出土状況（西側から）



③第56号土坑断面（南東側から）

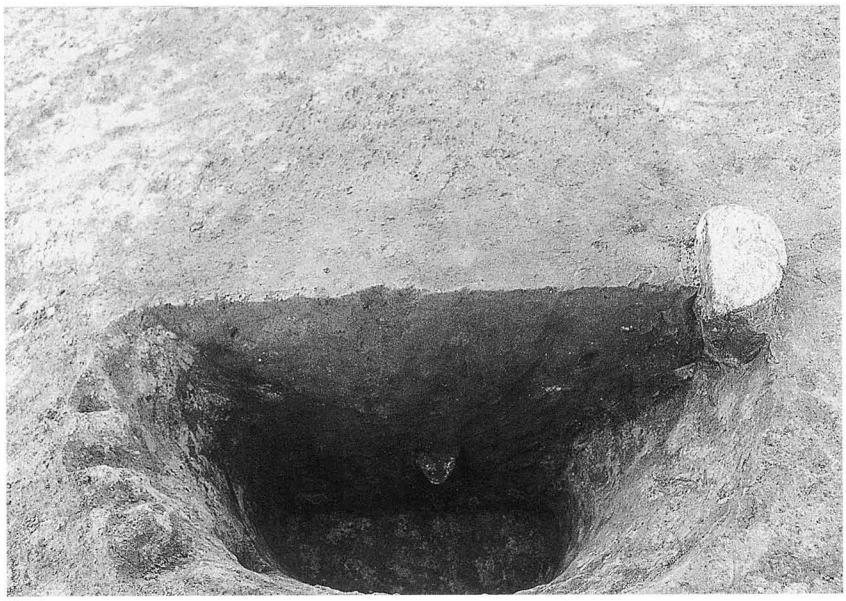
図版56

①第56号土坑（西側から）

②第65号土坑断面（南東側から）

③第65号土坑（南東側から）

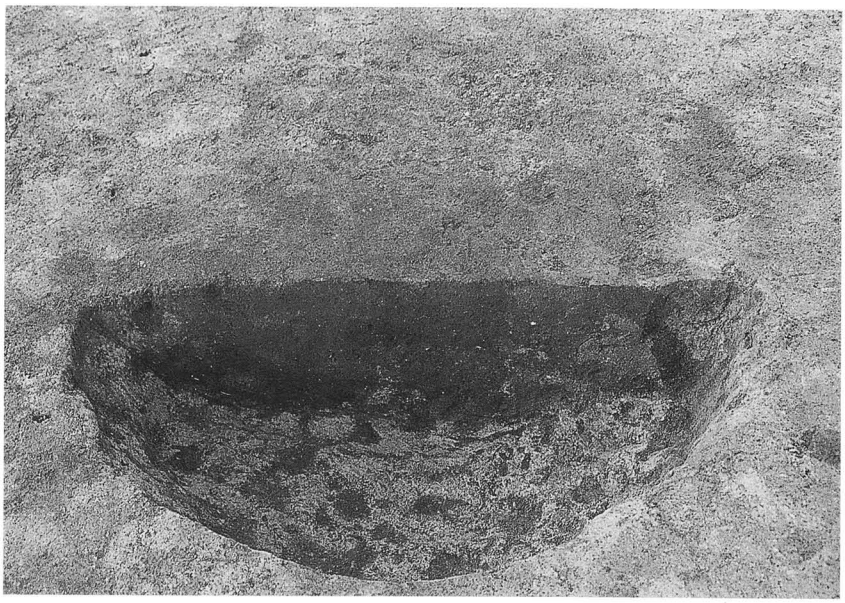
①第66号土坑（西側から）



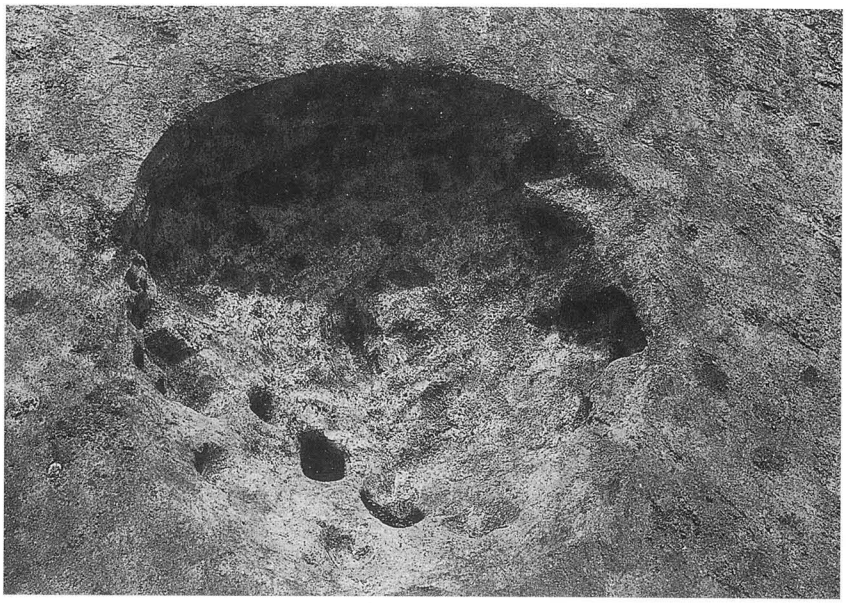
②第67号土坑断面（南東側から）

③第67号土坑（西側から）

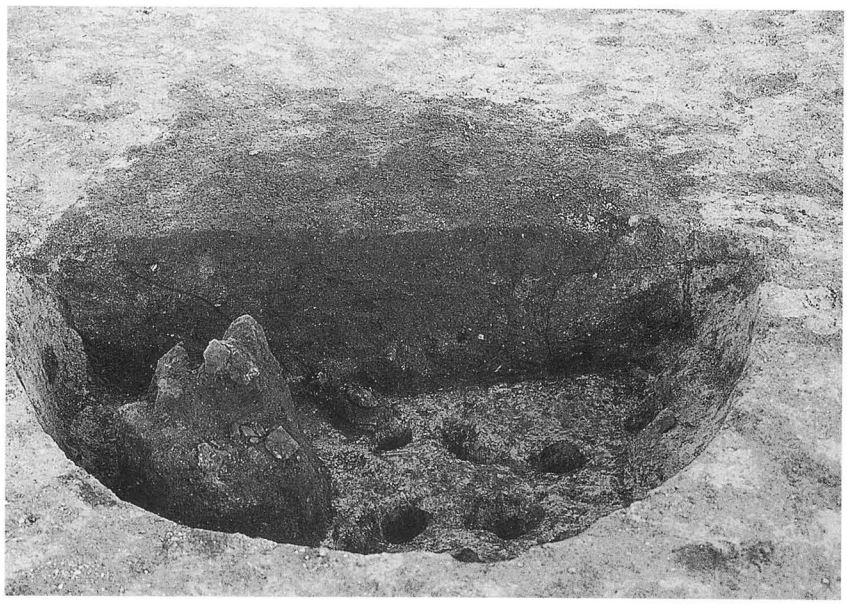
図版58



①第68号土坑断面（南側から）

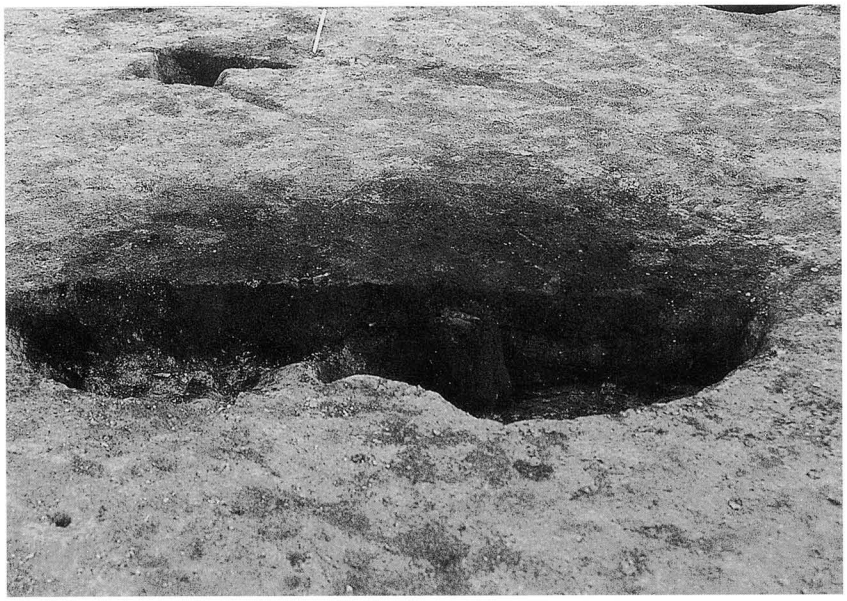


②第68号土坑（東側から）

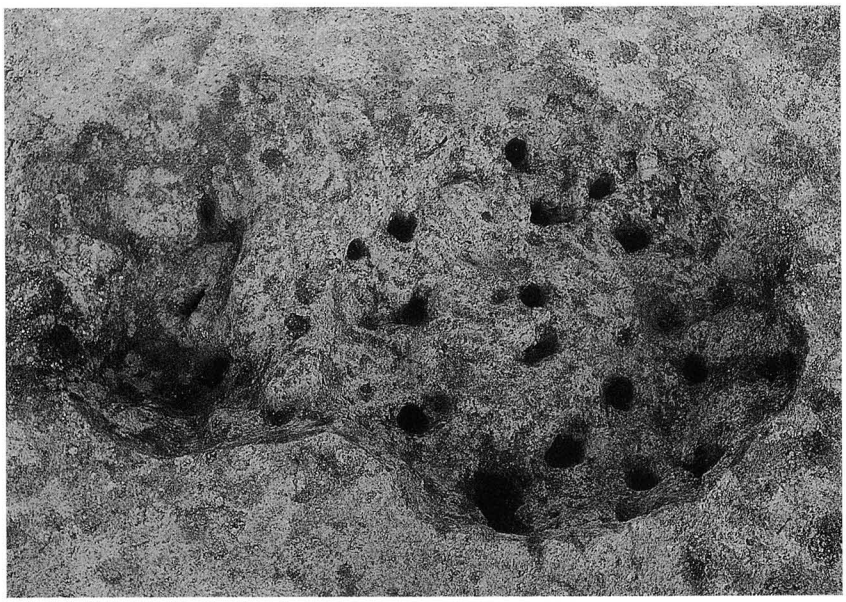


③第75号土坑断面（北西側から）

①第75号土坑断面（北側から）

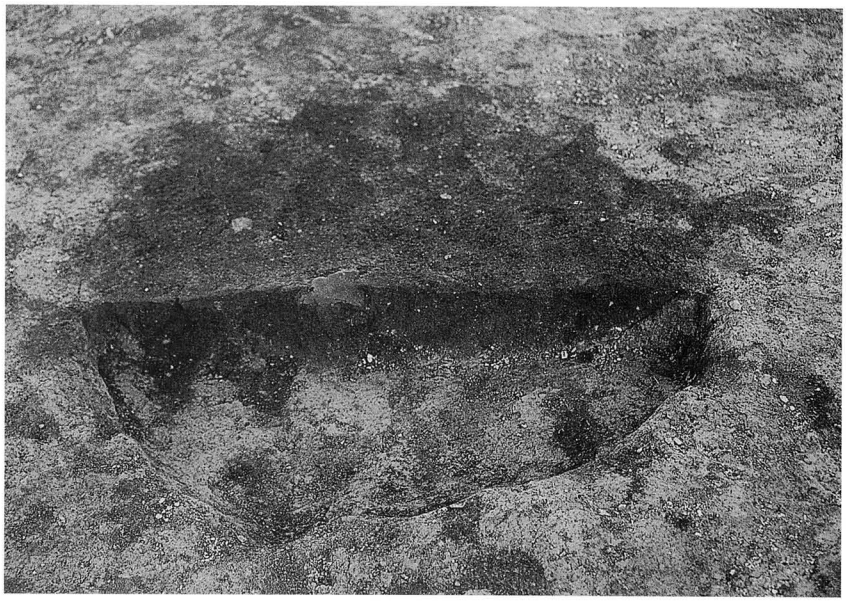


②第78号土坑断面（北西側から）

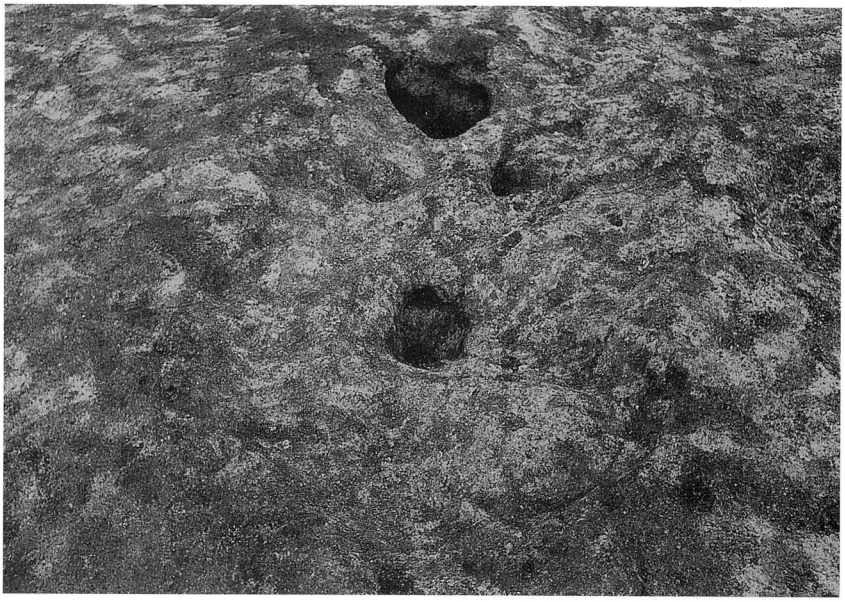


③第78号土坑（北西側から）

図版60

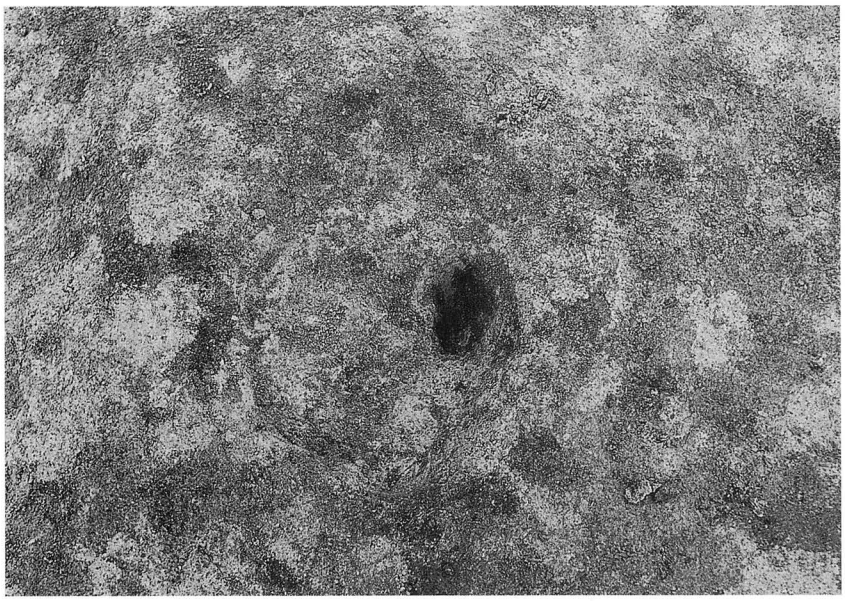


①第86号土坑断面（北西側から）

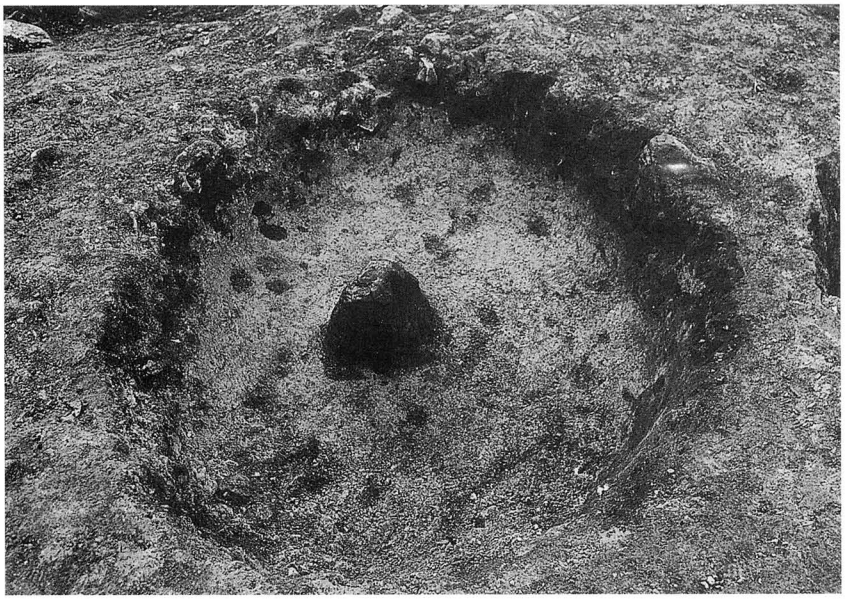


②第87号土坑（東側から）

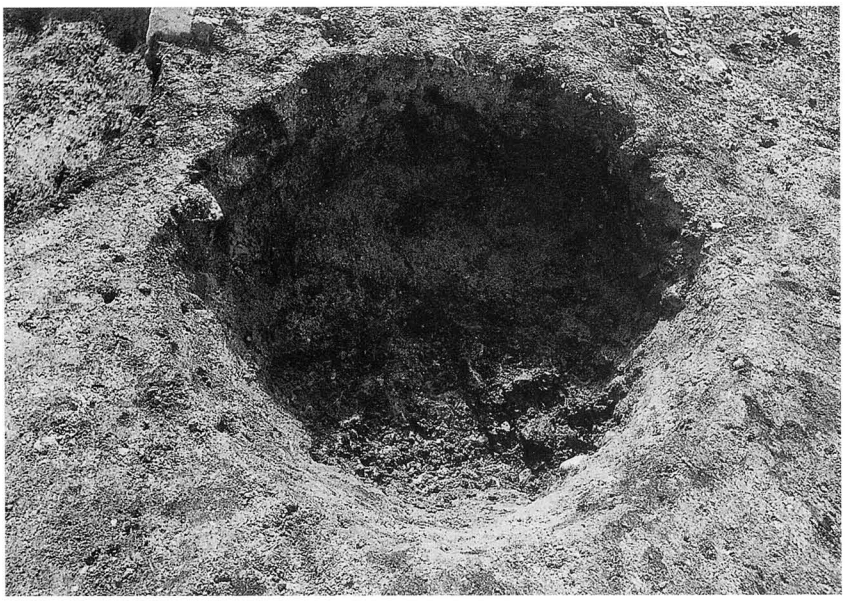
③第88号土坑（東側から）



①第89号土坑（東側から）

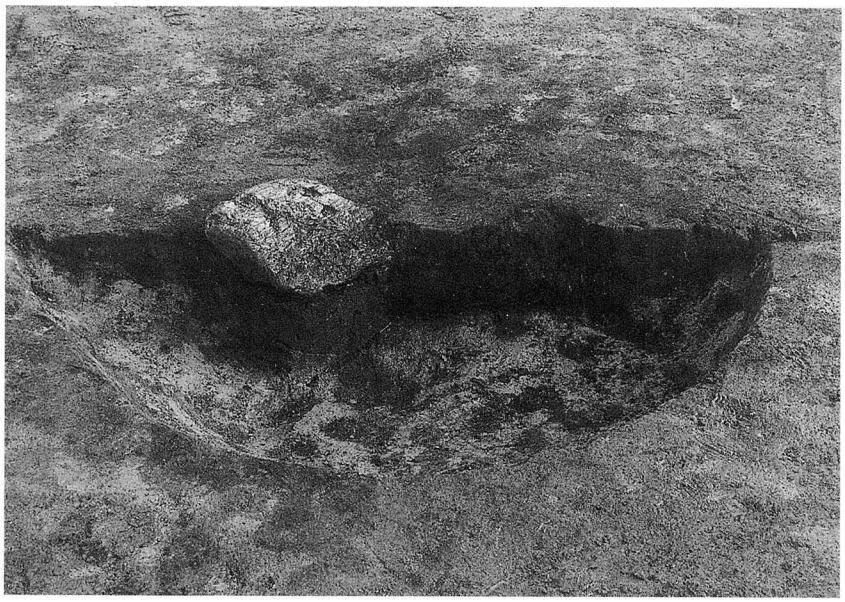


②第90号土坑（東側から）



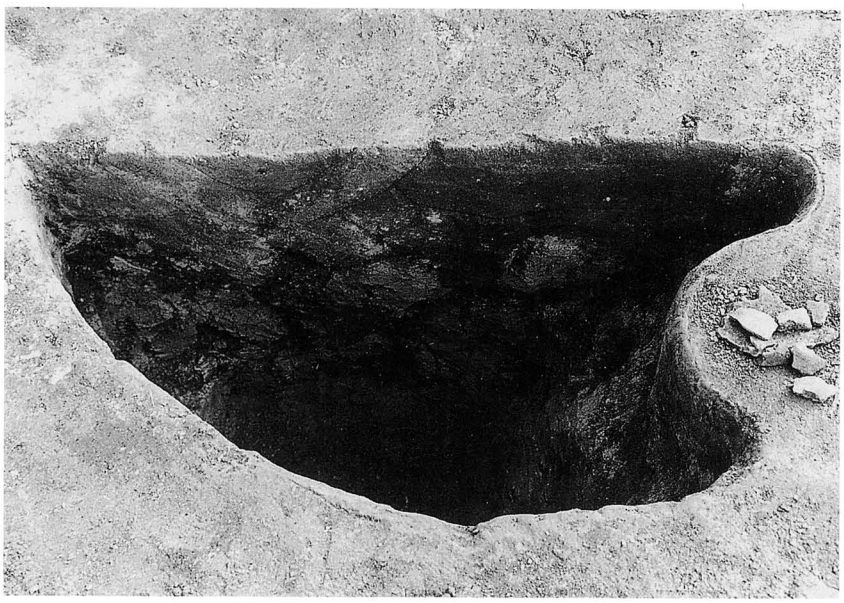
③第91号土坑（東側から）

図版62

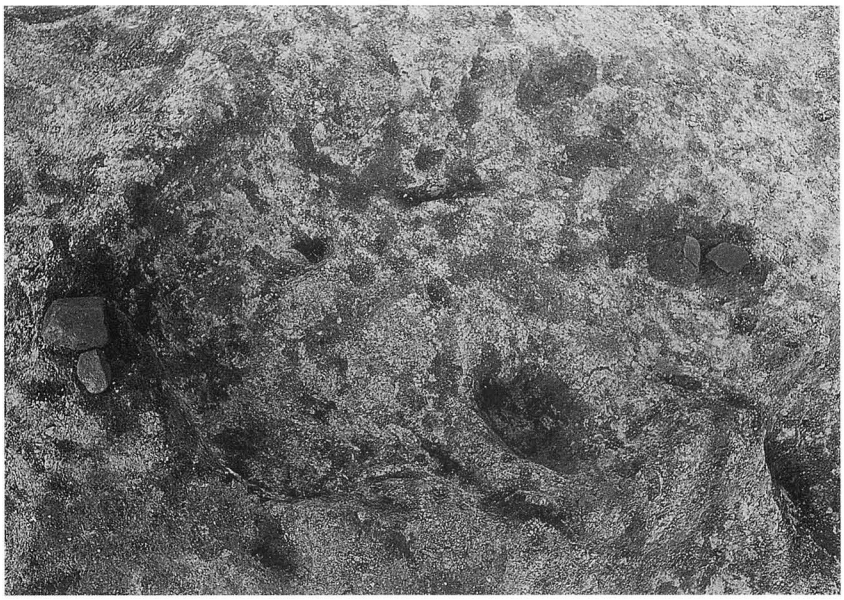


①第95号土坑断面（北側から）

②第95号土坑（西側から）



③第98号土坑断面（南東側から）



①第99号土坑（南側から）

②第101号土坑（北西側から）

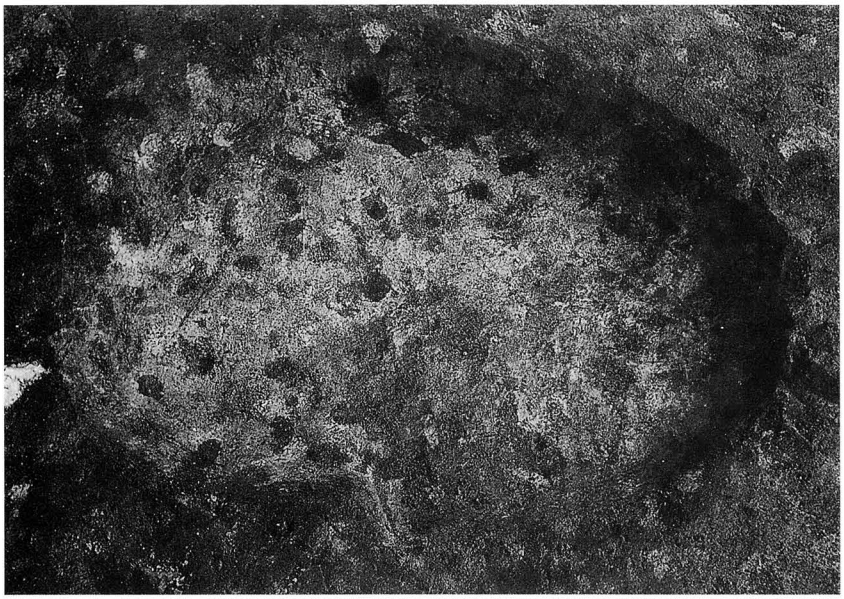
③第102号土坑（西側から）

図版64

①第107号土坑断面（南側から）

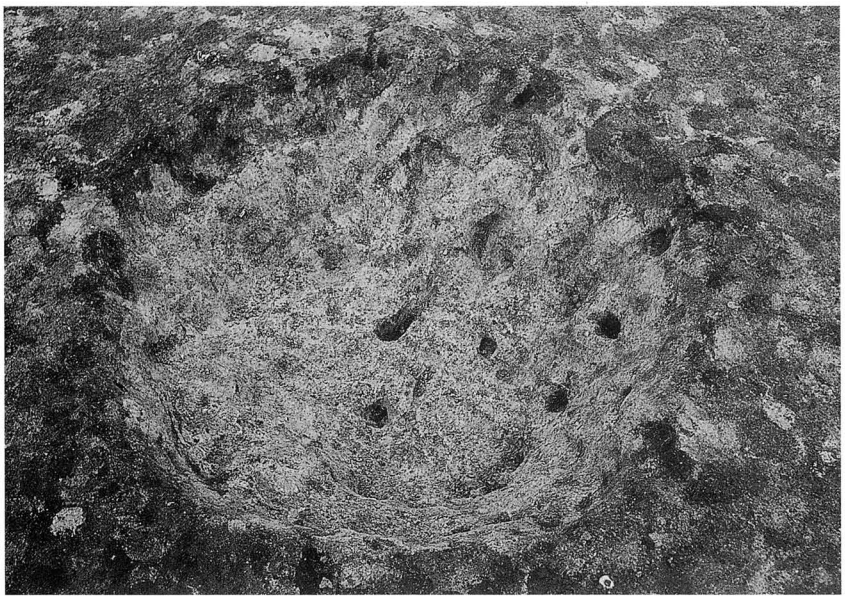
②第107号土坑（西側から）

③第109号土坑（南側から）



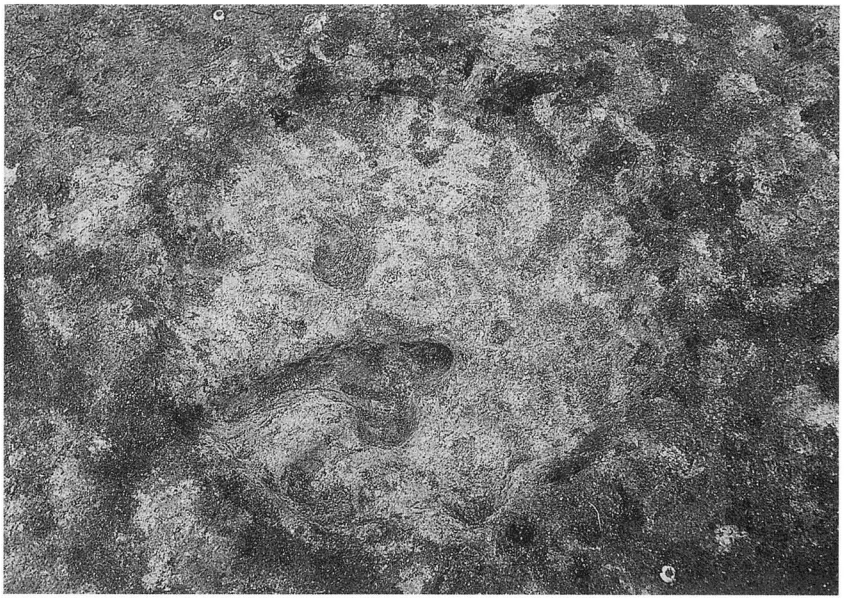
①第110号土坑（北側から）

②第111号土坑（東側から）

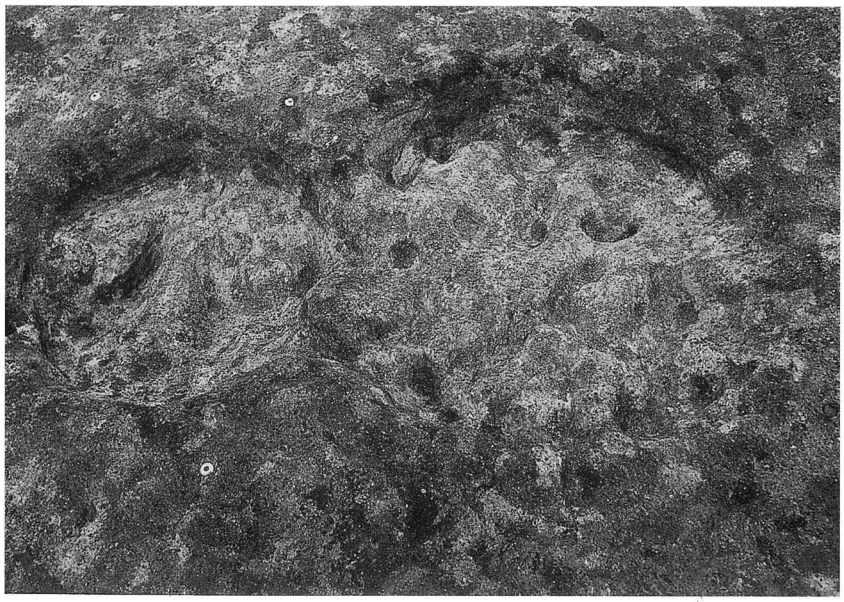


③第117号土坑（西側から）

図版66

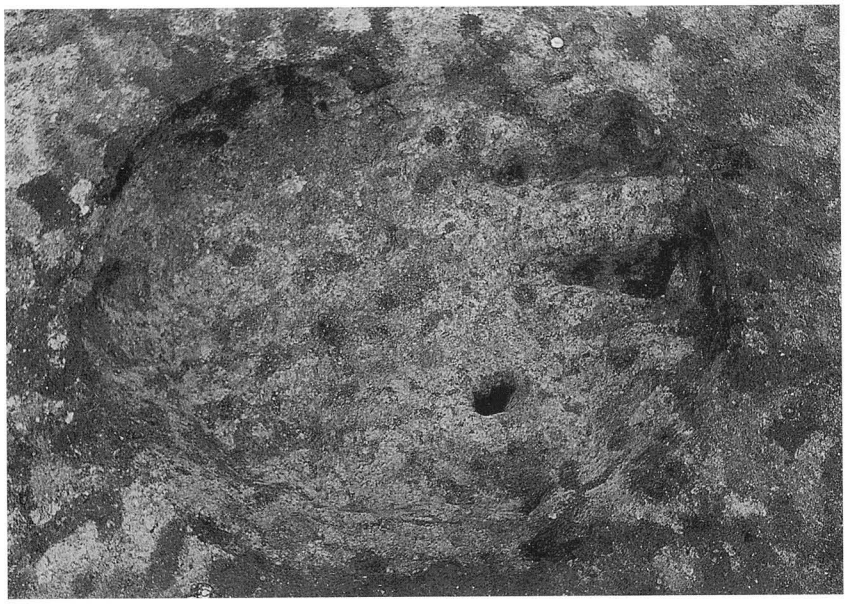


①第118号土坑（西側から）



②第121・122号土坑（西側から）

③第123号土坑（西側から）



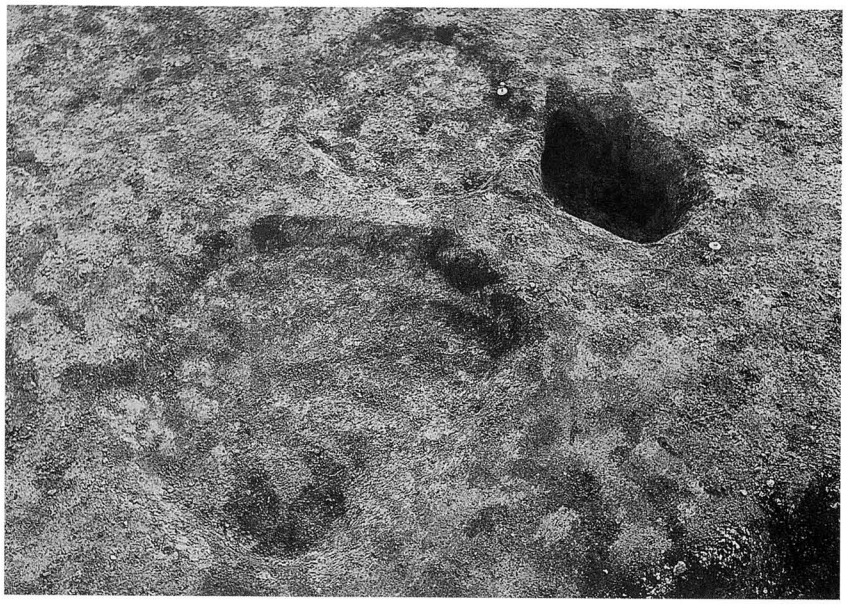
①第124号土坑（西側から）

②第127号土坑（北側から）

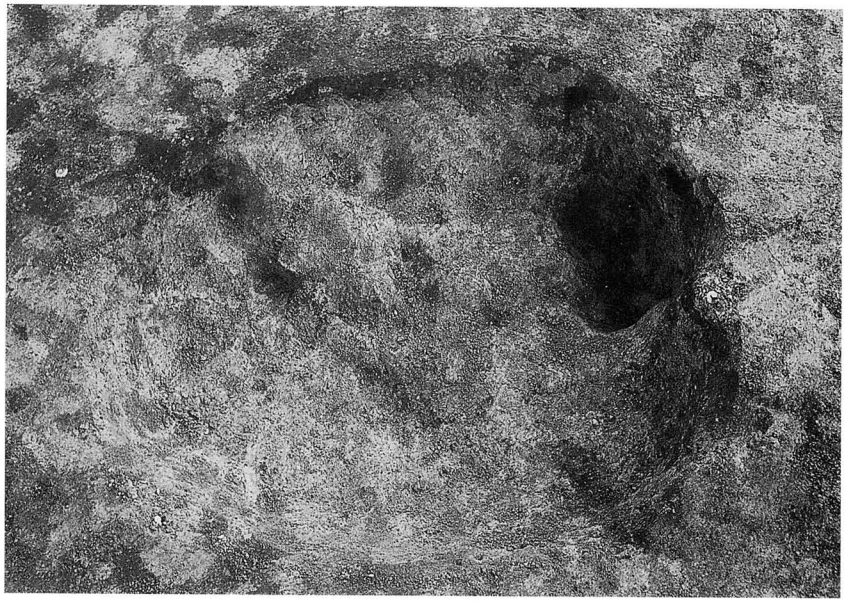
③第128号土坑（南側から）

図版68

①第131号土坑（西側から）

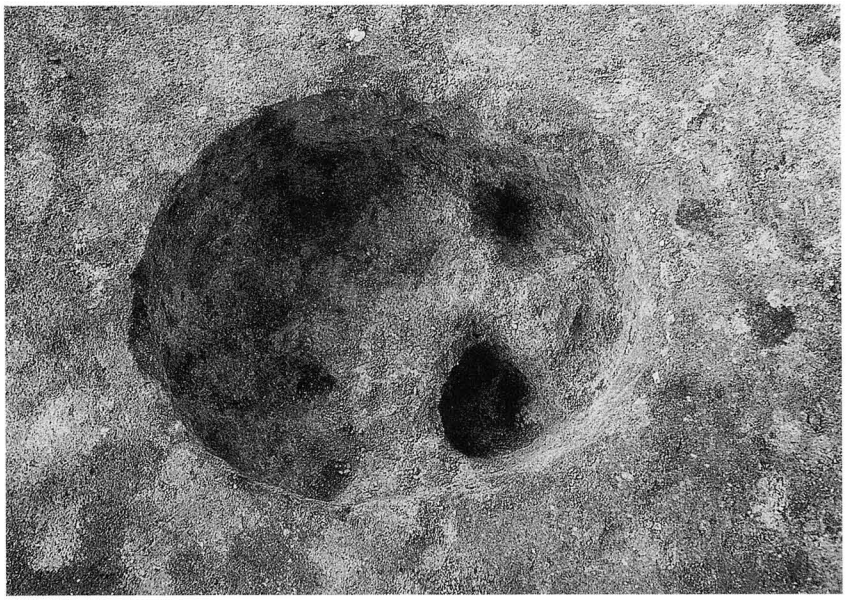


②第152・151号土坑（北側から）



③第154号土坑（北側から）

①第156号土坑（北側から）



②第157号土坑（東側から）

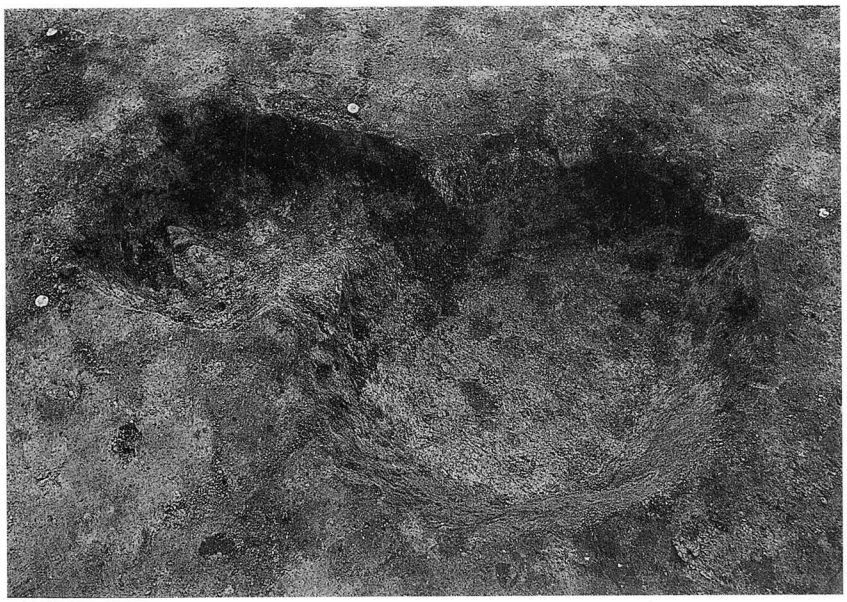
③第159号土坑（北側から）

図版70

①第160号土坑（北側から）

②第161・162号土坑（北側から）

③第164号土坑（北側から）



①第170・167号土坑（北側から）

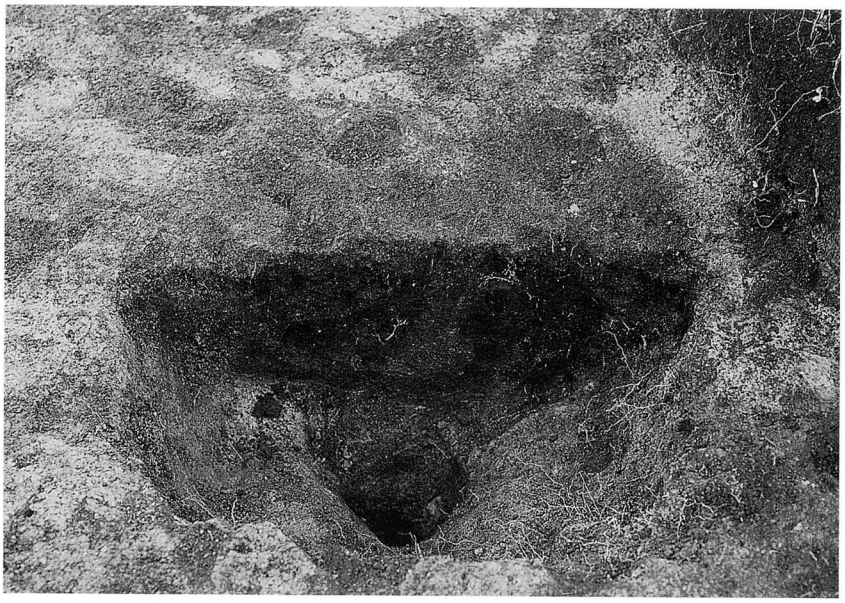
②第171号土坑（北側から）

③第174号土坑（北側から）

図版72

①第175号土坑（南側から）

②第176・177・178号土坑（南側から）



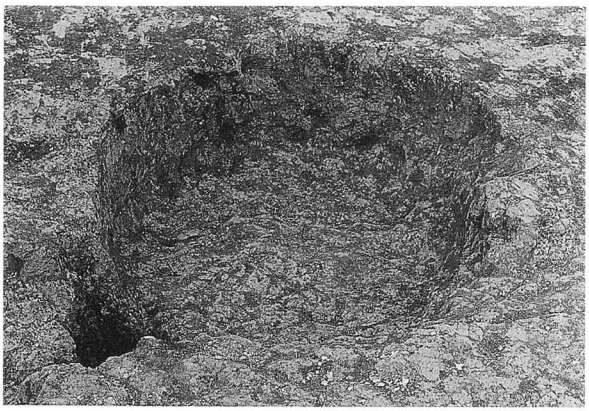
③第182号土坑断面（東側から）

①第185号土坑断面（東側から）

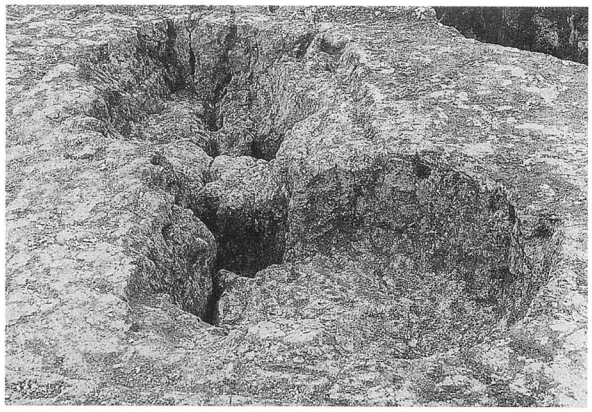
②第189号土坑（西側から）

③第190号土坑断面（南側から）

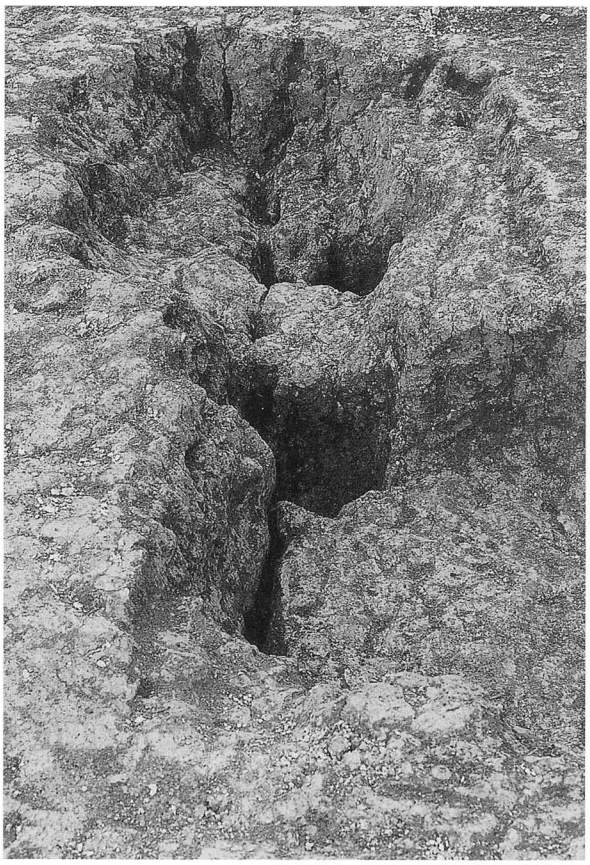
図版74



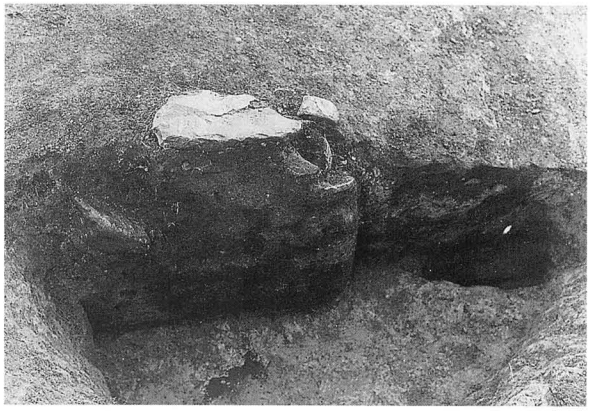
①第190号土坑（南側から）



②第189・190号土坑

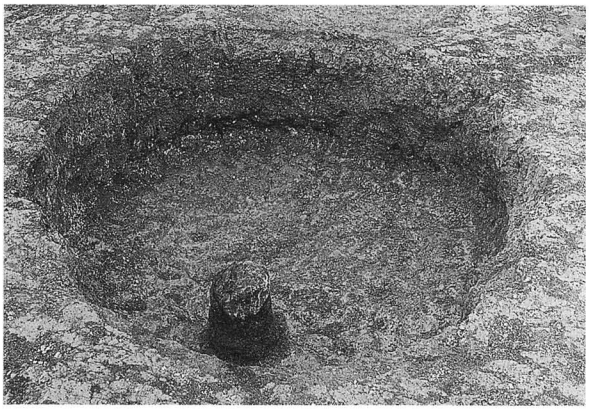


③第189・190号土坑の地割れ

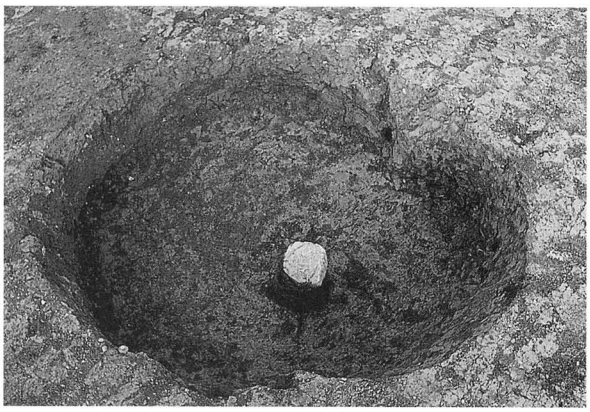


④第191号土坑断面（南側から）

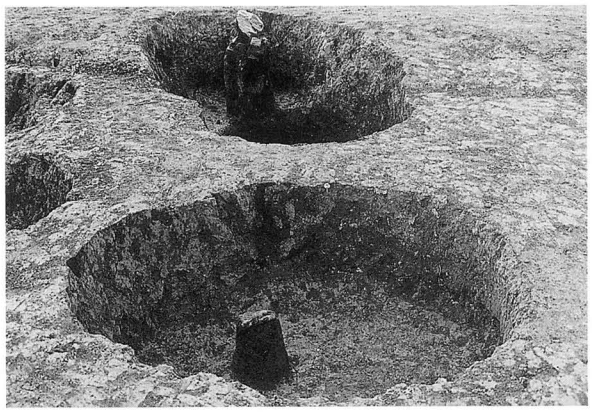
⑤第191・223号土坑（東側から）



⑥第192号土坑（南側から）

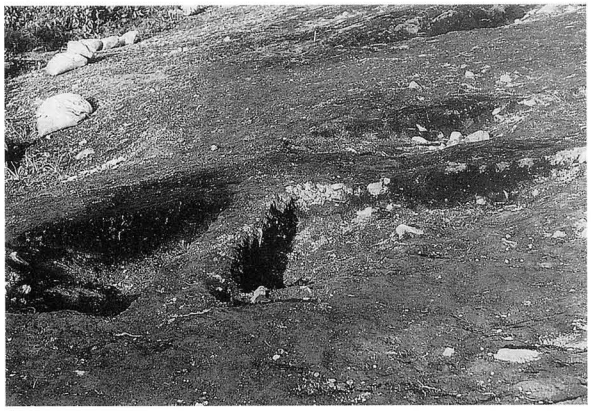


⑦第192・224号土坑（西側から）

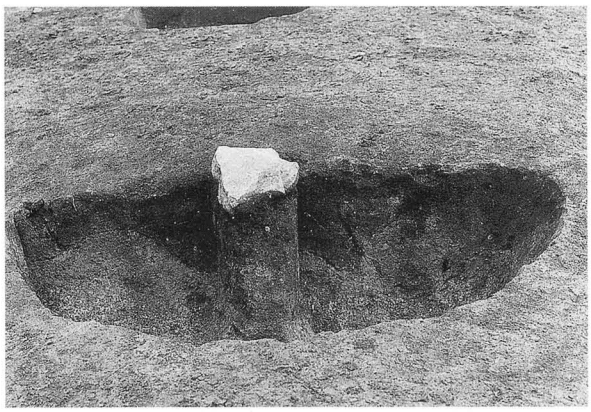


①第191・192・223・224号土坑（東側から）

②第223号土坑（南側から）

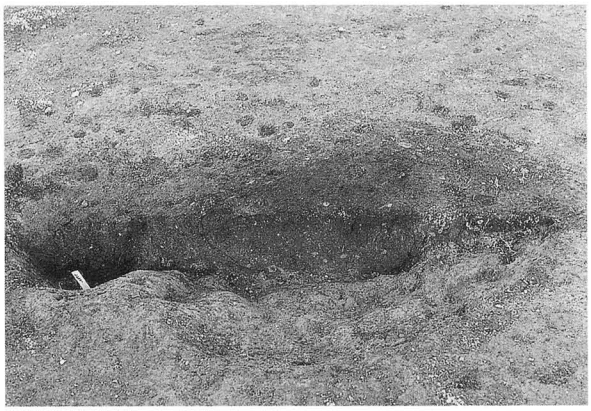


③第193・194号土坑断面（南西側から）

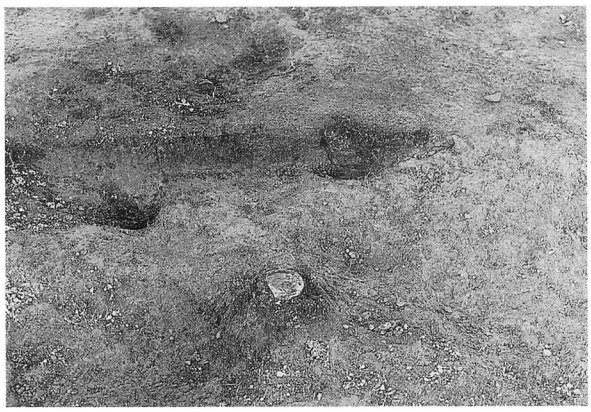


④第220号土坑断面（西側から）

⑤第222号土坑断面（東側から）



⑥第228・229・231号土坑断面（西側から）

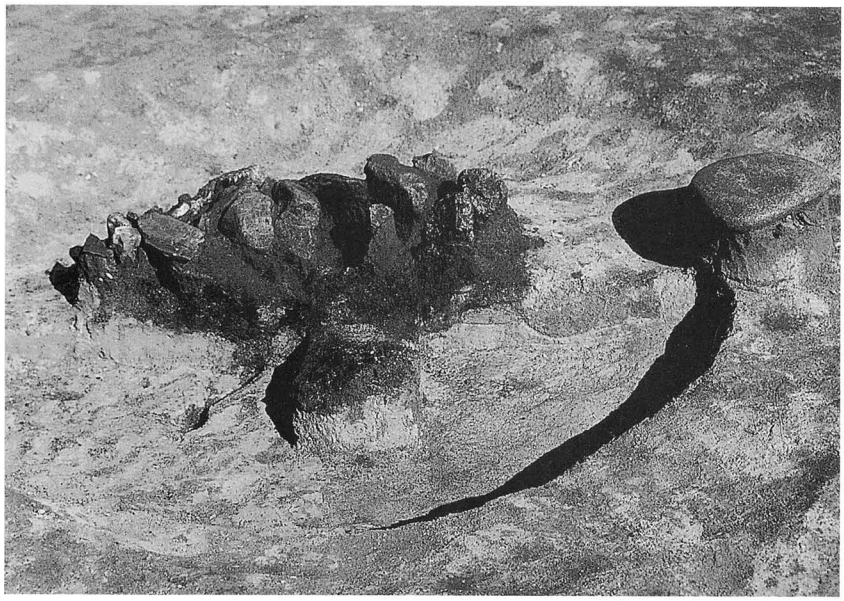


⑦第232号土坑断面

⑧第239号土坑断面（西側から）

図版76

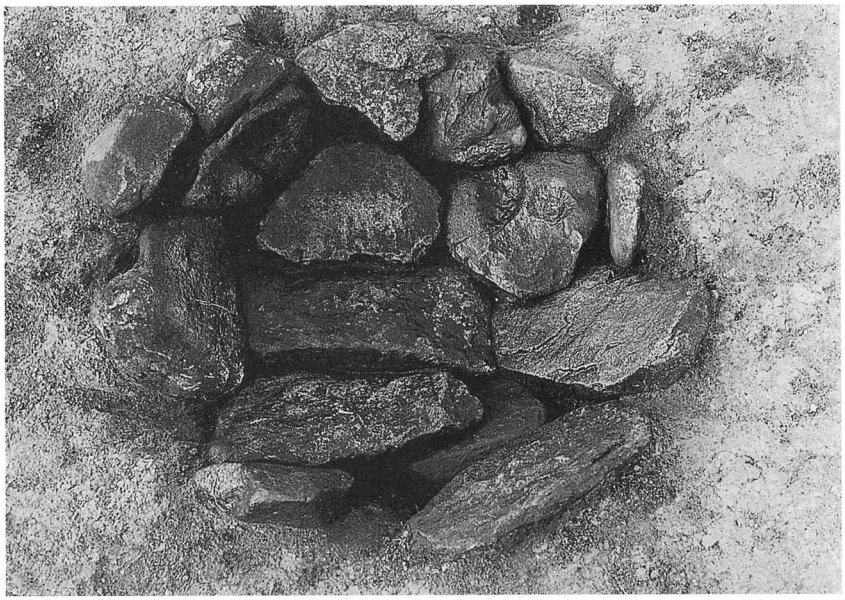
①第1号集石炉検出状況（東側から）



②第1号集石炉断面（西側から）

③第2号集石炉（南西から）

①第1号石囲炉検出状況（南側から）

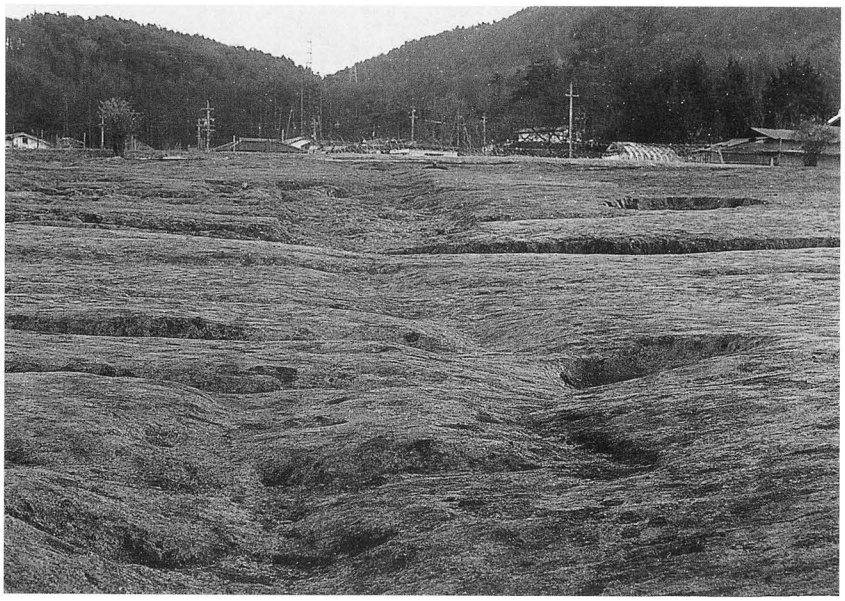


②第1号石囲炉　石組みの状況（西側から）

③第1号石囲炉脇黒曜石出土状況（西側から）

図版78

①第1号溝址礫出土状況（南側から）



②第1号溝址上段部全景（北側から）

③第2号溝址（南側から）

①平成16年度南側調査区盛土保存部遺構検出状況

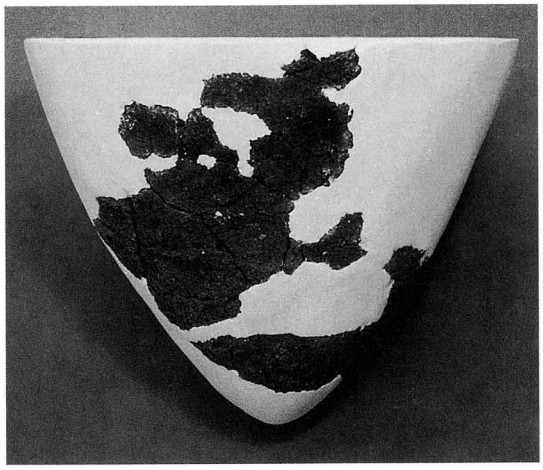
②平成15年度調査区西側破砕帯部分（南側から）

③平成15年度西側隣接部水田部分の破砕帯検出状況

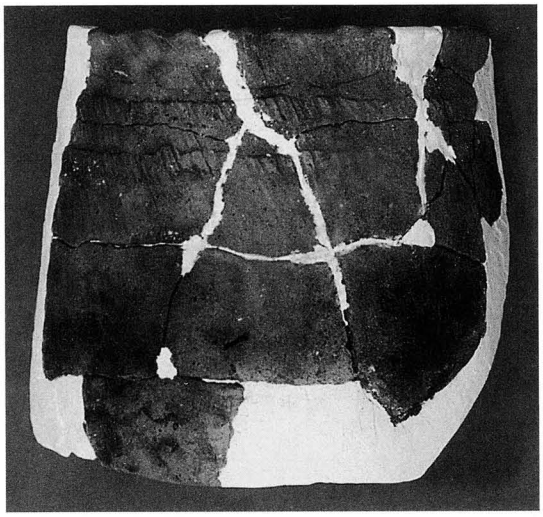
図版80

①平成15年度構造線境界断面

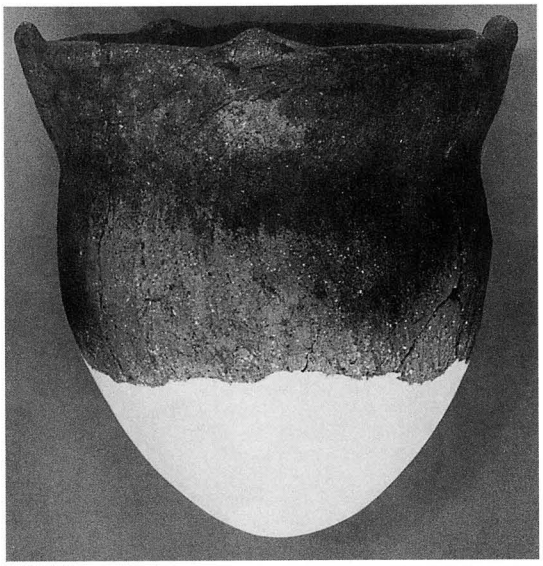
②平成15年度構造線断面（平底の落ち込みが見える）



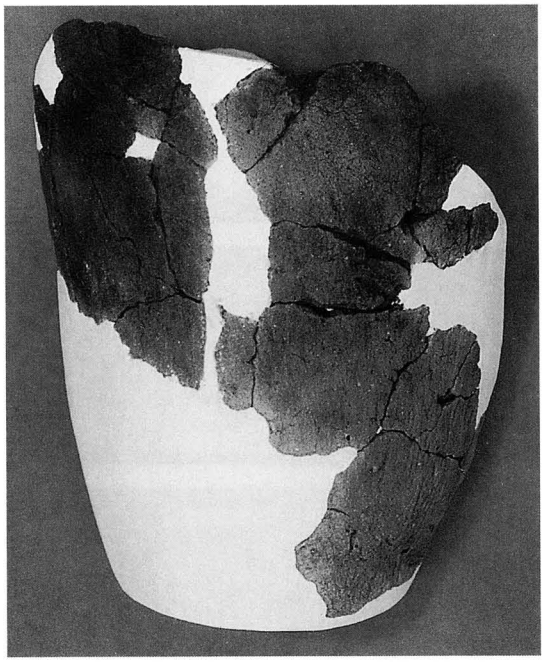
①第1号住居址出土器



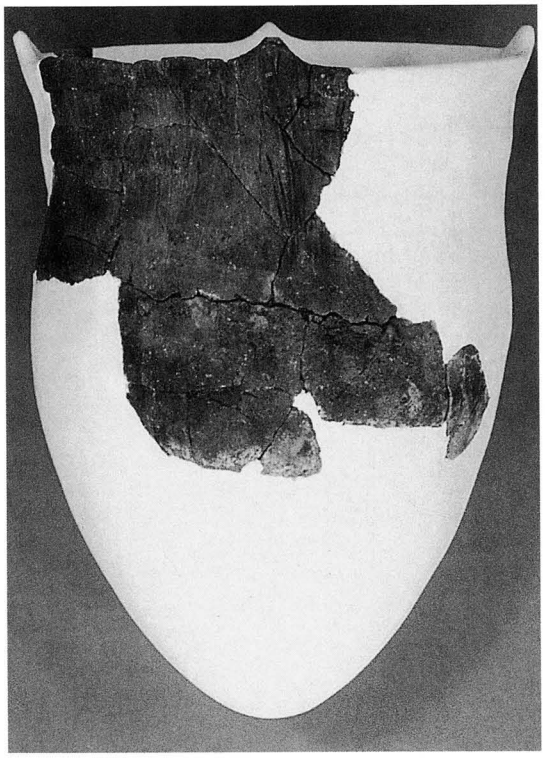
②第6号住居址出土土器



③第8号住居址出土土器



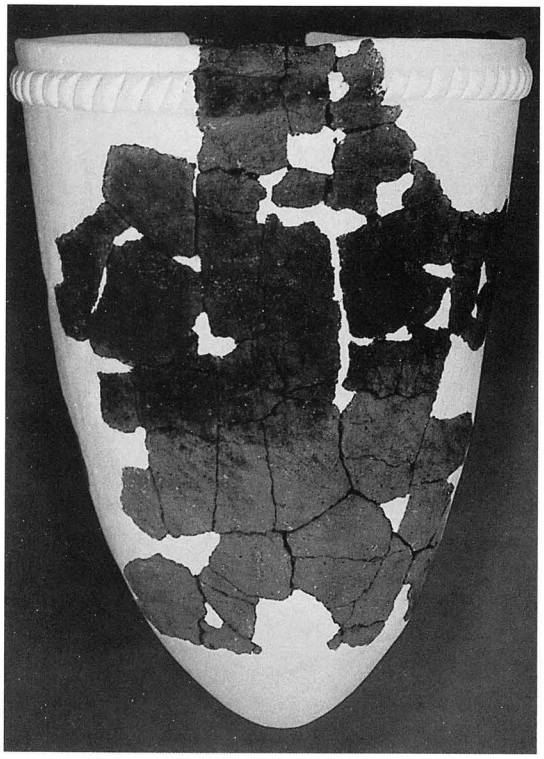
④第12号住居址出土土器



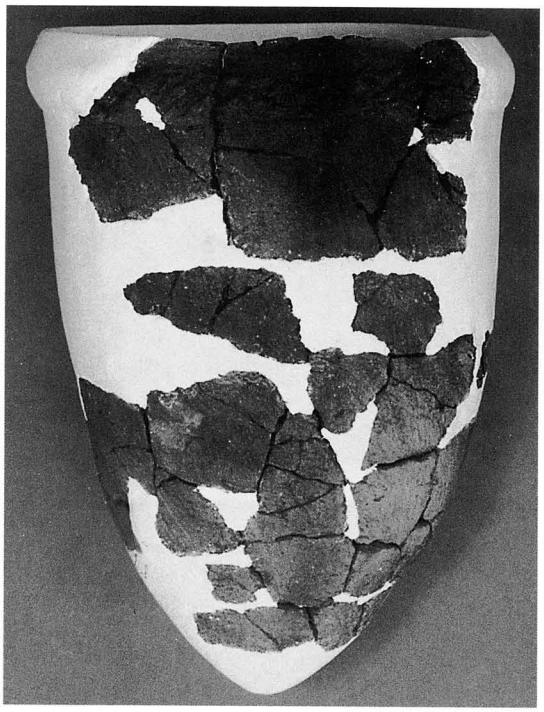
⑤第17号住居址出土土器

⑥第17号住居址出土土器

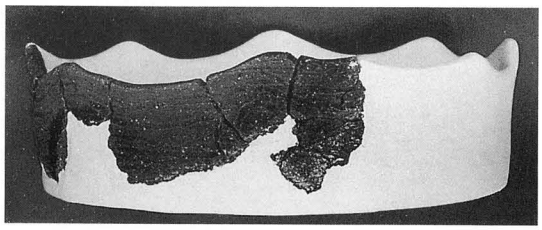
図版82



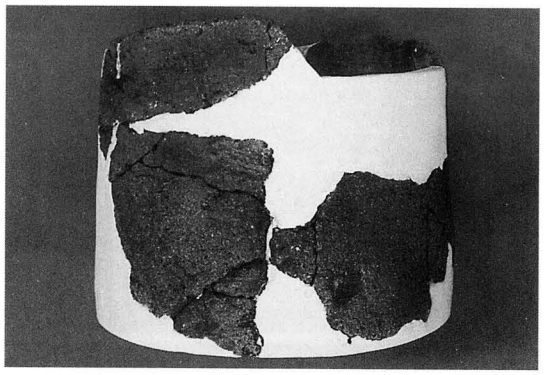
①第20号住居址出土土器



②第20号住居址出土土器

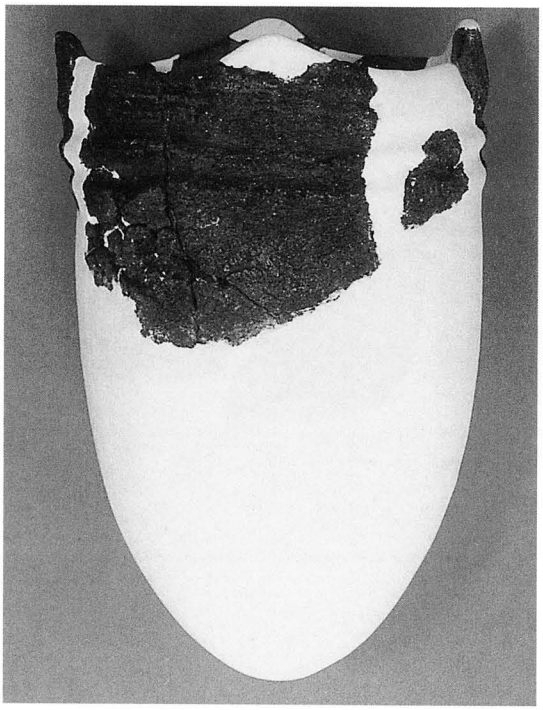


③第20号住居址出土土器



④第20号住居址出土土器

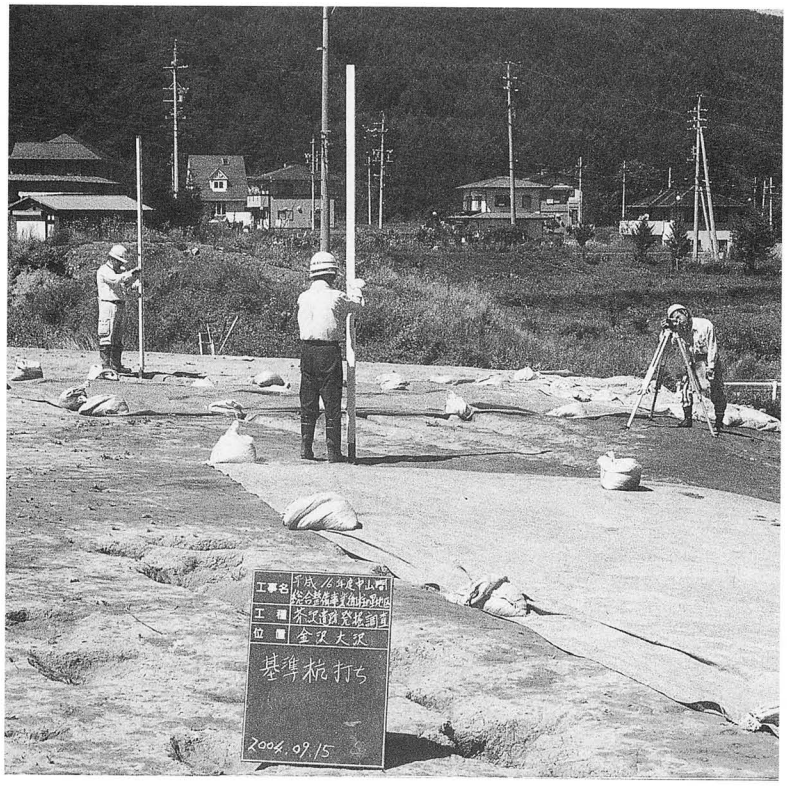
⑤第20号住居址出土土器



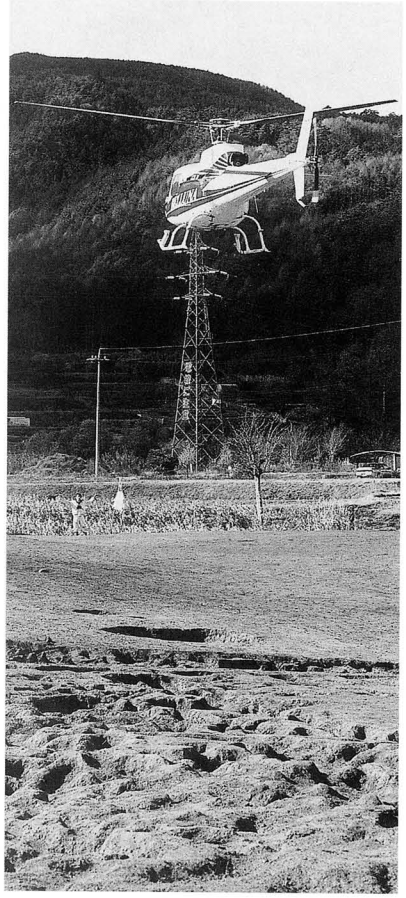
⑥第20号住居址出土土器

①芥沢遺跡出土緑色岩の原石、石器類

図版84

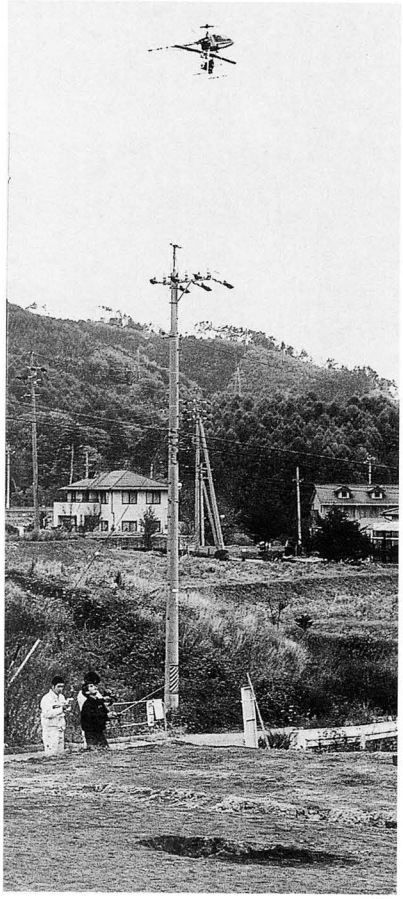


▲①基準坑測量



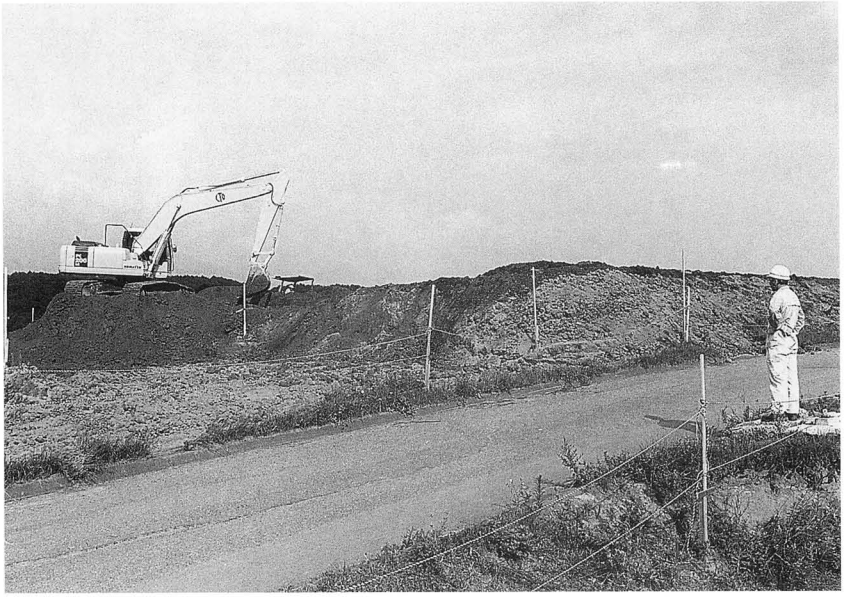
②平成15年度のヘリコプターによる航空測量▶

▲①航空測量図現地校正

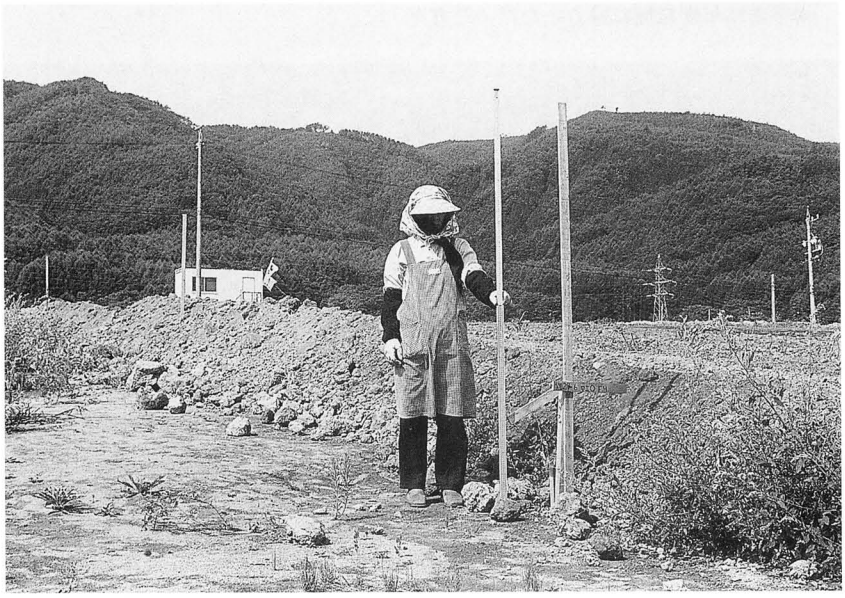


②平成16年度のラジコンヘリによる航空測量▶

①平成17年度本工事の遺跡保存地用ロームの切出し



②同盛土作業



③同盛土確保確認作業

図版86

①金沢歴史同好会の現地見学

②③現地見学説明会（上②平成15年　下③平成16年）

④平成15年度発掘に協力いただいた方々

⑤平成16年度発掘に参加いただいた方々

報告書抄録

ふりがな	ごみっさわいせきⅡ
書名	芥沢遺跡Ⅱ
副書名	「県営中山間総合整備事業 御柱の里地区」に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	百瀬　一郎
編集機関	茅野市教育委員会
所在地	〒391-8501　長野県茅野市塚原２丁目６番地１号　TEL 0266-72-2101
発行年月日	西暦2007年３月22日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
芥沢（ごみっさわ）	茅野市金沢（ちのしかなざわ）	20214	189	35度56分21秒	138度11分37秒	20030618～20031215 20040802～20041125	12,615㎡	農業基盤整備事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芥沢	集落跡	縄文早期末前期初頭 縄文中期 平安	縄文住居－37 平安住居－４ 土坑－229	ナイフ形石器－旧石器－ 土器、石器－縄文早期末前期、中期、後期－ 土師器、灰釉陶器、土錘ほか－平安－ 内耳土器－中世－ 整理箱18	糸魚川静岡構造線上に広がる本遺跡は阿久遺跡の集落が形成されていく前段階の縄文時代早期末前期初頭の大遺跡で平安時代の住居址も検出している。時期、規模、保存されている現況、時期不明ではあるが落し穴のあり方等から貴重な遺跡である。

芥沢遺跡Ⅱ

――「県営中山間総合整備事業 御柱の
里地区」に伴う発掘調査報告書 ――

平成19年３月19日　印　刷
平成19年３月22日　発　行

編　集　茅　野　市　教　育　委　員　会
発　行　長野県茅野市塚原二丁目６番１号
TEL0266-72-2101
印　刷　永　明　社　印　刷　所
長野県茅野市塚原二丁目12番30号